
バース・ストーン

甘森礎苗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バース・ストーン

【Nコード】

N9656H

【作者名】

甘森礎苗

【あらすじ】

弱気な高校生の少女ソミアは、ある日友達とのトランプ勝負に負けてしまう。その勝負に負けたら罰ゲームを科す、と前置きされていたため、ソミアは宣言通り罰ゲームを受けることになってしまった。場所を移して罰ゲームの内容を決めていくが、なかなか妙案が浮かばない。気分転換に周囲に視線を送った友達は、ひらめいたとばかりにこんなことを提案した。

「あのね…ソミアが、あの人にナンパするの！」

はじめに

「バース・ストーン」をご覧になっていただき、ありがとうございます。

著者の甘森礎苗と申します。

はじめに、この作品について説明させていただきます。

その後、この作品の読み方についても触れさせていただきます。

この小説は筆者のオリジナル作品です。

ジャンルは、近未来SFアクション、ミステリ風味の恋愛添えといったところでしょうか。

ライトノベルに属する作品です。

舞台は二十三世紀くらいの地球です。

各分野の技術は世界的に向上しております。医療、通信、情報、機械、その他の技術は時代相応です。

しかし、世界の情勢はそんなに変わっていません。貧富の差は広がるばかりで、争いは絶えず、自然環境も犠牲となっています。難しく思われるかもしれませんが、「機械技術は時代相応に高く、それ以外は二十一世紀初頭の横ばい」と捉えてもらって結構です。

この作品は、たびたび時間軸がずらされて描写されております。少しでも作品に面白さが加わればと思ったための工夫のつもりなので、ご了承ください。

時間軸の差異を表現するのに、作中では、改行による空白のスペースに以下のような記号が振られていることがあります。

それぞれの意味を説明します。

・ 『三つの米印』 から次に書かれる文章は、その直前の文章と同時に進行している。

例

マリオがジャンプした。

ルイージが火の玉を出した。

「マリオがジャンプしたのと同じ時間に、ルイージが火の玉を出した。」

・ ＊ 『アスタリスク』 から次に書かれる文章は、その直前の文章の時間よりも多少の過去か未来に起きている。

例

クロノが玄関の扉を開けた。

＊

マールが紅茶を飲んだ。

＊

クロノは家に上がる前に靴を脱いだ。

「クロノが扉を開けるその前か、扉を開けてからあとに、マールが紅茶を飲んだ。」

そして、マールが紅茶を飲むよりも前かあと（この場合は矛盾しないほうの事後）に、クロノが靴を脱いだ。

以上のように記号が使われております。

序盤は記号の捉え方を理解していただけるように時間軸の変化が起きたことを描写しておりますが、後半からは筆者の嗜好によって省略されております。

読みづらく感じてしまったら、それは筆者の責任です。お手数ですが、それを感想としてコメントしていただけると幸いです。

ちなみに、ただの改行による空白の場合は時間軸が前後せずにそのまま進行しておりますので、通常のようにお読みください。

筆者は文章表現能力について稚拙でございます。投稿してから誤字脱字に気づくこともしばしばです。また、この投稿システムを使いこなせてもいません。そのため、読みづらさを感じたり表現が理解できなかったりすることも想定しております。

また、作中に取り入れた各知識について誤りがあるかもしれません。そのような時は、先述した通り遠慮なくコメントしていただきたいと思います。

筆者は読んでくださった感想をしかと受け止め、より完成度の高い作品を作りたいと精進致します。

では、本編をどうぞ。

Monologue

ぼくにはなにかをする力がなかった。

やろうと思ってもけっきよくなにもできなかった。

どうしてぼくはこんなにできないんだろう。

べつにわるいことをしているわけじゃないんだよ。

がんばることがそんなにわるいことなの？

じゃあ、ぼくはなにをやっているの？

けど、少年の悩みに答えしてくれる人はいなかった。

それは、いつものこと。

俺には何でもやれる力が有る。

やろうと思えば出来なかった事は無い。

どうして俺にはこんな力が有るのだろう。

俺がこの力を善行に使うとは限らないのに。

俺に何を期待する？

俺に何をしてほしい？

だが、少年の問いに答えてくれる者は居ない。

それは、いつものこと。

第一章 交錯する生者

澄みきつた青い空に太陽が昇り、降り注ぐ太陽光線がアスファルトに熱を与え続けている。今の時期は日の出の時刻が早くなっている。この時間でも高い場所にある。あと数時間もすれば一番高い場所である南中に行く。

空には雲が一つもなく、陽光を遮る物は何もない。朝から絶えることなく日光を受けた地表は、この地域にしては珍しく暖められていた。

この街のある広い道路に併走する歩道を一人の少年が歩いていた。黒いＴシャツの上に黒いジャケット、黒のジーンズにアーミーブーツ、茶褐色の瞳を持っていて、やや長めの漆黒の頭髪を後ろで一つに結んでいる。顔立ちが子どもと大人の中間ほどだが、表情からは何の感情も見受けられず、口は真一文字に閉じている。

一見何でもないごく普通の少年だが、その顔には奇妙な黒いサングラスをかけていた。

サングラス自体は珍しくもない物だ。禁止されていないどころか市販化されている物の一つだ。この辺りでは地域に関係なく販売されているし、人種に関係なく装着されている。

だが少年のそれは他の物とは違っていて、片側のレンズがはめられていなかった。左目は隠れているが、右側からの眼は見える状態だ。少年のそれは本来のサングラスの役目を全うしているとは思えない。

交錯する生者 1

少年は何かを探しているかのように忙しく視線を巡らせている。少年は探している物がなかなか見つからないので、話しやすそうな人を捜し始めた。

(諺の “He who is afraid of asking is ashamed of learning.” に則るべきか……)

少年は自分の行動に自分で背中を押した。また一方では、こつちも見つからなかったら結構沈むだろうと思っていた。冷静に考えれば前者より後者の方が発見率が低いし、勘に任される方法でもあるので頼りない事この上ない。だが性格も影響するので人見知りする者には賢明ではないのも無論だ。

幸いな事に少年はその類に属する性格ではなかったため、バス停に設けられている長椅子に鎮座して時間を持て余している老婆に尋ねる事に成功した。

「済みません、ちょっとお尋ねしたい事が有るのですが」
表情と声色は無機質のまま、少年は日常では絶対使わないであろう慇懃な態度と口調で言った。

老婆は少年の方を向き、特に驚いた様子もなく、「はい？」と訊き返した。恐らく視力が低下しているのだろう、老婆は少年の変わった風貌を見ても特に驚いた様子を見せなかった。高齢者にはよくある事がここでは丁度良かった。

自分から話しかけると、通常他者は多少なりに驚いたりする。身形は全身真っ黒で、他国の人間がその国の標準言語を流暢且つ平淡に話すと、珍しい物を見たような反応を返される。個人的には余計な事柄はなるだけ回避したいので、この老人のような態度は有り難かった。

「この辺りで一番大きな図書館は何処に在るかご存じですか？」

そう、少年はさつきから図書館を探していたのだった。

訊かれた老婆は、

「この辺で一番大きいな救急連絡先かい？」

耳が遠いのを利用した呆^ぼけを披露して見せた。

「それなら私もよく使うから、確かどこかに電話番号が――」

「いえ、違います。lifelineではなく、libraryで
ライフライン ライブラリー

「ああ、図書館かい？　ないだい、最初からそう言ってくれりやいのに」

老婆は笑いながら少年の発言を指摘した。自分が悪いなどとは微塵も思わない。流石は老人。

少年はなんとか抑えた。

「それなら、ここからまっすぐ行つて、三つ目の角を右に曲がればすぐさ。あそこは何でも揃つてるよ。私が欲しかった本がいつもすぐ見つかるからねえ。それにあそこの店員さんときたら若くて可愛くてねえ、何だか孫に似てるよう――」

「私、急いでいるので。お話を拝聴し兼ねるのは残念ですが」

少年はこれ以上いると長話という名の脱出不可能な潜水艦に閉じ込められそうな予感がして、できるだけ丁寧に断った。

「道をお教えて下さり、感謝します」

「いえいえ、どういたしまして」

少年は御礼を言つてお辞儀をして立ち去ろうとした。

しかしすぐに、「お兄さん、ちよつと」と老婆に呼び止められた。

「その変わった眼鏡は、“今時のふあっしょん”ってやつかい？」

少年は答えず、無表情で老婆の顔を見ているだけだった。

数秒後、少年は踵を返し、教えられたとおりの道順を歩き出した。

交錯する生者 1（後書き）

He who is afraid of asking is
ashamed of learning.
「聞くは一時の恥聞かぬは一生の恥」

交錯する生者 2

（前ページより）

*

澄みきった青い空に太陽が昇り、そこから地上にある全ての物に容赦なく光を当て続けている。太陽が真南の最も高い場所、南中を過ぎても、気温はなお上昇しつつある。

商店街から南に位置する一帯には住宅街が広がっている。どの家も同じような造りで、六つか八つの家々が一組の集団となって密接し、その組が数え切れないほど存在している。各々が車二台通れるかどうかの道路を境界線代わりに区切って、作られた空間に収まっている。

その住宅街の中心から少し北側、つまり商店街の方に寄った場所に、低いが頂の面積が広い丘がある。その広い面積を利用して一つの学校が建立されていた。

四階建てのその学校の三階、南から見ると左から二番目の教室。その空間は他のどの教室にもあるような賑やかな声で満たされていた。

現在、お昼休み真っ直中。

誰もが午前中の疲れとストレスをここぞとばかりに発散している。そしてそれぞれが達したい目的のため、他者のもとへと向かう。それによって自然といくつかのグループが作られる。

窓側の最前列を占拠している、女子四人グループもその一つだった。

一日の平均気温が確実に上昇してきたため、皆がやや薄手の服装でいる。だが、お国柄、日照時間は長いが、気温が高いと言ってもせいぜい二十度が限界だ。しかも、ずっと昔から地球温暖化の影響

でこの辺りは気温が下がってしまったている。それなりに体温を保持できる服装である。

他のグループは周囲の迷惑などお構いなしの様子ではしゃぎまわっているのに対して、そのグループは静まり返っている。むしろ、緊迫した空気が流れている、と表現したほうが正解かもしれない。

四人のうち二人は互いに向き合っていて、二人とも数は違いが同じ物を持っていた。一人は一つ、もう一人は二つ。一つ所持している者は片手で、二つ所持している者は両手で、それらを自分の首辺りの高さに上げて持っている。

残りの二人は物を持っておらず、その二人の対峙を眺めている。

それはもう楽しそうに。

「いい？」

一つ所持しているほうが話しかけて、二つ所持しているほうがそれに頷く。一つ所持しているほうが相手の二つあるうち片方を選択し、抜き取った。そして抜き取った物を自分の所持している物と照らし合わせた。

抜き取った物と自分が所持していた物は書かれていた数字とマークが一致していた。

「やった〜！ 上〜がりつと！」

一つ所持していた者は持っていた物を目の前の机に置いて、歓喜の声を上げた。

それに対して二つ所持していた者は、

「あーあ、負けちゃった…」

非常にがっかりした様子で手元に残った物を見ていた。

薄くて掌より小さい長方形で角が丸く、裏にはチェックの模様が描かれ、表側の中心には白黒で描かれた体躯の細い、ピエロのような格好をしたキャラクターが描かれ、同じ面の右上と左下に縁側に沿って、こう描かれていた。

『JOKER』

「それにしても運がなかったねー、ソミー」

一番早く上がってその後を悠々と観戦していた一人は慰めの言葉をかけた。

「まったくだよ。こういう時だけ運が悪いんだもん……」

結局上がれなかった、ソミーと呼ばれた少女ソミアは、自分の運の悪さを怨んだ言葉で答えた。茶色のセミショートヘアに澄んだ薄茶色の瞳を持った、気の弱そうな印象を与える白人の少女で、シャツの上にカーディガンを羽織り、適度な長さのスカートという服装だ。外見は他の三人よりも若干若い。

この学校は制服が定められていないので、服装は自由とされている。大抵の人は普段着を着てくるが、中にはどこかの国の服装を好んで着てくる者もいる。

「ソミーは頭いいのにさ、『ダウト』とか『ポーカール』とか、トランプのゲームにほんと弱いよね」

二番目に早く上がった一人が、ソミアの学校の成績と、今までの成績と、ついさっき終わった結果からの正直な感想を漏らした。

「そうそう。なんでそんなに負けられるのか知りたいくらいだよ？」

三番目に上がった、さっきまでソミアと対決していた一人が、三番目でも勝ちも勝ちは勝ちとでも言いたいような口調で追い打ちをかけた。

「わからない……。けど、学校の成績と運は関係ないでしょ」

「てゆーか、『old made』で連敗記録はばめきを作れるのも、ある意味スゴいと思うよ」

ソミアは成績優秀な生徒で、毎回トップテンに記録されるくらいだ。周囲（特にこの三名）から、何故にそげな点取れるんじやいと、時には陰で、時には直接言われることもしばしばだ。答案が帰ってきた直後に真っ先に得点と答えを訊かれる身でもある。

が、しかし。

ソミアは運動どころかこんなゲームに関しての才能と呼ぶべきものが全くと言っていいほど無いのだ。どれくらい悪いかというと、四、五回トランプゲームをやったうち、一回でも最下位にならなければ良いほうといえるくらいだ。

「ところでロールさん、なにか忘れてませんか？」

一番最初に上がった一人が言った。

「そう言われると、なにか忘れてるような気がしますね。そう思いませんか、アニーさん」

ロールと呼ばれた、二番目に上がったローレンスがバトンを回す。染めた銀髪と茶色の瞳を持った白人の少女だ。

「ええ、私もジャミンさんの言うとおりだと思います」

アニーと呼ばれた、三番目に上がったアナリアが乗る。黒い髪に薄い緑の瞳を持った黒人の少女だ。

「そうですよねえ」

ジャミンと呼ばれた、最初に上がったジャスミンが頷いた。長い金髪と碧眼の白人の少女だ。

そして、三人揃って一緒にソミアのほうに向いて、

「ねー、ソミーさん？」

不適な笑顔を装いながら、見事にハモリつつ言った。

今日はこれで五戦目になる。ソミアはそれまでの四戦は全敗していたので、周期的に「次は勝てる」と自信を持っていた。

それを察したアナリアがこんな提案を言い出した。

『じゃあ、次にビリになった人には罰ゲーム付けない？』

今までそんな付録は付かなかったのでソミアは戸惑ったが、他二人は賛成していたし、さっきの何の根拠もない周期性が空っぽの自信を持たせていたので了承した。

そして見事に完敗した。

「罰ゲームでしょ……。はい、ちゃんとやりますよ……」

ソニアがしょんぼりとした様子で認めて溜め息を吐いた時、予鈴のチャイムが鳴った。

*

正午より少し前。

「やはり…」

サングラスをかけた少年は説明されたとおりの道程を通り、その終着点である場所に辿り着いた。

「人選は考えるべきだったか…」

少年の目の前には、大きな本屋が聳え立っていた。

交錯する生者 3

(前ページより)

*

授業の終了チャイムが鳴り、礼をして担当の教師が教室を出てすぐに、

「ねえねえ、罰ゲーム何にする?」

早速ジャスミンがソミアの席に来た。

「変なものは考えないで、お願いだから。恥ずかしいのは絶対にイヤだからね」

「でも、それじゃあ罰ゲームになんないよ」

「そうそう。こういうのは、もう二度とやりたくない!っていう心の叫びが聞きたいがためにやるようなモンなんだから」

いつの間にかローレンスとアナリアが私の後ろにいた。

これはある意味いじめのような気がする、と思った。

正直、罰ゲームなんてしたくなかった。確かに合意の上で決めたことではあったが、いざ自分に降りかかることになった今では気が進まない。あくまで遊びとはいえ、とにかくイヤだと思うのは変えられなかった。

しかし、いつまでも憂鬱になっけていても仕方がないので、覚悟を決めた。それに、黙って聞いているうちにとんでもないほうに進まれたらたまったものではないので、そろそろ会議に参加することにした。

「やっぱりイケナイ本とかかなあ?」

予感的中。

「いやいや、屋上から街に向かって大声で自己紹介でしょ」

「それはダメだよ。ソミー、声小さいから意味ないよ。ストーリー何

本まで口に入るか、くらいじゃない？」

どれもこれもイヤだ。

それに、なんでこんな短時間でここまで発展できるの？

自分の勘に従って良かったと本気で思った。

「ちよつと！ 勝手に話を進めないで！」

自分ではかなり叫んだつもりだったが、普段の声よりも若干小さく、はつきりともしていなかった。もし大声を出したら周囲から注目を浴びてしまう。そういうのは慣れていないため、できる限り避けたかった。だから自然と声が小さくなってしまっていた（テストのほうは実力を抑えるわけにはいかないし、言われるとしても陰口同然だからまだ気が楽だった）。

そんなソミアの胸中は友人達には全く悟られず、友人達からすれば普段通りの口調で抗議してきたソミアに言い返す。

「だって、ソミーぜんぜん話に参加してこないんだもん」

「ずっと黙ってたから、私たちで決めちゃっていいのかと思ってたよ？」

「それとも何か意見ある？」

三人は私の意見を聞くべく、無言の集中視線を向けてきた。三人にとっては何気なく送る視線なのだろうが、私にとってはそれでもたじろいでしまう。なんとか頭を動かして、私は自分にとって不快ではない、むしろプラスになる意見を提案した。

「じゃあ…夏の長期休暇の宿題を引き受ける…じゃ、だめ？」

「…だめ」

三人は同時に答えた。

「なんでよー？ みんな夏休みに思いっきり遊びたいんじゃないのー？」

「そりゃそうだけど…けど、それじゃあソミーにとつちやあ罰ゲームになんないでしょ」

「そうそう。イヤなことじゃないじゃん」

「むしろ、がつつくよね」

「が、がつついてなんか…」

私は呟くように言った。自分では普段のように勉強しているつもりなのだが、周りからすればそう見えるのだろうか。

自分勝手な妄想は時を積むことに同じく積もってゆくが、そんなことはできるだけ考えないほうがいいと思うし、今はそんなことを考えている暇はないと、無理矢理頭から振り払った。

その後も幾つか意見が挙がったがことごとく却下され（あるいは、話し合いを進めていき、気づけばいつの間にか教室には私たちしか残っていないかった）。

交錯する生者 4

(前ページより)

*

一日の半分を過ぎ、誰もが昼食を取り始めるであろう時間の頃。少年は図書館の玄関を潜った。

あの後、少年は町中をさんざん徘徊し、交差点でようやく見つけたガイドロボを利用し、怪訝な態度を取られ不審者を見る目をされかけながらも、地域案内サービスの施設検索機からこの図書館への正確な道順を教えてもらったのだった。

大幅に苦労した所為か、自然と悪態が思考の中を満たしていった。全く、これ一つ探すだけで、随分と時間を割いたものだ。いつもだったら既に着いてた筈だったんだが。事の原因は分かっている。あの婆さんの所為だ。直ぐ人の所為にするのは良くないっていうのは分かっているが、今回はどうだろう。

確かに俺があの婆さんに訊いたのが問題だったかも知れない。いつもなら、Self do, self haveだ、と済ますところだ。

だが…。

図書館と本屋を同じ物だと思ってる奴がどこに居る？

パトラズに愚痴を零せば、「さっきの婆さん」と屁理屈を言う確率が高いだろうが。

兎に角、疲れた。随分と歩いたから暑いし熱いし余計な汗をかけた。路上にいる店員に顔を覚えられたのではないかというくらいぐるぐる廻る事にもなった。もう二度とこんな事がない事を願いたい。この図書館が冷房完備で本当に良かった。体温調節は出来るが、

空気の温度で涼しくした方が楽だ。

少年は館内に歩を進め、目的の本があるであろうそのジャンルで集められた区画に行った。

少年がこの構造を知っているのは、以前に来た事があるからではなく、玄関を入ってすぐにこの構造とジャンル分けされた配置が書かれた地図があつたからだ。それが無かったら、今になっても外と変わらず徘徊していただろう。

少年はこの館長の親切心に感謝しつつ、建物の側面に向かった。

交錯する生者 4（後書き）

S e l f d o ' s e l f h a v e .
「身から出た錆」

交錯する生者 5

(前ページより)

*

ソミアの通う学校は、帰宅時間を迎えていた。

本当はその日の教育課程を終えると掃除をする時間が巡ってくる。この学校は、掃除のような日常で必要な行為も教育するという学校長の意向により、放課後に清掃の時間が設けられている。クラスメイトの数人が掃除に向かうのだが、私達四人は運良く全員当番から外れていたため、その日は当番の人から恨めしそうな視線を受けつつ帰ることができた。

普通なら教室から校門まで、その日の残り時間を何に使うか話し合うところを、ジャスミン御一行は、

「ホントにどうしょつか、罰ゲーム」

「なかなかいいアイデアが浮かばないもんね、罰ゲーム」

「このままじゃ、やらずに終わっちゃうよ、罰ゲーム」

まだ考えていた。

最後のアナリアの言葉に、ジャスミンとローレンスが、それは避けたいね、と同意した。

「三人とも、罰ゲーム罰ゲームって連呼しすぎ…」

最後尾にいたソミアが、恥ずかしさ半分諦め半分で指摘した。

三人はわたしを揶揄したりするのを本当に楽しんでいるようだ。私が困ったような顔をすれば大笑いするし、やめてと言ってもすぐにはやめようとはしない。今三人に、「罰ゲーム考えるの、そんなに楽しい？」と訊いたら、必ず「Yes!」と即答するだろう。

「この後はどうする？ このまま考えるのもいいけど、外でじゃイヤだよ。今日みたいな晴れてる日にずっと外にいたら日焼けちゃう

し」

ジャスミンが話を少しずらしたが、彼女の言う通りだ。話し合いを行うなら、それをする場所が必要となる。学校ですするという考えもあるが、街のほうに気が向くのがこの三人だ。何かと自由が利く街中のほうがいらしく、妙な管理がある学校はご免なのだろう。

「そうだね。教室はまだ掃除終わりそうにないし」

教育の一環とはいえ、半ば無理矢理に押しつけられた仕事だ。作業のペースはやる気の無さに比例して遅くなっている。

「でも、誰かん家^ちに行くのはナシだよ」

四人のそれぞれの家はこの学校からかなり離れていて、全員公共機関を利用している。しかも自宅の住所がバラバラに散っているというおまけ付きである。

「どこかのファーストフードショップにでも行く？」

「この時間はけっこー混むもんだよ。待たされたらたまないし、それにそういう場所にいるとなにか食べたくなっちゃうからやだな」

三人は揃って、うーん、と唸った。

私は三人が行き詰まっているのを黙って見ていると落ち着かなくなり、荷担する気にはなれないが、仕方なく助け船を出すことにした。

「それなら、図書館にする？」

三人が呆けた顔をしながら、私のほうを向いた。

「商店街から少し離れた所にあるんだけど。あそこなら室内だし、空調設備もされてるから快適なはずだよ」

私は、自分が知る範囲での、条件を満たしている最良の場所を教えた。少し離れていると言っても、三十分以上歩かないと到着しない場所だ。しかし、ずっと外で立ち話をするよりかはマシだと思った。というか、それは私も嫌だったから協力したのだけれど。

「それホント？」

ジャスミンが意外なものを見たような顔をしながら訊いてくる。「本当だよ。何度も行ったことがあるし」

私は真面目に答えた。

「ふつー、図書館って飲食禁止でしょ？ 飲み物が飲めないところだとつらいんじゃない？」

「あ、それも大丈夫だよ。あの図書館、ちょっと変わっててね、外から買ってきた飲食類はだめだけど、館内で販売されてる食べ物だったらオッケーなの。買ったことあるんだけど、本を汚さないための工夫がされてるの。味もけっこう美味しいよ。他にも、建物の中に簡易カフェもあるしね」

「混んでない？」

「うーん…中央ホールは混んでるだろうけど、カフェなら大抵空いてるんじゃないかな」

これからの会議（？）場所の情報を補足し終わると、目の前で私のため（？）に妙案を考案しようとしている女子高生三人組は目を大きく見開いていた。わかりやすいくらい驚いているみたいだ。

「ウソじゃないよね？」

ジャスマミンが少し顔を綻ばせながら訊く。

「嘘なんかないよ。私だって人混みには行きたくないもん」

私は本音を交えて答えた。

「期待しちゃうよ？」

ローレンスが含まのある微笑で確かめる。

「大丈夫。今回は私がみんなを案内するよ」

私は笑顔で答えておいた。

「素っ裸でサンバだよ？」

アナリアが訳の分からない罰を付け加える。

「そんなお仕置き、やだよ…」

ソミアが困ったような顔を見ると、当たり前のように三人は笑い出した。

今何が起きているのか、これから何が起きようとしているのか、何も知らない。

今は、ただ笑う。

交錯する生者 6

（前ページより）

*

気温が落ち着いた頃。

少年は『読書ホール』の端の席で読書していた。机に左斜め向きで腰掛け、左手で本の背表紙を持って支え、右手は本の右ページを押さえている。余った右肘は机上に乗せ、足は足首あたりで組んでいる。

普通なら隣りの利用者に迷惑がかかる体勢だが、その心配は無用のようだ。

何故なら、少年の周り（少なくとも二席以上）には、利用者が居ないからだ。正確には、少年の雰囲気にも近寄れないからなのだが。

少年は既に本の三分の一ほどを読み終えていた。

（そう言えば…）

次のページを捲った時、ある思考が湧出した。

あの婆さん、俺がサングラスを掛けているのは確認できていた筈だ。よく恐怖しなかった物だ。加齢すると度胸が据わってくるのだろうか。物腰が落ち着く、とは聞いた事があるが、あれは嘘だと思う。高齢になっても元気な人は居るから。…いや、あれは元気が良過ぎる。一つの過ちがこんなに今後に影響するのだから、今度から気を付けたい。

少年が頭の中で自問自答に後悔と自嘲の闘ぎ合いを繰り返している間に、図書館の利用者が増えてきていた。

学生が学校に入学するには入学試験を受けなければならない。その為、やる気があるものは新学年になってから直ぐに勉学に励み始

める。自宅で勉強する者もいるが、この辺りに在住する生徒は大抵この図書館に集まってくる。辞典や資料が豊富にあるし、インターネットが設置してあるので志望校に関する情報を検索する事も出来るし（更に電話料金を支払わなくて良いという特典付き）、空調設備が施されているので快適に勤しむ事が出来る、まさに絶好の場所なのだ。

顔を上げて周りを見ると、どこかの学校の制服を着ている者が目立っていた。もうここに居る者は、学校が終わって直ぐにここへ向かってきたのだらう。なにせ公共物という物は早い者勝ちなのだから。席を先取りされてから訪れては全くの無駄足になってしまうのである。

少年は今度は入り口の方を向いた。この建物には窓が無く、日の光が差し込むのは出入り口付近にしかないからだ。もし光を浴びたかったり風に触れたかったら、一度外に出るしかないのである。荷物を置いていくと窃盗される場合が多々あるので、その時は注意しなくてはならない。

出入り口からは暖かそうな陽光が差し込んでいた。日光浴をするには最適な日だったらう。

少年は館内の時計で時刻を確かめた。

現在、午後四時過ぎ。

正午近くから居るから、もう大分居る事になる。

（確か、『午後過ぎ』と言うのは正午から三時までの事を言い、三時から日没までを『夕方』と言う。そして、日没から九時までが『宵の口』つと言うらしい。それにしても、こんなにまだ明るいのに『夕方』とは可笑しなものだ）

少年は本当にどうでもいい事を考えつつ、再び本に目を落とした。暫く読書に没頭していると、妙に目立つ話し声が聞こえてきた。

恐らくまた勉強組だらう。公共物だから利用するのは自由だが、もう少し静かにしてほしい、と少年は胸中で呟いた。

交錯する生者 7

(前ページより)

*

ソミアが案内した図書館は、街の大部分を眺められるほど街から距離を取った郊外に建立されていた。

階層は十階にまで連なる建築物で、高さは階数相応に高い。一般的に知られる図書館と比較すると多少横に長い。屋根付きの出入り口まで含めると、上空から見ると、円に小さな四角を繋げた形で、昔広く使われていた金属製の鍵で開ける鍵穴を思わせる。コンクリートで造られた外壁はほぼ白で塗られ、西の空を染めつつある茜色を映している。汚れが少ないのはまだ建立されてから年を積んでいないからだろうか。

外の道路から出入り口を繋ぐ道と駐車場、屋根付きの駐輪場は地面用のコンクリートで舗装され、それ以外の所は綺麗に整えられた芝生が敷かれ、適当な間隔を空けながら木も植えられている。

図書館の内装は、大まかに捉えればどの階も同じような造りになっている。円の中心から半径のところまで占めているのが『読書ホール』、残りの半径分を棚を使ってびっしり占めるのが『書物スペース』と区別されている。

一階から四階は各国の歴史や文化などの文学を中心とした書物、五階から七階は数学定理の論文や生物学などの理学を中心とした書物、八階から十階は小説やエッセイ、社会学や心理学などに加えてインターネットを設置してある。

さらに各階に、小規模ながらも、休憩と飲食用の場所まである。内部にはエレベーターを備え付けられてある。各階の入り口には書庫検索用一覧表が組み込まれたタッチパネルが設けられており、作

品別・著者別に本を検索できる。同所にカウンターも運営されているので、気に入った本をその階ですぐに借債して、最大二週間持ち帰ることも可能だ。汗牛充棟であり、用意周到な図書館だ。

本の扱いは機械技術が発達した現在にとつて難しい問題でもある。書籍は、紙を媒体にして製本化する。しかし、それは機械がなかった時代において便利だった方法だ。機械技術が向上した現在では、本はチップ化され、それを閲覧用のハードに差し込めば同じように本の内容を読むことができる。

本自体をチップという小型化に成功した今、紙を重ねるだけのかさばる製本化では効率が悪いとして、多くの場所で書籍の機械化が進んでいる。特に、インターネットを介しての閲覧は需要が高い。手元にある端末に取り込めば、手荷物を増やさずに読みたい本を読めるからだ。

しかし、「本は紙でできているからこそ本と呼べるのだ」と世界中の読者から書籍の機械化を反対されたことがあった。その反対意見はあまりにも多く、過去には各国でデモが頻発したらしい。そのため、民意を汲んだこの国の政府は、図書館などの公共機関では書籍の機械化をしないことを決定した。

この図書館は、人のそんな勝手な出来事に振り回されたものの一つなのだ。

私は書籍の機械化をしなかった当時の政府に感謝している。なぜなら、私も紙でできた本のほうが好きだからだ。学校の教科書はすべて機械化されているが、それはなんだか違和感を覚えてしまう。紙を重ねるだけでできた重みのある本のほうが「本」のように思うのだ。

だから、こういう図書館がこれからもずっと建っていてほしいと思う。

「大きいと思うけど、けっこう地味な建物だね」

ローレンスが外見のみの判断で感想を言った。

「見た目はね。中は意外に広い所が多いし、ここを利用する人に悪

い人はいないよ。少なくとも指名手配されてるような人はいないと思う」

本当かどうかは分らないが、私はそうであってほしいと密かに望んでいた。

「でも、本当にここ知らなかったの？ けっこう有名な建物なんだけど」

「私達はこんなトコとは無縁だからね。名前は知ってたとしても場所がわからないし、探す気もなかったよ」

「商店街からけっこう離れてるしねえ」

私はジャスミンの台詞を聞いた直後、普段の授業ですぐにおやすみする三人は本当に活字アレルギーなんだなあと確信した。

そして、ローレンスの意見ももつともだった。この図書館はかなり遠い場所にあるのだ。商店街を抜けてある程度進むと、まるで別世界に侵入してしまったかのように田舎道が続いている。そこを三十分以上も進むとようやく図書館に到着する。町から出ようとしたいか街の近郊に興味がない者には見つけれない建造物だった。

「よっしゃー！ さつそく入るーか」

アナリアがはしゃぎながら入館しようとした時、

「ちよつと待って！」

私は思わず制止した。

「何度も言うけど、入ったら静かにしててよ。中は本つつつ当に静かで、針の落ちた音も聞き取れるくらいなんだから。お願いだから騒がないでね」

ソミアはここへ到着するまでに自分が知っている範囲で図書館の説明をしていた。そして中の様子を説明した時に忠告していたのだった。

「わかってるわよ。私たちを信じなさいって」

三人は図書館の正面玄関へ向かって行った。

三人の背中を見ながらソミアは、

「あなた達だから心配なのよ…」

自分にしか聞こえない声で呟いた。

交錯する生者 8

（前ページより）

*

少年は本を半分まで読み終えていた。
その本は中間あたりになると写真がずらりと載せられていた。そこだけは、毎度のように少し見ただけですぐに捲るのではなく、時間掛けて、見ていた。

写真に写っていたのは、カメラマンが命懸けで撮影した当時の様子・風景だった。

砂色の地面と空に目を凝らしている兵士。

全身汚れた姿でカメラを見上げている子供。

品粗な食料で空腹を満たしている女性。

徴兵され、突然の別れに涙する親子。

薄暗くて狭い地下室の隅で固い毛布に身をくるませて眠る子供。

車に寄り掛かって携帯食料を食べる兵士。

空爆によって跡形もなく破壊された民家。

声を上げて泣く元気もない、母親に抱かれている赤ん坊。

絶望感に満たされ、瓦礫に座って呆けている住民。

空に立ち上る黒い煙の中を、他人事のように通り過ぎる飛行機。

現在となつては用途が失われ、使用されることが無くなった、白黒の写真の数々。

どの写真も、当時の情景を真正面から撮影されてあった。

写真は“真実を写す”と書く。だが、たとえその風景が本当だと
しても、全ての真実を写しているわけではない。

一枚の写真は無数にあるコマの一つに過ぎない。

一コマを撮るまでにどんな過程があつたか、推定は出来ない。

写真の画像はレンズに映った方向しか撮れない。

レンズの反対にはどんな景色が広がっていたか、想像では決められない。

色は写せても、音までは写せない。

当時の思いまでは、伝えられない。

真実を伝えるにはその場に直接居合わせた、嫌でも体験させられた者に伝えさせるしかない。

過去の資料などの情報を元にした、人から人への伝聞では意味が無い。

（その為に俺達を使うつもりなのか…。いや、それも課せられた運命の一つ、か…）

伝えたところで、どれほど重要なのか、理解してくれるか分からないのに。

この世には沢山の人間が居るのに、理解出来る者が殆ど存在しないのだから。

（悲しい物だ。無駄だと判断できるのに、俺達はこれからも続行しようとしているのだから。全く以て愚かだ）

続けようとしているのはどうしてだろう。

それが自分の運命だからか。

単純に、無知な者達に教えてやりたいだけか。

理解出来る者などいない事を、諦めたくないからか。

少年は自分なりに納得のいく答えを出そうと、暫く考え込んだ。

暫く考え、読書することも忘れ、考察に時間を投資し、結局導き出せた答えは、無かった。

交錯する生者 9

（前ページより）

*

ソミアたち四人組は館内に設けられてある簡易カフェの席に座っていた。

入館した直後に、

「何階に行く？」

と訊き、各階の簡単な説明をしようとした直前に、

「どこでもいいんじゃない？ べつに本読みに来たんじゃないんだし。それに、歩き疲れたから、どこでもいいから座りたいのよねー」

という意見が挙がり、それに全員が賛成したので一階を利用することにした。各階に学習スペースが設けられているのだが、この時間は熱心な受験生で満員である可能性があったので、あえて言わなかった。

そして、閑静なホールを横目に、カフェで運良く見つけた空席四人分を占拠したのだった。

席まで移動するまでに「いやー、快適だねー」とか「窓ないんだあ」とか「みんな、勉強熱心ねー」など、あれほど静かにしてと言ったにもかかわらず好き勝手に声を出すもんだから、休憩中の方々から強力な眼力ビームを浴びる羽目になったことは余談（ソミア以外の三人は特に気にしていなかったようだ）。

話し合う前に、全員はジュースを買ってきた。喉が渇くだろうということへの対策だが、ローレンスはさらにハンバーガーも注文した。彼女はあまり太りにくい体質なので、食事制限については無頓着らしい。

「じゃあさっそく。何にしようか」

ジャスミンが間髪入れずに本題へ移させた。

「変装系と購入系はイヤなんだよね？」

「うん。…それだけに限らないけど」

一言本願を付け足しておいたが、果たして効果があるだろうか。

「考えてみれば、用意するのにお金必要になるよね。大金つぎこむのはイヤだな」

「室内のものならいいけど、屋外のものだったら時間がかからないものがないな。外熱いし、日焼けしちゃうし」

ジュースを飲みながら言うアナリアと、バーガーをナイフとフォークを使って切って食べているローレンスも、個人的な条件を出した。

私は少し驚いた。前までのよりちゃんと問題点を挙げているし、後先を考えてもいるからだ。

「まとめると、今すぐにでもできるもので、しかも時間がかからないものっていうことだね。…難しいわね」

そして、相変わらずジャスミンはみんなを纏めるのが上手い。

「今すぐにでもできることかあ…」

アナリアが何気なく首を回す。これだけ悩んで思い付かないものが、周りを見ただけで見つかるなんて都合の良いことがあるはずなのを承知の上で。

だが、

「……………」

偶然にも都合が良かった。

「ねえねえ…」

アナリアが嬉しそうな顔で言った。

「なに？　なんかいいの思いついた？」

「うん、思いついたよ。今すぐできて、時間がかからない罰ゲーム」
アナリアは四人で座っている場所の中心あたりまで身を乗り出した。

「なにになに？」

それと同様に三人も身を乗り出した。

アナリアは声が余計なほうへ散るのを防ぐために手を口の横へ当て、小声で言った。

「あのね…ソミーが、あの人をナンパするの！」

アナリアは自分から向かって二時方向にいる、硝子越しに見える人物へ指を指した。三人が指を指されたほうを向くと、『読書ホル』のそこには確かに人がいた。ただ見回しただけでは見落としてしまいそうな人だった。

空席の中心にいる、片方だけのサングラスを掛けた、奇妙な少年が。

ジャスミンとローレンスはアナリアと同じように歓喜の表情を浮かべ、ソミアは青ざめていた。

私があの人にナンパ？

あの、誰も近寄るのを避けているような人に？

そんな…。

「だめ！ ぜえつつつたいにだめ！！」

私は猛抗議するため、やや大きな声を上げてしまった。『やや大きな』とは言っても、それは普通の人の声ほどだが。

それでも、カフェにソミアの声が響いたのには違いなく、直後に周囲から視線の一斉掃射を受けてしまった。

顔がかなり火照るが、今度は音量を抑えて、抗議した。

「なんでナンパなの！？ 私そんなの一度もしたことないのに！ しかもその相手が…あんな人なんて！」

「なんで？ 今までの中で一番いいと思うけど」

「確かにすぐにできて、時間もかからないわね」

「もう二度とやりたくない、つてのにも当てはまるよ」

「だからって、ナンパはないでしょ…」

「ソミーの将来に役立たせるための練習よ。あんな適役は他にないわ。ソミーって、確か人見知りするほうでしょ？」

確かに。どちらも間違っではない。だが、

「ナンパって、私の将来に必要なの？」

「役に立つに決まってんじゃない！ たぶん」

最後の「たぶん」が気になるが、そう強く断言されるとなんとなく納得してしまう。

「でも…もし襲われそうになったらどうするの？ 将来の心配より、今の心配してよ」

「だいじょーぶ。その時は私たちが助けるから。警察への通報も準備しとくし」

「でも…」

何か言い訳を考えようとしたが、焦ると頭が上手く働かない。

「…」

「決まりね」

ジャスミンが思考を強制終了させた。

「心配しないで。別に変なことを言うんじゃないわ。お茶でもどう？って誘えばいいだけよ。もしナンパに成功したらあとから私たちも合流するし、失敗したら、いい経験をしたってことでいいじゃない。どっちにしろ、声をかけ終わったら、みんなでなにか食べに行こ？ ね？」

「うん…」

席を立とうとした時、ジャスミンが「ちょっと待って」と止め、もし成功したら“右手でサムアップ”、失敗したら“左手で耳を触る”ように言った。「なんで耳なの？」と訊くと「それしか思いつかなかったのよ」と言われた。

「じゃ、がんばってね」

交錯する生者 9（後書き）

ハンバーガーの食べ方は国によって違います。

アメリカ文化では素手で持って直接かぶりつきますが、イギリス文化ではナイフとフォークを使って食べます。

さて、どちらがお行儀の良い食べ方でしょうか？（笑）

「じゃ、がんばってね」

(どうしよう…)

私はさつき自分がいた場所とその少年が座っている場所の丁度中間で立ち止まっていた。

背中を押されるようにみんなのもとから出発したが、いざ実行しようとするとなんをすればいいのかわからなくなり、立ちすくんでしまった。

(さつきは雰囲気を押されて意を決したこと言っちゃったけど…改めてあの人を見たら…)

私は少年を見た。

(………怖いっ)

少年はさつきと変わらず近付きがたい雰囲気を纏っている。普通の人でさえ接近もままにならないのに、ソミアのような人間がそれを試みようとするのは無謀ともいえる。

(と、とにかく…近くに座らないと…)

だが、いきなり隣りに座ったら不審がられること間違いなし。ここは静寂した空間だから立ち話なんてしたら筒抜けだ。また睨みつけられてしまう。

せめて、近くに座っても怪しまれない方法があれば…。

(あ、そういえば…)

私は再度少年を見た。相変わらず本に没頭している。

(本を読むために座らせてもらっ、っていう理由なら怪しまれないかな…。うっん、怪しまれるほうが変だね。だって、ここ図書館なんだし。うん)

私は我ながら妙案だと考え、これなら問題ないと自分に言い聞かせて、早速本を取りに『書物スペース』へ向かった。

ソミアが視線を外した時に少年はページを捲り、そこで手が止まった。

（なんで…？）

本を選んで『読書ホール』へ戻ってきた時、自分の目を疑った。少年はまだ本を読んでいた。

だが、さっきとは明かに違う。読む体勢が違うとか読んでいた本が別種になつているとか、そんな単純なことではない。

まず、ずっと動かないのである。さっきまでは数分ごとでページを捲っていたのに、今はなかなか次のページに進もうとしない。そして、表情が険しい…気がする。はつきりとした変化ではないが、さっきまでは無表情で読んでいたのに（それでも充分近付きづらい）、今は目を細めて眉にも力が入っているような気がする。

まるで、本の内容を憎んでいるかのような。

私はマナーモードにしてある、腕に身に付けている携帯端末装置を操作し始めた。運動愛好家が使う汗拭きのリストバンドのような形状だが、柔らかい素材で造られた端末で、この時代では主流の形態の一つだ。このリストバンド型の他に、首から提げるタグ型やブレスレット型、指輪型などがある。私はリストバンド型にしている。女の子はブレスレット型やタグ型が多いのだが、私は今はこれじゃないと落ち着かない。

ブレスレット型の場合、起動ボタンは親指からの延長線上の側面にあり、装着していない側の手首を当てると静脈系列を読み取ることで反応する。静脈は個々で異なっているためにプライバシー保護によく使われる。起動すると手の甲側の帯から二次元の画面とキーボードが空間に投影され、そこから番号なり文字なりを操作する。

通話口とアンテナは無く、電話をする時は、手の平の側の帯を腮辺りに当てて話す。そうすると骨を伝わって渦巻管に届くので、騒

音に妨げられることがない。電子メールはデスクトップのソフトを選択し、書く。

バッテリーは基本的に外的な光源からの光発電と装着者の体温からの熱発電を利用するので、故障しない限り電池切れはない。

他にも別売りで、機種によって異なるが、赤外線通信とか、盗聴妨害ソフトや対ウイルスソフトとか、気温・湿度・紫外線放射度の計測オプションとか、その他諸々があるが、沢山ありすぎて覚え切れない。

私はややぎこちない手つきで文章を入力して、少し離れた場所にいる仲間に救難信号を送った。

『やめていい?』

仲間からの返信は勿論、

『ダメ』

と送られてきた。

『本当に怖いんだよ?』

と送ると、仲間はずんでもない返事をしてきた。

『Go for broke!』

私は早くこの悪夢から覚めてほしいと心から願い、仲間に『化けて出てやる』と返信して、携帯端末をしまった。

私は溜め息をつき、そして吐いた息の分だけ深呼吸をした。

今日はなんて運の悪い日なのだろう。ゲームで連敗を喫しただけでなく、こんな罰ゲームまで降りかかることになった。せめて、自分の努力で結果までが悪くならないことを祈るのみだった。

悪友に言われた通りに当たって碎ける覚悟をして、少年のいる場所まで進んで行った。

「あの……」

「……?」

「うう、座ってもよろしいでしょうか…?」

交錯する生者 10 (後書き)

G
o
f
o
r
b
r
o
k
e
.
「当たって砕ける」

空の太陽は地平線の近くまで下がり、色も橙色に変わりつつある。夕方になって気温が下がってきたので、薄い服装では堪えるようになる。

街の建造物にも徐々に光の色が着色し、高い建物には高い、大きな建物には大きな、それぞれの形を移す影法師が伸びている。

西に窓があれば鬱陶しいと感じるほどに陽光が差し込んでくるが、そちら側に窓が無ければ、蛍光灯を付けなければ暗く感じる頃でもある。それは民家、会社、施設、どこの建物だって同様だ。

ある例外を除いて。

街のほぼ中心に位置する地域に商店街がある。そこから北に向かうとやけに目立つ建物があり、周囲から浮いているように存在していた。

普段ならそれだけで説明が済むが、この日は特別だった。

今日限定で、外側だけでなく、内側も変わっていた。普段の『静寂した空気』は、この日だけ『緊迫した空気』になっていた。誰もが音を立てる事を恐れ、関わりを持つことを避けている。きっとそこにいる全員が「今日は厄日だ」と思っているのだろう。

勿論、

(どうしよう…)

ソミアもその一人に違いない。

あれから彼に許可を貰えたのかどうか疑わしい反応をされたが、何とか彼の隣の席に座ることはできた。机に向かって真っ直ぐ座った状態で、そこから左を向けばこちらに身体を向けた少年の姿が見える。が、そこからどうすればいいのか全く考えておらず、何か

しようと思考を練るが名案は浮かばず、適当に選んだ『この社会は間違っている！ 国民で変える社会改革』という本を開いたまま、結局三十分ほど浪費していた。

（どうしよう…どうしよう…！ いきなり『一緒にお茶でも飲みに行きませんか』なんて馴れ馴れしいこと言えないし…いや、それがほんとのナンパなんだろうけど、恥ずかしすぎるし…相手が悪いよお…）

ソミアの一人会議に進展はない。

（えっと、『私ソミアです』って自己紹介しても意味ないし、『いざ行かん、茶の出でる店へ』って、いつの時代これ！？ んと、ジエスチャーで伝える…って、言葉が通じないわけないし…たぶんまず変だし、『おぢや〜』なんて言ったら即刻警察行きだし、『ヘイ兄ちゃん、なんか飲み行かない？』ってこれは問題外…なんで私こんな言葉遣い知ってるの？）

今入館してきた人がいたら、本に向かつて睨み続ける怖い少年と、何故か頭の前から真っ赤になりながら小心翼翼している少女がいる、と思うだろう。

ジャスミン達は「何してんの、早くしなさい！」という苛立ちと、「どうしたんだろ？ 大丈夫かな…」という心配を抱えながら、あれからずっと見ていた。

（——そうだ！ いきなり誘おうとするから、いけないんだよね。何か他の、何気ない話題から始めれば…）

私は今までで最良の案を思いつき、実行に移そうとした。面を上げ、使えるものがないか左右を見回す。その光景を傍から見ているら、俯きながら悩む少女がいきなり顔を上げ、更に周囲を見回し始めたことに驚いただろう。

懸命に探すが、ここは図書館。ある者は本や本棚、机に椅子、時計、そして他の利用者くらいだ。

軽い話題から始めようと思っても騒いではいけないし、まず相手がその話に付き合ってくれるかどうかが問題だ。慎重に選ばなければ

ばならない。

また、相手と自分の言葉が合うかどうか問題だ。少年の外見は東洋か中東の人だと思うので、自分と違う言葉を話す可能性があった。ウェールズ語やゲール語なら聞いたことがあるが、それ以外の言語だと自信がない。やっぱり、当たって砕けることになるんだろうか。

心配しても仕方がない、と自分に言い聞かせて、まずは話し掛ける話題を考えることにした。

相手にも話しやすい話題（しかも初対面）にするには相手にとって身近なもの、例えば相手が身に付けている装飾品や所持物などの話題にすればいい。そう思っただけで改めて少年の容姿を見てみる。

少年が身に付けている物は、片方だけのサングラスと、空調が整備されているのに着る必要があるのかどうかと疑いたくなるジャケットと……え！　これだけ！？

もう一度確認してみるが、そのサングラスを掛けている以外は普通、というより無関心という感じだ。サングラスを外せば何の変哲もない、ただの少年に見えただろう。

よくよく見ると、顔立ちがけっこう整ってるかも……。

右目しか見えないけど、きつい目つきはしてないんだよね……。恐い顔してるけど。

素顔、見てみたいな……。

いつの間にか私は少年のことをずっと見つめてしまっていた。傍から見ると、読書している少年の姿に魅せられた少女、と誰もが思う光景だった。

そして、私の行動は少年にまで反応されてしまった。

「……何か？」

少年は本へ向きながら、視線だけを動かしてソミアのことを睨んでいた。

「え！？　あ、あの……すみません、なんでもないです！　ごめんな

さい！」

私は早口で謝罪すると同時に、初めて聞いた少年の声に感動のよ
うなものを覚えていた。少年は英語で話したので、言葉が通じるこ
とを知って少し安心した。一方で、少し低めの声色に威厳が感じら
れたが、棘のある言い方には聞こえなかった。だが、友好的とも言
えない言い方でもあった。まるで“言葉を言うだけ”のような言い
方で、感情が込められていたかも怪しく思う発音だった。

って、観察してる場合じゃない！　こんなこと早く終わらせよう！
私は余計な煩惱を絶ち切り、今まさに問題になっている本題を呼
び覚ました。

（えっと…えっと…）

焦りは思考能力を低下させる。込み上げる焦燥感を出来る限り抑
制させるよう努め、今度はさり気なく、再び少年を見る。

（身に付けているものじゃダメなら、他の、関心がありそうなもの
がないかな…）

だが、自分で考えた案に自分で問い返す。

…関心があるものって？

私と少年は完全かつ完璧な初対面なのだ。その相手の趣向を山勘
で当てるなど、普通はほぼ不可能だ。

（…）

だが、今回は場所が幸運を呼んだ。

今いる場所は図書館だ。

それ故、少年は（相変わらず同じ本を同じ体勢で）本を読んでい
る。

つまり、相手が読んでいる本に関連した話題にすればいい。

それに、さつきから畏怖の雰囲気を漂わせているのは、今読んで
いる本に関係があるのだろう。

私は残された希望をこの方法に託して、実行に移そうとした。が、
人生そう上手くはいかないらしい。

（…表紙が見えないっ）

少年は本を机上ではなく膝の上に載せて読んでいる。私の位置からだと惜しくも見えないのだ。

（じゃあ、そこから始めるしかないのかな…）

本来より一つ過程が増えたことにうんざりしながら、勇気を出して、話しかける。

「あ、あの…」

「…?」

少年が私の視線と自分のを合わせる。私はその眼光に少し身を引かせてしまいが、負けじと言葉を出す。無理矢理作った愛想笑いも付けて言った。

「その…な、何の本を、読ん、でるんで、す、か…?」

気持ちは充分だったが、行動に比例することはなかった。苦勞して出した台詞は途切れ途切れになってしまい、音量も図書館のような静寂した場でも聞き取ることが困難なほどの大きさしか出なかった。

幸い、少年は聞き取ってくれたらしく、読んでいた本を持ち上げ、表紙と背表紙を私のほうへ向けた。その意味は、自分で見たほうが理解しやすいだろ、なのか、言うのが面倒だから自分で読め、なのか。もう少し愛想を良くしてくれてもいいんじゃないかなと思う。

せっかく見せてくれている表紙を見て、思わず声に出して読んだ。

「『二十世紀の歴史 戦争編』…?」

少し驚いた。

普段自分はそのようなジャンルの書物は読まない。読むことはあっても、それは学校の宿題が何かで読む必要がある時だけだ。だから、普段からそのような書物を読むからには、その方面の研究をしている人か、とても優秀な人か、世界平和に関心がある人か、単にその方面の趣味がある人だと思った。

見た目はだいたい十五、六歳くらいだと思うけど、でも、世の中には童顔の大人だっている。または、大学へ飛び級した人かもしれない。そう考えれば、何となく納得できる…かもしれない。

実のところ、いったいいくつぐらいなんだろう…。

かなり知りたくなつたが、いきなり年齢を訊くのは失礼だと思い、当初の予定通り本の話題で話を繋ぐ。

「戦争に興味があるんですか？」

私は正直な気持ちを口に出した。

「…それなりに」

少年（見た目）は短く答えて、再び本に目を落とした。

そして、小さな沈黙が流れた。

いけないっ！

このままだとここで会話が終わっちゃうっ！

何とか話を繋げないと。

「えと…二十世紀というと、二つの世界大戦があつた時代…でしたっけ…？」

「…それだけではないが」

私は思わず口を噤んだ。今の台詞には、今までにはなかつた感情のようなものが込められていたような気がした。なんとなく、これだ…。

私は気持ちを元に戻して、次の台詞を考えていると、

「戦争は恐ろしく、そして醜い。どちらの戦いも兵士だけでなく、一般市民までが死に過ぎた。人間性など、何処にも有りはしなかつた。そんな業を犯しておきながら、人間は簡単に忘却し、知らないから、分からないからと身勝手な言い訳をして、また同じ愚行を繰り返す。いつ考えても、愚劣で、単純で、情けなくて、浅はかで、馬鹿馬鹿しい」

少年が先に口を開いた。

無表情のままの淡々とした口調だが、感情を表に出さないように抑えているようでもあつた。何故なら、今までの雰囲気には醸し出していたのに、台詞には何の感情が含まれていないのはおかしいと思つたからだ。

人を寄せ付けないほどの感情を空気に混ぜておいて、無心であるはずがない。理由は分からないが、戦争に関して、何か忌まわしい

ことを知ったのだろう。途中から雰囲気が悪化したのも、戦争に關した本を読んで感情が漏れたのなら納得する。

すっかり気まずい空気になってしまった。

次に出す台詞が思いつかず、しばらくそのまましていると、私の携帯端末が振動した。この振動の仕方は、メール着信だ。

携帯端末の画面を開いてメールの中身を見る。

それは、あの三人からのメールで、

『どーしたの？ けっこー仲良くなったみたいだし、そろそろ言っちゃえば？』

とあった。

どのへんが！？

まだ数えるくらいの言葉しか交わしてないのに！

ていうか、今、硬直状態の真っ最中じゃんか！

あの三人のほうを見ると、握った手を挙げていたり、両手をメガホンにして口を動かしたりして応援しているようだった。

再び少年のほうに向き直り、仕方がない、と一つ大きな溜め息をついたあと、当たって砕ける精神で意を決した。

「あ、あの…」

「…？」

少年が私の顔を見る。さっきとは何か違うように感じられたのだろう、読書の態勢から会話の態勢に変わった。

「わ…私と、その……ど、どこかへ、行きませんか…？」

言った。

言ってしまった。

こんな単純な言い方は二つと無い。

言った途端、自分でも分らないほど急に顔が真っ赤に染まってしまった。こんな台詞を言うことは私にとっては初めてだ。だからというか、なんというか、とにかく恥ずかしくなった（ソミアは失念しているようだが、ここは図書館だ。台詞が他の人に筒抜けである）。

収まらない気持ちを堪えながら、返答を待った。早く答えてほしいと願いながら。

すると、少年は読んでいた本を閉じて、椅子から立ち上がった。そして、答えた。

「…申し訳ないが、断らせてもらつ。今は遊戯に付き合っている余裕は無い」

少年は言い終わると、律儀に読んでいた本を元の場所に戻して、無駄に余計な動きは見せずに図書館から出て行つた。

私は半分呆けてながら、少年が見えなくなるまでその姿を追っていた。

選ばれた臆病者 1

第二章 選ばれた臆病者

現在、二三世紀前半。

人間の人口は約八〇億人ほどとなった。

幾多の社会問題や他国との国際問題を経て、人間の生活はかなり高度に発展した。

特に、科学技術に関しては、過去三百年に遡ってしまえば比べようのないほど向上している。たびたび勃発した国際紛争が懸念され、どの国も時刻を迎撃・出撃できるよう、軍事力を上げていった。死者が出ることにより、人体実験が秘密裏に進められ、既存の手術方法や薬物療法に改革が行われていった。一方で、便利になりすぎたネットワーク技術は情報の取得や連絡手段といったような代表的な機能を高度に向上させることにより、世界中のユーザーを依存させていった。

医療、戦争、情報ネットワーク。

一見無関係に思えるこの三分野は、それぞれを阻害し合うことなく確実に人間の科学技術の進歩に貢献した。

だが、良いことばかりではない。

食糧問題、環境問題、外交情勢が深刻化していた。

日進月歩に豊穡してゆく人類の技術をもつてしても、国際的に問題視されている難題を解決させるに至っていない。

昔から続いてきた領土に不満を訴えたり、今日も信仰者の精神の糧となり続けている宗教による見解の違いに立腹したりして、時々

国同士で戦争が勃発した。それらの中には関係のない隣国まで巻き込んだものもあり、その際にいくつかの民族を絶滅寸前まで陥れたものもある。

また、技術の進歩は軍事兵器にも影響し、戦争が勃発することによって大勢の犠牲者を出した。時には飛行機で空爆したり、敵国のコンピュータに侵入して社会規模で混乱を招かせたり、毒薬を散布して空気を浄土を汚染して食物を枯れさせ大飢饉を起こさせたりした。

世界の各国で起きたニュースを誰もが気軽に閲覧できるようになった情報化社会は、発信源となるマスメディアが強大な権力を持つようになった。また、そのメディアによって報道される情報の解釈が変化し、他国との外交を悪化させた例が目立った。

他にも、出生率の低下も見られた国もあった。特に、先進国は出生率の低下が目立った。

その結果、世界人口は想像していた以上の数には増加しなかった。

治安が安定しているかどうかは国ごとに差異が著しく、紛争や内乱は絶えない。

だが、市民は平和である以上、それ以外の余計な内情には関心がよらなかった。

しかし、『世界環境保護機関』の調査員達にはどうしても腑に落ちないことがあった。

あれだけ戦争を起こしたにも関わらず、オゾン層の欠落拡大、二酸化炭素の増加、戦地付近の海域汚染、土壌汚染、森林破壊、特定有毒ガスの漏出散布された大気汚染、酸性雨のpH増量といった、戦後に予想された数々の環境問題が最小限に抑制されていたのだ。さらに付け加えると、二世紀以上前から問題視されていた『地球温暖化現象』が、なぜか予測よりも遙かに食い止められているのだ。

自然現象とは考えられず、それを実行している活動団体がいるはずだと世界規模で探し回っているが、一向に見つからず、ただただ環境を維持し続けている偉大な星に感謝するしかなかった。

それらが現状となっている、今ソミア達が住んでいるのが、この時代の地球である。

選ばれた臆病者 2

昨日のナンパ失敗からずっとこんな感じである。

あれだけ勇気を振り絞ったのに結果は散々となり、私はかなりの間を呆けてしまっていたことをジャスミンたちから聞かされた。

一夜を越えたが、罰ゲームから解放された安堵感と失敗に終わってしまった空虚感で、今日の授業は完全に馬耳東風だった。どうやらナンパの失敗は私にとって尾を引くものであったようだ。

あのあとは、ジャスミン達にナンパの失敗を悟られ、落ち込みながらも約束通り図書館のカフェでお茶を飲んだ。だが忘却させるには力不足で、結局次の日までずるずると引きずってしまったのである。

私は相変わらずのローテンションで顔を沈ませながら鞆に自分の荷物を入れ、帰り支度をして帰路に発とうとしていた。

その時に、

「プラヒュリー」

誰かに自分のファミリーネームと呼ばれた。

面を上げて周りを見回すと後ろから、私のクラスにいる、お洒落の「お」の字もないような眼鏡を掛けた男子がいた。

「外国語担当のロス先生が呼んでたよ」

彼は用件である伝言を私に伝えた。

「あつ、そうなの？　なんだろ……？」

「なんだろうね。今日一日中ボーっとしていたようだから、そのことかもね」

彼は口の両端を上げて笑顔を見せた。

私は正直彼のことは好きではない。だが完全に嫌いというわけでもなく、クラスメートからの知り合いという程度に済ませていた。

一方、彼は噂によると私のことを敵対視しているらしい。これは

ジャスミン達から聞いた根拠のない噂だが、間違いなく自分より成績が良くて順位が上のソミアのことを僻み妬んでいて、テスト返却日には特にその様子が窺えるという。

今回だって、私が腑抜けていた様子を指摘してきたし、私を観察している可能性は高かった。

初めてその話を聞いた時は畏怖感を覚えたが、「いやじゃないの。そんなのメツタメタのギツタンギツタンに返り討てばいいのよ」と言われ、非常に物騒な物言いだが少しだけ安心したのを覚えている。珍しく声を掛けてきたのは私の様子を窺うためか、それとも委員長役目から生じた親切心か。それは本人以外には分からない。

「ちよつと、調子が上がらなくて…。教えてくれてありがとう」

「どういたしまして。躓いて転ばないように」

そう上辺は親切に言つて、彼は教室を出ていった。

私は彼が見えなくなると思わず溜め息を一つ吐いた。

「度胸試しはどうだった？ ソミー」

と肩に手を置かれながら声を掛けられ、若干心臓が跳ねた。

この声の主は、ジャスミンだ。

振り返ると、ジャスミンは勿論、ローレンスとアナリアもいる。

「…三人とも、見たなの？」

「そりゃあもう、バツチリと」

ローレンスが答える。

「あいつがソミーに声をかけるなんて珍しいね」

アナリアが一部始終の感想を述べる。

「それは私も思ったよ。正直、ちよつとびっくりしたもん」

「だとすると、気になるわねえ」

ジャスミンが右手を顎に当てて、『考える人』のようなポーズを作った。その台詞に「何が？」と疑問符を付けたのは私だけだった。

「アイツ、ソミーにホれてるんじゃないくて？」

「えっっ！！」

と驚いたのも、やっぱり私だけだった。

三人は嘲笑うかのような表情で私を見る。

「少女漫画によくあるでしょ？ “互いに嫌い合っていた二人が、やがて両想いになる” っていうの。前からあのヤローはソミーのことを気にしてるのよ？ そこから恋愛感情が生まれたっておかしくないって。ソミーは頭いいし、顔も悪くないと思うし、悪い所といえば、運動音痴で運が悪いつてところくらいよ」

ジャスミンは自分の憶測を一気に喋った。

それを聞いていると、なんだか恥ずかしくなり、赤面してしまった。否定したいのに、恥ずかしさが声帯を邪魔して声が出せない。

「いやー、世間はわかんないねー」

「ほんと。これからは二人の行く先をしっかりと見届けなきゃねー」とローレンスとアナリアが追い打ちをかける。

言われるほど恥ずかしくなってはくるが、実際のところ私は彼とはあまり関わりたくないと思っている。成績は優秀だし信用性もあることに否定はしないが、なにかと見られているような気がして安心できる人には思えなかった。そばにいたいとも思ったことがない。あんまり言うとなんに失礼だけれど、少なくともこれから恋愛感情が生まれることはありえないと思う。

私は一心不乱の全力否定を実行しようとしたが、先にジャスミンが話を切り出した。

「さてと。その話はここまでにして。さっきの会話を聞いたら、ソミー今日は急な用事ありなんだってね」

「う、うん……。だから、今日は一緒に帰れないみたい」

「待っててもいいわよ？」

「ありがとう。でも、ロス先生じゃ、いつ頃帰れるか分からないから」

「そっかあ。ならしかたないね」

「じゃあ、今日はここでバイバイだね」

「うん」

そう言葉を交わして、「じゃーねー」と手を振って別れた。

私は一緒に帰れないことを寂しく思いながら、職員室へ向かった。

*

「もしもし、俺だ」

幾多の店が建ち並び、数多の人が行き交う、いつもの商店街で、少年が通信機の向こうの相手に話し掛けた。

「何か動きは？ 分かった。無いなら良い。 ああ、分かっている。その為に俺はこの街に居るのだから。必ず食い止める。 相変わらず、と言われるても返答に困る。そんな簡単に人は変わらないだろう。 ああ、分かった。では、何かあったら連絡してくれ。 これでも頼りにしているつもりだ。ではまた」

少年は通信機との会話を切り、雑踏に消えていった。

今日、教師に呼び出されなければ . . .
今日、商店街に行かなければ . . .
街に、あの建物が無ければ . . .
昨日、あの少年に遇わなければ . . .
運命は、変わっていたのかもしれない。

選ばれた臆病者 3

(前ページより)

*

彼の予想通り(なんかちよつと悔しい)、授業に集中していなかったことを注意されてしまった。

幸い、今までの授業態度から今日は調子が悪そうだと憶測されていたので、大きな叱責を受けることはなかった。それでもロス先生は話が長く、さらに好機と言わんばかりに過去の不愉快な点まで掘り下げてきた。話が長い、過去のことまで引つ張り出す、という人から嫌われる六つの叱り方のうち二つを取る人だったので、下校時刻が予想以上に遅くなってしまった。

そのまま帰宅してもよかったが、独りはやはり寂しい気もしたし、あの三人もきつとあそこにいるんだろうと根拠もなく確信していたので、暇潰しに商店街に行くことにした。

西日になりかかって橙の色を付けつつある太陽が、立ち並ぶ数々の建物やこの一瞬一瞬を楽しんでいる人々を照らしている。家族や友人とくだらない話や身近にあった面白い話で盛り上がり、その平和で微笑ましい光景を佇む建物達が見守っているように見えた。

当てもなく商店街を闊歩して、ある区画でアクセサリーショップを見つけた。見つけた所に入る、という暇人達の習性に従って、私はそこに入店してみた。店内は店頭以外にライトなどで明るさを強調させ、落ち着く雰囲気を出させる壁紙やカーテンで飾り付けされた、シンプルながらもおしゃれな店だった。

売品には指輪、ブレスレット、ネックレス、イヤリング、ペンダントの他、キャラクターがプリントされている指輪の玩具、型に色

付きのプラスチックをはめ込んで加熱し鮮やかな色に仕上がったものに鎖やホルダーを付けてアクセサリーにした物など、子供が購入するには高級すぎる物や誰でも購入可能な安物まである。中にはビーズを使って自分で作れる創作セットや前述した型と色付きプラスチックの創作セットまである。

私はとりあえず店内を一周し、途中で「ゆつくりご覧になって下さいね。試着される際にはお申し付けください」と店員に言われて一応礼を言い、回り終えたあとは安物が揃うイヤリングが置かれていた区画へ向かった（流石に高価な物を買う度胸がないし、まずお金が無い）。

そこには様々なイヤリングがガラスケースの中に掛けられていた。商品の輝かしさを強調させたためか、ガラスの中に上下左右からいくつもの光を通して明るく照らされている。こうすると電球が見えないため、見栄えが良くなるのだそうだ。

かけられている商品には、ハートや星、菱形に水晶型、そして秋^{コス}桜、向日葵などの花形に、何故か今の季節には縁遠いクリスマスツリーの形まである。少しは考えて、店員さん。

店の意図が理解できないことに呆れながらも、なんだかそのようなことがおかしく思えてしまい、少しだけ顔を綻ばせた。

私は店員に頼んで、その中の、花の形を枠で模し、花卉の中心に橙色の石が詰め込んである小さなイヤリングを取ってもらい、購入することにした。

レジに持っていく、代金を払うために服の胸ポケットから『パースカード』を取り出した。

パースカードというのはこの時代の財布のことで、先進国のほぼ全員（実質、世界の約六割）がこのパースカードを所持している。義務づけられている、といっても過言ではない。

一世紀程前、全世界の貨幣に加えて、史上初の世界通貨が生まれ、このパースカードを使用することが国際首脳会議で正式に認証された。これはカードに振り込まれた分の金額をポイント化し、デジタ

ル表示した物である。クレジットカードとは違い、後から請求される使用料を払うのではなく、会計の時に所持しているポイントから代金分のポイントを引く仕組みだ。要するに、貨幣での支払いと同じである。

さらに、カードにはレジのセンサーに通すためのコードの他に、ボタンとディスプレイと赤外線通信用センサーが搭載されており、ボタンを押すと今所持しているポイントをディスプレイに表示することもできるので、使いすぎるという事態を極力避けられるのだ。赤外線通信センサーのほうは、相手にポイントを譲渡する時に、例えば、親が子に与える小遣いなどに、使うものだ。

立案時は文化放棄を招き兼ねないことや専用機器の設置などの問題が挙がったり、銀行側の発行権利による利益を含んだ反対意見が主張されたり、新貨幣の価格基準をどの国の貨幣にするかについて長年の猛烈な議論が繰り返された。しかし、いちいち財布から貨幣を取り出す手間や関税にかける不便さが省けたり軽くて持ち運びやすかったり、また世界を一体化するような印象もあり、現在では一般化した技術になった。

ちなみに、使用していない約四割の人口というのは、南アジアやサハラ以南のアフリカなどの貧国に住む人達のことを指す。今に時代になっても貧富の問題は解決していない。

店員がイヤリングの値段をレジに入力して価格を画面に表示する。そして、商品に貼られていた細くて小さな黒いテープのような物を取り外した。これは、いわゆる万引き防止に使われる物だ。このテープのような物が超微弱で特殊な電波を発していて、これを付けたままの商品を持ちながら出入り口を出ようとすると、出入り口付近に設置されたセンサーが電波に反応してブザーを鳴らし、御用となる。懷に隠しても電波を押さえ込むことにはならないから、無駄な抵抗である。店員はイヤリングがバラバラにならないよう専用のケースに入れて、ソミアはパースカードを店員に渡して代金を払い、

袋詰めは断ってパスカードと商品を渡され、商品を鞆の中に入れ、店を出た。

選ばれた臆病者 4

思ったよりもけっこう楽しむことができた。

現在、十七時半。太陽もさつきと比べて色が濃くなってきた。空に漂う羊雲を染めている。影もだんだん伸びてきた。気温もだいぶ下がってきている。けど、人々の賑わいや建物の佇まいは殆ど変わらない。何も変わらないことが、少し嬉しく思った。

私は普段何気なく見続けている日常の風景を、意識してじっくり吟味することが好きだった。一日を通してあまり変わらないものや、朝・昼・夜と時間でころころ変わるものを発見すると、なんとなく「面白いなあ」とか「忙しいなあ」とか思ってた。楽しくなるのだ。用事は済んだので、これで家に帰っても問題はない。でも、家に帰っても勉強するだけだ。それではなんだかもったいないような気がした。

せっかく来たんだから、もう少し商店街をふらつくことにした。

何度も擦れ違っ、自分と同じ子供の年代の人達。同年代に見える人や自分より年上、年下に見える人。外見では決められないような容姿の人もいる。

ずっと向こうまで続いている、建物。食品を売るお店、洋服を売るお店、お菓子を売るお店、玩具を売るお店、お洒落な美容店、日用品を売るお店、電化製品を売るお店……。いったいどれだけの種類のお店があるのか、ここからでは想像がつかない。

様々な形状と動作をしているロボット達。ある物は背が高かったり、ある物は自分の膝丈以下しかなかったりで、自分に与えられた役目をきちんと行っている。ほとんどが清掃用や危険場の作業用で、それぞれにできることはとても限られているけれど、人間達を援助

することができている。家庭用に造られている人造人間型は、感情や自律した考えなどの完璧に人間そっくりに造ることに限界があるようで暗礁に乗り上げている。

かつて、死んだ人間のうち、無事な脳を機械の体に移植して生き返らせるという、非道徳的な技術を成功させた例があった。事件当時は研究グループに重罪が処されたが、皮肉なことに、人体型機械は脳が持つ機能以外は問題ないことが証明された。その事件以来、ロボット工学者達は人工脳の研究を続けている。

いろんな場所から聞こえる、音たち。人々の雑談、店それぞれで流される店内BGM、たぶんそんなに遠くない場所で活動していると思うストリートミュージシャンの音楽……。いろんな音が混ざり合っ、それが一つの音楽のようにも聞こえた。

街灯や街路樹、所々に取り付けられている、宣伝用の看板。やけに目立つ派手なものや、やけに目立たない地味なもの。作った人の個性がよく分かるものや苦勞して作ったと思われるものなど、千差万別だ。ここに書かれている文字をよく読んでみると、おかしな部分とかが見つかったりする。ジャスミンとローレンスとアナリアと自分の三人で遊び歩いていた時に、そういう変な看板を見つけて笑ったことがあった。

電気製品専門店の店頭のショーウィンドウの前に、何人かの人が集まっている。ガラスケースの中には最新のテレビが展示してあって、ついでに適当な番組も映している。たぶん、ニュース番組だと思う。

集まっている人達は、放送しているニュースを観ているか、今の家計では購入が困難だから新機種を拝見して自己満足に浸っているかのどちらかだろう。仕事の出向かいかその帰りのサラリーマン、目に入った物をただ興味本位で近寄っている六、七歳くらいに見え

る子供、夕飯の買い出しを終えて買い物袋を手に提げて赤ん坊を抱えた主婦、テレビ画面を見つめているサングラスをかけた男の子、犬の散歩の途中らしい老婦人…。

年代は様々だけど、ニユースを観ているなら、偉いなあと感心してしまう。

…。

…。

…えっ！！ サングラスをかけた男の子！？

私は反射的にその人溜まりを見直した。

…やっぱり、いる。

その少年は、昨日図書館で私がナンパした、あの奇妙な少年だった。

頭を振っても目を擦っても消えないし、顔を抓っても痛かった。

ソミアは半ば興奮状態になった反面、昨日の出来事を思い出して気まずい思いが湧き上がった。

結局、嫌な結末を迎えてしまったワケで、あと最低一週間は顔を合わせたくない相手だった。

予想外のことにその場で立ち竦んでしまい、どうしようかと考え倦ねている間に、少しの時間が経過した。その少しが、少年が次の行動を起こすのに十分な猶予を与えていた。

少年はテレビから目を離すと、歩き出した。

ソミアのほうへ向かって。

(え…わっ、き、来ちゃった…！)

少年はやはり他人を寄せ付けない雰囲気を纏っていて、図書館の時と同じように、街の人達と隔離されているようだった。

私は焦って、さらにしどろもどろになる。少年は迷いなく歩を進め、真っ直ぐこちらへ歩いてくる。

焦りは緊張となり、身体が硬直してしまった。

ソミアは動かず、少年は動き続ける。必然的に二人の距離は狭まる。

もうあと数メートルの距離になった時、少年もこちらに気づいたのか、私のほうへ確実に向かって歩いてきた。

少年はついに目の前で立ち止まり、相変わらずの無表情を向けている。

背中に冷や汗が流れる。

鳥肌も立った感じがする。

なぜか声も出ない。

（わ、私なにもしてないよっ！？ い、いや昨日はナンパしちゃったけど…普段は少なくとも悪いことなんかしてないはずなのに！もしかして、怒ってる？ 昨日のこと怒ってる？ 恨んでる？ 気にしてる？ 見つめてくるよー！ 怖いーっ！）
もう混乱するしか私にはできなかった。

私が彫像のように固まっていると、少年は腰を屈めて、私の足下にある何かを拾い上げた。

「これ、落としていた」

少年はそれだけを無機質に言った。

少年が拾ったのは、手提げの鞆だった。どこかで見覚えがあると思ったら、それは自分の物だった。身体が硬直した時に手から滑り落ちてしまっていたらしい。

「あ……りが、とう、ございます……」

私はぎこちない口調でお礼を言っ、鞆を受け取った。

面と面を向き合わせても、少年はそれ以上何も言おうとはしないようだった。

互いの顔は、すでに認識できる距離にいる。見えないなんてことは起きない。

でも、少年は私を見ても、ただ見ただけで何の表情も変えなかった。普通なら、つい昨日見た顔に再び会ったことで、思い出したり驚いたりするだろう。現に私は非常にびっくりしているのだ。

対して、少年は何も表情を浮かべていない。私の顔を見ても、私とはこれが初めて会うかのように何も反応していない。

私の顔を知っているはずなのに、どうして何も思っていないような顔をしているのだろうか。

気づいていないのだろうか？ つい昨日にあんなことがあったのに。自分の感覚では少々針小棒大に捉えてしまっているかもしれないが、覚えていないのだろうか。

それとも、私の顔を思い出せていないのだろうか。確かに、昨日

の私は話す時も俯いてばかりだったと思うから顔を憶えられなくても仕方がないけれど。

それとも、視力が悪いのだろうか。よく見えないから、わからないだけだろうか。

少年は用が済んだと言わんばかりに退去へと動きかけた。

少年が行ってしまったといううちに、私としては訊いておきたかったそれは、人見知りする性格にしては珍しい行動だった。

何を話そうかとかは頭になく、なんで話しかける必要があるのかとかなんで話しかけようとするのかとかは自分にも分からなかった。ただ、あの時は場所が静かな図書館だったし、友人達に見られなからの会話だったので、ゆっくり話せる状態ではなかった。

もう少し落ち着いて話したい。

そう思っていた。

私は思い切って、少年に話しかけることにした。

「あ、あの…」

「…」

少年は何も答えなかった。

反応はないが、私は続けた。

「あの…私のこと、憶えていらっしやいませんか？ …き、昨日、あの図書館で…その、話しかけた者なんです…」

「…」

少年は記憶を遡らせているのか、茜色がかつた空を少し仰いだ。

どうか思い出してもらえよう祈りながら、静かに返事を待った。もしここで「忘れた」なんて言われたら赤っ恥である。

それは避けたい。

「……………」

「……………」

「……………ああ、昨日の」

なんとか思い出してくれたようだ。

よかった。赤っ恥をかく必要はないようだ。セーフ。

私は胸を撫で下ろして、話を再開した。

「あの…その…昨日は、本当にご迷惑をおかけしてすみませんでした」

私はとりあえず謝った。自分でもよく分からないが、この台詞が一番最初に思い浮かんだのだ。

すると少年は、

「いや、突然謝罪されても俺が困る。また、そのような上級敬語を駆使しなくて良い。使うに相応な人間でもない。基礎的な言葉遣いで構わない」

無表情で無愛想に答えた。今までで一番長い台詞だったが、それでも口調が真っ平らだった。

こんなに事務的で箇条的な言い方をされたのは初めてだ。

悪気があるのかどうかは知らないけど、この人は少し難しい性格だと思った。

少年と改めて対面してみると、気づいたことが二つあった。

少年は、思ったより身長が高くなかった。私はそこまで背が高いほうではないけど、それより拳一個分高い程度の身長だ。

そして、図書館で着座していた時には見えなかったが、右腰に一振の剣が納められていた。西洋の剣にしては見たことのない形をしている。刀身はわずかに湾曲しており、反り返っている向きからして、たぶん刃を上に向けて差されてある。黒い漆の鞘に、楕円の鍔と立派な装飾を施してある柄があり、どちらの装飾もさり気ないが精巧な造りをされていた。

たぶん本物ではないだろうから、アクセサリのように身に付けているのだと思う。本物だったら、凶器を所持している容疑ですでに逮捕されているだろう。

私は言葉遣いに気をつけて、できるだけ親密的に聞こえるように話した。

「は、はい…。えと…さ、さつき、何をしてたん…た、の…?」
やはり言いづらい。途切れ途切れになってしまった。

少年はこっちの気持ちを理解しているのか、それとも気にしていないのか、特に怪訝な顔もせずに答えた。

「ニュース番組を観賞していた。今、最新のニュースを報道している模様だった」

少年はテレビのほうを向いた。私もそれに倣う。

テレビではアナウンサーを放映していて、ニュースを伝えている。距離が遠いのと街の喧噪が音声を掻き消してしまっていてよく聞けないが、おそらくまたあのニュースだと思った。

政治の状況、今日行われたライヴコンサートの様子、一日に一度は起こる盗難事件、無差別に襲う放火、最近頻発している行方不明者の報道、ある家庭で起こった珍事件、そして、今現在の軍事情勢の状況。

私はよくニュースを見ているので、最近の注目すべきニュースは把握していた。

「そういえば…今、かなり緊迫した状態なんだし…なんだってね」
「ああ」

現在、この国イギリスは隣国のアイルランドと対立していた。

最大の要因は領土の問題だった。相手国は一九二一年に締結されたイギリス・アイルランド条約によって取り決められた国の境界線に異存を訴えたのだ。アイルランド島全体のうち、北の端の土地はソミアの住む国側の領土となっている。訴訟の内容は、その土地を隣国に譲渡することだ。島の名称が隣国の名を取っていることもあり、隣国に明け渡すよう起訴してきたのだ。

また、少なからず宗教も絡んでいる。どちらも同じキリスト教だが、ソミア側はプロテスタント、相手国はカトリックだ。起源そのものの因果の他、わずかながら思想にも相違がある。

ついでにいくつか他の適当な理由まで蛇足して事態を大きくしてしまった。隣国は退く気は全くないらしく、だとするとこちらも油

断することはできない。まだ衝突はしていないが、いつぶつかるか予測が不可能だった。一触即発とはこのことである。

ぼんやりテレビのほうを向いていると、

「あの時よりは恐怖感が緩和したように見える」

なんの前触れもなく少年から話しかけられた。少年は私のほうを向いている。少年から話しかけられたのは初めてだったので、不意打ちをかけられた気分だった。

「へ？　なんです…なに？　いきなり」

「図書館での会話はかなり緊張していた様だから。あの時と比較すると随分安着していると見られる」

「そ、そ…う？」

あまり自覚がない。

確かにあの時より場面的にも緊張する要素が少ないから気が楽ではあるが、完全に恐怖感が抜けたわけではない。その証拠に、まだ自分をへりくだって敬語を使いそうになってしまっているのだ。

少年は少し間をあけたあとに、また言った。

「ああ、大分に。話し掛ける前から“怖い”や“どうしよう”や“相手が悪い”と思っていた割には」

「…！！」

なんで分かったの！？

口に出してもいないのに！！

表情や態度には出してたかもしれないけど、正確すぎる！

だいたいこんなこと思ってるんだろ？　な、くらいなら分かるけど、勘でここまで当たるわけない！　…しかも三つも！

私は背中に冷や汗が流れるのが分かった。そして、昨日とは違った恐怖が再び沸き上がってきた。

自分の気持ちを盗み見られている。

内心は他者に知られないからこそ安心できていたのに、決めつけていた不可侵の特徴を簡単に打ち破られた。

知らないうちに、自分が許さない範囲に踏み込まれている。

この人から、離れたい。

恐怖からの発想はそれに尽きた。

私は、一步、後退った。

少年はそんな私の様子を確認したのか、突然背中を向けて立ち去りだした。

やがて少年は人混みに埋もれて見えなくなったが、私は自分の気持ちが落ち着くまで、しばらく佇むしかなかった。

どうして。

それしか思えなかった。

考えるのは、少年のさっきの言動だ。

どうして分かったのだろう。勘が鋭いのだろうか。

いや違う。さっきのは正確すぎる。

友達からは「ソミーってすぐ顔に出るからわかりやすいわよね」と言われたことがある。あの少年も人並みの観察力を持っているのなら、おそらく同じ感想を持ったんじゃないかと思う。だから、あの程度なら私がどんな気持ちになっているのかがわかったのかもしれない。

しかし、「怖い」や「どうしよう」ならまだ予想できそうだが、「相手が悪い」は偶然で当てられるような心理じゃない。考え方が単一じゃないし、誰もが湧き出る心理にはならない。それに、部分的とはいえ、私がいまに考えていたことを三種類も言い当てた。「不安に思っていた」のような状態を指す表現じゃなくて、私の心の台詞自体を言い当てたのだ。

常人の域では言い当てることなんかできるはずのないことを、あの少年は易々とやって見せたのだ。

どうして、そんなことができたのだろう。

もっと別の、何かこう、非科学的で信じられないような能力を持っている、それを使った？ 超能力とか、読心術とか、そういう類だろうか…。

もしそうなら、喋っていない時や普通に会話している時でも相手の心が読めることになる。

つまり、私の心境も筒抜けだったということになる。

困っていた私を目の前に、あの少年は私の心の中を無断で入ったことになる。

考えれば考えるほど怖くなってくる。

自分が思っていた気持ちを、あんなにもはっきり言われてしまったのだ。今度遇った時でもまた気持ちを読まれていると意識したら、とても会話なんてできそうもない。

もう遇うことなんてないだろうけど、できれば遇いたくない。

もう、こんな怖い思いをするなんて、嫌だ。

今回は向こうから立ち去ってくれたので、自分の努力を必要とせずに境遇から離れることができた。

少年は怒るでもなく、なにも感じていないみたいに余計に言わず、すぐに私から離れてくれた。

これは幸いと呼ぶべきだろうか。

待って。

ふと、論点を変えてみた。

あの少年は、何も表情を変えずに、ただ私の心理を言い当ててきた。

怒りすら見せず、責めるわけでもなく、むしろ何もなかったように接する人だった。

そんな人が、どうしてわざわざ私が恐怖するようなことを言ったのだろうか。

あと、私の顔を思い出すのにも時間がかかっていたみたいだけど、どうして私の台詞を覚えていたのだろうか。他人の顔を覚ええない人が、他人の台詞だけを都合よく記憶しているなんてことがあるのだろうか。

何か、変な気がする。

確かな道理は立てられないけど、あの少年の言動はどこかおかしい。

顔を覚えていないのに、台詞を覚えている。

その台詞を、わざわざ目の前にいた私に対して言う。

言動の運び方の自然さが妙なら、どれも意図的だと筋が通りやすい。

顔を覚えていなかったんじゃないくて、忘れたふりをしていた。

目の前の私に言ったのは、私に恐怖を与えるため。

恐怖した私は、実際に固まってしまい、少年を立ち去るのを安堵して見送っていた。

これがあの少年の狙いだったら？

私は少年に畏怖を覚えて、これ以上関わりたくないと思っていた。そうなるように予想した上での言動だったら？

図書館で見た時から、他人との接触を避けるために、あんなにも怖い雰囲気を出しているようにも思える。

それを望んでいたから故意にあんな振る舞いをしていたとしたら？他人との接触を避けるための仕方のない挙動だったんじゃないだろうか。

あの少年には、他人との接触を避ける理由がある？

あの少年には、他人に知られてはならない秘密がある？

だとしたら、知りたい。

自分の中にある知的好奇心が働いた。

いや、それだけじゃないと思う。

他人と距離を置く必要があるものを、あの少年は背負っている。

独りで抱え込んでいるのなら、理解してあげたい。

私は不思議と、あの少年のことを知りたいと思った。そして、母性本能が刺激されたのか、少年を憐れむようになった。

（あの人に、もう一度会って、確かめたい）

ソミアは意を決して、少年が去っていったほうへ進んでいった。

選ばれた臆病者 7

(前ページより)

とりあえず、あの場所からひたすら真っ直ぐ進み、商店街が終わるところまで行って捜したが、少年は見つからなかった。

それから来た道を戻って、交差点があったところを見つけたら曲がって、その通りを捜した。だが四つ、五つ捜しても少年は見つからなかった。たぶん、ここで私自慢の運の悪さが発揮されてるんだと思う。

残った通りは、あと一つ。その前に通りはもう無く、あの電化製品専門店のショーウィンドウに辿り着く。この通りに居なかったら、諦めて帰ろう。

今、六時半過ぎ。

いつもなら、急いで帰ろうとする時間だろう。帰りが遅くなると両親が心配する。「友だちと遊んでいる」と連絡しても、問答無用で「帰ってこい」と送られてくる。それだけ心配してもらえているのだから、何も無い日はちゃんと帰宅する。それは、両親から自分へ送られる愛情への誠意の一つだと思っている。

だから、できるだけ迅速に、自分が納得できる結果を出して、帰りたいと思う。

歩き疲れている両足を動かし、あの少年に会えるよう、少しだけ期待しながら、最後の通りへ入っていった。

高いビルの上で、

「あの娘、何故追跡してくる…?」

少年が一人座って、街を見下ろしていた。

結局見つからなかった。

商店街が切れている場所まで探しに行ったが、少年はいなかった。あまり期待しなかったとはいえ、やっぱりショックだ。

たぶん、道を入れ違いになったか、どこかの商店に入っていたのだろう。いつまでも路上にいるとは限らなかったのだ。そこまで頭が回らなかった自分に嫌気が走る。

そして、こんな時にも発揮した自分の不運を呪った。

気が重くなる。俯いた姿勢になる。溜め息も出た。

上手く言えないけど、こんな時の自分はいつも独りで沈んでしまう。友達にその様子を見つけれられてしまった時、かなり叱られてしまったことがある。クヨクヨしちやダメ、そうならないほうがいいっていう神様の思し召しよ、と事あるごとに注意してくれていた。

友達に言われてから、できるだけ自分で奮い立たせる努力をしてきた。

今回もその努力が必要みたいだ。

俯いてしまっている自分の顔を上げようと、空を眺めてみた。だいぶ色が染まっている。綺麗な茜色だ。所々に浮かんでいる雲にも色が映えている。逆に反対側の空の雲は影ができて、灰色になっている。

地面に這う影も長くなってきた。他の影と重なったり、誰かに踏まれたりする。

そろそろ帰らないと…。

私は自分に拍車をかけて、帰路を急ぎ始めた。

歩道を歩いている間、いつの間にか考え事をしていた。

あの人、本当にどこにいるんだろう…。どういう人なのか、知りたかったなあ…。

はあー…。

こんな時間になっちゃったし、電車に間に合うかな…。お母さんに連絡取っておこうかな…。そういえば、あの三人にも逢わなかったな…。やっぱり私、本当に運悪いんだな…。

考える量が増えるほど憂鬱な気分になる。

また風景を楽しもうと周りを見回してみる。

少し少なくなったような気もする人々や、位置や向きで不平等に陽光が当たっている建物。吹き抜ける風が涼しい。建物の間には、一メートルに満たない狭さだが隙間がある。覗いてみても暗くて奥まで見えないが、粗大ゴミとかが置かれているんだろうなー、とか非常に失礼な憶測を思った。

と、ある隙間の前で立ち止まる。

そこはさっきのような建物同士の間生まれた隙間だった。だが、両側の店の都合が作用したのか、やけに広かった。目測だが、たぶん四メートル以上あると思う。陽はまだあるが、そこは陽光が上手く入らない場所らしく、更に奥行きも広いのでよく見えない。そのずっと奥に、何かが光ったような気がしたのだ。目を凝らして見てみると、また光った。

そして、その光に照らされた人影を確認できた。

暗いし遠いから誰かは分からないけど、自分の中に、消えた筈のある期待が甦りつつあった。

（もしかして、あの人かな？）

こちら辺の店は人気がないのか、それともこの通りが人気がないのか、周りを見回しても人が少なかった（人が少なく見えたのはこのせいだと思う）。

私はその路地に足を踏み入れた。

一歩ずつ、音を立てないように進んだ。

沸き上がる希望、何者なのか分かるかもしれない期待、高鳴る鼓動、自分の中に満ちて弾けそうなものを精一杯押さえ込みながら、歩を進めた。

八歩ほど進んだところで、何をしているのか少し分かった。

そこにいる人は、建物の側面に何かを施していた。背中をこつちに向けているから、顔や行動は分からない。だが、さっき見た光はこの作業によって漏れたものだと思ってきた。

けど、一体何をしているんだろう…。

また近付こうとして足を前に出そうとした時、

(！？)

突然、その人の手元が、燃えた。

その火はみるみるうちに大きくなり、そして予め設置してあったらしいロープがガソリンを伝って、もう片方の建物の側面にも火を上げた。

火は炎となり、その場所を明るく照らした。奥が見えるほどに。

「ッ！！」

私は僅かに声を出してしまった。その声がその人に聞こえてしまい、私の方を振り返った。

その人は、大人の男だった。背も高く、彫りもある。まず顔が違う。

そして、男は二人いた。両側に一人ずつだ。

男達と勢いを増していく炎を見て、一つの結論に達した。

(この人達、放火魔だっ！！)

振り返った男二人組はいつの間にかそこにいるソミアを見て、驚愕した。そして、立ち上がったソミアのほうへ駆け出してきた。

「くそっ！ 見られたっ！」

「こんな場所に入ってくんなよっ！」

男達が悪態をつく。

私はこちらに近付いている二人を見て、反射的に出口のほうへ向いて駆け出した。

駆け出した途端、何かにぶつかった。真正面を見ると、上着に覆われた人の胴体が見えた。

恐る恐る視線を上げてみると、別の男の人が無表情で聳え立って

いる。

その男の人はかなり背が高かった。目測二〇〇センチの長身は、私から見れば山のような。

偶然かもしれないけれど、きつと異変に気づいてくれて助けに来てくれたんだと思った。

誰かは知らないけど、助かった。

そう喜んだが、

「おい、てめえら！ 簡単に見つかってんじゃないよっ！ このドアホがつー！」

それは一瞬に消え失せた。

その男は、放火魔の仲間らしかった。

「す、すいません…作業に集中しすぎてしまいました…」

「周囲の警戒心を失念するほど複雑な作業じゃねえだろが」

長身の男は呆れた様子で、その証拠に溜め息を一つ吐いていた。

観察してる場合じゃない。なんとかしなきゃ！

私は抵抗とばかりに携帯端末から通報しようとした。助けを呼べれば、自分一人じゃなくてもなんとか逃げられるかもしれない。

「おっと」

長身の男が、私が端末を操作するところに気づき、即座に端末を腕から無理矢理剥ぎ取り、さらに鞆も奪って、後ろ、つまり表通りのほうへ放った。

放物線を描いて地面へ落下した鞆は、道路に出た。

取っ手だけが。

私の正面には一人、背後には二人いる。私みたいな普通の女子が逃げることは、ほぼ無理だ。

自分に逃げる手段はもう無い。

絶望だと確信した。

男達はソミアを見ながら、相談し始めた。

「どうします？ この娘」

「俺達の行動、完全に見られましたよ」

後ろの二人が言った。

「口封じとはいえ、殺すわけにもいかねえだろ。死人を出すのは計画には入っていねえんだからな」

正面の長身の男が言った。二人から慇懃な態度を取られ、やけに指揮的な態度を取る様子からして、二人より上の立場の人間なのだろう。

そして、ソミアに一歩歩み寄り、見下ろす。

「誰にも言うなっつたって、聞かねえだろうな」

私は怯んだ。男の眼は、威圧感と威厳で満ちている。

恐怖感もあるが、あの人とは違う。

相手を完全に平伏させる、悪に染まった眼だ。

「仕方がねえ、本部へ連れて行くしかねえな。ここに残していくワケにもいかねえし。最低、人質くらいには使えるだろ。ボスへの土産つてのもいいかもな」

そう言つて、男達は気味悪く笑った。

自分の顔から血の気が引いていくのがわかった。これからの行く先が予想できなくて、恐怖の絶頂だった。手足が震え、歯も震えて「カチカチ」と音を立て続ける。

（やだ…やだ、やだ…！ 私、これから何されるの…？ いやだよ…誰か、助けて…誰か…）

目から涙が浮かぶ。

現実逃避か、目の前の光景を嘘だと自分に言い聞かせるため、力強く目を瞑つて見えないようにした。男達の声が聞こえないように耳も塞ぐ。が、完全に遮断する事はできなかった。

「早く行きましょう！ ぐずぐずしてると警察^{サツ}が来ますよ！」
やめて…。

「ここでバレたら、今までが水の泡になります！」

もう、やめて…。

「こうなったのもお前らのせいだろーに、まったく。…おーし、小娘、俺達と一緒に来てもらおうか。なに、痛いことはしねえよ。大

人しくしててもらえれば、別に何もしねえさ」

やめてったらあ！

「さあ、来いっ」

「断る」

選ばれた臆病者 8

「ッ!？」

長身の男が私の腕を掴もうとした寸前だった。私も含め、聞こえた四人全員が反応した。

三人の声ではない男性の声は、茜色の夕陽が差し込むこの路地の出入り口のほうから聞こえた。

男達は出入り口のほうへ振り返る。私も見ようとしたが、後ろの二人が私を力ずくで引つ込まされ、上手い具合に背中が壁になっているので見えない。

「貴様等が熱心に従事するのは感心するが、その娘は無関係だ。即座に解放しろ」

姿は見えないけど、この声、聞き覚えがある。

「何だてめえ？ 生意気な小僧だな。ヒーローごっこか？」

小僧っていうことは子供だ。子供の知人にこういう声をしていて…

「貴様等を放火の容疑で現行犯逮捕する。面倒臭いのは嫌だから、大人しく捕まれ。手間を掛けさせるな」

あんなに怖い大人にこんな強気な態度を取れそうな人は…

声の主による逮捕宣言に、長身の男は大笑いした。

「笑わせるじゃねえか！ 本当は警察ごっこかクソ餓鬼！——
黙らせる」

いい加減頭に來たのか、長身の男が指を鳴らした。それを合図に、後ろで構えていた二人の男が同時に前に出た。

二人の男はほとんど同じ俊敏さで懷から小銃を取り出した。

二人が腕を上げ、銃を構える。その途中で、何かを叩いたような乾いた音が聞こえた。

直後、

「うわっ!」「ぐあっ!」

二人分の男の声が聞こえた。それは悲鳴にも似ていた。

拘束から離れて見えるようになったので長身の男の脇からそろーっと覗いてみると、そこにいた人に歓喜し、その光景に驚愕していたのは、やはりあの少年だった。

だが、人間とは思えない行動をしていた。

少年が、男二人の顔を驚愕みにしている。

問題はそこじゃない。

少年の両腕が、異様に長いのだ。いや、“伸びている”と表現したほうが適当だろう。

少年は狭い通路なのに勢いをつけて腕を両側面に振り、顔を驚愕みにされている男達はその勢いのまま頭を壁に叩きつけられた。加減のない暴力を受けて男達は全身の力を弛緩させ、少年が手を離すと何の抵抗もなく崩れ落ちた。

その光景に、私は瞬きも忘れて見ていた。

長身の男はすぐに危険だと判断し、反応した。咄嗟の事態に頭が回転し、懐から銃を取り出す。だが、相手の状態をよく観察していたのか、その腕がさらに伸長しながら手を叩いた。長身の男の銃に少年の左手が触れる。

「あぁっちい！！」

長身の男が銃を放すと、当然地面に落ちる。しかし、跳ね返らない代わりに真つ赤な、水たまりならぬ鉄だまりに変わった。よくわからないが、長身の男の反応からして、銃が物凄く高温に熱せられたとは思えない。

余っていた少年の右腕が長身の男の頭へと伸びる。

「く……このお！」

長身の男は袖の中からナイフを取り出して、力任せに腕を薙ぎ、その手を払った。少年の両腕は、その後は追撃せず、本来の長さへと収縮していった。

少年がこつちへゆつくりと歩み寄ってくる。まるで、追いつめた獲物に余裕を見せる猛獣のようだった。

「て、てめえ何者だ！？」

長身の男が畏怖を含ませた声色で問いかけた。勢いはあるが、声は震えていた。

「貴様が知る必要は無い」

少年は淡々と返す。

そう言い終え、立ち止まった。そして、もう一言。

「残るは、貴様だけだ」

実力、度胸、威厳、全てが男を凌駕している。

人は自分が敵わないものに対峙した時に取る行動は、二つ。

自分の弱さを認め、潔く敗北を味わう。または、誇りを捨てて命乞いをするか。

敗北することを覚悟しながら、なおも自信の強運に頼って勝利を目指し、攻めるか。

しばらくの、感覚的には長いが実際には短い時間が流れた。静寂がその場を支配しそうだった。

「調子に乗んじゃねえ!!」

長身の男は逆上し、ナイフを無造作に投げ捨て、腰の後ろから何かを取り出した。

それは三本に分かれた金属製の棒だった。男はそれらを、端にある連結口同士を繋ぎ、強力な磁力で固定させ、長さが三メートルほどある一本の長大な棍を組み上げた。横にすると、この路地にぎりぎり当たらないほどである。

「The fly that bites tortoise breaks its back.」：七面倒臭い」

長身の男は棍を構え、少年は両手を叩いた。

緊迫する空気。ついさっきとは違う静寂が空間を包む。

どんどん大きくなっていく炎。

外から僅かに差し込む茜色。

倒れている二人の男。

私は巻き込まれないように数歩下がった。炎に近付いたので少し熱い。

互いに睨み合い、そして、

「——はあああああああ——！」

長身の男が少年に飛びかかった。少年は動かない。

長身の男は棍を振りかぶり、思い切り振り下ろす。

がんっ！！

(っ?)

太くて長大な棍棒から繰り出された攻撃を、少年は左腕だけで防御していた。その際、金属同士がぶつかったような、異質な音がした。

長身の男はそこで止まらず、次々と攻撃を続ける。右から、左から、上から。ただ闇雲に振り回すのではなく、攻撃の仕方によって持つ場所や持ち方を変える。そして突きも混ぜる。身体全体を使い、舞い踊るかのように棍を使いこす。回転や遠心力を利用した、止まることのない攻撃が続く。

あの見るからに重そうな棍を、身体の一部のように自由自在に操るのにどれだけの時間と鍛錬と精神力を必要としたか、誰にも想像などできないだろう。

金属同士がぶつかり合う音が、断続的に路地に響く。

私にとっては、この世のものとは思えない光景の連続でしかなかった。

長身の男の武闘技術は、確かに凄いと思う。あんな長い物をあんな風に使いこなすことなんて自分にはできない。

それよりも注目してしまうのは、少年のほうだ。

棍を防御していることは凄いが、この場合“おかしい”のだ。

あの棍の攻撃を両腕で防御しているのだ。服を隔てただけの、生身の腕二本だけで。普通なら、あの棒ほどの質量からの衝撃を受け続けられ、骨折、良くて骨に亀裂が入っているはずなのだ。それをなんでもないうちに受け続けていること自体異常な光景なのである。

さらに補足すると、この場所は薄暗い路地だ。最奥では光も届か

ぬこの場所で闇とほぼ同色の棍の軌道を完璧に見極めている。常人と判断することはほとんど愚考に近かった。

長身の男と少年は甲高い打撃音を出した一撃を機に、一度間合いを取った。

「はあ、はあ、はあ、はあ……」

長身の男は過激な動きを続けたためか、肩で息をしている。それに対して、少年には疲れが見られず、息も乱していない。

「はあ、はあ、はあ……。くそっ！ 何なんだてめえは！？ 化け物かっ！？」

長身の男の声には、氣にくわない態度への怒り、自分の極限まで研磨された武術が通用しない苛立ち、先程からどうしても人間とは思えないような現象の連続からの困惑などが混じっている。

しかも、相手はどう見ても子供。長身の男にとっては、舐められているようで許さない反面、ただ者ではないことを確信しつつあり、気味が悪く感じた。

「You have guessed nearly right .

少年は曖昧な返事をする。そして、凝った肩をほぐすように軽く回しながら、挑発のような宣告をした。

「いい加減に飽きた。もう遊戯は止めて、終決させてもらっ」

偽りのない完全なる相手の愚弄。不気味な相手にもかかわらず勇敢に立ち向かおうとしている人で、こんなことを言われて我慢できる者はいない。

長身の男は血液が逆流するくらい頭に血が上り、完全に激昂した。

「こおんの、クソツタレがあああああ……」

長身の男は棍を振りかぶり、左上――少年から見ると左上から全力で振り下ろす。少年はまた両手を叩き、左手を開いて棍の軌道に合わせる。

再び金属音がした時には、少年の左手は棍を握りしめていた。そして、余っていた右手を、高速で振り上げる。

次の瞬間、甲高い金属音が響いた時には、長身の男の棍は棍ではなくなっていた。

棍は少年の繰り出した手刀によって斜めに切断されていた。切り口は滑らかな平らになっている。長身の男の棍の長さは本来の三分の一になってしまっていた。

長身の男が自分の棍の有様と切り口を見て呆然している間に、少年は跳躍しつつ両手を叩き、自分の高度を男の身長よりも高くした。「餞別だ。受け取れ」

少年は右手の掌底を男の下顎に全力で見舞う。衝撃によって脳震盪を起こした長身の男は大きく仰け反って、そのまま仰向きに倒れた。

空を仰ぐ顔の顎は外れて、だらしく開いていた。
悪夢は終わった。

ソミアを拉致しようとしていた男達は倒れ、起きる気配を見せない。

その場所に立っているのは、私と、あの少年だけ。
もう、怖がる必要はなくなった。

そう思った直後、私は大きな安堵感に襲われた。
緊張が解かれ、意識が薄れていった。

少年は膝から崩れた少女を素早く抱いて支えた。そして、少女の額に手を当てる。

(・・・・・・・・・・・・・・・・極度の精神的疲労による気絶、か……)
少し休憩させれば大丈夫だろう)

左腕で少女を支えて、周囲を見回した。

路地の最奥。そこには大きな炎が燃え上がっていた。静まる気配は全くない。幸いにも外壁にはどちらも耐熱素材が使われているらしく、炎上する速度を停滞させているようだ。予想よりも炎上の速度が遅延して善哉だった。

少年は炎を一瞥してから両手を叩いて、右手を地面に当てた。

すると、目の前で燃え立つ大火が収まっていった。緩やかではあるが、確実にその勢いが小さくなっていく。

どんな炎でも、可燃物の温度が下がれば可燃ガスの発生が止み、燃烧することはできない。水で鎮火しなかったのは、放火するのに使用した可燃物が明確でなかったからだ。化学物質の中には水を含むと炎上または爆発する危険物もある。軽拳は謹慎すべきだと判断した。また、消化剤の使用を取らなかったのは、余計な証拠を残さないためだ。消火機材が近隣にあるかどうか不明なこの状況では、道理に合致しない証拠が残っているはずはない。したがって、可燃物の温度を下げる方法で炎を消した。

少年は炎が消えたことを確認して、地面から右手を離した。

少年は、少女の背中と膝の後ろに腕を回して、迅速かつ丁寧に抱え上げた。そして少年は出口へ向かわず、手を叩いてその場で垂直に跳躍し、建物を挟んだ向こう側の路地へと着地した。あのまま出口から出れば、住民や警察の詰問に遭遇する虞があった。この状況を目撃した人間は、間違いなく俺を犯人だと疑う。腕に抱える少女のこともあるし、今は面倒ごとを起こして目立つ行動はしたくない。したがって、危険度が少ない反対側の路地へ移動してから脱出することにした。

少女を抱えたまま、すっかり陽が低くなって暗くなり始めている表の世界へと、生還した。

白目を剥いて気絶している顎の外れた男と頭から出血している二人の男がいる路地の出口に転がっているはずの携帯端末と鞆は、見当たらなかった。

*

「こちらアルミ缶。ペットボトル、応答せよ。…おい、どうした？
…おい。ペットボトル応答せよ。繰り返す、ペットボトル応答せよ」

「何だ？ 繋がらねえのか」

「…………駄目です、繋がりません。恐らく何者かに阻止されたんでしょう」

「そうか。まあ、いい。供養する花が一本欠けただけだ。まだ花は他にもあるしな。今更手を打っても遅えよ」

「今、中央警察署の通報履歴を見ているんですが、四時間ほど前、市民から火事の通報が入ってます。目標付近の商店街の一角に火事らしき煙を目撃したと」

「ほう？ あいつら、火は起こしたみてえだな。そっから何があったかは知らねえが」

「米軍のメインコンピュータに侵入完了。目的の制御システム占領完了。ボス、準備完了いたしました。いつでもやれます」

「よし。そんじゃあ、世にも笑える暗黒舞台を開幕しようか。…さあ人間共、恐怖の祭に発狂しやがれ！」

選ばれた臆病者 8（後書き）

The fly that bites tortoise
breaks its back.

「螻蛄の斧」

You have guessed nearly right.
「当たらずといえども遠からず」

歴史ある跡無し者 1

第三章 歴史ある跡無し者

いつから眠ってしまったのだろうか。私はゆっくりと目を覚ました。

まだ微睡みながらも後頭部の圧迫から、どこかに横たわっていることがなんとなく分かった。空気は冷えていて、顔や足が少し寒いけど、何故か首から下だけは暖かい。

頭を横に向けて、今いる場所を眺めてみた。

辺りはすでに真っ暗で、目の前には開け放たれた広い空間が広がっている。地面には隙間なく芝が敷かれて、人工的に一定の長さに刈り揃えられている。

この付近を照らす青色の街灯も目に入る。それが照らしているのは、おそらく道路だ。車両道士の衝突を避けるためだけではなく、路上の痴漢やひったくりなどに始まる犯罪類を防止するためもある。そもそも青い色は人を冷静にさせる効果があるから、橙色の光より犯罪が比較的減少するんだそうだ。

防犯の設備はこれだけではなく、一昔前に街灯には監視カメラが設置されており、犯行は丸見えになってしまふと聞いたことがある。設置開始の二十世紀末当初はカメラの精度が低すぎたことや厳選された職員による秘匿主義が管理されていたため、民衆への認知が低いことを利用して大きな問題は起きなかった。しかし、精度の上がったカメラによる徹底しすぎた監視体制がプライバシーの侵害を引き起こし、多くの反対意見によって廃止されたいらしい。

他にも街から発せられる色とりどりの街灯や建物のイルミネーションが闇に染まる風景を輝かせている。昼間は若者達が闊歩しているが、夜になると代わりに仕事帰りの大人達が増えてくる。宴会や

記念パーティをして楽しんだりするんだろう。

夜の風景を力無く眺めていると、

「気が付いたか？」

上から声が聞こえた。

私は声のしたほう、自分からだ、上へ顔を向けた。すると、街の光で少し見えにくくなった星空を背景に、見覚えのあるサンングラスをかけた顔があった。

どうやら自分と少年は、どこかのベンチにいるみたいだった。

「ここは…？」

私が現在地を訊くと、

「商店街の近郊に設備されてある公園だ」

少年が素っ気なく返事をした。

いつまでも寝ていては失礼なので、私が体を起こそうとしたら、「無理はしなくて良い。自分の感覚よりも疲労が残っている筈だ」と少年がやはり愛想がないけど気遣ってくれた。

確かに体が少し気怠い。それでも、いつまでも寝ていては失礼だと思い「いえ、大丈夫です」と言っ、体を起こそうとした。

だが、上半身を起こすだけなのに、全身に力が思うように入らなかった。普段のようにベッドで眠るのは違っていたので、体の脱力感が凄く残っている。ベンチの背もたれに手を掛けて起きようともするが、少し浮いたところで限界だった。

諦めて力を抜きかける前に、背中に温かさを感じた。彼が手伝ってくれようだった。私は申し訳ない気持ちになりながら、やっと体を起こすに至った。

すると、身体から何かが滑り落ちた。自分の上着か。いや、今は夏服だから脱げる物はサマーカーディガンくらいだ。今日は三枚着ていたが、脱ぎたくない。脱がされていたのなら問答無用で悲鳴を上げようと思う。

じゃあ誰のだろうか。街灯からのわずかな光を頼りに、それが何かを確かめる。

それは、漆黒のジャケットだった。

これって、確か…。

私は少年を振り返った。少年はあの時着ていたはずの上着を、着ていなかった。

「あ、あの、これ…」

少年に上着を返そうとしたら、

「まだ着ている。その格好では冷える」

簡単に断られた。

少年は半袖Ｔシャツに長ズボン。それに対して私は薄手の半袖Ｔシャツとカーディガンと膝丈のスカートという春期相応の格好だ。しかも、昼間はそれでも支障はないが、今は夜である。ただでさえこの国は気温が上がりにくいのに、日没近くになれば気温はさらに下がる。二人の服装を比較したら、どちらかというと少年の言う通りにするべきだろう。

ソミアは手元にあるジャケットを、少し抵抗しながらも羽織った。袖に手を通すのは遠慮しておいた。

二人はベンチに座って肩を並べ、少年は空を眺めながら、ソミアはジャケットの暖かさを感じながら、しばらくじっとしていた。

私は何を話したらいいか思いつかず、ただ時間が過ぎていく。

というか、いつからここにいいのかとかどうやってここまで来たのかとか気になることはたくさんあるし、なんだかんだいつていさつきまでよく知らない他人に寝顔を見られていたことを自覚して一気に羞恥心が湧き上がってきたし、こんな気持ちで一体何を話せばいいのかとかかっていうか少しは彼から話を始めてもいいんじゃないのかとかそういうふう^{そよかせ}に物事を運んでくれるのが彼の立場なんじゃないのかとか、でもそれはちょっと自分勝手なのかなとか、ああもうさつきから調子が狂っちゃっている。

私は気晴らしに、周囲の景色を眺めた。空は曇りがちの天気になって、星空は断片的にしか見えなかった。降水量は少ないけど雨が多い地域だから、これも仕方がない。地上には微風そよかせが流れて、混雑

した思考を冷やしてくれる。草も風に踊っていた。

夜に目が慣れてくると、一つ細かい物を発見した。この公園にもベンチが十数脚設置してあった。名前は『マイベンチ』だったろうか、公園の管理局に寄付金としてお金を支払うと名前を貼られたベンチを作ることができる。管理局に予約をしておく、その日は貸し切りにできる。プレゼントとして贈られることもあるそうだ。

私は気分が落ち着いてくると、まず言わなければいけない言葉が見つかった。自分から話を始めるのは慣れていないけれど、頑張つて口を開いた。

「あの、先ほどは助けていただいて、ありがとうございました」

私がまず礼を言つと、少年は空を眺めるのをやめて、私と向き直つた。

「礼を言う前に、自分の軽挙妄動を反省する事を推奨する。それと、そのような上級敬語など使用しなくて良いと忠告した筈だ」

私はいきなり自分の立場に気まづくなった。

反論はできないけど、とりあえず後者のほうは意見しておくことにした。

「いえ、やはり敬語で話させてください。あなたは私の恩人ですし、私自身も気が楽です」

「ならば、せめて最低限まで砕いた言葉遣いにしろ。お前は気が楽でも、俺は気が重い」

少年は溜め息を吐きながら訂正を求めた。どうやら少年は自分の意見を一方的に押しつける勝手さがあるようだった。

「分かりました。それで、あの、いろいろ訊きたいことがあるんですが…」

私は本題に入れるように切り出した。本題というのは、目の前の少年をはじめとして、わからないこと全部だ。

「了解だ。巻き込んだからには教える義理もある」

これから、少し話が長くなるだろう。まだ素性も知らないし、あの不思議な光景も気になる。

「まず、自己紹介からですね。私はソミアです。ソミア・プラヒュリ。十四歳。高校一年生です」

私が名乗り、次は少年の番になったが、

「俺の本名は、立場上、誰にも教える事は出来ない。素性が知られる事になるからだ」

少年は名乗らなかつた。

「え？　じゃあ、普段はどうしてるんですか？」

名前を名乗れないって、かなり不便なんじゃないのか。

「名前を教える機会は殆ど無い。有ったとしても、その時は偽名を名乗る」

「…友達や、知り合いの時も、ですか？」

「当然だ。その以前に、必要以上の人間関係は築かない」
自分にとっては謎が増えていった。

なぜ身分や素性を隠さなければならないのだろう。

そして、知人にも偽名で関わっている理由も気持ちも分からないというより、偽名だけを使い続けていて自分の本当の名前を忘れたりしないかと心配になったり、嘘を吐き続けるということにも何も抵抗がないのかと疑ったりしていた。

それに、私にも名前を教えてくれないということは、これ以上親しくするつもりもないということだろうか。まだ知り合えて間もないし、私は人見知りが激しいから、正直に言えばちょっと怖い。でも、せっかく知り合えて、しかも窮地を助けてもらった恩人なのだ。せめて大事な人の名前は知りたいと思うのに、そんな願いも叶わないのだろうか。

私は他の疑問へ移ることができず、結果として尋問が一時中断されてしまった。

お互いに黙り合う。

そんな少女の困った様子を見て観念したのか、少年はまた空を仰いだ。

「…俺には信頼出来る仲間が存在するが、その者達にも本名を教え

ていないし、俺もその者達の本名を知らない。だが、流石に不都合が起きる。従って、不便にならない様に其々に偽名を付けて呼び合っている」

私は思わず顔を上げた。

少年の目をじっと見る。誰がどう見ても子供のように、教えてと訴えていた。

だがその顔をしたのはほんの数秒の間で、また俯き始めた。

偽名とはいえ、かなり極秘にしている情報だと思うと遠慮せざるを得なくなってしまう。普段から違う名前を使うほど隠匿しなければならぬことを訊こうというのも無謀だと思えた。

ほとんど赤の他人の自分が秘密を訊いてしまうのはとても図々しく思えたが、相手から教えてくれるのならそれは不可抗力になるんじゃないかと自己防衛規制が働いた。自分が考えた自分勝手な弁解をして、自責の念に駆られた。

私が訊こうか訊くまいか低迷していると、少年から口を開いた。秘密事項を漏らすのは普通問題になるものだが、それでも少年は教えてくれた。

「暗号名『オルパニル・コランダム』。それが俺を存在させている名だ」

極秘でも何でもないように教えてくれた。

歴史ある跡無し者 2

「オルパニル…ですか。なんだか、不思議な響きがします」

「確かに普通ではない身分だ」

サングラスをかけた少年——オルパニルは自嘲気味に言った。

私はまず、一番疑問に思っていることを訊くことにした。

「あの…あれは何だったんですか？ 路地での、あなたの行動のこ
となんです…」

私は自分の中で一番気になることを訊いた。というより、一番新しい記憶では、薄暗い通りで見たオルパニルの姿が焼き付いていた。なぜそんな場所に自分がいて、そこに彼と自分が居合わせたのかは記憶が薄ぼんやりとしているが、今は置いておくことにした。

オルパニルは説明に困ったように少し目を泳がせたが、「まあいい」と呟いて、説明し始めた。

「Seeing is believing. 先ずはこれを見る」

オルパニルはあの時のように両手を叩くと、私に近い左手の掌を開いて、私が見やすい所で固定した。

すると、オルパニルの掌から突然火が灯った。何もない掌の上にある空中で静かに燃えている。不思議に眺め、気づけば火はすでに変化し始めていた。火の下から水が生まれ、まるで蛇のように火の周りを螺旋状に取り囲んでいく。水に覆われた火は音もなく消え、残った螺旋状の水は下から凍っていった。徐々に上へと氷り、ついすべての水が凍った。途端、氷の表面に亀裂が入り、瞬く間に砕け散った。目の前に分散した氷の粒子は視界の端から順に消えていき、気づいた頃には何も残っていなかった。

私はその異常な光景に釘付けになっていた。

「い、今の…なんですか…？ 魔法、みたいな…」

「今のが、俺に授けられた『思』の能力だ。思念の具現化、簡潔に説明すると、俺の思考を材料に、この世に本物として実現させる。」

俗に言う魔法とも表現できるかも知れないが、原理が違う。魔力も呪文も存在しないし、杖も不要だ。用いるのは思念と発現する力のみ。今見せたのも勿論、俺の思念を使った物だ。呪文らしき言葉を唱える事もあるが、直接的な影響は無い」

オルパニルは説明した。そして、今私が着ているジャケットにも、着用している人の周囲の温度を暖めるようにしてあることも説明された。

話を聞いても、全然信じられない。しかし、今自分が夜風に当たっていても首から下は寒さを感じないのは不思議でしかないので、彼の言うことを信じる要因になった。

「思念の具現化…？ 何でそんなことが…？」

「それは俺達にも推理できない。気付いたらこの力を持っていたと言う感覚だからだ。だが、この能力を持つ者達には共通点がある」

説明される私には理解しがたい内容だらけだが、オルパニルにも判らないことがあるようだ。

それに、オルパニルが言った台詞には疑問点があった。共通点？

俺達？

「それは虚無だ。自我喪失とも言って良い。帰る場所、愛する者、信じる物、有らゆる全てを失い、深い絶望に堕ち、悲哀を知った者。未来を見失い、社会から拒絶され、存在を忘れられ、生きる事を止めた、廃人の成れ果てだ。しかし、人間を捨てた大罪への懲罰として、神はそのような者達に懲役一生の刑を与えた。それは、自然界に存在するエネルギーの根源を、空いた虚無の精神の隙間に憑依させ、化身にさせるという物だ。与えられた者は強大な力を得る代わりに、半永久的に生き続けなければならない。…その一人が俺だ」

この時点でもう私にとって想像の範囲を超えていた。最早常識など無視しているような真実だった。

私は理解できるかどうかはともかく、何とか頭に入れた。その後数十秒間の時間を使って自分を落ち着かせて、先程疑問に思った点を尋ねてみた。

「あの…あなたみたいな人が、他にもいるんですか？」

私の問いに、オルパニルは力強く回答した。

「居る。一人一人の能力に違いはあるが、同士と呼べる者達が存在する。俺のような者達を纏めて『ゲイブディパーソーズ』と呼称されている。聞いた事は、皆無だろう」

最後に彼と自分とのいる場所が全く異なることを言われた気がした。これまでいろんな分野に手を伸ばして知識を広げてきたが、正直言つとそんな単語を聞くのは初めてだった。それゆえか、自分ですら以上に関心が湧いていた。

「その…お仲間は、今どこに？」

質問内容に気を遣ってみたが、

「それは俺の知る範囲外だ。誰に限らず、全員が個別で活動しながら世界を漂泊している。ゲイブディパーソーズの一人一人には役目が決められていて、全員がその役目を懸命に行っている。だから知る術もその必要も無い」

返答は実に素っ気なかった。

「役目？」

「各自が担当している仕事の様な物だ。主に国連環境開発会議で策定されたアジェンダに基づいている。因みに、俺は“オゾン層の再構築”を担当している。他にも、これは全員が共通した役目だが、暇な時は各国治安管理を活動している」

暇な時に治安管理とは、やけに悠長な活動だと思う。

「そう、なんです。知らなかったです。世界には、あなたのような人がいるなんて、思いもしなかった…」

話を聞いた私が正直な感想を漏らすと、オルパニルは律儀に答えてきた。

「罪悪感を持つ必要は無い。知らないのが普通だし、顕揚されないように徹底している」

「何ですか？」

「ソミアのように理解を示す者も居れば、あからさまに精神異常者

として奇異な目で見る者も居る。俺達が関わった事で怨恨を抱いた奴も少なからず居り、下手をすると居場所が発覚されて殺されるからだ。過去に、そういう例があったと聞いた」

殺される、という単語を聞いて、私はびっくりした。

「どつ、どうして殺されるんですか？ 私たちのためにいいことをしてくれているじゃないですか！」

「今までの話から総合すれば、俺たちは献身的な活動団体に思えるだろう。しかし、それだけに限らない。任務上、人間と対立するとは少なくとも、怨恨も数多く買っている。また、俺たちの存在自体が狙われて仕方のない代物でもある」

「存在するだけで狙われるなんて、そんな話が……」

私は否定したかったが、オルパニルは説明してくれた。

「俺達は自然界に存在するエネルギーを操作する事が可能だ。意の儘に操り、新たに産出する事も出来る。そのような膨大な力の塊と呼べる存在を、軍やエネルギー開発研究所が黙認する訳がない。俺達の一人でも人間に洗脳、懐柔された場合、現在も人類を苦悩させているエネルギー開発問題を即座に解消させる事が出来るし、生身の人間では到底適わなくなる最強の殺人兵器へと化す。どの国のトップとしては、俺たちのようなエネルギー資源は是か非でも入手したい魂胆であるし、他国に渡れば外交の際などの関係に変化が生じて自国の立場が危ぶまれる。他の国に渡るくらいならば居なくなればいい、と考えるのも納得がいく」

納得できるとか、そんな問題じゃないのに。

自分の命が危険に晒されているというのに、この人はどうしてこんなにも無感情に話すのか。

私はいい感想も慰めの言葉も思い浮かばなかったので、誰でもわかっていようなことを独り言のように答えた。

「…難しいんですね」

オルパニルはそれに答える。

「そう。生きると言う行為は難儀だ。自分でも理解できない程次々

と障害が阻んでくる。だが、それらを乗り越えてこそ人生とも呼べる。…次は、あの三人組の事だ」

一つの話題が終わり、オルパニルは今度は事後の様子を話し始めた。

あの火事はオルパニルが鎮火しておいたこと。建物内部にも火は回っていないから心配はいらないこと。あのあと警察と消防隊が駆けつけて後始末をしてくれたこと。おそらく、上がっていた煙を発見して通報したのだろうということ。消防隊は、もちろん出火を確認できなかったが、現場には焼け跡に残る可燃物質が確認されたこと。さらに、現場には三人の男が意識不明で倒れていて、まだ三人の意識は戻っていないが、警察は放火と見て、男達を逮捕がてら警察病院へ搬送する首尾にしたこと。

「以上が事後要約だ」

「そう、ですか…。よかった、火も大きな火事にならなくて、放火犯も捕まって」

私は胸を撫で下ろしたが、

「余談だが、通報された時は四人の人物が居たと証言されていた。暗くて明瞭に目視した訳ではないらしいが、四人は確かだそうだが、警察が現場に駆けつけた時には三人しか居なかった。あと一人も仲間で逃走していると見て、捜査を続けているそうだ」

新事実を聞かされて、また気が張りつめてしまった。

「うそっ？ 四人って、私達違うのに。…って、あれ？ 人数が合わないような…」

あの時居合わせたのは、放火犯の男三人とオルパニルと自分の、合計五人のはずだ。これでは計算が合わない。

私が困った顔でオルパニルを見ると、

「確かにあの時居合わせたのは合計五人だが、暗所だった。それに、

ソミアはあの時男達の背後に居た。通常でも外からでは視認し辛い場所だった。ソミアが数に入っていないくても不思議ではない」

彼は正解を答えてくれた。

だが、説明されても納得いかなかった。

「それじゃだめですよ！ オルパニルは犯人の仲間じゃないのに、このままじゃ捕まっちゃいますよ！」

「心配してくれるのは感謝するが、それはいずれ杞憂に変わる」

「どうしてですか？」

「何故なら捕縛されるような常人ではないから。追求されたとしても、正面から反抗できる力も持っている。万が一捕縛されてもすぐ脱獄できるし、俺は元から警察とは干渉しない質だ。俺はあの時一番出入り口に近い場所に位置していたが、証言者が目撃したのは薄暗闇に見えた後ろ影だろうから、証拠不十分だ。逮捕には力不足だろう」

どこまでも冷静に考えるオルパニルに感心してしまう。自分が決して良い立場に置かれているわけじゃないのに、焦るところか表情一つ変えない…というか、初めて会った時から無表情なのだが。

そして、オルパニルがどれほど強くて、それゆえに他人と過剰な干渉をしていないことを悟った。

会話が途切れてしまった二人の間に、昼間の温度がすっかり冷まされた夜の風が、二人の身体を控えめに撫でた。

「他に尋問したい事は？」

オルパニルが尋ねた。

「えっと…あつ、そうだ！ 図書館のことなんですが、なんで私の考えてることが分かったんですか？ それも能力なんですか？」
できるだけこれは初めのほうに確認したかった。なにせ、自分が恐怖心さえ抱いてしまった体験であり、この追求心が事件に関わることになったのだから。

「ああ、丁度近くに居たし、無断で失礼とは思ったが、関与する事は無いと予想して、練習台になってもらった」

れ、練習台…。

「で、でも、手を叩く音は聞こえませんでしたよ？」

この言葉にオルパニルは驚いたようで、ほんのわずかに、ミリ単位の変化だけど、目を開いた。それは、おそらくソミアが今までで初めて見た、オルパニルの表情の表れだった。

「お前の観察力には正直驚かされる。…種を暴くと、本来は能力発現に拍手する必要は無い」

「じゃあ、どうして叩くんですか？」

「それは、俺にとって“呪い”^{まじな}のような物だからだ。俺の能力は思念を材料にするから、必然的に一意専心する必要がある。故に言うか、理由にはならないかも知れないが、今の俺はこの行為に依存しないと集中出来ない。図書館の時は静閑な場所だったから、叩かずとも集中出来たが、読心術はかなり接近した者にしか使用できないし、読み取れるのは断片的な物だから使い物にならない。辛うじて読み取れたのがあの三つの単語だったと言うだけだ」

信じられない現象を操っているんだけど、そのための集中力のようなものがたくさん必要だということがわかった。

能力は凄いが、なんか苦勞しているんだなあと感心してしまう。

「そういう訳だったんですか…。疑問がまた一つ晴れました」

答えを聞いていくと、どんどん霧が晴れていくような錯覚を覚える。

「他には…それ、そのサングラスです。それは趣味なんですか？」

私は、オルパニルが書けている、片方のレンズしかないサングラスを指した。

「これは、少し個人的な理由がある。先刻のゲイブディパーソーズの共通点の話に戻るが、俺達は能力が身に付いた事に加えて、もう

一つ、外見上の変化が現れる。それが眼だ。能力の憑依の証拠に、眼の色が変化する。能力の違いがあるように、色も赤、青、白等というように、それぞれが違う。そして、その変化は虹彩と瞳孔に及ぶ。それ故、目敏い者には一目で正体が見破られる」

「…ゲイブディパーソーズは一般的には知られていないんじゃないんですか？」

「一般的には、だ。軍人や憲兵、政治家などの上層部には殆ど顔が割れているし、過去に関与した者は無論だ。あと…その手のマニアも存在する」

最後のは危険度が感じられないが、共通して“見つかる”とまずい”のだろう。

「でも、オルパニルの右目はなんでもない、普通の焦げ茶色ですよ？」

「それは右目だけだ。左目は抜かりなく染色している。俺はこれを露顕させたくないから、こんなサングラスを装着してまで隠匿している。何故片目だけなのかは知らないが、仲間曰く、“精神が不安定だから”だそうだ」

「ちゃんと見えてるんですか？ その、染まっているほうの、ですけど」

「機能としては問題ない。使えなければ眼帯をしている」

「はあ…。見てみたい気もしますが、ダメですか？」

「断固拒否する」

「…なら、仕方ないですね。あとは…あ、そうだ、この剣は？ ずいぶん大きな物ですけど、アクセサリーですか？」

そうやって私はオルパニルの右腰に納められている一振の剣を指した。

「これは装飾具ではなく、本物の凶器だ。『日本刀』と呼び、その名の通り、東洋の島国の独特な製法によって生まれた、芸術的な武器だ。金属製の刃物の中では最高の切れ味を誇る。古い英国広辞苑なら『刀』と記載されている筈だ」

私は聞き取った一つの国名を聞いて、

「日本って、あの『国際共同環境保全支援事業施設列島』ですか？」

驚愕した調子で訊き返し、

「そう。あの『国際共同環境保全支援事業施設列島』だ」

対してオルパニルは平然と答える。

日本は二十一世紀に入ってから出生率の低下が目立ち初め、百五十年前にはついに人口が一億人を切った。経済的な困難により他国に救命措置を依頼したが、大きな支援を受けることはなかった。それから百年前が経過して、純血の日本人は希有な存在になった。

問題として、残った日本列島及びその領土の島々をどうするかと議論が開かれた。案として、植民地にするとか大富豪に区分した面積を売却するとかが挙がったが、それらは身勝手であり不平等だと却下された。結論として、重要文化財や天然記念物はアメリカやヨーロッパに移築させて、残った土地面積全てを廃棄物の集積及び処理場、また南北に伸びて多様な温度環境が揃っている条件を活かして、絶滅危惧種を保護するための島として利用する旨が正式に決定した。

日本は国土面積の約七割が山岳地帯であるため、廃棄物処理場が平野・盆地に、動物保護地域はそれ以外の山岳・湿地に設置されることとなった。

集積された廃棄物は様々な形式で処理される。

可燃ゴミは、そのまま焼却処理し、その時発生する熱を発電力として利用している。不燃ゴミは、有害物質を発生させない工夫を施されてはいるが、百パーセント発生しないというわけには至っていない。そのため、プラズマなどを当てて、水素燃料を抽出したり、可能な限り最小化して道路のコンクリートなどに混合し使われている。また、プラスチックは植物から加工して作り出したポリ乳酸で造られているため、リサイクルを可能としている。生ゴミは、巨大な粉碎装置に掛けて粉末状にし、堆肥量の原料として出荷したり、

これもまた植物性プラスチックに加工されたりしている。缶・瓶・ペットボトルは、従来とほとんど変わらず、再利用しやすい形状に加工して出荷している。粗大ゴミは、種類にもよるが、家具などの有機物は紙類の元となる木片チップへ、電化製品などの無機物は、修復利用できる物は分解修理し、不可能な物は分解した後溶解して金属塊へと変換している。

島の保護目的である絶滅危惧種は世界各地から収容されくる。

ゴリラやジャイアントパンダなどの穏和な動物は本州で保護し、特別な環境が必要な動物は周辺の孤島を改装してそこで飼育している。野生の動物は警戒心が過剰に高いものが多いために、最善の注意を払わなければならない。

ちなみに、沖縄県人のほとんどはそこに永住することを希望し、今も文化と伝統を後世に伝承させている。今では『日本』ではなく『沖縄』という国名として、経済を維持している。沖縄には二十世紀中盤からアメリカの空軍基地が設置されていたが、日本の他の土地を代替とすることを条件に沖縄から撤退した。珊瑚礁や広大な山林は、世界文化遺産として登録されているため、現在も変わらぬ姿のまま存在している。

記憶が正しければ、ソミアは学校でそう学んだ。

「これは、二百年程前に腕の良い刀匠に無理を言って製造してもらった物だ。打刀『漣哭』^{さざななき}。素晴らしい名刀だと今でも賞讃している。現在ではこの技術を継承している者は現存していないだろうから、大切にしている」

私は刀に惹かれて思わず聞き流しそうになったが、ある一点が非常に気にかかった。

「……………つて、え！ 二百年前！？ オルパニル、あなた、いったい何歳なんですか！？」

「肉体年齢は、数え年で十五歳だが、実年齢は三百歳を多少下回るくらいだ。正確な年齢は、忘却したため不明だ」

オルパニルは刀を鞘の上から撫でていた。私はオルパニルをよく観察してみる。

黒髪に茶褐色の瞳。この国でも黒髪の者はいるが、茶褐色の瞳を持つ者は珍しい。

白くはない、しかし日焼けをしたわけでもなさそうな、黄みがかった色の肌。黄色人種は古今東西、東洋の民族だけだ。

そして、『サザナキ』という名の、刀という剣と、日本という国への思い入れ。

だとしたら、答えは一つ。

「オルパニルは、純血の日本人……なんですか？」

「……そうだ。俺が、生き残りの一人だ。……生まれた国を嫌った人間がその所為で生き残っているのだから、皮肉な物だ」

これにはさすがに衝撃を受けた。もう希少といわれている民族が生き残っていた事実。そして、その少数民族が自分の目の前にいる。

もう、感動や衝撃で頭がいっぱいだった。

歴史ある跡無し者 2（後書き）

Seeing is believing.

「百聞は一見にしかず」

日本刀『漣哭』

読みは「さざなき」。

「漣（さざなみ）」に、大泣きの意味を持つ「哭（コク）」を合わせ、韻を踏ませた当て字。

名前の由来は彼の過去にあるのですが、それはまた別の話です。というかまだ書いてません……

イメージだけラフってあるので、仕上がったらupしますm（

）m

歴史ある跡無し者 3

オルパニルはさつきより少し大人しくなった隣の少女が気にかかつて見てみると、ソミアの様子が動転してはいるが、言葉を発さないのだから切り出した。

「他に質問は？」

「へっ？ ああ、いえ、んと………ないと思います。たぶん」

訊きたいことはまだありそうなのに、興奮しているせいで頭が上手く働かず、曖昧な反応をしてしまった。

「自信が無さそうだが？」

揚げ句に突っ込まれてるし。

「今はこの程度で良いだろう。知り過ぎると、却って悪い方へ傾く事もある。…注文を一つ聞いてもらいたいのだが」

最後に出た申し出を断る理由は勿論無いので、私は首を傾げながらも頷いた。

「俺達のことは他言無用に願いたい。公になると厄介だから」

つまり、誰にも言うな、とだけだった。予想より簡単な注文だったのもあり、私は快諾した。

そう終わると、オルパニルが次の言葉を繋いだ。

「自宅まで送ろう」

「え…あの、ここからなら道は分かります。私の家はとても遠いので、そこまで迷惑を掛けるわけには…」

「夜道を一人で歩くのは常識的に危険だ。しかもお前は女でもあるいくらこの国の治安が劣悪でないとは言っても、夜の方が犯罪発生率が高い。それに、送るくらいの時間はある。心配は不要だ」

「…じゃあ、すみません、お願いします…」

私は了承して、しかし申し訳なく感じながら厚意を受け取った。オルパニルはゆっくりと立ち上がり、私も立ち上がるうとした。その時に、あることに気がついた。

「あれ？ そういえば、鞆…」

持っているはずの鞆がないのだ。

「オルパニル、私の鞆を知りませんか？」

「？ いいや、知らない」

私は周りを見回してみたが、見当たらない。そういえば、腕に装着していた端末もない。

「確か…あの男の人に…ッ！」

そこまで思い出して、私は震えた。

目をぎゅつと瞑り、握った手を固くした。僅かに震えてもいる。

夕暮れ、暗闇、火、三人…。

暗い場所で、乱暴に自分に向けて伸ばされた、手、手、手。

脳裏に刻まれてしまった、恐怖の映像。

自分のために言った自分の言葉で、薄ぼんやりとしていた記憶が、完全に甦ってしまった。

体の震えが止まらない。忘れようとしても、執拗に頭の中を飛び回る。気分が悪くなり、顔色も悪くなっていく。夜風の強さは変わっていないはずなのに、とても冷たく感じる。冷えた体を、震える体を、両腕で抱く。それがさらに孤独感をも誘発させる。

あの時から、ずっと前から、判っていた。なのに、友達ができたことで忘れていた。忘れることができた。

だから、再び襲った独りのつらさが、余計に苦しい。

自分の体が、様々な苦しみに耐えられなくなり、前に屈んでいく。このままなら倒れてもおかしくなかった。

だが、私は倒れなかった。

自分では体の力を完全に抜いている。なのに倒れない。目を開けてみると、自分の体の前に一本の腕があった。

その腕が誰のかなんて、見なくてもわかった。

オルパニルが、支えてくれていた。

途端に喋らなくなったソミアを疑問に思っただけなら、様子がおかしいことに気づき、倒れそうになったところを受け止めていたのだった。

オルパニルは私を支えたまま、言った。

「失念していたが、奴等の身柄を教えていなかったから教える」

まだ震えが止まらない私は、おずおずと彼の言葉に耳を傾けた。

「結果を先に報告すると、奴等は問題なく逮捕された。再度襲撃される事は無い」

オルパニルは今度は事後の様子を話し始めた。

三人の男性は少年が制圧したこと（言われてから、私も少しずつ思い出した）。あの火事はオルパニルが鎮火しておいたこと。建物内部にも火は回っていないから心配はいらないこと。あのあとは警察と消防隊が駆けつけて後始末してくれたこと。おそらく、上がっていた煙を発見して通報したのだろうということ。消防隊は、もちろん出火を確認できなかったが、現場には焼け跡に残る可燃物質が確認されたこと。さらに、現場には三人の男が意識不明で倒れていて、まだ三人の意識は戻っていないが、警察は放火と見て、男達を逮捕がてら警察病院へ搬送する首尾にしたこと。

「以上が事後要約だ。もう奴らは居ない。心配しなくて良い」

「は、はい…ありがとうございます…よかった、火も大きな火事にならなくて、放火犯も捕まって」

私は胸を撫で下ろした。

が、

「余談だが、通報された時は四人の人物が居たと証言されていた。暗くて明瞭に目視した訳ではないらしいが、四人は確かだそうだが、警察が現場に駆けつけた時には三人しか居なかった。あと一人も仲間で逃走していると見て、捜査を続けているそうだ」

新事実を聞かされて、落ち着きかけた心臓がまた激しく高鳴り始めた。この人、わざと言ってるんじゃないよね。

「うそっ？ 四人って、私達違うのに……って、あれ？ 人数が合わないような……」

あの時あの場所にいたのは、放火犯の男三人とオルパニルと自分の、合計五人のはずだ。これでは計算が合わない。

私が困った顔でオルパニルを見ると、

「確かにあの時居合わせたのは合計五人だが、暗所だった。それにソミアはあの時男達の背後に居た。只でさえ外からでは目視し辛い場所だった。ソミアが数に入っていないくても不思議ではない」

彼は正解を答えてくれた。

だが、説明されても納得いかなかった。

「それじゃだめですよっ！ オルパニルは犯人の仲間じゃないのに、このままじゃ捕まっちゃいますよ！」

「心配してくれるのは感謝するが、それはいずれ杞憂に変わる」

「どうしてですか？」

「何故なら俺は逮捕されるような常人ではないから。追求されたとしても、正面から反抗できる力も持っている。万が一逮捕されても即座に脱獄できるし、俺は元から警察とは干渉しない質だ。俺はあの時一番出入り口に近い場所に位置していたが、証言者が目撃したのは薄暗闇に見えた後ろ影だろうから、証拠不十分だ。逮捕には力不足だろう」

どこまでも冷静に考えるオルパニルに感心してしまう。自分が決して良い立場に置かれているわけじゃないのに、焦るところか表情一つ変えない……というか、初めて会った時から無表情なのだが。

そして、オルパニルがどれほど強くて、それゆえに他人と過剰な干渉をしていないことを悟った。

私がようやく落ち着きを取り戻してきてから、オルパニルは再び告げた。

「残念だが、」

オルパニルが話し始めた。

「盗難された物は、諦めるしかない。一応盗難届を出しておこう。何か大事な物は入っていなかったか？ パースカードや、身分証明証など」

そうだ。鞆をなくしてしまっていたんだった。

どうしよう、何が入っていたんだっけ。

私は思い出しながら中身を言い並べていった。

「あ、住民証明証が入ってました。携帯端末もありませんし…。あと、ノートとか、教科書チップとか、ペンケースとか、櫛とか鏡とか香水とか、それから――」

私は思いつく限りの物を並べていく。一方、オルパニルはさつきから微動だにしないでちゃんと聞いているかどうか怪しい顔をしているが、決して表情には出さないためわからないので気にしないでおく。それよりも中身だ。

「――あと、せっかく買ったイヤリングが」

「色々入ってたのは承知したから、もうその辺で止まってくれ」

オルパニルがとうとう停止するよう懇願してきた。

「パースカードは所持しているのか？」

「はい。それはいつも上着のポケットに入れているので」

「なら良い。文房具は買えば用意できるが、パースカードは拙い。^{まず}中のポイントを使用されていただろうから。携帯端末は、気の毒だが、これは新規で購入するしかない」

「そう…ですね…」

仕方がない、そう自分に言い聞かせたが、溜め息が出てしまう。

オルパニルは大したことないように見えているようだが、自分からしてみればとても大きなショックだった。あの文房具は今まで自分が使ってきたのだ。今のような他人から羨まれるくらいの学力を身につけられたのも、あの文房具があったからだ。とても愛着があるし、中には長年使っているお気に入りだってある。

他にも、あの鞆の中にはジャスミン達から貰った物だつてある。仲良くなり始めて、彼女らは私の自分自身への無頓着さを叱った。その頃は、櫛や鏡とかは持つてはいたが、香水やマニキュアなんて代物は持つていなかった。持とうとも、持たなくてもいいとさえも思っていた。

年頃の女の子がそんなんじゃダメと、彼女たちは身嗜みの仕方を教えてくれた。口紅の艶に驚いたり、マニキュアや睫伸ばしによって自分が変わってしまった恥ずかしさを感じた。それらは自分にとって刺激が強すぎたため、いつもバツチリと化粧するのは断った。でも、「せつかくだから」とジャスミンは香水をくれた。「使い回しだけれど」と冗談を言いながら手渡されたそれは、香水の中でも微香といえる香りが醸す種類で、匂いの強い種類に弱い私にうつつけだと言ってくれたのだ。

だから……思い出せば思い出すほど、悲しくなる。

俯いた自分の目には、すでに涙が浮かんでいる。あと少し経てば零れて頬を伝うだろう。

そんな私を知ってか知らずか、あるいは始めからそうするつもりだったのか、オルパニルは立ち上がった。

「行くぞ」

「はい……。私は電車通学なので、駅へ――」

俯く私の目は、悲しみでいっぱいだった。表情も声も曇っていたが、その半分くらいが疑問の色に変わった。

「違う」

オルパニルが否定した。

「商店街だ。これから必要物品を購入しに行く。文房具屋、日常生活品店、携帯通信端末取扱店、家電商品店、その他考え得る必要品の関連店へ時間が許す限り立ち寄っていく。何か意見は？」

私はしばらく茫然としていた。そして頬を撫でていた冷たい風が一瞬止まったと同時に、はっと我に返った。

「そ、そんな、お世話になるわけには……」

「今更言うな。この事態も俺の責任でもある」

「でも…もうこんな遅い時間ですし、家に帰らないと親が心配します」

「今回は帰宅してから報告しろ。きっと、友人と何処かに出掛けていると推測するだろう」

「でも、予想通りにいかないかもしれません…。私の両親なら心配すると思います」

「ならば、俺の通信機から連絡を入れておけ。買い物は今日中に終わらせるつもりだから、明日に朝帰りする訳ではない。それに明日の学校で必ず困る」

「でも…全部を再購入するとなると、高価な買い物になってしまいますよ？」

「案じるな。いつも不便に思わない程度なら持ち合わせている」

そう言つて、オルパニルは自分のパスカードを取り出した。そして、カードに搭載されているボタンを押して、現在の所持ポイントをディスプレイに表示させた。

「ッッ!？」

私はそこに表示された数字を見て、驚愕した。それはもう飛び上がるくらいに。

表示された数字は、一般人が持つわけがない桁だった。というより、一般の家庭の全財産を含めてもここまで行かない金額だ。それをオルパニルは常に平然と持っているのだという…。

私は呆氣に取られるだけだった。

「二言は無い」

オルパニルは私を納得させるため、そう付け加えた。

だが、私はまだ承諾しなかった。所持金の有無もそうだが、他の理由があつた。

オルパニルとはまだ他人に等しい関係なのだ。出会ってからほんの二日。通算時間に直すと、二時間が経つか経たないかである。いくら命の恩人だからといっても、こっちは助けられた側なのだから

謙虚になるのは普通だし、責任があると言われても助けてもらっただけで充分なのに、まだ恩を重ねてしまうのは気が引けた。

私は正直に、そのことを言おうとした。

「でも…」

「でも」じゃない。送る時間は有ると言っても潤沢ではない。それに、長引くと風邪を引くから手早く済ませるべきだ」

それをオルパニルは簡単に打破した。

もう言い訳すら聞いてくれそうもなかった。

オルパニルは商店街のほうへ歩き出してしまったので、私もその後を渋々について行った。

顔には出していないが、オルパニルは嘘をついていた。

放火魔の三人組は、ただの放火魔ではないことを。

証拠はないが、あの手口に思い当たる事件があることを。

そして、それらが繋がった後にこれから起こりうることも、予想できていることを。

歴史ある跡無し者 3（後書き）

今のうちに白状します。

作者の私は、伏線が大好きです。

狂乱者と阻格者 1

第四章 狂乱者と阻格者

オルパニルとソミアは夜の街を闊歩していた。

オルパニルは堂々と。私は怖々と。

私は夜に外を出歩き、なおかつ街中を歩くことは初体験であったため、かなり緊張していた。高い建物から煌々と発せられている一種の芸術のような蛍光灯の光に感動したり、昼には見かけなかったホームレスの囁や呻き声に怯えたり、夜間限定で行っている小さな催しに歓喜したり、見知らぬ人からいきなり声をかけられて身を竦ませたりした。

今、私は遠慮がちにオルパニルの腕を掴んでいた。

初めは同じく遠慮がちにＴシャツの裾をつまんでいたのだが、景色に見とれているうちに離れてしまい、慌てて掴み直すことがあった。それが一度だけなら許せるだろうが、自分は懲りずに何度も話してしまった。

そんな私に対しても、オルパニルはどう思ったのか感じ取れないが、「握力に自信が無いのならば、掴むのではなく掴むのが妥当案だ」と言ってきた。親切な進言だったのか、それとも繰り返し私のドジっぷりに呆れたのかは、わからない。

でも、彼の着目点は正しかった。自慢ではないが、私は握力が一般女子の平均以下だったため、指先の力だけで離れないようにするくらいＴシャツを掴むことは非常に困難だった。

だから、両手全体を使って、腕を掴むことにしたのだ。自分にとっては大胆な行動を取ることに顔全体が赤くなるのがわかった。彼

からの提案でもあったけど、最初はやっぱり迷惑なんじゃないかと心配して行動に出せなかった。なんとかオルパニルの腕を掴んでから彼の様子を窺うと、特に気に留めていない様子だったので、このままでもいいさしてもらった。

はじめは、こんなところで迷子になるのは嫌だという理由だった。でも、なぜか次第に掴んでいられるだけでも安心するようになった。これも彼の能力なのだろうか。

引っ込み思案な自分が面識の少ない人と一緒にいるのに、こんなに緊張がほぐれていることなんて今までなかった。ぜんぜん緊張してないってことはないけど、やっぱり緊張してるってことは変わらないんだけど、一度ピンチを救ってくれた恩人に対する気持ちというか、巻き込まれた私にきちんと説明してくれたオルパニルってよく考えてみれば親切っていうか、なんていうか。

とりあえず、今までのようなまったく知らない人とは違う気がするから、そこまで緊張しないんだと思う。

事情を知らない傍から見れば、ベタベタとくっついてデートしているカップルにしか見えないのかもしれない。

そのせいか、ただの気まぐれか、ただの気晴らしか、あるいは全部の理由から、品の悪い男数人の集団に絡まれてしまった。しかし、オルパニルは威厳のある目で睨みつける、いわゆる“がんと眼飛ばし”（と言つらしいことを悪友から教わった）をしただけで追っ払ってしまった。

一部始終を目前で目撃していたソミアは呆氣に取られるだけだった。

すでに半刻くらいは歩き続けているが、会話はしていない。いや、商店街に再び戻ってきてから、まだろくに言葉を交わしていなかった。私が初めての夜間の社会見学に見とれ、オルパニルが会話をしなくてもどうも思わない性格だったせいだ。

それに気づいた私は、ようやく何か会話をしたいと思い始めてい

た。ちょっと遅い気もするけど、意識した途端にこの空気がもどかしく思えた。

「あの、」

「何だ？」

オルパニルが短い返事をして、じっと見つめてくる。彼の目はずつと感情を感じられないから、ただ一つ尋ねることすら怖く思ってしまう。

「す、すみません…。なんでもない、です…」

私はやっぱりやめておいた。聞こうとした内容は、たぶん秘密事項だ。私が個人的に気になったことだ。オルパニルにとっては、私に教えたところで何の得もない。教えてくれるわけがないと思った。「言わなければ、分からない」

慌てて謝って俯いてしまった私に、オルパニルが言った。

「発言しなければ表明できる事は無いし、理解もされない。次に尋問する機会も訪れるかどうかすら不明なのに、言わないのは勿体ない」

「…いいんですか？ 秘密にふれるかもしれないのに」

「杞憂だ。また、迷惑だったら、既に応答していない」

「そう、ですよ…」

短いやりとりだったが、彼の意見を聞くことで自分の中にあった不安が減っているような気がした。本当に、この人は凄いと思う。

「じゃあ、あの…オルパニル、一つ訊いていいですか？」

私は恐る恐る尋ね始めた。

「ああ」

オルパニルが前を向いたまま、声だけで返事をする。

「オルパニルの役目のことなんですが、いいですか？」

「構わない」

あっさりと了承してくれた。私の中では決して少くない量の安堵が生まれた。

「確か、オルパニルは『オゾン層の再構築』を担当していると言いましたけど、どうやっているんですか？」

これは企業秘密を暴露させるような質問だが、訊いてみたかった。自分が持つ、ただの知的好奇心で。

「教える前に、幾つか確認したい」

「はい？」

確認、って何だろう？

やっぱりアレかな。映画でよくある、家計とか、人間関係とか、簡単な適性検査で信用できる人かどうかを見極めるのかな。

「オゾン層破壊物質である、フロン、四塩化炭素、一、一、一、トリクロロエタン、ハロン、臭化メチルは知っているか？」

オルパニルは次々と化学物質の名前を挙げていった。

予想とは違ったことを聞かれた私は、少し安心しつつ、並べられた名前と自分の記憶を照合した。

「え、と……。フロンだけは聞いたことがないです、すみません……」

普通、専門的に扱っていない高校生が知っているはずもない。しかし、それでも知らない自分が悪いと私は自責してしまう。

「ああ、フロンは日本での通称か。公式名はフルオロカーボンという名称だ」

それを知ってか知らずか、オルパニルは間違いを訂正してくれた。気持ちを改めて、私は無意識に視線を上げ、焦点が合わない、どこか遠くを見るような茫漠な目になって、口を開いた。

「……フルオロカーボン」。炭化水素の水素を塩素や弗素などで置き換えた、弗素と炭素の化合物の総称。無色無臭の気体または低沸点の液体。無毒で不燃性、熱的にも科学的にも安定、断熱性や電気絶縁性が大きく、油脂をよく溶かす。オゾン層を破壊することが判明し、一九九五年に生産を中止し全廃された。欧米では、水素を含まない、塩素・弗素・炭素の化合物は『クロロフルオロカーボン（CFC）』、水素を含むものが『ハイドロクロロフルオロカーボン（HCFC）』と呼ばれている。HCFCは二〇二〇年に全廃を完

了した。

…『四塩化炭素』。別名テトラクロロメタン。メタンの全ての水素原子を塩素原子で置き換えた化合物。常温では無色の揮発しやすい液体で、その蒸気は特有の臭いを持ち、燃えないのが特徴。毒性が非常に強い。一九九六年に生産と消費を全廃される。

…『一、一、一、トリクロロエタン』。別名メチルクロロホルム。常温では無色の液体だが、揮発性が強く、その蒸気には特有の甘味風の臭いがある。有機塩素化合物中、比較的毒性が低く、かつ燃えにくい。高濃度では、人体に対して麻酔作用や粘膜への刺激作用を示し、動物実験でも肝臓や腎臓に障害を及ぼすことが知られている。四塩化炭素と同じく、一九九六年に生産・消費を全廃。

…『ハロン』。臭素原子を含むフルオロカーボンの通称。多くは常温では無色の気体または揮発性の液体であり、科学的に不活発な、毒性の低い物質。臭素は塩素よりオゾン層の破壊力が強い。ハロン一三〇一、同二二二、同二四〇二は、一九九三年に生産・消費を停止し全廃した。

…『臭化メチル』。別名プロモメタン。メタンの水素原子一個を臭素原子で置き換えた化合物。常温では無色の気体として存在し、高濃度ではわずかながら特有の臭いを示す。また臭化メチルは、燃えにくく、アルミニウム以外の金属を腐食しないが、人体に対する急性毒性が強く、劇物に指定されている。二〇一〇年に全廃を完了した。

これらは全て全廃されているが、多少の差異はあるものの、全て科学的に安定していて、自然浄化には一〇〇〇年を要すると推定されている」

間髪入れずに、オルパニルからの次の尋問が来る。

「オゾンとその層は？」

「…『オゾン』。分子式O₃。酸素の同素体。特有な臭いのある微青色の気体。乾いた酸素ガス中で無声放電を行わせる過成層圏の中層ないし上層部で、太陽光に含まれる強い紫外線的作用によって生

ずる。酸化力が強く、目や呼吸器を冒し有害。殺菌・消毒・漂白などに使用。

…『オゾン層』。オゾンを比較的多く含む層。地上一〇～五〇キロメートル。約二五キロメートル付近で濃度最大。動植物に有害な太陽からの紫外線を吸収する作用がある」

「オゾン層の破壊の原理は？」

「…フロンは科学的に安定しているので、大気中の他の原子とほとんど反応せずにオゾン層まで到達する。そして成層圏で紫外線によって分解して塩素原子を生ずる。塩素はラジカルと呼ばれる反応性に富んだ状態のもので、オゾンの酸素原子一つと容易く化学反応を起こし、酸素分子 O_2 と酸化塩素となる。ついでこれとは別に紫外線の作用でオゾンから切り離された酸素原子が、この一酸化塩素と反応して塩素原子と酸素分子を生成する。結果的にオゾン分子二つから酸素分子三つを生じさせる。さらに塩素原子が再度オゾンと反応し、これにより塩素原子は触媒効果となり、オゾンを破壊し続ける。一方、ハロンや臭化メチルの場合には臭素原子が遊離される。オゾン分解能力は塩素より強く、その四十から百倍を示す…」

私は言い終え、

「…で、合ってますか？」

オルパニルの顔を見ると、

「…」

オルパニルはただじつと私を見ている。

「どうしたんですか？ …あつ、どこか間違っていましたか？」

「いや、正解だ」

大丈夫だったらしい。もしかしてさっきのつて、例の驚いている表情だろうか。

「再構築の作業だが、説明するだけなら簡単なのだが、理に適っていない。それでも信用できるか？」

「…頑張ってみます」

オルパニルはその言葉を確認して、幻想の事実を語り出した。

「オゾン破壊の主な原因は塩素原子だ。それを狙う。先ず、オゾン層の、オゾンが最大濃度である高度二十五キロ付近でナトリウムを出現させて、強制的かつ高速で化合させる。塩素はもともアルカリ金属と結合しやすい性質の為に作業が安易だ。ナトリウムと結合した塩素は塩化ナトリウム、つまり食塩に変化する。それを、ほぼ真下に有る無人の島に落下させる。これによって自然界の食塩比率が上がるが、年に一度の周期で生産したナトリウムを消滅させて規定値に戻している」

「……」
「次はオゾン。オゾンは酸素原子の同素体だ。結合している原子の数が異なるだけだから話は簡単だ。まずは酸素原子を集める必要があるのだが、高度によって大気濃度に差があるから、これは上空一万メートル付近で行う。初めに、一部の大気を周囲から隔離させ、その気温をマイナス二一〇・〇 まで冷却する。これで窒素などの、酸素より昇華温度が高い気体は全て昇華し固体となり、除外される。次に酸素の昇華温度であるマイナス二一八・四 まで冷却し、純粋な液体酸素を手に入れる。そして、その酸素を一旦強引に分離させて原子個体にし、無声放電を起こしてオゾン分子にする。この作業を繰り返し、大気中の酸素の割合の約二パーセントのうち、〇・〇〇〇一パーセントを使用し終えたら、その日の作業を終了する。これを一、二ヶ月毎に行っている。……以上だ」

「……」
私は自然と何かを呟いていた。

「？」
「凄いです……！ 本当に、そんなことができるんですか？ 凄すぎます！」

私は人知れず偉業を成しているオルパニルに対して尊敬の意を隠せなかった。

空想に近い話でも、この世で起こっている事実であるのに変わりはないのだ。何百年も試行錯誤をして、未だに解決に至っていない

環境問題を、こんなに容易く退けているのだ。驚嘆するし、感動もする。

「買い被り過ぎだ。これは俺ならではの方法だし、自然界の法則を無視して無理矢理対処しているだけだ。それに、まだ解決してもない。フロンは少量だが、未だ使用されているし、臭素の方も片付いていない。ハロゲンは只でさえ有毒なのは知っているだろう？

それ故、可能な限り配慮しなくてはならない。または、モントリール議定書を再び改定させて人間達に協力してもらわなければならないかもしれない。俺もまだ未熟だ」

オルパニルは冷静にあしらった。

「そんな！ 謙遜しないでください！ ただの人間じゃなかつと社会から軽蔑されていようとこそそこそ隠れて作業をしていようと、世界を救っている凄い人なのに違いはないんですから！」

聞く側としては引つかかる表現を無意識に漏らしていることにソミアは気づかなかった。

「解釈は任せる。…所で、一つ訊きたい」

オルパニルから質問された。

私から聞く必要なことなんてあつただろうか。

「はい、なんででしょうか？ お返しに何でも答えます！」

私はなんだか興奮気味になっていた。興味深い話を聞けたし、自分にも新たな知識が得られたからだ。

それに、彼が持つ秘密を聞かせてもらった。

だから自分はそのお返しをしなければならぬような気がした。

「お前、本当に高校生か？」

狂乱者と阻格者 1（後書き）

化学物質については昔文献で調べた情報です。誤っていたら、お手数ですがコメントください。すぐに訂正します。

また、同様に全廃年号が書かれていますが、昔調べた時点での「全廃予定」を基にした表現です。お読みくださった時に誤っていたらこちらも改正しますので、教えてください。
ご迷惑をおかけします。

狂乱者と阻格者 2

彼からの質問に、私は思わず歩みを止めてしまった。

オルパニルにとっては、さっきの説明を聞いた感動から何気なく口に出した尋問なのだろう。

でも、私にとっては少し困った尋問だった。

私の止まった歩行に合わせて、彼もその場で止まった。

「お前の記憶力は驚嘆した。讚美すべき能力だ。だが、お前のような実力を持つ者が未だ高等学校に通うに等しいとは腑に落ちない。この国には飛び級などの特進制度が設置されている筈だ」

私は困って俯いた。

なんとか、誤魔化しておきたい。今だけでいいから、納得してもらえぬ“嘘ではない理由”を考えた。

「高校生なのは本当です。一度だけ飛び級を利用しましたので、年齢と学年が違うのはそのためです。科学の知識は、昔参考にした資料を閲覧して、その時に覚えてしまったんです。今の時代になっても環境問題は解決しきれないし、無関心でもいられないし、知らないよりは知っておいたほうがいいと思って。そしたら読んでいるうちに、なんだか面白くなって、自然に……」

そこまで説明してオルパニルを見ると、彼はまだ自分を見ている。納得していないのか、説明に不足があったのを不満に思っているようだ。

短い時間だったが、二人は視線が重なったままだった。

オルパニルの眼を見ていてもさつきと変わらない、無表情のようだが追求しようとしているような目をしている。

そんな眼を見ていると、なんだか心の中まで見透かされそうな気分になった。

たぶん、分かっているんだ。自分がまだ何かを隠していることを。口に出さないのは、私から話してくれるのを待っているためだ。

強制するわけではない、そんな少し不器用な気遣いを感じた。

相手から話してくれるのを待つ、という行動は、まるでさっきの自分のようだった。

もしかしたら、その仕返しかもしれない。違っだろうけど。

これ話すのは、すごく勇気が必要だった。

勇気というか、気持ちとして嫌だっていうのがあった。

誰にも話したくない。

誰にも晒したくない。

誰にも笑われたくない。

誰にも否定されたくない。

自分以外の誰かに話した瞬間、今まで自分の築き上げてきた理想を崩されてしまうような錯覚があった。もちろん、それが起こるかどうかなんて話さなきゃわからない。それくらいならわかっていた。不安だった。

怖かった。

自分が一番恐れていることを、今自分から起こそうとしている。話したあとで私がどうなるかは、これから話を聞く相手にかかっている。

すべて、相手次第だった。

私は、その相手になる人を見つめた。

目の前にいる、真っ黒い格好をした無愛想な少年。

名前は、オルパニル。

不思議な力を持っていて、世界中を回っているという人。

この人でいいんだろうか。

本当に、本当に、この人を信じていいんだろうか。

「説明するに当たって不安要素があるならば、予め言え。俺はそれらの事項について禁制すると約束する」

オルパニルが言った。

無表情な彼は、まるで私の気持ちを読み取っているみたいに、私

が不安に思っていることに対して提案してきた。

彼は一度図書館で私の考えを読み取ったことがあったから、今回も同じかもしれない。集中の度合いがどうか言っていたけど、落ち着いていればなんだかなでできるんじゃないかな。

また心を見透かされたと思って嫌な気分になったけど、知ったからこそ私を気遣ってくれる言葉をかけてくれたのかもしれない。

そう思うと、感情的でない彼のことがとても紳士的に思えた。

彼だって、ただの口約束で自分のことについて話してくれた。信用のない私に対して嘘をつかず、自分について話してくれた。

だったら、話す前から疑っている私はただの臆病者じゃないか。話すのが嫌だってことは変わらない。

でも、なんとなく、なんとなく、彼になら話しても大丈夫な気がした。

彼なら信じてても大丈夫な気がした。

「私、昔は独りだったんです」

ぼつりぼつりと、声が上手く出ないけど、少しずつ言葉を繋いでゆく。

「いつからだったのか、よく憶えていないんですけど……私、中学生まで友達がいなかったんです。たぶん、成績のせいでしょ。自惚れですけど、昔から他の生徒より上のところにいました。いい結果を出せば、先生も両親も褒めてくれましたし、正しいことだとも信じていました。けれど、それが他人と無意識に距離をつけちゃったみたいで、友達が全然いなかったんです。時には、陰湿な嫌がらせや虐めを受けたこともあります。出る杭は打たれるらしくて。初めのうちは、悲しいっていうよりも、混乱しました。どうしてこんなことになるんだろう、って。自分は正しいことをしていて、なんにも悪いことなんかしてないのに、って。人の中には、自分より秀でると、嫉妬や不快感から、軽蔑したり、距離を取ったりする、と

分かるまで、混乱し続けて…。気づいたら、私自身もクラスメイトと関わるのが嫌になっちゃって、周りから逃げていました…」

私は、リストバンド型端末のあった箇所を、カーディガンの上から撫でた。

「一度だけですけど…耐えられなくなつて、したことがあります。けっこう強く切ったんですけど、だめでした…」

オルパニルは静かに耳を傾けてくれている。

「高校は、同級生と会わないように、できるだけ地元から離れた学校を受験しました。私にとっては無理なく入学できるところだったので、無事に進学して。初めて教室に入った時には、誰一人として顔を知っている人がいなかったの、それはそれで安心しました。でも、その教室で新しい友達を作ろうと強く思っではいたんですが、いざ話しかけようとすると、嫌がられるんじゃないかって、今までの思い出が全部甦ってしまつて…。結局、自分から話しかけられなくて、またクラスの人と離れてしまつたんです」

私は一度そこで話を切つて、深呼吸をしたあと、再び話し始めた。「新学期開始からしばらく経つて、周りのみんなが新しい友達としての輪ができあがってきた頃、まだ独りだった私に、声がかつたんです。女の子の三人組でした。その人達は、その日に提出する予定のレポートがまだ終わってなくて、私を見せてほしいって頼んできたんです。…はじめは戸惑いました。同級生と話をすることなんて、本当に久しぶりだったから。少し怖かつたんですけど、必死で頼む様子に嘘はないみたいだし、私のことも嫌がらずに話しかけてくれたので、私はレポートを貸しました。それ以外はいつもと変わらない一日を過ごして、どこにも寄らずに帰宅するつもりでした」

あの時は、そんなふうになるなんて、考えてなかった。ぜんぜん思つてもいなかった。

「けれど、その日の帰りに、さっきの三人に呼び止められたんです。その人達は私に『お礼がしたいから、これから一緒に遊びに行かない?』って言われたんです。…正直、信じられませんでした。また私を虐める口実かと卑しい想像をしましたが、和やかで、真っ直ぐ笑ってくれた顔にそんなものは感じられなくて、それが、嬉しくて…。今では、私の大切な友達になりました」

ちよつとだけ目に涙が浮かんだ。

「それからその三人は、何度も遊びに誘ってくれます。私が勉強ができるほうだつて知ったら、分らないところをよく訊きに來てくれます。…今までに何度か学校側から飛び級を勧められたことがあったんですけど、その三人の友達と別れるのが嫌だったから、断っています。たぶん、これからも…」

そこまで話し終えて、オルパニルのほうに振り返った。

「オルパニルは…こんな私は…間違ってますか…?」

訊くのは怖かった。

不安で仕方なかった。

もし否定されたら、と思うと不安になって、言葉が少し変になっていた。

オルパニルは理解しているからこそ、そこを指摘せず、本題を指摘した。

「自分では、どう思っている?」

彼は私自身について訊いてきた。

簡単な質問に、私は即答することができなかった。
だが思い直す。

すべてが悲しかった、あの気持ち。

どこでも寂しかった、あの気持ち。

なにより嬉しかった、あの気持ち。

友達を想う、この気持ち。

自分の取った行動が間違いだと思いたくなかった。

だから、

「間違っていないと、信じたいです」

力強く、そう答えた。

「…ならば、間違っていない」

彼の答えはとても短かった。というか、彼の考えが入っていないように思えた。

「えっ、これでもいいんですか？ オルパニルは、正しいと思うんですか？」

オルパニルはただでさえ三百年くらい生きているのだ。人生経験が豊富なのは自然に推測できる。

だから、人生の先輩として、自分の生易しい思想を評価してほしかった。

必死で理由と訊こうとする私を見たせいか、オルパニルは小さな溜め息を一つついた。

「そのような例は、特に規則や道理が在る訳ではないため、正しいかどうかなど問題ではない。大切なのは、その者にとって後悔しない選択をする事だ。人の行動には必ず理由が伴う。外観だけの判断では不当でも、本人からすれば正当なのかも知れない。他者が客観的に可否を批評するものではない。…お前の様子を見たところ、損をしている訳でもなく、寧ろ逆に満足しているようだ。間違いではないと思うのなら、それで良い。俺がとやかく言う必要は無い」

そう、助言にも似た意見を述べた。

答えになっていないような返答だが、確かに答えてくれた。

「正しいと思うのなら、これからその信念を貫けばいい。でなけ

れば、今迄のお前を信じてきたお前自身が哀れだ」

「…」

私はこの時、オルパニルに話して良かったと、感謝にも似た気持ちになった。

今まで自分の秘密を他人に話したことなどなかった。

いや、話そうともしなかった。

両親は自分が虐待を受けていることを、鞆の切り傷などから知られてはいたが、親に言えば心配させてしまうと誤解して自分から直々に話すことはなかった。

高校で友達になった三人、ジャスミンとローレンスとアナリアにも話したことなどない。話せば笑われてしまうという先入観を抱いてしまっていたからだ。

話すまでは、不安がいつぱいで怖かった。けれど、話したあとは、なんだかとても清々しい気持ちになったように感じた。今まで無理に自分を隠してきた負担が軽くなったみたいだ。

さっきまでにじみ出ていた涙は、もうすでに頬を伝って流れていた。

別の話を切り出そうとしたらしいオルパニルは、私の様子を見て動きを止めた。

「どうした？ どこか痛むのか？」

「あ…ご、ごめんなさいっ。なんか…勝手に出てきちゃって…」

「…何か、不快な部分に触れてしまったなら謝る。済まない」

「ち、違うんです、っ、オルパっ、ニルはっ、悪くなっ、いんです」

止めようと思って涙は止まらず、とうとうしゃくり上がるようになってしまった。

悲しいんじゃないのに。

嬉しいのに。

気持ちが軽くなっただけなのに、彼にまだ心配をかけてしまっている。

言いたいことが、涙に邪魔されてちゃんと言えなかった。

オルパニルは、私に掴まれている左腕を動かさないように、私が羽織っているジャケットの袖で涙を拭ってくれた。

「…あ、あり…がとう、ございます…」

やっと、なんとか言えた。ぐずぐずな声だったけど、言いたいことをようやく伝えられた。

「Not at all.」

オルパニルは無表情で応えた。

「…英語、とても上手ですね。発音も正しいし、聞き取りやすいし、ネイティブくらいに流暢で、外人じゃないみたい」

「馬鹿みたいに長く生きてみれば、世界中を徘徊してもいるからだ。優勢の言語程度ならば会話できる」

オルパニルの自慢と自虐が混合したことを言い、少しだけ笑えてしまった。

話す前の不安なんて、もうどこにもなかった。

最初に話した人がこの人でよかった。

狂乱者と阻格者 2（後書き）

Not at all .

「どういたしまして」

狂乱者と阻格者 3

「先ず、何から買い揃えるか？」

オルパニルが本題について尋ねた。

「え、つと……」

少し、落ち着いてきた。鼻を嚙らせるのはどうしようもないが、だんだん涙も止まってきた。

買う物はだいたい決まっている。とにかく文房具屋その他授業に使う物だ。

とりあえず手短な店へ向かおうと、私はきよろきよと周りを見渡した。

すると、

「……あ」

一つの店舗が目に入った。

「目星を付けたか？」

「い、いえっ、なんでもありませんっ」

「……本当か？」

なんとか誤魔化そうとしたが、オルパニルの眼力は私の黙秘力を容易く屈服させた。もうこの人には敵いそうもない。

私はその要望を言っただけいいものか迷った。自分が目を付けた店は、本来立ち寄る予定のない種類の店なのだ。

自分が向いている先にある、他より眩しい光が漏れている、一軒の店。

アクセサリーショップ。

私が無くした鞆には、夕方に買ったばかりのイヤリングも入っていた。また改めて買い直したい気も起こるが、今は駄目だ。それを買うためにここにいるんじゃない。オルパニルは忙中にも拘わらず、自分のために買い物に付き合ってくれている。早くやるべきことに戻ってもらえるように、買うものはできるだけ最小限に留めなくて

はならないと思っている。

だから、迷惑をかけちゃいけないんだ。
それを買うのはあとでもできる。

本当はすぐにでも買い直したいけれど、今はねだらずに、我慢しなくちゃいけないんだ。

「あの店か。では、行こう」

「へっ？」

予想外の言葉に、思わず声が裏返ってしまった。

「だ、だって、あそこは関係ないのに」

「紛失した物があの店に在るのだろう？ 別に構わない」

そう言って、オルパニルはアクセサリーショップへ向かってしまった。

「……」

彼の背中が店に向かっていくのが見える。

本当に、申し訳ないというか、感謝の気持ちでいっぱいになった。

アクセサリーショップに入店した直後に、私は気が重くなった。

店内は、夜であることを忘れてしまうくらい明るかった。純白色に光る天井だけでも充分なのに、同色の壁が光を反射して倍に眩しい。目に悪そうだ。

前回の店と比較すると、店内は同じくらいの広さだが、品揃えはやや少ないように見える。雰囲気も私にとっては落ち着かない。強いて言えば、今時の元氣潑刺な若者向けの店のようだ（現に店内にいる客はみんなオシャレな若い人ばかりである）。

その、蛍光灯の光で満たされた店内を、真っ黒なオルパニルが立っている。ジャケットは私が羽織っているが、その下は同じく無地の黒いシャツだ。さらに腰には凶器付きである。それはそれは目立つ。舞踏会で雪だるまの格好をしているくらい目立つ。

オルパニルは相変わらず周囲からの視線など気にしていないようだが、傍らに立って連れの立場となる私には酷だ。オルパニルが見

られているのなら視線は自然と自分へと向けられる。

これでソミアの今日の運勢は最悪だったことが確定した。

オルパニルは店頭の店員に素っ気なく挨拶をして、私も大人しめに挨拶をして、入店した。

「目標は何だ？」

至って自然体なオルパニルを倣って、私もできるだけ平常にいうと腹を括った。

「はい、イヤリングなんですけど…」

「了解」

オルパニルは即答して、その場からある程度店内を見渡して、視線がある一点で止まり、歩き出した。

私は置き去りにされないように、周囲から妙な目で見られながら、店の奥へと入っていった。

辿り着いた場所は、注文の通りイヤリングが売られている区域だった。

「先代のと同種の物は望みにくいため、気に入った商品を選べば良い。値段は気にするな」

とは言ってくれたものの、気にするなと言われると余計気にしてしまう私の性格。やはり遠慮してしまう。

とりあえず選ぶ。強制されたことではなく自分から要求したことなのだから。

並べられた品々を吟味する。やはり種類は豊富とはいえない。人気のあるデザインか、誰にも注目されなかった種類を並べただけに見える。人気商品が発掘品か、極端な品揃えだ。

私は傍にいた店員に試着の許可をもらって、その中の、比較的簡素なデザインのイヤリングを取り出してもらった。マグネットピアスで、浅葱色の小さな玉をぶら下げたものだ。値段は気にするな、と言われてもどうしても気にしてしまうので、“値段がそんなに高価でなくて気に入ったもの”という基準で選んだら、これが一番だった。

「それか？」

「はい。これがいいです」

「遠慮していないか？」

「えっ、い、いえっそんなことないです全然全くこれっぽっちも！」
「ならば良い」

オルパニルは右手を差し出した。

「会計を済ませてくる。ここで待機している」

「は、はい。わかりました…」

オルパニルは私からイヤリングを受け取り、店員とともにレジへ向かって行った。

しばらく待つと、小さな袋に包装されたイヤリングを抱えて戻ってきた。

オルパニルは袋を自分へ渡さないまま、開封し、中身を取り出す。余計な物が付いていないことを確認して、ようやく渡してくれた。

「塵^{こみ}を廃棄してくる。再度待機している」

たぶん、余計な荷物を作らないようにしたいんだと思う。

再び待ちぼうけをくらった私は、たった今、他人に買ってもらったイヤリングを見る。

オルパニルはあくまで償いとして購入したのだろうけど、私にとってはプレゼントのように思えた。

そう思うとなんだか気恥ずかしくもなるが、購入してくれた人へのお礼としてふさわしい態度は何かと考える。

私はフックを耳朶に引っかけて、イヤリングを着けた。

そこへ、ゴミ捨てを終了したオルパニルが戻ってきた。

そっちに向き直る。

同時に、イヤリングが揺れた。

「…丁度似合うと思う」

それを見つけたオルパニルは一言だけ漏らした。

茶色の髪と眼を持ち、気の弱い性格の私に、淡い緑のアクセサリは違和感がなかったらしい。

あまり感情的じゃない彼に真顔でそんなことを言われてしまい、私は下を向いた。

「あ、ありがとう、ごさいます…」

なんとかお礼を言った。本当は笑顔で言いたかったが、今は赤面しているだろうから、向き合っただけでできなかった。

口調はいつも通りぶっきらぼうだが、ちゃんと見てくれたあとの感想で褒めてくれたことが嬉しかった。

「ここで購入する必要があるのは、他にあるか？」

「いえ、もう大丈夫ですよ。急がないといけないんでしたね。早く済ませないと」

私は明るく答えた。なんだかよく分からないけど、気持ちがとても軽く感じた。

兎にも角にも、この店で購入すべき物はもうないので、次の店へ移動することにした。

自分の持ち物を元に戻すまで揃えるには、これから沢山の店を寄らなくてはならない。残量に限度がある貴重な時間を序盤で浪費したら、今日中に必要品を買い揃えることがなくなる。それに、オルパニルの任務復帰の時間が遅れてしまう。だから余計な時間を掛けるわけにはいかない。

店を出て、私は再びオルパニルの腕に掴まった。掴まっているうちに、一つの煩惱が浮かんだが、してもいいか、しないべきか、葛藤した。ただ、なんとなく、大丈夫と思った。確かな根拠や証拠があるわけではないが、これまでの過程で、窮地を助けてくれたり、自分の秘密を真面目に聞いてくれたり、蟠っていた自分の悩みに一つの答えを出してくれたり、高額な買い物を嫌な様子も見せずに請け負ってくれたりしたことが、自分の領域に入ることを許せる材料になった気がした。

掴んでいた手の力を緩めて、代わりに彼の腕を抱くようにしがみついた。

ただそれだけだが、私にとってはとても勇気のいる行動だった。

こんなことをしている自分が恥ずかしくなる。

けれど、やめたくなかった。

オルパニルは相変わらず表情どころか眉毛一つ変化していないが、振り払おうとしないからには許してくれているのだろう。

勝手な憶測だが、もし嫌でないなら嬉しいと思う。

次の目的地までこうしていられたら、いいと思う。

運が悪くて色々あったけれど、今日はとても嬉しい日だと思えた。

そんなこれからの行動予定は、一つの物事によって粉々に粉碎されることになる。

数分歩いたところで、

「済まない、通信だ」

オルパニルがそう言つて足を止めた。オルパニルは自由に動かせる右手で通信機の回線を開いて、機器越しに相手の話を聞いている。そして、

「……………。分かつた、直ぐ対処する」

突如前触れもなく緊張感を孕んだ声を出し、通信を終えて電源を切った。

「ど、どうしたん、ですか…?」

「緊急事態だ。『レイジャー』が発射された。それがこの街に向かつている」

「れ、れいじゃあ?」

「ミサイルの一つで、弾頭は純水爆。予定通り目標に着弾すれば、半径二十キロが薙ぎ払われる」

いきなりの破滅的な情報に、私も緊張が湧き上がった。

「えっ!? そんなっ…! だ、だって、そんなものが飛んで来ているなら、防衛システムが感知して警報が鳴るはず——」

私が言い終わる前に、けたたましい警報が街中に鳴り響いた。

『エマージェンシー非常事態発生! エマージェンシー非常事態発生! この街は攻撃されようとして
います! ただちにこの街から避難してください! 繰り返します、
ただちにこの街から避難してください!』

街中に避難を促すアナウンスが流れた。

私はそれを聞いて身を強ばらせる。周りの人々も同じ反応をしている。

人は大抵、たとえ真実であっても、常識の範疇から逸脱している情報を聞いたとしても、それをすぐ真に受けることはない。誤報か、

いたずらか、何かの手違いだと思い、真実を捉えるタイミングを遅らせる。

しかし、町全体に響いている警報と避難勧告はいつまで経っても鳴りやむことはなかった。滅多に聞くことはない緊急警報を聴覚より受けるたびに、その正確性を人々に与えていった。

一体何が起こったのか。

自分たちの知らない場所で何が起きているのか。

人々にそれを確認する術はなく、姿見えぬ厄災に怯えるだけだった。

そして、誰からもなく悲鳴が上がり、賑やかで楽しい夜の街が一瞬间で阿鼻叫喚に満たされた。

「細かい説明は一切無しだ。それより、この町に目立つような巨大な建物はないか？」

「……」

「ソミア？」

「……やだ」

小さな声で呟く。

「やだ……やだよ……私、死んじゃうの……？　そんなの、やだ……やだ、やだ」

首を小さく左右に振りながら、ぶつぶつとひとりごちる。知らぬうちにオルパニルの腕を掴む手にも力が入っていた。

オルパニルは、やれやれといった意味なのか小さな溜め息をつき、少し屈んで目の高さを合わせた。

「ソミア、今から俺の話を聞けるか？」

彼は冷静だった。その様子に影響されたのか、私も錯乱せずに済み、小さく頷いた。

「よし」

私は言われた通りにするため、じつとオルパニルの眼を見る。

「ミサイルに恐怖するのは受容できる。事実、それは恐ろしい殺戮兵器だ。だが、このまま何も対処しなかった場合、本当にこの街に

ミサイルが着弾してしまう。この町の全員が爆死してしまうだろう」

「……」

「しかし、現在この街には、ミサイルに対抗できる力を持っている者が存在する。それは誰だ？」

私は目の前にいる人を見つめて、答えた。

「……………オルパニル？」

「そう、この俺だ。俺にはミサイルを阻止する力がある。ソミアだけでなく、この街の人達を救うことが出来る。だが、それだけでは駄目だ。今回の場合、阻止するには、俺以外の何者かに情報提供の協力を要請する必要がある。そこで、だ。ソミアに協力してほしい」
オルパニルの話は、最後まで淀みがない。迷いなくミサイルに立ち向かう意志を出しているし、私に協力してほしいと頼んできている。

「どうして…？」

どうしてそんなに、力強くいられるのか。

「俺だけでは力不足であるため、ソミアの助力が必要だ。協力してほしい。この街を救ってほしい」

オルパニルは真剣な眼差しで自分を見てくる。

どうしてこんなにも疑うことなく私を信用できるのだろう。

どうしてこんなにも勇気ある姿勢で立ち向かえるのだろう。

こんな状況の時って、誰だって逃げ出したくなるんじゃないのだろうか。

「止めることが、できるんですか…？ 止めて、くれるんですか…？」

私は、これからの彼の行動に対する猜疑を言葉に変換した。信頼と期待を含ませながら、対して不安を無くそうと、訊きたかった。
「止められる。止めてやる。この街を救うために、止めてみせる」
オルパニルは自信に満ちた答えを返した。自分にしかできないことであり、自分なら必ず遂げられると、確信しているようでもあった。

彼の言う通り、このままでは現実に悲劇が起こる。沢山の人死んでしまう。

だから、誰かが止めなくてはならない。その“誰か”に、彼がなると言ってくれた。

その彼が、自分の助けを求めている。何もない、何かを守れるようなものなんか持っていない自分が役に立てるのなら。

「…うん、わかりました。協力します」

「助かる」

そう言っ、オルパニルは屈んでいた体勢を直した。その時の顔が、無表情なのは変わらないが、少しだけ嬉しそうだった気がした。

「早速だ。この街で目立つ建物は知っているか？」

「えっ？ どうして？」

「そのミサイルは発射してから着弾するまで、外部からの妨害手段が皆無だ。その代わり、目標が巨大でなければ照準が合わせられないという特徴を持つ。故に『^{レイジャー}狂乱者』と命名された」

それ、ミサイルとしてちゃんと役に立つの？

変な疑問が浮かんだけど、今こうして驚異となっているんだから、その欠点については置いておくことにした。

「あ、はい…。大きな…目立つ…うーん、ビルだったら至る所にあるんですけど…」

「酷似しているビル群の一つを特定することは出来ない。周囲から浮いているくらい明白でなければならぬ」

「周囲から、浮いている…。じゃあ、ドームやスタジアムはどうでしょう？ この町にはありませんけど、隣の町になら…」

一番ありそうなものを挙げてみた。

「いや、違う。補足し忘れたが、目標はこの街以内に存在するそう。飽くまで概算らしいが、仲間の計算は信用できる」

思い当たるものを出しても簡単に誤答にされてしまった。

あと、彼が言った“信用”という言葉は、大きな重さを感じられ

た。途方もない年月を生きてきた仲間の人達とは、言葉では語りきれないほどの経験を交わしてきたんだと悟った。

「数日前から巡回しているのに、思いつかないとは不覚だ…」

オルパニルは明らかに自己嫌悪していた。

彼の仕事の一つは治安管理だと言っていた。彼の仕事は生きている証拠にほとんど等しいと思う。それが滞ることは、何より苦痛なのだろう。

今は私に情報を手に入れようとしているけど、もし私と出会っていなかったら、多分彼一人で対処しようとしていたんじゃないだろうか。

一人で抱え込むなんて、しちやいけないんだと切に思う。

それに、これはオルパニルだけの問題じゃない。ソミアやこの町の住民みんなの問題だ。彼一人に委ねるのは失礼だと思う。

そもそも、自分はオルパニルよりこの町に詳しいはずだ。

あの日から、友人と何度も町中を歩き回った。みんな、国内とはいえ、生まれ育った町から少し遠離れた場所にある学校に通学している。互いによく知らない場所だからこそ、冒険心に駆り立てられて色々な場所へ行った。

美味しい飲食店にも行った。

ゲームセンターという所にも初めて行った。

時には自分一人だけでは決して入らないだろう場所や店にも行った。

彼より持っている情報は豊富で鮮明なはずだ。

安直に、愚直に、与えられた条件を満たす建物を特定する。

巨大で、目立っていて、周囲から浮いている…。

思い当たったのは、中でも自分が気に入っている、最近行ったばかりの建物だった。

「あれ…かな」

「どこだ？」

「あの、私とオルパニルが初めて会った、あの図書館です。大きい

し、目立つし、周りに何も無いから凄く浮いてるし…」

「…そうか、あれなら」

オルパニルが納得した。

「恐らくそれだ。この町の中心から少し離れているが、有効範囲を考えれば或いは」

「あ、でも、自信がないんで、あまり当てにしないほうが…」

「いや、可能性は高い。——ソミアの御陰だ、感謝する。そして待機していてくれ。奴を阻止したら必ず帰還する」

忠告された私は、断る理由など到底なく、頷いた。それを確かめたオルパニルはすぐに踵を返して目標に走り去っていった。

「…」

私は、今さっき起きたことがいまだに信じられないでいた。

オルパニルが、自分に、お礼を言ったのだ。

力のない、何かを守るような大きな力も持っていない自分が、

彼の役に立つことができた。

それが、何よりも、凄く嬉しい。

完璧な人間なんていない。誰だって苦手なことや嫌なこと、怖いこと、知らないことがある。完全無欠のような能力を持つ彼でさえ、独りでは全てに対応できるわけではないんだ。弱みがあるからこそ、欠点を持っているからこそ、それぞれ違うものを持っている人達が互いに支えあっていく。独りでは困難なことも、他に誰かがいるだけで違ってしまうほど、人間の結束の力というのは凄いんだと思う。小さくなっていく彼の背中を見つめながら、

「オルパニル…頑張って…」

小さく応援した。

狂乱者と阻格者 5

俺は胸中で悪態を吐きながら走っていた。

走る、とは言っても、脚力と骨密度と関節の柔軟性を強化し、両足の痛覚を遮断しているので、傍から見れば人造機械人間が走力の実践検証しているように思える。

高速により生じた突風が擦れ違う人々に迷惑を重ねているのは置いといて、自分の気分は晴れない。

それはこれから相手にする問題児が原因だった。

『レイジャー狂乱者』。

トマホークミサイルの一つ。全長二十メートル。推定最高速度はマッハ三十四。およそ三時間半で地球を一周してしまう速度だ。

弾頭は純水爆弾。爆発すると、放射能は無いものの、強烈な熱と爆風と衝撃波が拡散し、半径二〇キロメートルは確実に壊滅する。

燃料は水素を使用した原子エネルギー。核融合により生じる莫大なエネルギーを科学技術で精巧に制御し、半永久的に供給する。つまり、故障や老朽でもしない限り飛翔し続ける。

飛行中は管制部から独立する為に、外部からの更新・撤回指令を交信することは出来ない。通常、中断が出来るように自爆機能が装備されているが、これには無い。ある程度のステルス機能が施されている故、送受信を利用した逆探知も当てにならない。噴射炎や噴射煙が限りなく減少されている為、一度見失うと探し出すのも苦労を強いられることになる。

破壊しようにも、高硬度装甲で覆われているため、ミサイルをぶつけても徹甲弾を打ち込んでも決定的な損害は与えられない。攪乱兵器のデコイ、チャフ、フレアーも受けつけず、信管破壊レーザーも通じない。それ以前に、当たらない。

化学兵器には必ず融解温度と凝固温度というものがあり、それ以

上かそれ以下の温度になると無効化する性質がある。だが、レイジーの装甲の下にはパラフィンワックスという物質が層を成して覆っている。その物質は、温度が上がると溶けて熱を吸収し、逆に温度が下がると固まって中の熱を放出する性質を保有する。つまり、内温度が変わりにくい。初めは、月面飛行の際に着用する宇宙服の素材の一つとして開発されたものだが、こんな物にまで利用されていることに陰悪感を覚える。

これは、卑近なミサイルとは相違であり、発射したら着弾するまで止める方法が無いのだ。賞賛する表現を用いれば、必ず目標を撃破したい場合にはこれ以上相応なミサイルは無い。

オルパニルはこんなことを起こしやがった張本人に嫌気が差していた。

このミサイルはアメリカ陸軍が製造・保管していた代物だ。発射したのは管理司令部の誤操作らしい。

だがこのミサイルはそう簡単に発射されないよう、何重にもロックされている筈だった。軍外部の人間に侵入を許す訳が無い。

故に、内部から侵入ハッキングされたと推測する。しかも、並大抵ではない技術を持ち、特別コードを知る事を許可されている程の階級が高い人物だ。

不幸中の幸いか、その犯人には心当たりがあった。

それは、俺が近頃追跡している人間だ。

これまではあの三人の男達のように地味かつ地道な手段でちまちまとやってきているが、今回のような大事になることは初めてだ。その元凶たる組織の頭を捕らえられれば話が早くて望ましいが、気に食わないことに、逃げ足だけは早くて捕まえないでいる。これまで何度も居場所を突き止めては急襲しているが、嘲笑されているように逃げられている。本当に頭に来る。

あの三人組に拷問を掛けてでもして無理矢理聞き出そうと思ったのだが、偶然に機会を活かしそびれてしまった。

偶然と形容する、ソミアという名の少女。

あの娘が居た為、予定が少し狂ってしまった。

あの場は少女の救助を優先することが最良と考えたため、男達への尋問はお預けになった。だいぶ怯えていたし、尋問する機会が完全に消失するでもない。再びあのような行動を起こすだろうから、また捕まえた時に尋問すれば良いのだ。従って、少女の救助を優先した。

少女が居なければあの時、全部の指の爪を剥がして両肩に極太の釘を刺して礫にし骨という骨を完璧に砕いて両手足を炭化寸前まで焼き落として死ぬ寸前まで殴打して宙吊りにしながら水槽に沈めて洗いざらい吐かせて最後には高圧電流で焼き殺している算段だった。本当に実行していたら、あの路地は地獄絵図に化していただろうから止めておいた。ただの健全な少女の面前で実演する処罰ではない。

兎に角、もう過ぎた事だ。居場所の詮索はまたの機会にすれば良い。

今は、ミサイルだ。

オルパニルはソミアの居る位置から数十秒で目的地に着いた。

円柱型の、巨大な図書館。

今が夜の時刻だったのが幸いして、建物の中には誰も居ない。玄関の電気も消されている。もし居たとしても、先の警報で避難しているだろう。

俺は通信機の向こうで待機する人物に話しかけた。

「こちらオルパニル。目標に到着した」

『了解。あと十四分だ、気楽にやれよ』

通信機の向こうから、緊張感の抜けた声が返ってきた。

「まだ安心は出来ない。遂行するまでは樂觀も出来ない」

『別にいいけどよ、その堅っ苦しい口調どうにかなんねえか？ せっかくテンション上げてやってんのに』

「それはお前の軽い口調にも言えるだろう、パトラス。改善不可能なことを今更言うな」

『仰る通りで。んじゃ、思う存分無理なくやってくれい。以上』^{オーバー}

「了解。今から目標を粉碎する」

これが俺の阻止作戦だった。

『狂乱者』は発射したら目標に着弾するまで止める方法が無い。

なら、その目標が無くなった場合、どうなるか。

目標を失い、残った機械だけで駆動する、超高速で惰性的に飛翔する物体へと成り果てる筈だ。

そうなったら、どうにかして軌道を逸らし、大気圏外に放り出せば良い。

だから、これは重要な第一段階だ。

俺は図書館の外壁に近寄り、手を叩いた。右手を白い壁に押しつけ、能力を発揮した。

右手を初めに、外壁に白い波紋が幾つか伝う。水面に起こる波紋の様に建物を伝わっていく。白い筋は外壁だけでなく、内部まで伝い、床、壁、天井、電線、本棚、机、椅子、全てに及んでいく。そして建物の中を通り、オルパニルが触れた部分から点対称に、反対側の一点に白い筋が集束した。

触れている手を離さずに態勢を変え、後ろに体重を掛ける。

「――散れ」

紐を引っ張るように、右手を握って思いっきり引いた。

直後、

図書館全体が一斉に崩れ始めた。図書館は亀裂も入ることなく、いきなり瓦礫の塊になった。

俺は巻き込まれる前に素早く退避した。

巨大な建築物を迅速かつ粉々に破壊する方法に、物質の組織間の連結に干渉し、比喩的に引っ張って組織結合を倒壊させる荒技を取った。さほど大きくない瓦礫の塊になった図書館は、轟音を立てながら形を無くしてゆく。瓦礫の隙間から、内部を構成していた物らしい瓦礫も見えた。が、すぐに見えなくなった。

あれほど巨大な、地震でも起きない限り倒れないとも思えた建物

が、こうも簡単に破壊された。

ゲイブディパーソーズの者は全員異常な能力を所持している。建造物の破壊であれば、メンバー毎の得意とする方法で容易に破壊できるだろう。また、この力を発揮するか否かは、今のところたった七人に委ねられているのだ。

図書館は完全に破壊され、瓦礫の山と砂塵に変わった。それを確認した後、俺は通信機の向こう側に報告した。

「粉碎完了。あと何分だ？」

この後は直進飛行するようになった『狂乱者』を大気圏外に送るだけだ。予想よりも早く済みそうだった。

だが返事の内容は意表を突いた。

『何言つてやがる。まだ照準は消えてねえぞ』

「何？ 確かに破壊したが」

『んなこと言われても計器は作動しっぱなしだったの。：間違つてねえか？ 目標』

確かにその可能性は有る。だが他に候補が挙がるとは考えられない。この辺りの地理に詳しいソミアに訊いて、ここだと証言のだ。間違いだとは思えない。

では、何故だ？

俺は念のため確認することにした。

「おい、本当にこの国か？」

『なんだ、いきなり疑つてんのか？ 俺を誰だと思つてんだ？ 人間不信か？』

「五月蠅い。お前も、発射から三十分も気付かないのはどうなんだ？」

『うつせえ！ こっちは情報の津波に襲われてんだよ！ 止められねえのに緊急発進なんかしやがったバカタレ空軍もいやがるし！ あの異常一ツコ見つけるだけでもすんげえ苦労したつつの！ ネットサーフィンを右往に左往だつつの！』

「：悪い、意味が分からない」

『けつ、俺の苦勞が分かってたまるか！ 過勞死したら真っ先にお前えを呪ってやる！ 便所の時でも憑きまとってやらあ！』

「それは迷惑だから他の呪いにしてくれ。便秘にだけはなりたくないから」

時間が無いのに口喧嘩するほど呑気でいられないのだが。

「それより、返事は？」

『…ああ、間違いねえよ。アイルランドの可能性も考えられたが、軌道からの計算で除外したんだ。間違えるはずがねえ』

「それで、この街のどこかである？」

『管理部のデータによるとな。確認するつもりで発射口と情報のやりとりをしてた衛星の照準履歴を見たら、その街を捉えてたんだ』

「方角は東北東で合っている？」

『計算上だが、誤差はあってもその街以内だぞ』

「ならば、本当に間違えたのか？」

意図せず恐ろしい一理を洩らした。

『また探す時間は無えぞ。あと十一分だ。こうなったら総動員して食い止めるか？』

「ああ、最悪そうするしか——」

自分にとってはあまり採りたくない手段だが、この際仕方がないと諦めかけた時だった。

地面が揺れ始めた。

だが地震ではない。地震大国で生まれ育った俺だからこそ確信する。

何か、地面の下から重く響いてくる感覚だ。

地響きが次第に大きくなり、自分の予想が確信に変わった。

様子を見ていると、元図書館の瓦礫の山が段々と盛り上がっていった。

山は高さを上げていく。

よく観察すると、瓦礫だけでなく、綺麗に整備されたコンクリートまで盛り上がってくる。

ある程度盛り上がると、瓦礫が摩擦に耐えられなくなったのか、崩れていき、その犯人の姿が露わになる。

まず見えたのが、白銀に光る正四角錐の尖塔。だがそこで止まらずに、まだ迫り上がってくる。これでもか、これでもかと現れて、底面積も大きくなってくる。もう瓦礫を押しつける状態にまで巨大な白銀の外壁。いや、装甲と言うべきか。月光を澄明に反射し、夜でもその全貌が確認出来る。

漸く振動が収まると、俺の眼前には巨大な物体が聳えていた。

公共施設区域を荒らしてまで姿を現した、巨大な物体。高さは二五メートルかそれ以上。底辺一辺の長さは七十メートルは有る。一見見事な、傷一つ無い滑らかな装甲だが、それ故並の防御力ではないと推測出来る。表面は横向きの長方形に象った溝が掘られている。それは、エジプトの世界遺産、ピラミッドに酷似していた。

違うのは、鑑賞も説明も不要ということだ。

（選りに選って“これ”に照準しているのか…）

場所も方角も合っている。だが見つからなかった。

ならば、どこかに隠匿されていたのも考えられる。地表に顔を出さなくても、ある程度の深度ならセンサーが通用する。送受信からの逆探知を使っても割り出せる。

元からこいつに照準していたのなら、図書館を破壊しても駆動していた計器や探しても見つからない理由に説明がつく。

それに、非常事態だとばかりに出てきた対処行動が、自分から白状しているような物だ。

俺は通信機の方こうに話しかけた。

「おい、あと何分だ？」

「ん？ あー…っと、十分だ。どうかしたか？」

「ああ、謎が解けた。皆は召集しなくていい。スクランブルの連中も撤退させる。俺一人で片付ける」

「？ はーいよ。以上^{オーバー}」

オルパニルの宣言を相手は了承し、会話を終了した。

こいつを破壊すれば、『レイジャー』も止められる。
なら、遠慮する必要は無い。
叩き潰す。

俺はさっき同じように破壊するため、物体に向かって跳躍した。
このままでは何をし始めるか予測出来ないから、先手必勝、電光石
火に越したことはないのだ。

近付いた瞬間、物体に動きがあった。横長方形に区分けされた部
分一つがハッチのように開いた。遮蔽を除外したということは、何
かを出す兆候だ。

出てきたのは、
砲身。

「ッ！」

甲高い轟音が轟き、高エネルギーを集束させて放つ強力なレーザ
ーが発射された。レーザーは正確にオルパニルへ光速で飛んでいく。
かなり接近している、回避できる筈がない。

レーザーは自分の僅か一メートル前で弾かれた。

俺の目前には球体の障壁が出現して、自分を守っていた。

（くっ…あ、ぶない！）

俺はハッチが開いた直後に危険を感じ、一定範囲の次元を外側か
らの干渉から断絶・隔絶する障壁を作っておいた。勘は正しかった
ようだ。

だが物体の攻撃は止まらない。表面に見える全ての遮蔽蓋が開き、
それぞれから砲身が姿を見せた。それら全ての銃口が自分に向けら
れた。

（！！）

舌打ちをしたのを合図のように、全砲身が一斉掃射した。レーザ
ーが、雨に匹敵するかのような数で襲いかかる。

俺は思いつき切り跳び退いた。その直後に、〇、一秒前まで自分が
居た場所にレーザーが着弾した。能力で生成した障壁が粒子の塊に

破られる事は無いが、俺は現在精神的に不安定な部分があるので、強度に斑があるのだ。永続的に耐え切る自信が無かった。

レーザーは辛うじて躲したが、丁度近くを通った一台の車が一瞬で原形を失い、悲惨な犠牲となった。外れたレーザーは綺麗に整備されたコンクリートの地面を軽々と削っていく。爆炎を上げ、地を砕き、砂を舞い上がらせても、まだ撃ってくる。

八秒後、砲身は動きを止めた。

発射されたレーザー数、実に五万一千四百発。

砲撃が止んだのは、標的である自分が五百メートル以上離れた場所にある建物の地下に逃げ込んだからだ。

今居る場所は、地下室。

建物の底面積を地下に延長した広さで、高さは四メートルほど。地面には等間隔に区切り線が引かれており、その空間に自動車が二台駐車していた。地上からは四、五メートルくらいの深さで、どうやらシエルター兼駐車場のようだ。だが岩盤に砲弾が流れたために、この地下室に瓦礫が降り注ぎ、辺り一面が廃墟のようになっていた。自動車二台は奇遇にもおしゃかになった。

「はあ、はあ、はあ……。情報と実物は、合致しないか……」

異能の力をもつてしても、あの弾幕には耐える自信がなかった為、仕方なく一度身を隠すことにした。入り口が設置されてあったため、好機と思いながらもそこから不法侵入させてもらった。その際にこの地下室の持ち主である地上の建物が犠牲になってしまったが、所有者には申し訳ないが、申し訳ないとしか言えない。

流星に、あの主力防衛要塞、通称『チェッカー阻格者』と呼ばれている兵器を知らなければ、対応も遅れていたかもしれない。

光線兵器を主力としている情報は得ていたが、一度にあれ程の量を浴びさせるという情報は無かった。管制系統には過熱を防止する為の制御プログラムも組み入れられている筈で、一度に照準を合わせる上限を設定されている。しかしそれは過去の記録だったようで、先刻受けた攻撃の一点集中化のように、一つの対象物に対する照準

数の上限を解除されていると分析した。

俺は荒れた息を調節して、通信機の電源を入れる。

「パトラズ、あと…九分くらいか？」

『ご名答。正確にはあと九分二十二秒だけだな』

「屁理屈は無駄だ。…済まない、通信を切る。以上^{オーバー}」

そう告げて、俺は通信機の電源を切り、仕舞った。もう確認することもないから、邪魔なだけだった。

俺は右腰に納められていた日本刀を鞘から抜いた。

双手打の柄の柄巻きが手に程良く吸い付き、腕と同化するような心地よさを感じさせる。黒漆の鞘から見せた片刃の刀身は、細身ながらもか細さは微塵も感じさせない。極限まで鍛錬され、研磨され、使いこなされた乱刃は何者にも屈しない強さを醸し出す。一切無駄のない白い鋼は喜んでオルパニルの力になろうと言わんばかりに強く美しく輝いている。

現代刀、最上大業物、打刀『漣哭^{なみなき}』。

共に生きてきた絆。

共に力を貸し合った信頼。

共に母国の魂を伝えてきた戦友。

オルパニルにとって『漣哭』は何よりも信じられるものだった。

それは、長年使用しているからだとか、数々の戦歴を刻んできた業物だからだとか、感情や過去による理由ではない。

酷く曖昧で酷く無茶苦茶だが、きちんとした実用的な理由があるからだ。

『阻格者』に組み込まれた一自立起動回路（AI）は、敵が急に動かなくなったことに気付いた。

熱・音感知機によって生物を正確に区別し、大きさ・場所などの情報から敵を把握し、識別する。

伸長一六四センチ、体温三六・七度、直立二足歩行型、心拍間隔

一〇〇分の六〇秒：分析の結果、相手は“人間”。

戦術回路は、敵に自由な時間を与えることは危険を招くと判断した。戦術基礎プログラムには、人間は優先的に排除せよと命令されている。ただでさえ人間は知能指数が高い生物の中で殺人兵器を扱う種類なのだ。野放しにすると何をしてくるか予測がたい。まだ行動を起こしていないうちに対処法を取ることを指示した。

指揮系統からの指令が下されると、最上部の尖塔部分が開き始めた。

覗いたのは、表面の砲台よりも何回りも巨大な、主砲。表面と同じくらい白銀に光る砲身は輝かしくも邪な威光を放っている。

砲身は、ゆつくりと標的がいるであろう場所に照準を合わせた。

砂埃がぱらぱらと降りかかり始めた地下室の壁際に、俺は身を潜めていた。

壁に寄り掛かって、考え事をしている。

題名は『阻格者』の破壊方法だ。

(どう攻めれば破壊できる……?)

まず考慮しなければならないのは、奴の構造だ。情報は頭の中にあっても、盗難されてから長い年月が経っている。当てには出来なかった。

表面はチタン合金。硬度を上げつつ、長期的に地中に埋没しておくには、錆びにくいチタンを含有させ、他の金属と融合させて硬度を上げるのが得策だろう。そう配慮すれば、『漣哭』の刃も通らないかもしれないし、通っても決定的なダメージは望めそうにない。

また、奴の兵器も警戒しなくてはならない。重層弾を使用した砲台が、一面にびっしりと顔を出していた。ならば、全四面が同じ数の砲台を持つと推測出来る。それらが一斉に砲撃してくるのだから堪ったものではない。

形状からして、長所と短所が導き出せる。

長所は三六〇度^{オールレンジ}全方向射撃が可能であるということだ。砲身はあ
る程度（真下や真横以外）なら調整が利くのだろっから、地中に潜
伏でもしない限り接近することも儘にならない。

短所は、敵一体に対して最高二面でしか相手に出来ないというこ
とだ。例えば底辺の頂点に位置した場合、その反対側の面は死角に
なつて砲撃できない。

頓に強力なレーザー砲を使用していたようだが、幾つか疑問があ
る。普通、レーザー砲は一発撃つだけでも大量のエネルギーが必要
になる。人間が扱う軽量・重量タイプの両方とも弾倉に充電バッテ
リーが兼備されているため、弾を装填すると同時に充電されるのだ。
奴の場合は、明らかに装填も充電もしている素振りはなく、内蔵含
蓄エネルギー量を見殺したように乱射してくる。奴の中身に充電や
補充をする場所は…ありそうだが、殆どを配給ケーブルや冷却装置
などの銃器の機関で満たされていると仮定すると（そうでもなければ
あれだけ馬鹿みたく一斉に連射することに説明がつかない。あれ
だけ撃つても故障する気配が全くと言っていいほどない）、設置す
る隙間などあるとは思えない。

なら、どう説明する？

無から有は生み出せない。必ず何処かから引っ張り出すしかない。
考えられるのは、二つ。

一つは、奴の中にエネルギー供給装置があるということ。

もう一つは、電線か人工衛星のいずれかからエネルギーを供給さ
れているということ。

遙か昔に居た、ある書道家が言った。“大事なものは表に出ない
”と。その言葉が本当なら、見えないところに必ず仕掛けがある筈。
そこを断てば、撃破できる筈だ。

（…ん？）

今気付いたが、外がやけに静かになった気がする。ここに逃げ込
んでから二分以上は経っているだろっが、標的がいなくなつて大人
しくしているのだろっか。

俺は『漣哭』の柄を両手で握り、瓦礫の山を登って、僅かに解放された亀裂からそつと外界を垣間見た。

視線は位置関係により、上から下へと動いていく。

最初に見えたのは、光。

「……？」

次に見えたのは、砲身。

「なっ？」

オルパニルが驚愕の声を洩らした瞬間、光が膨れ上がった。

『阻格者』の頂点に換装されていた主砲——集束粒子砲が、オルパニルのいる地下室を吹き飛ばそうとしていた。いや、今まさにしている。

巨大なエネルギー状の砲弾がオルパニルに向かっていった。

威力は半端なものではない筈だ。なら、たとえ回避できたとしても、その後の爆炎に襲われる。生存率は無いに等しい。

轟音を響かせ、放電を進らせながら、迫ってくる。

両手を叩く猶予は、無い。

高速で発射された悪の鉄槌が、着弾した。

莫大なエネルギーが解放され、灼熱の炎が巻き上がった。炎がドーム状に燃え広がり、圧力に耐えきれなくなった地面が捲れあがり、砂塵を舞い上がらせる。

何ジュールもの熱が拡散する。

空が、大地が、夜が、赤く染められた。

狂乱者と阻格者 5（後書き）

マツハ三十四：

時速で表すと1万1560？毎時。

最高速度で飛べば、たった1秒で3？も進む。

東京→大阪間をカップラーメンが出来上がる前に移動できるとにかく超速い。

狂乱者と阻格者 6

『^{チェッカー}阻格者』の温度センサーからもオルパニルの反応が消滅していた。

炎がそれを証明するように、燃えていた。

この光景の中を生き延びられる生物など居ない。

だが、大火の広がり続ける表面積状に、霞む影が見えた。動く物などある筈がない状況で、確かに動く影があった。

その影は『阻格者』の、大火を隔てて反対側へ移動し、炎の外へと姿を現した。

俺はシールドで全身を保護しながら、燃え盛る火炎から奪取した。

（このっ…手加減無しか！）

ついでに悪態も吐いた。

俺が無事だったのは何故か。確かに、手を叩く暇など無かった。

答えは、俺が握る、日本刀。

通常、今の自分が能力を発揮するには両手を叩かなくてはならない。それは何の理論もない、いわば集中の為の自己暗示という理由だった。俺も自ら“^{まじな}呪い”と分類している。

証明はそれと同様である。ある行動や態勢を条件に、能力を発揮する。俺は二つの条件を決意している。

一つに、両手を平同士で叩くこと。

一つに、両手が刀を握っていること。

どちらかの条件が満たされた場合、自信に暗示をかけて集中しているのだ。

（握っていなかったら死んでいた…）

あの兵器は、本来は大型の標的か大量の標的に対して使用される兵器だ。俺のような小型の標的一つに対して向ける戦術は取らないはずだった。どうやら兵器の限界制御だけでなく戦術マトリックス

まで改変されているようだ。

最も離れた方へ態々（わざわざ）炎から脱出したのは、追撃を免れる為だった。『阻格者』に搭載されている感知センサーは恐らく、音、温度、二酸化炭素、水蒸気の関係だと推測する。この程度揃ってあれば動物が駆動する無機物を判別できる。レーダーは正確な大きさや種別が判別できず、相手にステルス機能があると無意味化するので、需要度は下がりがつつある。

故に、高熱と轟音と酸化が過剰に起きている大火の陰に隠れていればセンサーに感知されないと予想したのだ。

だが『阻格者』は推測を超えた。

感知センサーの中に、音波レーダーが搭載されていた。それは、正確にオルパニルの位置を表示させていた。誤差を修正し、地球の自転による移動も計算に入れて、砲撃した。

（早く撃破しないとミサイルが来てし）

「うあつ！」

レーザー弾がシールドに着弾した。

（これでも駄目か）

何もかもが突然である。心臓に悪い。

俺は仕方なく火の陰から離れ、人間の肉眼では見失ってしまう程の速度で疾走し始めた。

行動を起こした事が誘発し、『阻格者』が自分に砲撃を始めた。着弾に因ってまた地面が抉られる結果になるが、もう迷惑だの何だのと配慮している余裕は無い（まず、こんなのが居て砲弾を乱発している方が迷惑だ）。

この辺り一帯が何も無い平野である地理が幸いした。今は『阻格者』の周囲を衛星のように旋回している。これならレーザーは命中しないし、距離も変わらない。半径を縮めていけばかなり接近も出来る。

（しかし、この戦況では防戦一方だ。そろそろ仕掛けなければ）
時間も迫っている。大人しくやられているばかりではいけない。

俺は先ず、『阻格者』に向かって炎弾を砲撃してみた。勿論手加減無しだ。高速で跳んだ炎は外装に着弾し、その面を焼き焦がす…筈なのだが、炎が収まってから観察すると、外殻には多少の焦熱の痕跡はあるものの、有効なダメージを与えたように見えなかった。

時間を惜しむように（というか惜しんでいる）立て続けに、水圧弾、空圧弾、雷撃弾を放ったが、結果は同様だった。途中で水の電気分解によって発生した水素と酸素が引火して爆発を起こしたが、今までの衝撃と比較すれば赤子のような威力だった。空中に巨大な溶岩を具象化して飛ばしてみるが、着弾するまでの間に弾雨を受け続けて質量を減らされ、結果的には分散して有効なダメージにならなかった。『漣哭』で直接斬りつけたい気分だが、接近できないので断念する。

どうやら単純な攻撃で破壊するのは無理のように思えた。

突破口を見つけようと必死になっている間にも、時間は刻々と過ぎてゆく。

（エネルギー配給は兎も角、先ず奴を地面から引き離す）

無限に思えるエネルギーの謎はこの際無視し、次の戦略に移る準備を始めた。

俺は誓約通りに刀を両手で握り、刀身を円の内側に水平に構えた。能力を発揮し、自分の思念を具現化する。刀身が白い光に包まれると、刀身が通った空気に純白の光が残留した。それは砲弾が通過しても砂塵に煽られても消えず、輝きを失わずに在り続けている。

数十秒後、俺は漸く一周し終えた。

光は今、『阻格者』を取り囲んでいた。

俺は走り続けながら、

「——捕らえろ」

刀を片手で真横に薙いだ。

すると、光の輪が半径を縮め始めた。その速度はあまりにも速い。光の輪は着実に半径を縮め、中心に向かっていく。

光が『阻格者』と衝突した。外殻に接触した光は照明したり熱し

たりするなどの本来の働きをせず、寧ろ生みの親から伝承したかのように、一種の刃と化していた。

光はその速度を落とすことなく、外殻を削り、電線・配線を切断し、砲弾も何発か粗大塵化した。

やがて光は『阻格者』の内部で一点に集束し、その役目を終えて、消滅した。

暫く様子を見ていたが、最下層の砲台列以外は通常通り機能している。

このまま放って様子を見たいが、そんな悠長な事を言っていられない。

体内時計が正確なら、あと五十八秒だ。

一朝一夕だから、迷うことも躊躇う事も余裕が無い。

俺は円の軌道から外れて、今度は真つ直ぐ『阻格者』へ向かった。地上からではなく、跳んで空中からだ。

俺に掛かる万有引力の作用を改竄し、重力の影響を極端まで減少させた。重力の影響が少なくなれば、常人程度の脚力でも高く跳躍できる。

砲弾が有効な範囲では接近すら儘にならない。先程の戦法なら可能かもしれないが、もう時間がない。

砲撃されない、砲弾が届かない範囲は、

（此処しか思い当たらない）

真上。

砲身はかなり広範囲に首が回っていたが、構造から推測するに、直角からそれ以上の鈍角までは曲がらないと予想した。ただでさえ大がかりな兵器をあそこまで所狭しと搭載しては、本来なら左右九十度まで曲がれば優秀なのだ。真上の内の、砲身が搭載されていない頂上の真上なら一斉掃射は受けない筈なのだ。

近代兵器としてあるまじき欠陥のように思えるが、重火器を搭載する迎撃特化の兵器はこのような欠点が付属している事が多い。

何故ならば、第一に稼働域が広すぎると自身を誤射して自滅する

可能性があるからだ。誤射しないような設計をするよりも、稼働域そのものを誤射しない範囲までしか設計しないでおけば、開発上の手間が省けるという理由もある。

第二に、真上から接近する物体という存在が理論上考えられないからだ。地球は自転している為、飛行物体が対象物に接近する場合、たとえ大陸間弾道弾であつても地面から垂直の軌道に沿って接近する事は不可能である。

これらの理由から、真上の攻撃手段が配備されていなくても事足りるのである。

その欠陥を利用として大きく跳躍した俺は風を利用して位置を調節し、予定通り『阻格者』の真上に到着した。

だが、まだ問題は残っている。

真下に健在している、銀色に鈍く光る、主砲が見えた。

それは、既に真上を向いていた。俊敏な対応に感心する。

主砲に狙われる事は予想できていた。ここに来れば、対抗できる兵器はそれだけになる。慌てる必要は無用が、緊張が高まる。

一発そのものの威力は恐ろしいが、連射が利かない。一発さえ防げれば、こちらの反撃……いや、攻撃だ。

砲身の先端にエネルギーが蓄積されていく。粒子が荷電され、限りなく一点に集束され、地球から見た太陽よりも輝きを誇示する。

到来する瞬間が迫る。柄を握る手に力が籠もった。

(……………来い！)

充分に蓄積されたエネルギーが、

強烈に迸った光と共に、

自分に向けて発射された。

(我が島の魂は……)

俺は刀を振り被った。

(何にも屈しはしない！)

エネルギーの塊に、オルパニルは渾身の力を込めて、輝く刃を振り下ろす。

粒子が刀身と衝突した。

抵抗が伝わり、刀が弾かれそうになる。

兵器技術の結晶対人力。力負けしても可笑しくない。いや、普通は負ける。

完全に力の差が歴然としているが、俺は諦めない。

この任務が失敗したら、この街が廃墟に変わる。数えるのも苦痛になる程の人の命が奪われる。

あの子の命も…。

そんな事態は絶対に避けなければならない。させる訳にはいかない。

だから、負ける訳にはいかない。

「うおおおおおおおおおおおおおおお！！」

オルパニルの思念が『漣哭』なみなきに伝播する。

思いが、力に変わる。

刀身が輝き、粒子の塊に刃が食い込む。そのまま刃が通って、塊を二つに分断される。

大気に光の筋が通過し、消え去った。

残ったのは、人間が一人。重力に従って降下している。

宵闇に身を潜ませつつも、月光によって映える剣を一振構えたその姿は、勝利を導く者のようだった。

俺は刀身を縦に振り下ろして両断し、続いて台座との連結部に横一閃を繰り出した。そして機能機関と固定性を失った砲身を蹴り飛ばした。

もう邪魔される事は無い。刀を逆手に構え、真下に突き刺すように振り下ろす。

切っ先が『阻格者』に触れると、俺が発動した能力が発現した。『阻格者』の全身が、その重量すら量れそうもない巨大な物体が、浮いた。地面から離れた『阻格者』は、まるで重力など作用していないように、そのまま加速しつつ高度を高めてゆく。

いや、表現し誤ったか。

『阻格者』は確かに重力の影響を受けているのだ。ただ、それがどう作用しているかが異なっている。

俺が『阻格者』に対して発動した能力の内容は“重力の作用を真逆にする”という修正だった。つまり、重力に引かれれば引かれるほど重力源から離されていくのだ。

俺は自分の足の裏に粘着作用を施し、足場を固定した。

残り三十秒足らず。そろそろ目標を目視できると思い、遙か遠くの風景を眺めた。

予想通り、見えた。

今が夜のため、常人の肉眼では確認できないだろうが、自分の能力を駆使すれば視認できる。

それは、暗くも星たちで輝く夜空を割くような不気味な音を立てながら、確実に着実にこちらへ飛来している。

トマホークミサイル『レイジャー狂乱者』が迫っていた。

音よりも遙かに速く、レーザーにも映らず、噴射熱も出さない為か、『阻格者』は反応する気配が無い。

このままなら『阻格者』の落下速度も充分に加速し、『狂乱者』が直撃する可能性は下がるだろうが、樂觀でできなかった。トマホークを始めとした巡航ミサイルは総じて高い誘導性能を常備している。縦しんば終端速度に近い速度で空に落下していようと、着弾しない保証は無い。

やれる下積みはやっておいた方がよい。慎重は怠惰よりも勝る。自動車でも“だろっ”運転は危険である。そう自分に言い聞かせて、俺は予防策を施す事にした。

先程と同じように、刀を『阻格者』に突き刺し、能力を使用した。落下速度が急激に上がり、高度を上げていく。また、もう一つの効果も与えた。

続いて、夜空に視線を移し、『狂乱者』の位置を確認し、その方に刀の切っ先を向ける。切っ先から光の軌道のような黄色い筋が光速で伸びていった。先端と自分とが可能な限り離れ、且つ可能な

限り『狂乱者』に接近した間隔を見計らって、

「――弾ける」

更に能力を追加した。すると、先端から強烈な電流が迸り、一瞬だけ夜空に蜘蛛の巣の如き亀裂が走った。

空気中に放たれた不安定な電流は最も近い物質に誘導される。雷が発生した時に、高所から降りたり長身の物体から離れたりするよう勧告されているのはこの理由だ。

この場合、最も近くにあるのは、『狂乱者』だった。

電流は自然学の法則に従順し、直撃した。だが、流石は俺を困らせる問題児、外部からの電撃などものともしないようだ。

その結果に俺は喫驚することはない。何故なら、最初から電撃で攻撃しようとは思っていないからだ。電撃を当てたのは、帯電させることによって手段を確実に倍加させるためだった。

準備は揃った。

『狂乱者』も平凡的な視力で視認できる距離にある。

目測で、あと約六キロメートル。

最後の確認のつもりで、刀の柄を強く握ってその存在を再確認する。それは両手に従ってくれていた。

五キロ……四キロ……三キロ……

早まる鼓動と呼吸を抑制するため、長い息をする。

二キロ……一キロ！

俺は備えておいた装置を発動した。

二つそれぞれに帯電させた電流によって発生させた“磁力”のプラス同士が、互いを強力に引き離させた。

ゼロ。

『狂乱者』は爆音と衝撃波を伴って、擦れ違った。

爆風と爆音という置き土産を残したが、直撃はしなかった。

通過した『狂乱者』はプログラムされたことを律儀に従い、大きく軌道を変えていた。また着弾するためにこっちに向かってくるだろう。

だが磁力は消えていない。それは自分が望む限り存続する。つまり、しばらくは殉職する心配はしなくて済みそうだった。

狂乱者と阻格者 7

（前ページより）

巨大なピラミッドが空に向かって急上昇している頃。

数キロ離れた場所で、その異常な光景を心配そうに眺めている少女がいた。

警報はいまだに鳴り止まない。ついさっき、もの凄い轟音を響かせながら頭上を高速で通過していった物があつたが、通過しても近くにあれば鳴りやむことはないらしい。人々に恐怖感を与える効果も持つその警報も、今の少女の耳には差ほど意味がなかった。

「……」

どこにでもいるような少女ソミアは、自分が眺めている先で何が起きているのかを知る、数少ない人間だった。

ほんの数時間前までは凡庸な十四歳の女子高校生であつたはずなのに、今までの平和な光景が嘘であるような事実や真実と出会つた。変わったのか、と訊かれてもノーと返答するだろうが、以前の見解や視点が変化しているのは確かだった。

「……。オルパニル……」

そのきっかけを作ってくれたのが、オルパニルという名の人物。無愛想で、無表情で、話し方が少し堅いけど、自分の話を真剣に聞いてくれて、本当に小さなところだけれど気を遣ってくれて、危機を見つけたら真っ先に行動してくれる。

彼には、何度言っても足りないくらい感謝している。今の事件だって、必ず解決してくれると信じている。

別れる前に、最後に忠告された言葉は、自分を信じるよう含ませた言葉だっただんだと思う。

心配しないで。

私はあなたを信じているから。

必ず帰ってきてくれると信じているから。

信じて、ずっと待っているから。

だから…

「がんばって…」

そして、生きて帰ってきて。

私は、何もかも上手くいくと、誰よりも強い希望を抱いていた。

だから、背後に人間が近づいていることに気づけなかった。

その黒い服を着た人間は、そうつと近づき、音も立てずに懷から細長い物を取り出した。それは長さが十五センチほどの金属製の物で、ボールペンのように見える。

その先端を素早くソミアの首筋に突いた。

「っ！？」

指先が触れるくらいの弱い圧力が突然ふれて私は体を強張らせたが、それも一瞬だけだった。

（ん…なんか、目が重い…力が、入、ら、な…）

突然注入された睡眠剤によって、すぐに意識が暗転した。

倒れた拍子に、羽織っていた彼のジャケットが滑り落ちた。

黒服は小型の麻酔注射器を懷に仕舞い、目前の足下に倒れて眠っているソミアを抱え上げた。鍛えているらしく、その動作は軽々しくて無駄がない。

黒服は少女を運び、ある裏道に停車してあった車まで連れて行った。ソミアを後部座席に横たわらせる態勢で乗せ、自分は助手席に乗る。

あらかじめ運転席に乗っていたもう一人の黒服がそれを確認し、車を発車させた。

「随分とあっさりだったな。抵抗されなかったのか」

「ああ、傍から見れば、願いをかける修道女だな。警戒心の欠片もない」

「そりゃ運が良かったな。…しっかし、何なんだろうな、あの殺人鬼は」

「だよなあ。破壊神が少女一人に構うもんかな。…全く、何を考えてやがるんだか」

これで十四回目か。

『レイジャー狂乱者』が通過する時に間近で唸る爆音にも慣れてきた。

速度はとくに終端速度まで達していて、頂上で直立しているには空気抵抗が辛くなってきた。そこは能力でシールドに効果を添加できるから良い。

大変なのは高度だ。現在約一万二千メートル付近。とくに圏界面に達している。酸素濃度と気温がかなり低いので、今では境遇的と環境的に苦悩している。身を乗り出して下界を眺めると、雲の平原の隙間から、やや東側に先程までいた土地が見えた。地球は時速一六六〇キロメートルほどで自転しているので、地面から離れていると地上との距離が生じてしまうのだ。

役割以外で高々度ここへ来るのも久し振りだった。

『阻格者』が上昇し始めてから展開していた、空気抵抗と温度の対策にもしていたシールドに、オルパニルは紫外線防護作用を添加していた。もうオゾン層に到着している高度なのだ。地上付近ならオゾン層の御陰で紫外線による病気は最低限抑えられているが、その上では完全に直射する。浴び続ければ皮膚癌になる可能性も生まれる。発症するのは出来る限り避けなければならない。

また、自分の周囲の空気のみ、強制的に高温に加熱させていた。チエツカー

『チエツカー阻格者』には超強力な磁力を発生させている。そのため、間近に接近している自分もその影響を受け、血液中の鉄分が異常な動きを見せ、本来の血行を妨げることになる。電磁気は高温で熱するとその磁気が狂い、結果として磁力を失う。従って、俺は最低限の範囲

である自分の周囲の空間だけ、磁力を無効化している。

自分の身は兎も角、苦悩する部分はまだ有る。

自分の身は幾らでも防御できるから良いとして、『狂乱者』と『阻格者』はどう処理すれば最善なのか。

熱圏付近まで上昇したら、どうにかしてこいつらを同時に破壊するか。

または、このまま上昇し続けて大気圏外にまで飛ばし、方向転換できなくなった双方を宇宙空間へと追放するか。

考えれば幾つでも発想が浮かびそうだが、多分どれも似たような案になるだろう。『狂乱者』も『阻格者』も、破壊した際の破片が地上に拡散してしまうため、成層圏内で破壊するのを避けるべきであることは共通している。

無難なのは、後者だ。呼吸なら一分程止めれば問題無い。一時的に宇宙空間に出る為、紫外線や宇宙線、気温などに対して生命維持対策を施しておく必要があるだろう。また、帰還する時には大気圏を突入する形になる。摩擦熱が心配だ。日焼け止めが欲しい。

そこまで計画していた俺は、通信機の電源を切っていた事を思い出し、電源を入れた。

すると直ぐに接続された。

「何だ？」

応答するが、相手は無言だった。

「……？ おい、応答しろ」

「“何だ”じゃねえ！！」

応答した直後に、先程と同じ相手から罵倒された。

『いきなり通信切りやがって！ お前えは歴史的に見ても勝手過ぎんだよ！ こっちは様子見るために衛星に不法侵入するほど心配したんだかな！』

「……それは、悪かった。だが、共犯になるつもりは無い」

『こんなのバレなきゃいいんだよ、バレなきゃ』

監視していたからには、地下室から現在までに何があって何を

して何がどうなったのかは承知済みなのだろう。

『それよりよ、お前え今どこにいった？ まさか、北大西洋とか言うなよ？』

「半分のみ正解だ。高度が違う」

『阻格者』は真上に進んでいるため、自転の影響を受けず、現在は海の上となっている。

『…問題児どもを引き連れてぶっ飛んでんのか？』

「満点だ。これからこいつらを大気圏外へ捨てに行く」

高度一万五千メートルに達した。気温は既に氷点下である。

「まあ、構わねえけどよ。どうせ今んとこ邪魔する物はいねえし。

いるとしたら対空ブラスター砲くらいだな。…けど、油断すんなよ？ 何度か言ってっけど」

「無論だ。これから安全圏まで上昇したら、高々度で『阻格者』を破壊し、『狂乱者』の軌道を修正して追放する予定だ」

『おう、わざわざ報告あんがとさん。…けどよ』

大人しく聞き流すと思っていた相手は、器具の雰囲気を含めながら突き詰めてきた。

『予定通りに行きやあ文句も無えが、少し考慮する範囲を広げたいたほうが良くなえか。ここまで手の込んだことをしやがる暇人野郎だ。目標が消滅した瞬間に、何か別の機能が作動する可能性もある。目先の物に照準を切り換えるかもしれねえし、照準の履歴を利用して街に戻るかもしれねえ。最寄りのステーションに向かって飛んでく可能性だって考えられるんだ。よりによつては、同時に破壊する必要があるかもしれねえ。軽率な行動は控えたほうがいいんじゃないか？』

「何時にも増して慎重か」

『仕方ねえだろうよ、こんな問題児突っ込ませるバカがいるんだから。予定通りに行かなかつたらどうするつもりだ？』

「臨機応変に破壊する」

『そう簡単にいきやあいいがな。『阻格者』なんか、製造されてか

ら半世紀くらい経ってるし、どこをどう弄くり回されてんのか検討もつかねえんだからよ」

「そうだとしたら、どこまでも徹底しているらしい。そんなに混乱させたいのか」

「だろうな。んでもって逃げ足は早えんだから、ムカツく野郎だよ」
「ああ……」

俺が同感したと同時に、足元から事務的な警報が聞こえてきた。

『異常事態発生、異常事態発生。残量エネルギーによって、自爆装置起動。…爆発まで、あと十秒』

「…は？」

思わず耳を疑った。

『十……九……』

足下から聞こえる無機質な音声は、刻々と数を数える。

「通信を切るっ」

『おい、また——』

『八……』

最悪だ。こいつ、自分から消滅しようとしている。こんな機能を追加しているとは予想外だった。

破壊する手間は省けそうだが、さっきの並べた憶測も無視できない。

本当に、同時に破壊するしかないようだ。

『七……』

もう迷っている場合ではない。最悪中の最善となる策を取らなくてはならない。

シールドには爆発に耐えられるほど防御力が無かったら心中するかもしれないが、危急存亡に構ってなどない。そして爆発の効果範囲を超えるため、少しでも高度を取らなくてはならない。

『六……』

俺は上空の中にいる筈の『狂乱者』を探した。

さっき十七…いや、十八回か？ ああもうどうでもいい、兎に角

何十回目かの擦れ違いを終えた筈だ。

炎と煙を消せても、音は消せない。それを頼りに探す。

『五……………四……………』

いた。今方向転換を終えて、真っ直ぐこっちへ向かってくることになるだ。

人生でそう何度もないくらい運が良かったと思う。

もし少しでも遅かったら、時間内に手の届く範囲まで戻ってこれなかっただろうから。

『三……………』

『狂乱者』が接近してくるが、少し瞬間が合致しなさそうだった。まだ距離があり、あと三秒で戻って来られそうもない。

同時に破壊しなければならぬから片方だけを残すわけにはいかない。更に、もう限界に近い。

無駄なことは一切切り捨てなければ、全ての命運に関わる。

『二……………』

俺は『漣哭』を鞘に収めた。

能力を繰り出す速度は低下するが、これから行おうとしている行動は複雑ではないので、両手を自由にする状態が出来そうだった。

両手を叩き、用意した。

『一……………』

素早く両手を足場、もとい『阻格者』に押しつけ、能力を使用した。

今迄プラスだった磁力をマイナスに変更する。

磁力は極が同じだと、反発しあって離れてしまう。だがプラスとマイナスのように異なる場合は、引き寄せ合う。

俺の狙い通り、『狂乱者』は磁力に引かれて速度を増し、更に引き寄せられて真っ直ぐ『阻格者』に向かっていく。

『ゼ……………』

口、と数え終わる寸前に、『狂乱者』が『阻格者』に着弾した。

二十二時三十一分、高度二万二〇八四メートル。

『狂乱者』は、目標の『阻格者』を破壊した。

街の警報が鳴り止んだ。

それはミサイルが消滅したたとと符合する証拠で、人々は混乱することをやめた。

その代わり、街の人間は奇妙なものを見上げていた。

雲の隙間から見える空の高い場所に、一点の光が見えた。その光は直径を膨張し続け、大きくなっていく。目を凝らすと、光の中に赤い球体がちらちらと見える。

光と球体は止まることなく膨張し、次第にその正体について目を疑えるほどになり、邪魔していた雲がそれを避けるように掻き消えて、ついに全貌が確認できた。

それは、炎。

『狂乱者』の水素爆弾と『阻格者』の自爆原料であるTNT爆弾が重なり、生み出された強烈な爆炎。

炎は拡大し続け、まばゆい光を発光していた。それは一見、夜の星空に出現した太陽にも思える。

だが、その太陽は悪質だった。

推定範囲は二十キロメートル。実際に爆発したのはそれよりもっと高い場所だ。推定通りなら、炎は地上にまで届かないはずである。しかし、炎以外は範囲を軽々と超えた。

空を眺める人々がいる地上におぞましいほどの低い音が轟き、空の火が無害でないことを人々に教えた。

ある者は動揺し、ある者は泣き喚く。

不可解な状況に晒されて混乱し始めた街に、第二波が訪れた。炎から生まれた熱風が街を煽り、高温地帯へと変える。温度は更に上昇し、ほとんどの人に皮膚が赤くなる火傷の症状が現れた。路上で

販売していたアイスクリームは瞬く間に溶け落ち、外壁に貼られていたポスターが燃え上がった。

正しく理解できた者など数えるほどしかないだろう。正しく理解できても、状況を改善することには役立たない。ほとんどの人間が、何がどうなっているのかさえもまともに考えられなかった。

事實はなおも続き、最後に祈る時間さえも与えずに、非情の第三派を振り下ろそうとしている。

爆発によって生まれた衝撃波が町全体に降りかかった。庇の下にて片手で顔を扇いでいる者、火傷に悲鳴を上げる者、車の中で冷房を効かしてくつろいでいる者、路上にいる全ての人間が、いきなり吹き飛んだ。突然で圧倒的な力が、無慈悲で平等に襲った。人は吹き飛ばされ、車は吹き飛ばされ、街灯や建物の外壁に叩きつけられる。建物のガラスや至る所の電球は一枚残らず砕け散る。建物は地震が起きたように揺らされる。地面に固定されている樹木やビルや街灯は同じ方向に傾く。地面に罅が入る。敷かれたコンクリートは抉られ、引っ剥がされる。

平和だったはずの街は、一瞬で地獄絵図と化した。

真実の代言人 1

第四章 真実の代言人

目を開けて最初に目に入っただのは、赤い絨毯だった。

体の片側だけに圧力を感じていて、景色もいつもと違う。どうやら私は横たわっているみたいだ。変に柔らかい感触が、体の下敷きになっている腕から伝わってくる。なんだろう？あ、ソファか。そこに横になっているんだとようやくわかった。

手首や足首に妙な圧迫感を感じるので見ると、ブレスレットのような金属製の輪が填められていた。紛失した携帯端末じゃなくて、見たこともない物だ。

一瞬流れが読めず、ソミアは体を起こして、今いる場所を見回した。

そこは白い壁で囲まれた空間で、左奥には木製の扉がある。何かか誰かの部屋だろうか。最初に見えた絨毯は、部屋の隅々にまで敷かれている。詳しくは知らないけど、高度な模様や足で踏んだ感触からして高級な種類だと思う。部屋の隅には大きな観葉植物が鎮座し、壁には（たぶん）有名な画家が描いた絵画が飾られている。

様子見を続けようと正面を向こうとしたら、

「気がついたかい？」

丁度その方向から声をかけられた。

少し前に同じような立場から同じような問いをかけられた記憶が甦り、少し混乱した。同じ人に問いかけられたのかと思って、声のしたほうを見ると、声の主は一人の男からだった。

オールバックに整え、碧眼で黒髪の白人。黒いスーツで身を包んでいる。重厚な木製の執務机の前の椅子に座って、何か作業をしていたようだ。机上にはいくつものディスプレイが浮かび、様々な情

報をリアルタイムで表示している。

執務机の適度に離れた両脇には黒いスーツを着た男が一人ずつ直立している。

男が立ち上がり、私のほうへ歩み寄ってきた。

男は長身痩躯で、スーツの上からでもよく分かる体型だった。四十歳前後だろう、顔には年相応の彫りと皺と日焼けが見える。だが適度に鍛えられているようでもあり、同年代の人と比べて動作に無駄がなかった。

男は私の傍まで来ると、再び話しかけてきた。

「大丈夫かい？ どこか痛いところは？」

男は馴れ馴れしくて劣る口調で言った。普通なら相手に警戒心を解き安心感を与えるだろうが、私にとっては逆に不気味だった。

怯えてしまい、固まっていると、

「おっと、いきなりこれはないか。初対面だからね」

男が私の警戒を察して、自分を明かした。

「私はコルド・キンベスター。この極秘警察本部を統括している者だよ」

そう名乗った男——コルドは、笑顔で丁寧に身分を説明した。

一見人柄が良さそうに思わせる笑顔だったが、心のどこかで怪訝に思う自分がいた。友好的な態度に対して失礼なような気がするが、今は自己嫌悪している余裕がない。初対面なら尚更だ。

警戒しつつも、自分も名乗った。最低限の礼儀は守ったつもりだ。「体は大丈夫かい？ ずっと眠っていたから心配していたんだが」

どうやら眠っていたらしい。最後に覚えている限りでは町中で急に眠くなったと思うのだが、まずは確認しておくことがある。

「私、どれくらい寝ていたんですか？」

私の質問にコルドは答えた。

「だいたい丸一日だね。今はもう夜だよ」

ま、丸一日……？

私は、一体どうしてしまったのか。そんなに寝坊するような不規

則な生活は送っていなかったはずなのだけれど。

「どうやら、君や私が思っているよりも、君への負担は大きかったようだね」

コルドが不思議な分析をして、自分だけで納得していた。

私の頭の中はすでに疑問でいっぱいだった。すぐにでも確認しなければ不安で仕方なかった。

おっかなびつくりだけど、話を切り出した。

「あの…私、どうしてこんな所に…？」

当然の疑問だった。一番新しい記憶を辿れば、商店街の路上にいたはずなのである。その後、何かが首に触れたと思ったら、いつの間にか眠ってしまい、気がついたらここにいたのだ。

コルドはそれを聞いて、不思議そうに聞き返した。

「どうしてって、君を保護するためだよ。救助といっても齟齬はないな」

…な、何を言っているんだろう、この人。

私は危険なことに晒されてなんかいなかった。一度放火魔に拉致されそうになったことはあったけど、それからはずっと難もなかった。

救助されるような特別な立場の人間でもないし、やっぱり勘違いじゃないかな。

私は勘違いのまま進まないように、すぐに誤解を解こうとした。

「あの、私、そんな危険なことに巻き込まれた覚えがないのですが…。人違いじゃないでしょうか…」

訂正を求めた私の返事に、コルドは意外な返事を聞いて何度かまばたきをした。

「君、憶えていないのか？ …まあ、憶えていないほうがいいだろうね。嫌な出来事だっただろうから」

「？」

奇妙だと思った。確かに三人の男に拉致されそうになったが、その件は“あの人”が助けてくれた。その後は、何も危険なことはな

かった。というより嬉しいかったと思う。なのに、どこに嫌な出来事があったのだろう。それに、”何”から私を保護する必要があったのだろう。

「あの… どのような意味か、教えていただだけませんか？」

コルドに丁寧な口調で訊いた。

「君が望むのなら教えよう。——君は、ある凶悪な殺人鬼に襲われそうになったんだよ」

私は素直に飲み込むことができなかった。意味が理解できなかったのである。

コルドは必要性を感じたのか、それに関して説明を始めた。

「君は二十六時間ほど前に、一人の“少年”に遭遇した。見た目はどこにでもいる少年なんだが、実は“そいつ”は大罪を積み重ねた犯罪者だったんだ。強盗、麻薬の密売、脅迫、爆破テロ、殺人…あらゆる犯罪を繰り返していた。“奴”は最初に若い女の子を標的に、親しげに話しかけたり、人がいいような行動で善良な印象を与えるんだ。女の子は次第に警戒心をなくしていき、遂には味方の側に取り込まれてしまう。だから、いくらこちらが犯罪者だと言っても名前を一致させても、そんなはずないと“奴”を庇護するようになる。だから、せつかく追い詰めても穏便な手段が使えなかったんだよ。…そんな危険な奴に、君は狙われていたってわけさ」

一瞬、話がわからなくなった。コルドはおそらく、“あの人”のことに對して“奴”と代名詞を使用している。けれど、“あの人”が犯罪者で、自分を味方に取り込もうとしていたなんて話は信じられなかった。

「我々は長年“奴”を追っていてね、発見しては可能な限り尾行して逮捕しようと構えているんだよ。単独の場合でも複数であってもすぐに気づかれて逃げられていたんだが、今回は違った。“奴”は君の相手をしていることで周囲への警戒を失念し、さらに君のおかげで我々に好機を与えてくれたんだ」

聞いているうちに気分が悪くなるようなものが胸の奥に広がり、

頭の中がごちゃごちゃになっっていく。

何だろう、すごく嫌な気持ちだ。

「奴」は君の希望を聞いて、ある店へと入っていった。それは我々にとって幸運に恵まれた好機だった。店というのは大抵出入り口が限られているから、一種の鳥籠でもあるんだよ。外の様子も確認しづらいしね。そのあと捕まえるのは簡単だ、店を出る時に捕まえればいい。我々はその作戦で、「奴」を追い詰めることに成功した」

コルドはそこで一端区切った。

「奴」を捕まえて連行しようとした時、「奴」は我々の隙をついて捜査官の手から逃れ、逃走した。その時に我々は君を保護したんだね。発見した時は気絶していたけれど。…「奴」は逃走中に、ビルとビルの間の路地に逃げ込んだ。追っていた捜査官も路地へ入った瞬間――」

コルドは胸の前で拳を握り、そして開いた。

「ドカンッ！だ。なんと「奴」は自爆しやがったんだ。自殺に対する躊躇がないなんて、私達クリスチャンには理解できない選択だったよ。焼け跡から死体は見つからなかったが、生きているかどうかは不明だ。だが、「奴」は不可能を可能にしようから、「奴」の死体を確認するまではあまり安心はできないな」

信じられない。

聞き終えた直後に思ったのはそれだった。

自分の記憶の中の「あの人」には、無事でいてほしいと願ったが、コルドの話が本当なら、訃報よりも悲しいことだった。

そして、自分の記憶と相違点が多すぎることに疑問を隠せなかった。

確かに、部分的には一致しているかもしれない。年齢的に若い自分と関わったこと、無愛想だったけれど親切だったこと、一緒に店で買い物をしたこと。それらは自分の記憶としても存在する事実だけれど、それだけだ。他の部分がまるで違う。

“あの人”が自分を騙していたとは思えなかった。いや、思いたく

なかった。

それに、コルドが話した内容の、最後の部分が気になる。

自分はアクセサリーショップに立ち寄った。だが、その後しばらくは“あの人”と一緒にいたはずだ。店から出てすぐに警察に捕まってもいないし、爆発も記憶にない。完全に矛盾しているのだ。

確かに“あの人”の印象に悪いものはなく、信用できる人物だとさえ思っていた。でなければ、わざわざ危険な男達に喧嘩を売ろうとは思わないだろう。

(…でも)

自分の強さに自信があることを自覚し、計算に入れた上で、助けにくれたのだろうか。

本当に、初めから騙すつもりで、助けてくれたのだろうか。

あの三人の男性達は、現場を演じるための共犯者だったら。

考えれば考えるほど疑念が湧いてきてしまう。今まで抱いた信頼が、疑心に変異していく。

着々と疑心暗鬼に駆られる自分が自分の中を占めていく中で、唯一対立する自分が、最後の抵抗であるかのように証言するため、記憶を話した。

「でもっ、その人は悪い人だとは思えません！ もし悪い人なんだったら…この街を救うために自分の危険を顧みずにミサイルを止めようとは思えないはずですよっ！」

詭弁に思われるかもしれないが、自分にとっては自信のあることだった。責任を取るという理由で自ら買い物を買って出たのに、それすらも後回しにしなければならぬ代物が迫っていたのだ。安易に済ませられるものではなかったのだろう。

初めに聞いた時は冗談かと思ったが、“あの人”は嘘をつくというような余計なことをしなそうだったし、何よりその事実を裏付けるようにあの直後緊急避難放送が流された。彼だけの情報だけならともかく、公表された情報を疑う理由はない。情報内容が偶然にも相互確認されたのだ。この記憶を否定することはできない。

「なるほどね…」

コルドは納得したように相槌を打った。
だが、それだけだった。

「君には、そういう記憶を植え付けられたんだね」

思考が止まった…ように思えた。それくらい頭の中が真っ白になっ
てしまったのだ。

コルドは構わず詳細を話し始めた。

「君が気絶していた、と話したのは覚えてるかい？ …そう、店
に出た直後だ。じゃあ、その気絶した原因はなんだったのか。それ
が答えさ」

次から訊く真実は、私の中にあつた信頼と呼べるものを、簡単に
崩した。

「“奴”には不思議な力があつてね、それは物を出したり動かした
りする、俗に言う超能力みたいなものだ。記憶の操作は、現代の医
学じゃ人工で可能になっているのは知っているね？

能の記憶中枢にしかるべき電気信号を与え、物事を覚えさせたり、
特定の記憶を思い出させないようにする。技術が一般化された今じ
や常識だよな。“奴”はそれを強制的かつ瞬間的に君の脳に施した
みたいなんだよ」

なんだろう、これ。

私は何を聞かされているんだろう。

「“奴”はもともと、秘密の遺伝子実験によって生み出された現代
科学の結晶なんだけど、“奴”はその能力の高尚さに気づいて脱走
し、好き勝手に能力を乱用しているんだ。公にされていないのは、
その実験を内密に済ませたいからなんだ。“奴”は我々から逃走す
る寸前に、君に記憶操作を施した。頭に手を触れるっていう、一瞬
の動作だったけれどね。理由は簡単、現在の君のような信用を作る
ためだ。その記憶操作によって生じた負荷によって、君は気絶した
んだよ。外部から無理矢理脳味噌の中を書き換えられるんだ。相当
つらかっただろうね」

私の詭弁は簡単に覆された。

それよりも、昨日の数時間が全て他人から作られたものだと思うと、悲しくて堪らなくなった。

本当はもつと他の事実から信頼できることを証明したかったが、“あの人”と関わった時間が少ないことも事実だった。

もう否定できる情報を持っていない。コルドの説明が真実であるんだと、認めた。認めてしまった。

「すみません…その、犯罪者の名前は…何と言うんですか？」
これこそ最後の反抗だった。

まだ名前を聞いていない。

“あの人”だと決まったわけじゃない。
もしかしたら他の人かもしれない。

“あの人”とは関係ないかもしれない。
本当に最後の希望だった。

私はまだ“奴”と呼んでいる名を確認しておきたかったのだ。
「名前かい？ “奴”の名は——」

コルドは要望通り、出し惜しみも秘密裏にもせず、その名を教えた。

「オルパニル・コランダム。本名じゃあないが、そう呼ばれている
忌み名だよ」

真実の代言人 2

（前ページより）

*

宵の口を過ぎた頃、ここでは一つの儀式が行われようとしていた。周囲を新緑で満たされた木々で囲まれた建物。一階建てだが天井は高く、屋根の一部が他より遙かに高く造られており、その屋根のすぐ下には空洞で、大きな鐘が吊されている。白い壁で建てられた建物は神聖さを醸し出している。

正面の門をくぐると、外からの月光が優しげに照らしていることに加え、淡い黄色の光で満たされた空間が広がる。その中は、左右に二列ずつ長椅子が並べられており、奥に行けば行くほど人が座っている。

最奥の、数段高くなった所には、三人の男女が立っている。

一人は純白のタキシードで身を包んだ新郎。ぎこちない様子だが、振る舞いから自信に満ちている。

一人は純白のウェディングドレスで身を包んだ新婦。恥ずかしげに俯きながらも、その目は輝かしい未来を導けるほどの光に満ちている。

最後の一人は、背中に神聖の象徴である十字架を背負い、そんな二人を重厚な木製の台からの向こうから柔らかな雰囲気で見守る牧師だ。白髪に白髭という、実年齢に比列した年老いた容貌だが、牧師のみが被る小さな帽子の下に浮かぶ目は、全ての人々に分け隔てなく幸福を望む様をしている。

ここは、マンチエスターで式を挙げるのに有名な、屈指の人気を誇るプロテスタントの教会だ。

今この場所は、二人の結婚式を祝っていた。

大抵の結婚式は昼間に行うが、二人は夜を選んだ。二人とも昼より夜のほうが好きだったからだ。太陽よりも控えめだが美しく光る月と、幾万もの星々に魅了されていた。

今夜はそんな二人を祝慶しようといわんばかりに、空は澄み切り、月も星も輝いていた。

ふたりの初々しい様子に微笑んだ牧師は、

「では式を始めましょう」

そう前置きして、儀式の祝詞を唱え始めた。

「私たちは神の御前に集まり、立会人の見守る中、この男女の神聖なる婚姻の儀式を執り行う。…この二人の結婚に意義のある者がいれば、この場で訴えるか、永遠に口を閉ざすこと」

牧師は祝詞を、滑らかに、時には厳しく、抑揚を付けて、紡いでいく。

「…マックス、」

牧師は新郎の名を呼んだ。

「貴方あなたはこの女を生涯の妻として神聖な結婚生活を共に送り、病める時も健康な時も、彼女を愛し慈しみ、尊敬し続けること、誘惑を退け、生きている限り彼女一人に心を捧げることを誓いますか？」

問われた新郎は、しかし迷うことなく真っ直ぐな目で、答えた。

「誓います」

牧師は頷き、今度はその隣の新婦に向いた。

「…エミリー、」

牧師は新婦の名を呼んだ。

「貴女あなたはこの男を生涯の夫として神聖な結婚生活を共に送り、病める時も健康な時も、彼を愛し慈しみ、尊敬し続けること、誘惑を退け、生きている限り彼一人に心を捧げることを誓いますか？」

問われた新婦は、しかし恐れることなく真っ直ぐな目で、答えた。

「誓います」

牧師は頷いた。

「では、指輪の交換と、誓いの口づけを」

牧師が言い終えると、新郎新婦二人は互いに向き合った。

先程新郎が取り出した箱を開けると、そこには一つの指輪が収まっていた。

金のリングに、繊細な技術から生み出された装飾にはめ込まれている、ダイヤモンド。光を浴びて輝くそれは、どんな闇をも寄せつけなくしてしまいそうな、強く美しい輝きを放っている。

新郎は指輪を手に取ると、空いているもう片方の手で新婦の左手を引き寄せた。

新婦はされるがままに従っている。だが一方的ではなく、自らも望んでいることに間違いはないのだ。

新郎はゆつくりと、優しい手つきで、新婦の左手の薬指に指輪を通した。

二人は互いに見つめ合う。これから愛を確かなものにするために、新郎が新婦の肩に手を載せた。そして、顔を近づけていく。

二人はこの日、男と女ではなく、夫と妻になる。目を瞑り、唇と唇が触れ合う、

寸前。

大きな破壊音が教会内に鳴り響いた。

その音源は、頭上の屋根からだった。何かが教会の屋根を貫通し、屋根の瓦礫と共に降ってきた。

その何かはやたらと高速で、目に見えたのも束の間、協会の床に激突した。落ちても勢いが止まらなかったのか、長椅子二脚を巻き込み、粉々の木片へと変えた。

幸い、後ろのほうの席だったので、瓦礫の落下や謎の物体に潰されるような被害を受けた人はいなかった。

結婚式は必然的に一時中断となった。まず、猫も杓子もその何かに釘付けになっており、式どころではなかった。

何かの周りにはもう野次馬と化した元立会人達が群がっており、

牧師はその隙間を縫って、何かを視認した。

正体は、なにやら大きな球体だった。直径は二メートル弱。表面は漆黒一色で、未確認物体の雰囲気が満載だった。球体はなぜか高熱を帯びており、一瞬隕石か何かかと誤認しそうだった。吸熱性が高い黒であるせいなのかは分からない。だが、あれだけの衝撃を受けたにもかかわらず、表面にはたいした外傷が見られない。

皆が皆じろじろと物珍しそうにその何かを観察していると、突然球体が碎けた。亀裂も入らずに割れていくそれは、漆黒の表面は細かい破片となり、しかしそれらはどれも下には落ちず、その大きさを小さくしながら空気中に消えていく。

漆黒の球体の代わりにそこに見えたのは、一人の少年だった。

全身を黒色の服装で纏った身形で、左の腰には一振の剣を提げている。黒髪から覗く双眸は固く閉じられている。おそらく気を失っているのだろう。

よく見れば、顔は砂埃で汚れ、服も至る所が傷んでしまっている。眠っているだけなのに、満身創痍の姿がやけに痛々しかった。

漆黒の球体から出てきた少年という特異な外見で、いつの間にか勝手な憶測が飛んでいた。屋根からこの結婚式を覗いていたら屋根が抜けて落ちてきたとか、人間大砲として少年が入った黒い砲弾が教会に被弾したとか、球体は実は卵でそこから生まれた少年は何かの新種生物だとか、ありそうでなさそうなことばかりの戯れ言だった。

見ているだけの人々より先に、牧師は少年の傍へ駆け寄った。

まず、首筋に手を当てた。……脈を感じた。心臓は動いている。

次に、自分の頬を少年の口元に近づけた。……
・弱い風を感じた。呼吸をしている。

大丈夫だ、何とか生きているようだ。

だが、この少年は一体何者なのだろうか。

牧師は憶測を並べる衝動を抑え、少年の肩を揺らした。気絶して

いるだけなら意識を戻せるはずだ。

「おい、君っ！ 大丈夫か！？」

揺らすと同時に声をかける。名前を呼べればいいのだが、分からない以上、二人称で呼びかけるしかない。

何度が揺らすと、「う…」と小さな呻き声が漏れた。

しばらく様子を見ていると、少年の目がわずかに開いた。

「気がついたかい？」

その声が聞こえた瞬間、少年の双眸がかつと見開き、瞬時に覚醒し、すぐに体を起こした。だが、

「ッ！」

聞こえない呻き声を上げ、少年は両腕で自分を抱くように蹲ってしまった。

「お、おい、どうしたんだね？」

声を掛けるがそれには答えず、少年は周囲を見回し始めた。現在地を確かめようとしているようだ。

「ここは？」

少年は英語で問いかけてきた。言葉は通じるらしい。

「ここは、教会だけど？」

「どこのだ？」

少年は抑揚のない声で訊き返してきた。

「どこって、マンチエスターのだよ」

それ以外にあるのだろうか。自分の落下地点すら分からなくなるなんて、何があればそうなるのだろうか。

「マン…チエスター、だと…？」

少年は牧師を見ながら、表情を変えずに驚いていた。器用だと思っ

「憶えていないのかい？ 君はさっき屋根を突き破って、ここに落ちてきたんだよ」

それを聞くと、少年は頭上を仰いだ。確かに、屋根には一つの穴がぽっかりと空き、星空が見えている。

少年がこの教会に闖入してから今に至るまでの数分間だけでも、いくつもの謎が浮かぶ。なぜ屋根を突き破ってきたのか。なぜ都市名を聞いただけで驚愕したのか。あの黒い殻のような物は何だったのか。なぜ気絶していたのか。そもそも、この少年は何者なのか。そして、知らないうちに注視してしまったが、少年の左眼の色は何なのか。あんな虹彩を持つ人種は聞いたことがない。

考えれば考えるほど謎が増えていくばかりだ。

少年は穴と周囲に散らばっている椅子と床の欠片を確認すると、ズボンのポケットからパスカードを取り出し、なにやら操作している。

「目算だが、屋根の修理費と結婚式の慰謝料だと、思ってくれ」

差し出されたパスカードは贈与モードに切り換えられており、ディスプレイには巨額の寄贈金額が表示されていた。どうやら少年は、今が結婚式の最中だということまでも読み取ったらしい。

「そんなことより、まずは自分を心配しなさい！ 新郎新婦や親族には私が説得しておくから」

子供がどうしてそんな巨額の財産を持っているのかということよりも、それを教会側に寄付しようとしていることに気が引けた。いくらなんでも金額が大きすぎるのだ。修理費と慰謝料を差し引いてもかなり余るだろう。

「本人が希望しているんだ。気が変わる前に貰っておかないと損をする」

少年は抑揚を付けない口調で答えた。見た目の年齢に不相応なくらい落ち着きすぎた口調だった。

「いいのかい？ こんな…大金をもらってしまって」

「早く受け取れ。腕が疲れる」

牧師は躊躇いながらも、その大金を受け取った。

自分のパスカードに加算された金額を呆然と見つめる牧師の横で、少年は衣服に付いた埃を叩いていた。案外身形をきちんとする性格なのかもしれないと周囲の人達は見て思った。

ようやく我に返った牧師は面を上げ、少年に尋ねた。

「その眼は…君は、まさか——」

少年は手を左目に当てて、いつも装着していた物がないことに気づいたのか、慌てて辺りを見渡して探し始める。ちゃっかりと左の瞼を閉じながら。様子からすると、見せたくはなかったことだったのだろう。

「あの…」

今まで周囲を囲んでいた、人の壁の一部から声が聞こえた。

「もしかして、お探し物はこれですか？　そこに落ちていたんですけど」

声の主は、この式の主役の一人、新婦だった。隣には新郎もいる。二人は人の輪の外から、無事かどうか様子を見ていたようだ。新婦は純白の手袋に覆われた両手で何かを握っている。

その手の中に包まれていたのは、右側のレンズがないサングラスだった。

少年は立ち上がり、新婦の手から丁寧にそれを受け取り、すぐに掛けた。

少年は、未成年ながらも多少厳肅さを持った容姿と顔立ちを、直立させた。新婦と正面で向き合う。

「お騒がせした。大事な式を台無しにして申し訳ない」

そう謝罪の言葉を述べ、少年は頭を深々と下げた。
長く下げていた頭をやっと上げると、

「お二人の幸福の果実が実り続けることを祈る」

そう言い残して、少年は出入り口へと走り去って行った。

いくつもの謎を残し、真相を訊く間もなく去ってしまった。本当はもう少し話す時間があれば良かったのだがと、牧師は残念に思う。だが、全てが謎に終わることはなかった。牧師は、昔に警察を公務する旧友から聞いたことがある逸話を思い出した。警察内部の極秘情報は外部へ漏出させてはいけなはずなのだが、旧友は朗々と話してくれたことがあったのだ。

異様な眼を持ち、異常な力を振るい、異質に生き続ける存在を。
一連の様子が終わって呆然としていた一同に、牧師の声が掛かった。

「皆さん、今日はこのような事態が起きてしまい、不安を抱いた方もいらつしやることと存じます。私も、こんなことが起きたのは生まれて初めてです。…ですが、これは不幸なことではありません。むしろ…」

そこで区切り、満面の笑顔で説いた。

「これは、とても運が良いことなのですよ」

驚いた。まさか結婚式に乱入することになるとは思わなかった。

俺は教会から脱走するようにそそくさと移動していた。可能なら誰にも知られたくはないのだが、あの教会に居合わせた者達には完全に顔を、ついでに眼も見られてしまった。自分が（特別な組織の一味であるかどうかは知っていないとも）ただの人間でないことを知られてしまった。今後に悪影響や悪い展開に傾かなければいいんだが。

走りながら、先程の件の後悔に悩む。

言い訳をさせて貰えば、自分のような能力を持っていたても、あの状況から生還するだけでも死力を尽くす程だったのだ。全身打撲で全身が痛い、今こうして生きていられるだけでも賞讃だと思える。

レイジャー

チェッカー

『狂乱者』が『阻格者』に着弾する寸前の事だ。磁力で引き寄せ、時間内に間に合う所まで接近させた。その着弾寸前、手を叩いた記憶はないのに、いつの間にかシールドが張られていた。耐熱作用が施され、更に可視光線も遮断するためか表面が黒くなっていた。そのお陰で任務に支障を来す大怪我を負わずに済んだのだ。

しかし、防ぐ必要があったのはそれらだけではなかった。残って

いた激烈な衝撃波が襲ったのだ。彼は衝撃波をともに受けてしまい、緩衝剤もない小さな球体の中で揺らされ、結局気絶した。その間にも圧力に押され、遂には数百キロもあるアイリッシュ海を横断してしまった。

きちんと備えていられれば良かったのだが、時間がなかったので手が回らなかった。故意ではないし理由もあるので（爆発に巻き込まれてここまで吹き飛ばされたなどと誰も信じないだろうが）、密入国者扱いにはされたくない。

兎にも角にも、今は生きているのだ。悪夢のような相手と対峙し、死にかける経験もしたが、生きているのだ。

図書館を破壊して道路を破砕して犠牲者を出して建物を蜂の巣にして隕石でも落ちたのかと疑われるような巨大な穴を空けて俺の体を飛ばしかけ鼓膜を破り掛けたが、『阻格者』は予定時間に着弾することは出来なかった。

そんな偉業を成し遂げたのが、たった一人の少年だったなどと誰が信じられるだろうか。

（アトラクションには不向きなイベントだろう…）

着弾阻止という偉業を遂げた張本人は、この場にそぐわない長閑な感想を述べていた。

一難が去って一息つきたい所だが、悠長ではいられなかった。

早くソミアが居る場所に戻らなくてはならない。

可能な限り早く、彼女の下へ帰らなければならない。

俺はそれだけを考え、両足を稼働させ続けた。

真実の代言人 2（後書き）

婚姻の祝詞は映画「インデペンデンスデイ」を参考しました。

（前ページより）

*

説明を聞き終えて、すぐ。

私は、現実を受け入れられずにいた。

コルドから聞いた、オルパニル・コランダムの詳細はこうだ。

かつて、人間の脳は全体の三割しか使用されていないという研究結果が報告された。当時は余分な知識としてしかならず、気にも留めない内容だった。

しかし、脳の研究が進み、自立機動ロボットの脳の開発も向上する裏で、脳の七割の使用されていない部分を覚醒させようという試みが決行された。

進歩した遺伝子工学を駆使し、幾多の挫折や紆余曲折を経て、遂に生まれながらに脳全体を使う新生児を人工的に誕生させることに成功した。

彼はまず、寿命が長かった。最初は成長の遅滞として心配されたが、知能レベルは平均を遙かに超えており、問題ないと判断された。また、彼が成長するにつれて発揮する不思議な能力については研究員にも驚嘆の連続であり、観察者にとっては充実した日々でもあった。

しかし、誕生から数年後に少年は自我に目覚め、非科学的な能力を前回に発揮して研究所から脱走した。

それから彼は自由気儘に世界を跋扈し、犯罪を繰り返した。今までに犯したことのない凶悪犯罪はほぼ無いと断言していいらしい。

研究チームは、とうとう少年の捕縛または殺害を決定した。研究

側にとっては成功サンプルを処分するという苦渋の決断であったが、死人が出ていたためにやむを得ないとされた。

少年の捕縛・殺害において何より厄介なのが、実験の副作用である非科学的な力を持っていることだった。たとえどんなに周到な作戦で追い詰めようとしても、常識外れの現象が起こされ、その網を避けられ続けた。

現在の人類の技術で彼を捕縛するのは困難を極め、毎度逃亡を許していた。少年の充足した経済状況が長引いていることが疑問に拳がったが、確証はないが、沢山の国のあらゆる銀行を脅迫して多額の生活資金を受け取っているという話もあるそうだ。

生年月日が不明で、不老のせいもあり、一体いつの時代から生きているのかも闇に閉ざされている。彼に関する研究資料は、彼が脱走した際に研究施設ごと全て焼き落とされている。頼りになるのは警察省に保管されている過去の記録だけで、それによると、最低でも百年前からは事件を起こしている。現実的に考えれば非現実的なことだが、この際全てを受け入れる覚悟が必要になる。

最近起こした大事件は、日本の滅亡。東洋の最末端に位置する島国が、たった二週間で滅亡したという事件だ。記録によれば、オルパニル・コランダムはその時期に力を暴走させ、その島国を滅ぼしたらしい。理由がどうあれ、一つの国を滅亡させたのだ。逮捕されたら、死刑は免れない。

説明を聞き終えて、こう思った。

騙された、と。

裏切られた、と。

今まで自分が感じたものも抱いた感情も、全部偽りだなんて酷すぎる。

恐かった。悲しかった。嬉しかった。いつの間にか胸の奥が暖かい気持ちになっていた。記憶の中の自分は、そう感じている。

でも、それらは全部偽りなんだ。

助けてもらった。上着を貸してもらった。悩みを聞いてもらった。イヤリングを買ってもらった。してもらったことは、みんな嬉しかった。

でも、それらは全部彼の狙い通りなんだ。

私を味方につけるために装った、嘘だらけの親切だったんだ。

積み上げられたものが、一気に崩れたように思えた。信じていた人に見捨てられ、あの時まで感じていた喪失感が戻ってきたように感じた。全てを失う感覚が何もかもに染み込み、虚無感が自分の体中に広がっていった。

私、何をしているんだろう…。

簡単に赤の他人を信用して。お人好しにも程があるのに。

これから、どうすればいいんだろう…。

これから、何を信じたらいいいんだろう…。

自分でも気づかないうちに、涙がこぼれた。

(前ページより)

*

悪夢。

この光景を表現するには、それだけで充分だった。
マンチエスターからこの街へ(文字通り)飛んで戻ってきたら、
なんだこれは。

街全体が、戦時中のような惨事になっている。建物は半壊しているものが殆どで、全壊しているのも少なくない。道路のあちこちには瓦礫が散乱している。硝子片から建造物の壁と思われる材質など、本来道端に産卵している筈のない物が視界の端まで広がっている。それらの瓦礫に混在するように、生身の一部も視界の端々に捉えられる。自力で救助を求める者、知人の救助の援助を求めて奔走する者、既に力無く四肢を垂れさせている者。まだ充分に救急隊が出勤できていないようで、この場の空気が悲痛な呻き声で震えている。原因は他でもない、『^{レイジャー}狂乱者』に因る被害だ。僅か数時間で街一つを壊滅状態に変える原因が幾つもあったら堪らない。

自分は『狂乱者』の有効範囲だけで危険度を軽視していた。実際は予想外の敵が配置されており、範囲外へ引き離そうと空へ逃げたが高度を充分に取る前に敵が自爆した。どれもが俺の催促処理に横槍を入れた妨害因子であった。

だが、それらは全て、聞き苦しい弁解だ。理由はどうあれ、深慮の至らなかつた自分に因つて、このような惨事を生んでしまったのだ。妨害因子を列挙した弁解など、吹けば飛ぶ程の価値もない。

眼前の光景が絶望を誘発するが、せめて彼女だけでも無事なら、と願いたい。自分勝手な願望かもしれないが、自分が関わった人の

心配だけでもしたいのだ。

俺は両手を叩き、ある探知能力を使用してソミアの位置を探した。すると、何故か候補が二つ挙がっている。一つはこの街の地下。もう一つは、なんとこの島の南側だ。自分が今いる場所が北側だから、陸地内のほぼ反対側だ。国境さえも越えている。

全く以て理解できない。反応が二つあるのも疑問だが、それよりも何故こんなに移動しているのか。

地下なら、避難勧告に従ったのだらうと納得できる。だが、街を出るのならまだしも、何百キロも離れた場所まで移動する必要性が思い当たらない。まず、この混乱時に渋滞しているであろう道路を多少の時間で遠くまで移動できるとは思えない。

一体何があつたんだ…。

不安が過ぎつた。

理由は兎も角、彼女の元へ行かなくてはならない。『狂乱者』が爆発して街を破壊した以上、もうすぐ勃発するだらう。余計な時間は削減する必要がある。順番に近い場所から行くしかない。

俺は地下に通じる通路に向かって歩き出した。走っていききたいのが本音だが、至る場所に散乱した瓦礫で道が狭まった上に右往左往する人々と行き交い続けているので、早歩きするだけで精一杯だった。

(ん…)

一つ疑問に思った。

どうしてこんなにも彼女を気にするのだらう。

地下にいるにしても遠くにいるとしても、備えて避難しただけかもしれない。もしかしたら知人と一緒に避難したのかもしれない。あの時は「待っていてほしい」と言ったが、何も彼女の行動を自分が束縛する必要はない筈だ。自分を信じて待っているとも思えない…。

(いや…)

そこまで考えて、自分の憶測を振り払った。

必ず帰る、と約束した。

約束したからには、守らなくてはならない。自分でそう思っていたではないか。言い出したのは自分なのだから破る訳にはいかない。もし自分が破つても、彼女は純真そうだから、自分の帰還を何時間も待ち続けるだろう。

何故自分がそのような事を言ったのか、正直分らない。気付けば口に出していた。

ただ、目を離してしまうと心配に思った。一時的にとは言え、今時夜の街を歩いた事もない生真面目な彼女を一人残すのは心配に思つたのだ。

自分たちが一般市民と深い関係を築くべきではない事は承知している。それでも彼女の存在を気に掛けるのだから、完全に否定できない。または、自分がただお節介なだけかもしれないが。

確かに彼女を助け、夜の街を共に歩いたのは事実だ。だがそこに感情が込められていた自覚はない。飽くまで任務の一貫として行動していた。

彼女に追跡されそうになつて姿を眩ましていると、ある建物と建物の間から煙が立ち上り始めた。恐らく出火でもしたのだろうと思ひ、小火のうちに鎮火したかつたのでその場所に行つてみたら、なんとあの少女が三人の男に絡まれていたのだ。初めは男性の友人と秘密の会議か尋常ではない遊戯か倫理上大変宜しくない事でもしているのかと推測したが、彼女と男達の年齢が離れているように見えた事と、彼女の様子が小心翼翼でいる事で、馬鹿な憶測を切り捨てる決断をした。

救助した後には自分の情報を教えたのは、ただの償いのつもりだったが、軽率だったかもしれない。本来は易々と漏らしてはいけな極秘情報である筈なのだ。各国政府にも圧力を掛けているし、報道局には更に脅迫までしているのだ。ある程度の量なら口外を甘受されているが、喋り過ぎたかもしれない。

都合良く、その後に街へ赴く流れになつたので、ついでに人格判

断をさせてもらった。内気で恐がりで見つ込み思案で夜の街に来たことがないくらい糞真面目だが、知能は予想以上に高く、社会常識も弁えていたようなので、記憶操作をして部分的に記憶を消す必要が無く安心した。知能や社会意識が高ければ、そう簡単に口外するほど教養が無いとは思いくかつたからだ。

腕にしがみつくのも、途中から腕を抱えるように寄り添ってきたのも、逸れ^{はく}ないようにする為という口実で特に気に留めなかった。歩くのに邪魔だったという訳でもなかったし、無下に振り解く理由も無かつたので、好きな様にさせていた。だが少なくとも彼女の中の、自分への信頼度が上がったという自負は感じ取れた。悩みとも言えない、寧ろ彼女の事情を聞いたという程度だが、それに対してただ自分の考察の一つを出したと言うだけでこれほど心理的に影響するのだと、改めて痛感した。

それは、彼女が自分を信頼してくれていると言う事なのだろう。彼女が自分を信じてくれているのなら、自分も彼女の信頼に応えなかった。

狙った訳では無いが、言うならば自分が彼女を信じる為の一步として、彼女と一つの約束をしたのだ。

仲間以外の人間を信用するのは数十年振りだった。信用することで余計な期待が生まれ、その所^{せい}為で苦心を強いられた事が何度もあった。もうそんな思いをしたくない一心で、その時期から他人を信用することを拒否し続けてきた。

しかし世界を孤独に過ごしている内に、別の思いが心の奥底で誕生していた。それが“寂しい”というものだど気付いてはいたが、そんな筈はない、自分で望んだ事だ、と否定した。だが言葉で強がってはいても、心は正直だった。いつしか人と関わりたいと思うようになり、だが上手くいかずに、現在を迎えていた。

今回もその好機だと思い、彼女との繋がりを大切にしたいと願った。

彼女なら、自分に人を信じることを教えてくれるかもしれない。

その為に、先ずは約束を守りたかった。

望むのなら、与えなくてはならない、と教えられた。

だから、俺は彼女のもとへ行かなくてはならない。

悲惨な状態の街を歩く彼の歩みが、力強くなった。…かどうかは不明だ。

だが、道を進む彼の足取りに迷いはなかった。
いつも頭の片隅に宿っていた迷いはなかった。

真っ直ぐ歩き、やがて目的の地下への通路に到着した。地下への通路、と言っても、ただの地下水路へのマンホールに違いないのだが。

俺は下まで見えない通路を見て、しかし躊躇せずに梯子に足を掛けて下り始めた。

マンホールの下、つまり地下水路は兎に角暗い。昼と夜の違いが全くなく、湿度が高い。地下水に乗って流れてきた廃棄物の所為で、年中異臭に満ちている。しかし、それさえ我慢すれば人がいられる空間なのだ。流石に季節によって気温は変化するが、眠る時に体に掛ける布さえ確保していれば眠れるし、風が吹かないので体感温度も下がりにくい。路上で夜や雪の寒さに凍え死ぬ可能性が低いのだ。

そのような理由から、地下水路はホームレスが集まる場所として知られてもいるのだ。時々警察が巡回してきてホームレスを排除しようとする事もあるが、一晩をやり過ごすには格好の場所なのだ。どうやらここ数時間は警官の巡査が来訪していないらしい。やはり地上の事件で地下水路に人員を割けない状態にあるようだ。

地下水路内は、異臭と普段伝播してくる振動に目を瞑れば、実に平和だった。瓦礫が散乱している訳でもなく、パンクに陥っている訳でもない。彼女が進んでここに足を踏み入れるとは思えないが、反応の一つはここにある。どんな状態でも生きていてくれれば何だって構わなかった。

今自分の眼にも、ホームレスは映っていた。現在は日付が変わり
そんな時刻な為か、殆どの人間は眠っている。ある者は横たわり、
ある者は壁に寄り掛かって眠る人間もいる。また、上手く確保した
毛布にくるまっている人間もいれば、着用していた上着を体に掛け
ただけで眠っている人間もいる。

目の前の者も、後者の内の一人だった。

そして、反応の一つも目の前だ。

つまり、ここだ。

目の前の人物は、黒いジャケットで体の前を覆い、壁に寄り掛か
って眠っている。眠っている顔は、不幸そうに見えるが、どこか安
らかだった。

俺は溜息を一つ漏らした。

彼が使っているのは紛れもなく自分のジャケットだ。寒さを防ぐ
ために、遺棄されてあったそれを入手したのだろう。このまま放置
してやりたいが、生憎こちらの都合もある。それには自分の汗や体
毛などが付着している筈な為、自分がここに存在した痕跡を残す訳
にはいかなかった。また、ジャケットの懷には“あれ”が入ってい
る。赤の他人にこのジャケットを渡す事は出来なかった。

俺は両手のうち、左手でジャケットの襟を掴んだ。すると、何も
持っていなかった筈の右手に、黒いジャケットが現れて手に握られ
ていた。しかも汚れも皺も寄れもない新品の状態だ。俺は左手に触
れた物を完全な状態で複製した。

右手の感触を確かめた。そして、能力で右手の物と左手の物、即
ち新品と中古品の位置を一瞬で交換した。安眠妨害をしたくない一
心でただけだが、これで問題はなくなった。温まっていけないのは
我慢してもらう。

彼は気付かずに、眠っていたままだった。

俺は目の前で眠っている彼を見て、随想を起こす。

自分のように世界から狙われて世界を巡りながら波瀾万丈な生活

を永遠と続けていく人生と、彼のように数十年を世界から知られず世界に埋もれて何の特徴もない平々凡々な生活を苦痛と共に続けていく人生と、どちらが良いだろうか、と。

多分、正しい答えなどないのだろう。いつもの悩みと同じように。彼は客観すれば貧相で恵まれていない不幸な人間に分類されるだろうが、決してそう断言できるものでもない。今こうして生きていられることが何よりの幸せだ、という格言じみた言葉を見ても、幸せである理由なら幾らでも見つかると思う。彼には仲間がいるかもしれない、周囲にいるホームレスの皆が友人かもしれない、恋人だっているかもしれない、一日の中で享樂を見つけて笑顔を浮かべているかもしれない。彼の日常生活を知っている訳がないが、不幸でも幸福と言うことだって出来る筈だ。幸せかどうか、または何が幸せかは人それぞれなのだ。他人が勝手に決めてしまっただけはその人に失礼だと思うのだ。

それに、自分の生き方だって平穩な訳がないし、客観すれば異常で不運な人間だ。権力や財産があっても、この世界に居場所が無い事を不幸と呼べるのなら、尋常でない差異があるものの、自分は目の前の彼と同じ人間に分類されるのだろう。だが、自分が不幸だとは思えなかった。辛い事があっても命を狙われていても非難され続けていても、自分が生きてきた生涯はそれだけではなかったからだ。世界政府から援助金は受け取っている分、衣食住には困らないし、世界各国をほぼ自由に往来できるし、買いたい物も普通に出来る。それに、ソミオのように、様々な人々にも逢える。面倒な方向へ傾くのが常で、いつも必ずと言っていい程辛い何かが起こるが、反面嬉しい事だってあった。自分にとって必要だと思っただけのことや当たり前だと思えるようなことをしただけで、関係した人間の一人から、時には無関係な筈の何人もの人々から感謝の言葉を貰ったこともあった。存在が目立たせないように努め、存在がないも同然のような身分なのに、そういう時の度に自分自身が存在していることを自覚できたのだった。

だから、こう納得することになっている。

正しいかどうか決められていない以上、何が正しいかは自分が決めていく。誰にどれほど非難されようと、自分が望んだ方法ならば貫き通そう、と。

『自分で決めたことなら、他人の言葉なんかにはビビってんなよ。そんなに行動には意義が必要か？ 本当は気持ちのどっかでわかっているんだから、いちいち迷ってんじゃないよ』

かつて自分の恩師が言っていた言葉を思い出した。

則る以上、出藍の誉れには程遠いが、お陰で迷いが少なくなった気がする。

俺は握った右手を自分の胸に当てて、祈りを捧げた。

（どうか、出来るだけ多くの人間が少しでも幸福であるように）

祈り終わると、俺は再確認したもう一つの反応へ向かうために、地上へ繋がっている梯子を登り始めた。

自分で正しいと思うことをする為に。

自分が選んだ後悔しない方を成し遂げる為に。

ソミアの元へ帰る為に。

（前ページより）

*

コルドは執務机に座り直し、事務を再開した。

執務机に積まれた書類の上で手を動かしながら、壁寄りに呆然と
している自分に話しかける。

「ま、時間も遅いし、今日はここに泊まるといい。明日の朝に、我々が責任を持って君をお家に送るよ。なあに、たとえ“奴”が生き
てたとしても、ここに来るなんて可能性はないさ。建物内には何人
もの優秀な警備兵を配置してるし、特にこの部屋は頑丈にできてい
るからね。もう怖がることはないよ。心配しなくていい」

コルドの独り言にも似た提案を聞いても、返事をするような気が
起こらなかった。

返答しなかったために会話はそれきり途絶え、室内に沈黙が満た
していく。

執務に没頭するコルドの、パソコンを操作したりボールペンを走
らせたり紙が擦れたりする音がやけによく聞こえる。両側に直立不
動でいる男二人は相変わらず、呼吸しているのかも疑わしいくらい
余計な動作をせずに立っている。

私は俯いて、ただただ悲しみを増やしている。

理由は無論、“彼”のことだ。

会って確認したい気もするが、コルドから教えられたことが本当
なら、嫌だ。つらい思いをするくらいなら、いつそ誰にも会いた
くない。

悲しいままでいいから、早く朝になってほしかった。日常から逸
脱している今の自分の境遇がとても嫌に思えて、早くいつもの日常

に帰リたかった。学校に行くために朝早く起きて、両親に朝の挨拶を言つて、学校に言つて、ジャスミン達と話をして、授業を受けて、帰りにまた三人とどこかへ寄り道して、家に帰つて、明日はどんなことがあるのかとちよっぴり期待しながら眠りにつく。同じことの繰り返しに思える普段の生活が、今ではとても恋しい。

これ以上、傷つきたくない。

これ以上、関わりたくない。

これ以上、何もしたくない。

無意識に、かつて虐めを受けていたときに思つていたことと同じ気持ちになつていた私は、自分からは決して何かを起こさないという現実への逃避を選んでいた。

何もしないから、早くいつもの日常へ戻してくれるように、祈つた。

暗い考えに囚われ、奥歯を噛んだ…その時。

遠い場所から音が聞こえた。何の音かはわからないが、低くて重い音だった。連続してはいないけど、一定の間隔で定期的に聞こえてくる。巨人が歩いたときにこんな音が出るんじゃないかと思つていたら、音と一緒に地鳴りも響いてきた。まさか本当に歩いているんじゃないだろうか。

コルドもその音に気づいたらしく、どこか中に視線を泳がせている。傍で待機していたボディガードの二人も、懷に隠してある武器を確認している。

非常識な想像を抱いていると、轟く衝撃音と共に部屋全体が大きく揺れた。今までのとは明らかに異なり、すぐ傍で大鉄球を落とされたような物凄い衝撃だった。

突然の事態に全員が困惑している間に、この部屋唯一の扉が破裂音と共に、縦長方形二枚の形に変わつて内側に吹っ飛んできた。急な出来事に全員が身を竦ませている間に、吹っ飛んでいた扉二枚は突然軌道を変えて、ある方向に一直線で飛んでいく。いち早く我に返つて戦闘態勢に入ろうとしたスーツ姿のボディガードの二人は、

突然軌道を変えてきた厚さ何ミリもある頑丈な扉それぞれに衝突され、背後の壁まで一緒に吹き飛んで押し潰された。

床に落下したあとでも、分厚い扉が遮っていて、ボディガードの二人がどんな状態なのか分からない。ただ、潰されたあととも全く動かないことは無事でないことを物語っていた。

何が、起きたのか。

目の前で起きたことに、頭がついていけない。コルドを見ると、彼も同様に呆然としていた。

非常時に作動する機械が反応し、警戒音とともに執務機のすぐ前で隔離する、分厚く透明な防護ガラスを瞬時に下ろされようとした。その寸前に、コルドの後ろの壁に横一文字の大きな傷が彫られた。ガラスが完全に下ろされ、その後壁の欠片がばらばらと床に落ちる音が響く。

警戒音で我に返ったコルドが、一連の異常を引き起こした犯人へと叫んだ。

「……ッ！？ 誰だ！？」

「貴様を長年追跡している者だ」

埃が立ち込める扉の奥から問いへの答えが返ってきた。向こう側との間には分厚い隔離壁があるが、会話するのに差し支えてはいなかった。たぶん、どこかに換声管のようなものが設置されているのだろう。

ゆっくりとした歩調で部屋に入ってくる間に、その姿が明確になっていく。

汚れた黒い靴。あちこち擦り切れた黒い長ズボン。ベルトに挿された鞘。黒いシャツとジャケット。片手に握られた一振の刀。サングラスを掛けた有色の肌と、一つに結われた黒髪。

「今まで随分と面倒事を抱えさせてくれた」

その人は全貌が現れた所で足を止めた。

先程まで私とコルドが主題にして話していた張本人が、ここに現れた。

「片サングラスに日本刀を携えた東洋人…。そうか、お前が本人か…！」

コルドはさっきまでソミアに向けていた穏やかな雰囲気を一転して無くし、代わりに嘲るような歪んだ笑みを浮かべた。

まるで、突然の来客に歓喜を感じているようだった。

「よく来たね！ 歓迎するよ、死に損ないの黄色人種^{イエローモンキー}！」

「戯れ言を垂れる暇があれば彼女を解放しろ、戦争好きの溝鼠^{ウォーフラット}」

迎えるコルドと襲う“彼”は棘だらけの挨拶を交わした。

そして、“彼”の発言によって確認された。

やっぱり…私を取り戻そうとしてる…！

「それはできないな。私の立場がなくなってしまう。それに、本人も望んではいないようだ」

「どういう意味だ？」

そう訊いて、“彼”が私のほうを見た。その表情が異様な雰囲気
を宿していて、とても怖く感じた。

記憶の中の彼は、あんな雰囲気をしていなかった。無表情であることは変わっていない。でも、表情の奥に秘めている雰囲気のようなものが全然違った。記憶の中の彼は、無表情のためか何の風波も立っていないかった。いい言い方をすれば穏やかだった。でも、今の彼は穏やかさなんてこれっぽっちもない。目の前の目標に邁進し、楯突くならば構わず切り伏せてきそうな威圧感がある。

記憶の中では無表情で通っていた“彼”との違いに、私は本能的に確信していた。“彼”は私を取り戻そうとしていると。本性を偽りの記憶に隠してまで、私という人質を欲していると。

「いや…来ないで…！」

体が恐怖で震えた。“彼”の元に戻ったら、また同じように騙されて、都合のいいように利用されてしまう。そう思うと、コルドに保護されることを切望した。

「…」

「嫌だつてさ。というか、最初からお前に彼女を渡す気はないんだ。

痛い目に遭う前に帰ったほうが身のためだよ。…ま、逃がす気はないけどな」

コルドは警察の一人で、ここは警察関連の機関だ。犯罪者の“彼”を逃がす理由はない。応援を呼べばすぐに逮捕されるのだ。だから、コルドの側に付いていたほうが確実に安全なのだ。

「…ややこしくなる事を」

空気が静まって、やや沈黙が流れた後、硝子の向こうの“彼”が言った。

「しかしまあ、よくここがわかったね。どうやって探し当てたんだい？」

コルドの質問で、私は二つ気が付いた。

ここはどこなんだろう。

コルドは、組織の本部だと答え、確かに部屋の形をしている。だがそれだけで、詳細な地名は教えられていない。

「貴様らの最大の失敗は、その娘を拉致した事だ」

突然、視点が自分に移り、ドキッと鼓動が高鳴った。

「公園で休憩していた時には、何者かに尾行されている事態に気付いていた。確認の為に町中へ移動し、今後に危険だと判断した俺は、彼女に一つの予備装置を施した。…遠目で見ていれば気付く筈はない」

商店街で、“彼”からされたこと。

それは、話を聞いて貰ったことと、もう一つ。

「イヤリング…？」

私が小さな声で言い、“彼”が答える。

「丁度装身具を買いたいと要求があったから、利用させてもらった。俺は会計を済ませると同時に、イヤリングに発信能力を施した。俺にしか捉えられない所在通達機能だ。…人質のつもりなのか用途は推測し難いが、俺の狙いにうまくまと捕まってくれた」

聞き終えた私の胸に、覚悟していたつもりの痛みが走り始めていた。

利用された…。

イヤリングが欲しいという我が儘な追加注文を快諾してくれたのは、やっぱり親切じゃなかった。

また、ここを突き止めるためだけではないような気がした。私がイヤリングを身に付けていれば、“彼”はいつでも私の場所を知ることができるし、取り戻すこともできる。

ただ自分の都合を良くさせるために、仕方なく買ったんだ。

コルドから聞いた話と、否定したかった自分の予想が的中し、胸が痛くなった。特別な人にしか見せない信頼をずたずたに引き裂かれた、そんな気がした。

「それはそれは、随分と無駄な苦勞をしたねえ。善良な一般市民を君の勝手な事情に利用するとは、酷いじゃないか」

「彼女の協力でここを突き止められたのは事実だ」

そこで一度台詞を切り、苦勞話を聞かせるように言い直した。

「誰がコインランドリーの地下に施設があると推理できる」

この建物は地下にある。

どうりでこの部屋には窓が無いはずだ。

まだ痛む胸の痛みに耐えながら、脳裏に過ぎった疑問を思考にとどめさせた。ここはなぜ地下に建設されたのだろう。いくら隠密活動組織だからと言っても、公務機関の本部を公から隠す必要はないと思う。地上に場所が無くて地下に建設する例はあるけど、それは地下に置いても支障がないか、あるいは表に出すと外観にマイナスが付加するかだ。地上に立てるより地下に立てるほうが建設費や時間もかかる上、との地域の知事と道路交通の管轄に許可を申請する必要があるため、相当な理由がないと地下建設はできない。

「見つからないように建てたんだから、当然だよ。しかしまあ、君みたいな不審人物をどうして警備員は止めなかったんだろ？ セキユリティや腕のある警備員を配置してたはずなんだけども」

「警備員は四肢の骨を砕いた。作業員は解放を望んだ者だけ見逃した」

なんていうひどいことを…と考えたが、別のところに違和感を持った。

作業員？

ソミアの頭に、その単語が留まった。

警察機構に作業員？

この建物内で従事する職員のことを総じて指しているのか。いや、警察機構なら証拠分析やデスクワークのほか、捜査員だっているんじゃないだろうか。捜査員のことを作業員だなんて、普通感覚で呼ぶだろうか。どう考えても違和感が消えない。

また、そんな人がどうしてここにいるのだろうか。事件現場に発見された証拠品の鑑識をするためだろうか。わざわざここへ運ばれてくるほど充実した機関なのかもしれないし、地下へ隠してまで調べる必要がある専門の場所なのかもしれない。でも、これらは私の勝手な推測だ。実際に期間内を見て回ったわけでもない。地下に建てる必要があるのだから、よほど外に出したくない理由があるはずだ。監察医による検査や事件関係者の保護施設なのだろうか。保護されている人たちを狙って“彼”は襲撃してきたのか。いや、正当な公務を行う人がどうして避難ではなく“解放”を望むのだろうか。「おやおや…また人に暴行を加えたか。存在がない者が現世を生きる尊い生き様を邪魔したか。これで君はさらに罪を重ねたってわけだね」

「苦にも思わない」

「よく言うよ。君は今までに、幾つの犯罪を犯しているんだ？ …

殺人、暴行、器物損壊、密入出国、詐欺欺瞞、個人情報を含む極秘情報の無断閲覧、エトセトラ。これだけやって、まだ足りないっていうのか？ 君らはもう、どの国でも死刑が確定されているほどの救いようのない大犯罪者なんだよ」

「貴様の所業と比較すれば大したことではない」

今、“彼”は否定しなかった。ということは、ここに“彼”が訪れた理由はその類に決まっている。

そして、コルドから聞かされたことは…。

「本当なんだ…」

“彼”とコルドが自分のほうを見て、自分が思っていたことを口に出していたことを知った。ただ、詫びる気持ちは起きず、むしろその勢いで言葉を繋ぎたかった。

「あなたは、本当に…人を殺したり…？」

猜疑と追求と避難の視線で、独り言に近い音量と口調で、“彼”に言った。

「誑かされたか」

“彼”の発言にコルドが答える。

「いいや、真実を知っただけさ。そして、自分で考えた結果、本当の敵に気づいたのさ」

「貴様も奴らに唆された一人に過ぎない」

「口の減らない野郎だね。だから世界政府から『無情の一閃』だの抹消の旋律』だのと馬鹿げた異名が付けられるんだよ」

重い衝撃音が響いた。

“彼”が衝撃波を全方向に発して、防壁の向こうにあった物は吹き飛んだ。こちら側にも振動が伝わり、部屋全体が揺れた。

「…二度とその名で呼ぶな」

“彼”は重々しい声で言い、気迫で圧殺しそうな眼でコルドを睨んだ。

「器物損壊罪だ。裁判に掛けられた時はこれも追加させてもらうよ」

「残念ながら、貴様にその機会はない」

“彼”は掌を前に出し、三本の指を立てた。

「貴様は三つの大罪を犯した」

まず人差し指だけを立たせた。

「一つ、度重なる戦争誘発行為」

次に中指を立てる。

「二つ、『ダークステイル鉄』への利害関係による協力援助」

最後に薬指を立てる。

「三つ、少女の拉致及び暴行と誹謗による心身への弊害。以上の三つの罪により、貴様をこの場で死刑に処する」

“彼”が宣告すると、コルドは高らかに大笑いし始めた。

「私を殺すだつて？ 面白いことを言ってくれるじゃないか！ だけどね、そりゃ永久に実現できないよ。なぜなら……」

コルドが手元のスイッチを押した。すると、突然“彼”の足下から金属製の輪っかが射出され、それらがそれぞれ“彼”の手首に巻き付いた。すると、腕輪から発生した強力な磁力によって両腕が左右に引き離され、まるで空中に磔にされたような態勢になった。

同時に、防護ガラスで隔離された、“彼”がいる側の壁や床から黒光りする重火器が大量に出てきた。それらは狂いなく“彼”に銃口を向けている。

さらに床から濁った黄色い煙が噴出し、“彼”を包み込む。おそらく毒ガスだ。

「てめえはここで死ぬんだからなあ！！」

“彼”に向けてられていた全ての銃から、ガトリングガン並みの速度で一斉に銃弾が発射された。喚声管を切つていても銃声は劈くびりびりと振動が伝わってくる。意識しない間にも数え切れないほどの銃弾が黄色い煙の中に吸い込まれていく。発射始めて数秒後に、黄色い煙が爆発した。可燃性ガスだったらしく、銃弾の熱と摩擦で着火されたのだ。空気が破裂し鼓膜を刺激している間も、銃撃は続いている。

感覚的にはしばらく経過して、やっと銃撃が止んだ。ガラスの向こうは硝煙と爆発の煙で曇っていてよく見えない。

いつもの“彼”なら難なく凌げるだろうが、今回は違う。

撃たれる前、爆発する前、“彼”は両腕の自由を奪われていた。記憶の中の“彼”は両手を叩くことで能力を発揮していたが、目の前の“彼”も同様なのだろう。コルドは最初に彼の両手を拘束していたけど、あれは動きを封じるためじゃなくて、“彼”が両手を叩くのを封じるのも狙っていたんだ。動きを抑制する方法なん

て他にあるのにその方法を取ったのだから、記憶との違いはない。

その部分の記憶は間違っていなかった。

”彼”は目の前で両手を縛られていた。

それでは手を叩くことができない。

能力が使えないのなら、防ぐ術がない。

「……」

“彼”はまともに攻撃を受けたのである。

「あ…」

私の胸に不思議な痛みが広がった。

悲しいはずはない。恐怖の原因が、自分の目の前で…そう、目の前で、いなくなったのだ。

なのに、何だろう、この喪失感。記憶のせいだろうか、持つはずのない感情が湧き上がってくる。偽りの記憶でも、彼といた時間が、彼といたことで生まれた気持ち、とても、かけがえのないもののような気がして。それらを、一気に、なくしてしまったような…。

膝に何かがこぼれた。何かと思って見たら、自分の涙だった。

さっきまで泣いてはいたけど、どうして今も涙が出るの？

なんで涙が出てくるの？

私は何を悲しんでるの？

なんで…。

「ハハハハハハ！ 無様だな！ 弱いな！ 威勢を張ってきて、結局はこの様かあ！」

コルドは歓喜を抑えきれず、一人で大笑いしていた。さっきの穏やかな雰囲気がるで嘘のようだ。

「今まで何度も俺を捕まえようとした奴は何人もいたさ。だがいつもこいつも失敗した。なぜだと思う？ —— てめえみたいに死んでいったからなんだよ！ ハハハハ！」

今まで狙っていた人が自分の手によって葬ることができた悦びというのは、高笑いしたくなるほど嬉しいらしい。彼を見ていれば誰が見ても分かる。達成感に満ちたその表情は不幸の影も見られないでも。

コルドはどうしてそんなことを言えるのか。どうしてこんなことができるのか。どうして人の死を嘲笑うことができるのか。

コルドの話が本当だとして、“彼”がとても危険な存在だとしても、人が死んだのにそれを喜ぶコルドの精神が理解できなかった。私は目の前で人が死んだことに悲しみを、目の前で人を殺したことに憎しみを抱いた。

「…ひどい」

口から思いが零れた。

「ここまでする必要なんかないじゃないですか！ ただ捕まえるだけでもいいはずなのに、なんで殺したんですか！ 私達のイエス様はこんなことを望んでなんかいません！ 罪人であろうと、死をもつて報いるなんて許されないことです！ あなたがやったことは、イエス様が唱える人道主義に逆らっているじゃないですか！ 最低です！」

一気に罵倒する。今の私には怒りに満ちている。怒りに載って、罵詈雑言が溢れてくる。

どうしてこんなに起こりたいのか、どうしてこんなに悲しくなるのか、私自身にも分からない。理由なんて分からないけど、コルドに反抗したい気持ちでいっぱいだった。コルドを否定しなければならぬ気がした。そうじゃないと自分自身を止められなかった。この気持ち悪い不快感を抑えるなんて自信がない。この言いようのないやるせなさを無視するなんてできない。

もしかしたら、植えつけられた記憶せいかもしれない。記憶の中の“彼”を失って悲しいだけなのかもしれない。偽りの記憶なのに、私はその中で“彼”を恩人に思っていたから、喪失感を感じているのかもしれない。恩人だと思っていた“彼”を目の前で殺されたから、だからコルドに怒りを感じているだけかもしれない。

コルドも、“彼”も、どうしてこんなひどいことをするのか理解できなかった。

もう、自分の感情に支配されるしかなかった。

「なんだと、クソガキ…！」

コルドは手元のリモコンを押すと、私の手首と足首がそれら同士

で引きつけ合い始めた。今気づけば、“彼”の両腕に巻き付いた物と自分のそれとは相違ない代物だ。磁力によって同士を引きつけ合うという同じ効果を持っていた。

コルドは私に歩み寄り、いきなり平手で殴ってきた。乾いた音が部屋に響く。急な出来事と激痛に呆然としかけている私に構わず、今度は胸ぐらを掴んできた。

「誰に向かって言ってる？ てめえなんざ、すぐにでも殺せるんだぜ。知らねえか忘れてんだろうが、ここはアイルランドだ。俺はカトリックで、てめえはプロテスタント。消えたって俺が困るこたあねえ」

コルドは大きく息を吸うと、息と一緒に吐き捨てた。

「てめえのようなヤツらはいつともいつも邪魔なんだよ！ 生きていようがいまいが何の意味もねえくせに、偉そうに批判や美辞麗句をダラダラと並べやがって！ 口先だけが立派な無駄の塊だろうが！ 一人じゃ何一つ充分にできやしねえムシケラの分際が、いい気になってるじゃねえ！！」

「っ！」

私は言葉を失った。失ってしまった。

生きていても、生きていなくても、同じ。

いても、何の役にも立っていない。

いなくても、変わらない。

残酷な一言が、自分の頭の中で何度も何度も反芻されていた。何度でも何度も突き刺さってきた。

心理的にも不安定な年代の人間にとっては拷問と変わらない言葉だった。

「うつ…うつ…」

事実を明確にされた悲しさや言い返せない悔しさが込み上げてきて、涙となって溢れた。

自分は子供であり、何か重要な立場にあるわけじゃない。成績が良くても、それだけのことで、尊重されるような実質でもない。今

の私はなんの変哲もない、ただの子供だ。社会に役目を貰っているわけでも、役立っているわけでもない、一人の人間。両親や、友達や、先生や、その他の色々な人に迷惑を掛けてばかりで、そのくせ何もしていない、ちっぽけな存在。

そうか、だからなんだ。

いなくてもいい人間だから、コルドも、“彼”も、私にひどいことができるんだ。

ひどいことをしても何の影響も出さないから、私っていう存在を無視できるんだ。

私なんか、いなくなっただけいいんだ…。

「誰がそんな事を決めた？」

私の否定思考を否定するような、そんな男性の声がどこから聞こえた。

コルドのものかと振り向いたが、彼も急に出た声に驚いていた。この部屋には、彼の他に男性は見当たらない。

「生きている意味が無いなどと、誰が決めた？ 存在が矮小だと、誰が断った？ 自分一人で生きられない者は弱者であり邪魔な存在だと、誰が定めた？」

まさか…。

まだ煙幕の漂う隔離壁の向こうを見やった。そんなことない。そうであってほしい。冷静な現実視と小さな希望を持ちながら、凝視していた。

「それは、単なる傲慢な弱肉強食主義だ」

言葉が終わった直後、煙が充満していた、隔離壁の向こう側の空

間に、旋風が吹き荒れた。時間が経つと共に、煙も薄らいでいく。煙が出入り口の向こうに流されていった分、部屋全体がよく見えるようになっていく。

「……!?」

私も、コルドまでも、驚愕した。

そこには、本当に目を疑いたくなるような、奇妙な光景があった。銃弾が止まっている。

“彼”を覆い隠しているほどの銃弾が、止まっている。

“彼”は両腕を封じられた状態のままだ。その“彼”の、数十センチ前で、“彼”の体を貫くでもなく、外しているでもなく、何百何千という数の銃弾が“彼”を取り囲むように止まっている。

「これからの未来を創世する若人は、とても大切な存在だ」

磁力によって礫にされ、弾雨に包囲されている“彼”は、諭すように声を響かせた。

「それを……」

“彼”の能力を受けたのか、停止していた銃弾が機関銃のほうに向かつて飛んだ。本来持っていた、秒速九百八十四メートルの速度のままで、それぞれが来た道を戻るように飛ぶ。空気を裂き、銃身へ戻り、薬室へ戻り、その場所を叩く。銃身が砕けようと銃弾は止まらず、金属が砕ける音が鳴り響く。

「虫螻むしけら”と切り捨ててくれるな！」

“彼”の腕に巻き付いていた腕輪が、乾いた音を立てて外れた。拘束する機能を失った腕輪は両側の壁に引き付けられ、勢いでぶつかって壁にめり込んだ。

コルドを見る“彼”は、今までの無表情さからは想像もできないほどに激怒していた。

「そんな、バカな……」

さっきまで歡喜に歪んでいたコルドの表情は、目前で起きたことが信じられないと言いそうなほど青ざめていた。

身動きを封じる物が無くなった“彼”は、隔離壁へ前進する。

「てめえは…情報じゃ、両手を封じられたら力を使えねはずだろ…」

コルドが呟いている間に、“彼”は隔離壁の前に到着した。携える刀を真横に固定し、握っている左手を引き、右手を刀身に添え、態勢を低くして構えた。【突き】の構えだ。

そこまで“彼”が動いたのを見て、コルドがはっと気を取り戻した。

「な、何をやってたって無駄だ！ 厚さ六十センチのポリカーボネート積層だ！ そんなナマクラでこの壁は破れねえっ！」

“彼”は聞かずに、気を集中させ、一気に刀を突き出した。

繰り出された刀は隔離壁を、貫けなかった。切っ先の数ミリだけが突き刺さっている。

「…へっ」

結果を見たコルドは、またも余裕に歪んだ侮蔑の表情を見せた。

「だから言つたろうがよっ！ てめえにその壁は壊せねえ！ お前の侵入に気付いた俺の部下がもうすぐ応援にここへ到着する！ その時がてめえの最期だっ！」

未来の予言を聞かされた“彼”は、それでも全く動じていなかった。

突き出した刀身を、空いていた右手で滑らすようになぞった。

「——^{ひし}拉げ」

“彼”が唱えるように一言漏らした直後、乾いた音を立てて、隔離壁全体に蜘蛛の巣状に亀裂が走った。そしてその壁をじっくり観察する時間も与えられぬまま、隔離壁は粉々に崩れ落ちた。ガラスの欠片に室内灯の光が反射して、キラキラと輝いていた。光の粒が降り注いでいるようなその光景は、元の原料からは想像し難いくらいに美しくもあった。

崩れる音が止んだ時には、部屋の真ん中を横切る、ガラスでできた小さな山脈ができあがっていた。

透明度の高い物質が砕けた山は、表面のなめらかさや凹凸に対応

して光を取り込んだり乱反射したりしている。輝くそれは宝石の山のようにも見えた。

“彼”はその山に対して何の感情も向けず、ただ踏みつけて突破した。

「動くなあ！！」

いつの間にか、座らせられている私を盾に、コルドが立っていた。「動くな！ 動くんじゃねえぞ！ 動いたらこのガキの頭を吹っ飛ばすっ！！」

コルドは恐怖と焦燥が混じらせながら吼えた。手に握られた拳銃は私の頭を狙っていた。空いている反対の手は私の髪を鷲掴みにしている。

髪を引つ張られる痛みにながら、頭に突きつけられた拳銃に私は震えた。コルドが指を少し動かすだけで私は死んでしまう。私は、ここで命を終わらせてしまう。

「てめえの目的は俺の処刑と、こいつの救助だろう！ なら話は簡単だ！ こいつを死なせたくなえのなら言うことを聞きやがれ！」

コルドは半分発狂しているらしく、顔も真っ赤だった。数十分前までの沈着さは欠片もない。

一方的な要求を突きつけられた“彼”は、それでも落ち着いていた。

「人質に頼り、また逃げるか。…みつともない」

「黙れっ！ 逃げ回ってんのはてめえも同じだろうが！ その上、世界の情勢には直接関与しねえくせに、世界平和つつー大義名分を盾に大罪を犯しまくってんじゃねえか！ 本当の危険因子はてめえらのほうだ！」

コルドは彼の素行に対して反論するが、“彼”はそれに対して反論する。

「死刑以外に更正手段が無い虫・螻がほざくな」

私に突きつけられている銃口が、より強く押しつけられた。

「てめえ…いい加減にしねえと、本気でこいつを撃つぞ！」

人質を取られた“彼”は、

「Go ahead, make my day」

まったく動じていなかった。

要求にはソミアの命も懸かっているというのに、これじゃあ売り言葉に買い言葉だった。

それもそのはずだ。“彼”は絶対的な自信を持っているのだから。

「動くなと言うのなら、」

コルドの唯一の失敗は、

「ここから貴様を殺す！」

“彼”をまだ人間扱いしていることだった。

コルドは“彼”と目が合い、妙な眩しさを感じて瞬きをした。

「……！」

次に目を開けた時には、別の光景が広がっていた。

一面に広がっているのは、黒。部屋にあったものは何一つ無く、

“奴”も、すぐ目の前にいた小娘もない。自分の姿は辛うじて見えて、拳銃の重みは手に感じるが、僅かな明暗も区別が無く、壁と床の境目ですら見えない。

そもそも、壁と床という物があるのかも判らない。

自分の部屋はどこだ？ 俺はどうしてこんな所にいる？ 奴はど

こだ？ 出口はどこだ？ 俺はどうやってここに来たんだ？ ここ

はどこなんだ？

問いに答えは見つからず、考えれば考えるほど混乱していく。訳が判らなくなり、次第に自分がここにいることですら疑問に思えてきた。まだ感覚が残っていれば、まずは安心できそうだ。

そう思っただけで安堵しかけた瞬間、目の前の黒が動いた……気がした。

我が目を凝って目を凝らしてみるが、いくら経っても変化はない。錯覚だろう。自分で思っている以上に疲れているのだ。作戦も終盤に差し掛かっていたし、失敗は許されないような緊張を強いられる作業が続いていた。そのせいだろう。

コルドは無理矢理に理由を付けて、頭を振って馬鹿な想像を払っ

た。そして改めて目の前へ向き直すと、また動いた。今度はさつきよりもはつきりと、大きく動いた。

徐々に立体感を持ち始め、黒の中に巨大な目が二つ現れた。くすんだ黄色をしているが、黒い空間内ではそれだけで充分よく見える。目はどこか猫科の動物のそれに似ている。

その双眸が徐々に高さを上げていく。コルドの身長以上の高さになったところで、やっと止まった。

（な…なんだよ、なんなんだよコイツは！）

コルドは気付かないうちに大量の冷や汗をかいていた。

殺気立つ双眸が微かに引っ込んだかと思うと、双眸の後ろから別の黒がうねり、コルドに直撃した。コルドは踏み止まれずに吹っ飛ばされ、数メートル横の壁のような物にぶつかった。何かと思っただけでみると、コルドの頭上に同じような金色の双眸が浮いていた。コルドは今、二匹の物の怪に追い詰められていた。

突然の現象にますます混乱し、痛みを感じる余裕もない。

狼狽している間に、目の前の双眸が近付いてきた。コルドを侮蔑するように見下ろすと、頭上から別の黒を振り下ろした。それはあまりに早く、コルドは防衛反応も起こせないでいた。

腕に痛みが走った。やけに肩が軽くなったと思い、拳銃を握っているはずの手と逆の手で触診してみようとして、ようやく気付いた。両腕が、無い。

何故か出血はなく、しかし確かに腕がある感覚が無くなっていた。黒が双眸の裏に引っ込んでいく。

「う」

遂に、コルドは精神の限界を超えた。

「うあああああああああああああ！！」

コルドは悲鳴の叫び声を上げた。

「えっ、なにっ？」

その様子を一部始終見ていた私は、コルドが急に激情したことに恐怖心を抱いた。

私は“彼”によつてコルドと引き離されていた。コルドが立ち尽くすようになってから、“彼”によつて素早く体を引っ張られ、今では距離を取つた場所にいた。

（なんだろ……。コルドがこの人と目を合わせて、そしたら急に彼の眼が虚ろになつて、妙に拳動不審になつちやつて、それで急に青ざめたと思つたら今度はあの人がコルドを蹴り飛ばして、それでもコルドは反撃をしようとししないで、抵抗しないコルドの腕をあの人が剣から出した光で斬つて……。一体どうしたの？ 何が起きてるの？）

目の前の奇妙な光景に、私は不気味さと思議さを覚えた。“彼”に訊けば教えてくれるかもしれないが、“彼”も今集中していた。“彼”と、コルドと。対峙している男性達の行動一つ一つに目を奪われる。

「貴様に逃げる道はもう無い」

コルドの頭上にある双眸が動いた《“彼”は歩きながら言う》。

「貴様に赦しを請う猶予はもう無い」

双眸が嘲笑うかのように歪むと《同情も容赦も躊躇もなく》、そのすぐ下から赤黒い口が開いた《ただ淡々と歩いて近づいていく》。口内よりも赤い牙が鈍く光り《やがてコルドの目と鼻の先まで近づくと》、ちらつく舌からは涎が滴っている《コルドと決着をつける最後の言葉を放つた》。

「俺達が、幾万人を救うことを望むが故に、貴様を阻止する」

邪惡に開かれた口が降下して《“彼”は右手を伸ばして》、

「う、うああああああ！」

コルドを丸飲みするかにように食らいついた《コルドの頭を鷲掴みにした》。

コルドは雷に打たれたように一瞬仰け反ると、糸が切れた操り人形のように前のめりに倒れた。

音を出す物がなくなり、違和感があるほどの静けさが漂った。おもむろに“彼”が振り返り、ソミアのほうへ向きを変えた。それだけのことなのに、自分を助けてくれたと思っているのに、一瞬だけ脳裏に過ぎった推測が離れなかった。

“彼”がここへ到着した時点で考えられる推測が、今更ながらも私の思考を支配した。

“彼”が向きを変えて、自分のほうへ歩き出した瞬間、ソミアの鼓動は跳ね上がった。

考えから同伴してきた恐怖が募ってきた。違う、そんなはずはない、どれだけ自分に言い聞かせても、その考えのほうがり、振り払えなかった。真つ黒な両足が交互に動いている様をぼんやりと見ていた。黒いそれが近付いてくるだけでも、恐怖の推測を煽った。彼が目の前で立ち止まり、何の声もかけてこない時点で、私は確信した。

次は自分が殺されると。

真実の代言人 6 (後書き)

Go ahead, make my day.

「やれるものならやってみろ」

終盤の表現(コルドへのトドメ)はルビで重ねて表現したかったのですが、仕様でこんな形に。

限られた範囲で表現するって難しいです。

私は“彼”の秘密をいくつも知ってしまった。自分の情報を他言されないようにするには、殺すのが一番手っ取り早い。しかも、コルドの情報が正しければ、“彼”は今までに多くの人を殺しているのだ。殺人に対して躊躇があるなんて思えない。ついさっき目の前で鎧袖一触されたコルドのように、私も同じように殺されるに違いない。

縛られている両手足を使って、必死に後退った。だが努力は実らず、すぐに壁にぶつかった。それ以上は退けないと分かっている。足の動きは尚も退こうと止まらなかった。

逃げられない私を追い詰めるように、“彼”は私のすぐ目前まで接近してきた。“彼”の足が止まったので見上げると、“彼”の掌が近付いてくるのが見えた。

やっぱり、そうするんだ…。

予想が的中して、今までにない恐怖が込み上げてきた。

どんどん近づいてくる掌を凝視しながら、今まで自分を省みた。

どうしてこんな目に遭わなきゃいけないのか。本の数日前までは私はただの高校生だったはずだ。ちよつと成績がいくらいいの、何の取り柄もない私はどこにでもいるような子供だ。ジャスミンも、ローレンスも、アナリアも、今は普段通りの日課を過ごしているだろう。自分をライバル視してるっていうクラスの男子だって、今まで過ごしてきたような日常の中にいるんだろう。みんな同じ高校生なのに、どうして私だけがこんな所において、今まさに殺されそうになっているんだろう…。

眼前に迫った掌がコマ送りのように見える中で、脳裏に今までの

過去が断片的に思い起こされた。

両親と手を繋いでいる記憶、

近所の子供に泣かされて帰ってきた記憶、

父に勉強を教えてもらった記憶、

母にスープの味見を頼まれた記憶、

小学校で同じ女の子達と学食を囲んで食べた記憶、

ちよつと気になっていた男の子から大事なノートを取り上げられ
たけどあとで謝りながらちゃんと返してくれた記憶、

学年が上がるに連れて自分と周囲の成績に差が出てきたために浮
いてきた記憶、

仲の良かった女の子の友達も、気になっていた男の子も、嫉妬の
目つきで私を避け始めた記憶、

ロッカーの中が荒らされていたり机が使えなくなっていたりした
記憶、

逃げるように、飛び級を申請したり、進学先を遠くの学校へ決め
た記憶、

新しい学校で課題を提出する日にローレンスが最初に私のレポー
トを見て頭を下げ、それに続いてジャスミンとアナリアも頼み込ん
できた記憶、

その日の帰りにゲームセンターっていう場所へ初めて行っている
戸惑った記憶、

話し合いの時に気弱な自分の意見もきちんと聞こうと気を配って
くれた真摯なジャスミンの記憶、

時々人が怖くなって泣き出してしまいうつになった時に詳しく聞
こうとせず慰めてくれた親愛なローレンスの記憶、

食べ放題の所へ行くと呆気に取られるぐらいすごい量を食べる豪
傑なアナリアの記憶、

両親が笑っている記憶、友達が笑っている記憶、温かく、笑って
くれている記憶…。

「いや…」

会いたい。みんなに、会いたい。
会いたい。

嫌だ。

死にたくない…！

「いやぁーっ！！」

最後の抵抗と言わんばかりに、思い切り叫んだ。

「喧しい。鼓膜が痛い」

そんな言葉が聞こえると、項うなじに圧力が加わって押さえ込まれ、前屈みの態勢にさせられた。

「動くな」

手首に衝撃が走り、だがその代わりに手首が動かせるようになっていた。

項を押さえつけていた手も離れていて、上半身をちゃんと立たせる。自由になった両手をただ眺めていた。呆けている内に、“彼”は私の足首にかかっていた輪に刀を突くと、なぜかそれだけで外れた。

状況が飲み込めない間に、“彼”は刀を鞘に収めてそれを腰から外し、私の目の前に腰を下ろした。刀は自信のすぐ横に横たえさせる。

「さて、何から話されたい？」

“彼”は独り言のように私に話しかけた。

「どうして…」

私は“彼”とちゃんと向き合うことができず、俯いて、小さく言った。

「どうして、私を…殺さないんですか…？」

こんなことを普通は言ってはいけないのだが、そう訊く以外に訊き方が浮かばなかった。

「何故だ？」

「だって…あなたのこと、たくさん知っちゃったし…他の人に言い

ふらさないうちに、消したほうが、あなたのためって……」

私はさっき自分がどう思っていたかを正直に話した。馬鹿な女だと呆れられても、嫌われてしまっても、仕方ないと思った。そう思っているのは本当だから。ここまで告白してしまうと、“彼”と目を合わせることもつらい。

告白し終えた時には、私は全てを覚悟していた。何をされようと、もう逃げることも許されないのだ、と。

理由を聞いた後に“彼”が言ったことは、

「それだけか？」

たったその一言だけで、耳を疑いたくなる言葉だった。

自分は“彼”に恐怖心を抱いていた。真実か否かもしれない情報を信じ込み、“彼”を敵視してしまっていた。

それなのに、“彼”は全然大したことないかのような答えを出したのだ。

「それだけ、って……私、きつと触れちゃいけないことまで知ってるはずなんです……。そんな人は、あなたには都合が悪いはずから、だから……」

消したほうが、あなたの都合に合うんだ。

私の考え方が間違っているわけ、ない。

「……そもそも、俺はその遺伝子研究という実験の産物ではないのだから」

“彼”がぼつりと漏らした。

「そ、そんなの嘘です！ あなたは不思議な力を持っているじゃないですか！ それ以外に、何が有り得るっていうんですか！」

猛抗議した。もう、騙されたりしない。

私の態度を見て、“彼”は答えた。

「一度説明した筈だが、まあ良いだろう。元々俄には信じられない話だったのだから。それに、今はどちらでもどうでも良い事だ」

ここで、“彼”は話題の路線を外した。

「質問して良いか？」

「…はい？」

何を訊かれるのだろうかと待っていると、予想外の質問が来た。

「俺の本名は？」

「えっ…？ オ、オルパニル・コランダム…ですよね？」

名前はコルドが説明したのもあったから、間違いないはずだ。

「それは暗号名だと言っただろう。質問しているのは、俺が今の状態になる前の、日本での名前だ」

「…」

そんなの、知っているわけがなかった。だって教えてもらった覚えがないから。

かなり意地悪な質問だと思うが、答えようがない。だから黙るしかなかった。

そんな様子を見越してか、“彼”はまた訊いてきた。

「次。俺の血液型は？」

それも知らない。ABO式血液型は四種類しかないから、勘で答えても当たるかもしれない。だが今はそんなことをしてもいい状況ではなかった。

「…分かりません」

「当然だ。教えていないのだから」

「…ごもつとです。」

今の二つの質問で確信を得たのか、“彼”は長い溜め息を吐いた。「俺があのか園で教えたのは、俺達の情報の極一部だ。長話はしたが、質では軽薄だ。お前に教えていない事の方が遙かに多い。本当は情報が少しでも漏露しないように極力努めなければならぬんだが、あの程度を知る一知半解な人間は夥多に等しい。故に問題無いそれがお前を始末しない理由だ」

「でも…でも！ 今さっき、コルド達を殺したじゃないですか！」

そう言われて、“彼”は少し黙ってから、こう言った。

「殺していない」

「……………え？」

私は鳩が豆鉄砲を食ったような顔になった。

「だから、俺は奴等の誰一人も殺していない」

「だ、だって、能力使って、みんな起きないじゃないですか!」

「ボディガードは重傷で気絶しているだけだ。大腿骨や肋骨等が折れているだけで致命傷にはなっていない。コルド・キンベスターは記憶を司る脳細胞のシナプスを断絶させた。奴にはもう言葉や記憶を憶えていない。その影響が負担になって気絶している」

「信じ、られません…」

「詐欺や欺瞞は頻繁にしているが、今は嘘は吐かない」

「だって…」

私はさらに俯いた。

「あなたは私を、騙して、利用したん、です…」

コルドから話を聞いてから、ずっとそれが頭から離れないのだ。

“私”を疑ってしまった理由もそれなのだ。

事実である以上、許すことができなかった。

「では、その部分について話そう」

“彼”は改めてそう話し始めた。

「お前の態度の変化が気になって、先程お前の頭部に触れて、何を奴から聞いたのか読み取った。勝手に済まなかったが」

そこで息を吸って、次の言葉をはっきり言った。

「お前が聞いた話は、作り話だ」

「えっ!？」

思わず声が裏返ってしまった。それほど衝撃的だった。

コルドから聞いた話が、嘘?

じゃあ、騙したのは、“彼”じゃなくてコルド?

そこまで考えて、私は自分の思考を否定した。

駄目だ。すぐに信じちゃ駄目だ。

“彼”はまた私を騙そうとしているかもしれないのに。

「まず、俺とソミアが接触していた事実についてから話したいと思う。が、その前に、個人的に気に入らない部分がある」

「？」

“彼”は頭をがしがし掻きながら言った。

「何故俺が警察を前にして背を向けなければならぬ？」

—— “奴”を捕まえて連行しようとした時、“奴”は我々の隙をついて捜査官の手から逃れ、逃走した。

コルドは“彼”を追い詰める経緯をそう話していた。

でも、今ある記憶では“彼”は公園でこう言っていた。

—— 何故なら捕まるような常人ではないから。追い詰められたとしても、正面から反抗できる力も持っている。万が一捕まってもすぐ脱獄できるし、俺は元から警察とやらには干渉しない質だ。

この記憶と“彼”の今の発言が繋がるなら、コルドから聞いた話は矛盾が生まれる。

じゃあ…本当に…？

「虚実を明確化するには、記憶の真偽より、俺の能力についてもう少し理解してもらう方が早い。…確かに俺の能力は、念じさえすれば事象を実現できる。だが、何もかも自由に顕現できる訳では無い。例えば死者の蘇生は不可能だ。無闇矢鱈に顕現すると自然界の均衡に影響が及ぶ。それ故、非常な事態を除いて、殆どを自然界の法則や原理に基づいて能力を使用している。先程のコルドとそのボディガードも例外ではない。コルドは先の説明のとおり、俺の体内で発生する電気信号を用いて記憶中枢へ干渉し、奴の記憶の仕組みへ然るべき電気信号を送電することによって記憶を喪失させた。ボディガードは壁を半重力によって地球の重力から解放することによって、同時にその自転から影響されなくなる事象を利用して攻撃した」

“彼”は、ただ淡々と説明していく。

「本題に入る。今回は他人の記憶の捏造だ。自分の記憶を相手に見せる事なら可能だが、他人にその者自身らしい記憶を偽造する事は出来ない。何故なら、俺の能力で感情を含ませる事は出来ないからだ。…人間は外部から情報を記憶化する時に、ある程度の感情を抱く。好感、恐怖、親近感、嫌悪感、懐かしさ、苛立ち。同じ風景で

も、人によって感じ方は異なる。…お前もこの数時間の間に様々な風景を見て、そこには何らかの感情が伴っている筈だ。だが俺はお前の感性を知らない。好物も、好色も、何も知らない。そんな俺が対象の人の記憶らしい記憶を植え付けても、お前にとってはいずれ違和感が生じるだろう。つまり、あたかもお前自身が感じたように錯覚するほどの精巧な記憶を、俺が秒速で偽造する事など、塵ほどの可能性も無い。これが証明だ」

“彼”は言い切った。

確かに、理屈でいえばその通りだ。印象に残る思い出って、その時の自分の気持ちが強ければ強いほど記憶に残るものだ。思い出っていうには早いかもしれないけど、“彼”といった時は、やっぱりちよつと怖かったり、ちよつと嬉しかったんだから。

でも、それだけじゃ納得できないし食い下がれない。

「…それだけですと、まだ、あなたの凶悪な人格を否定できてません…」

自分の言葉が単調で、声が尻窄みしていた。

「分かった。では次に、俺自身について教える」

“彼”は一呼吸置いてから、話し始めた。

「正体はともかく、俺が過去に起こした行動については、表面上偽りはない。…様々な犯罪を犯した事がある…日本を滅ぼした…過去に力を暴走させた…幾人もの人間を殺した…。それらは全て事実だが、真実とは差異がある。これが答えだ」

私が理解しきれるようにか、一つ一つ区切って説明している。

「順序通りに白状すれば、最初は力の暴走に関してだ。…俺がまだ未熟だった時、ある人物と関係を持った。それから暫く経って、あるきっかけで、その人物に裏切られた。俺は感情に任せて、能力を爆発させてしまった。それだけだ」

“彼”はこんな内容の話でも無感情に話していく。

「次に、日本の滅亡だ。日本は少子化の影響で、確実に総人口が減少していた。また、二〇四四年に世界で一つの事件が起きた。知っ

ているか？」

私は記憶を辿った。確か、試験にも出たはずだ。

「二〇四四年……、……！ 原油の枯渇！」

「そう。新エネルギー開発が渋滞していた時に、それは起こった。日本は使用する石油のほぼ全体を輸入に頼っていた。自動車の燃料や衣類の素材、飲料水のプラスチックボトルなど需要が求められていた時に枯渇した。つまり第三次石油ショックだ。それからの日本では惨劇が続発した。貴重な石油を求めて人々は血眼になり、相互を敵対する社会に変貌していった。石油の価格は暴騰し、入手できなかった者、特に乳幼児や高齢者は、冬が訪れている間に凍死していった。また、石油を巡る争いが絶えなくなり、相手と殺し合う事も珍しくなかった。国としての経済は暴落し、日本は世界から見限られた」

私はある箇所が気になって質問した。

「…石油がなくなっただからって、冬に凍死するんですか？ その時代ならエアコンとかの空調整備機で凌げると思っんですけど…」

そう問われた“彼”は、僅かに俯いた。

「使えなかった」

「え？」

「石油ショックが起きた年の冬期に、選_よりに選ってその年に、…巨大地震が起きた」

「ッ……」

私は、もう言葉に出せないほどのショックを受けた。

「二十一世紀初期に予測されていた天災が、冬を迎える直前に襲った。都市直下型で、マグニチュードは9.4だった。ほんの二十秒間だけ揺れただけで、二十世紀に建立された建物は全壊・倒壊し、数十万の人が亡くなり、帰路遭難者が溢れた。首都側の経済は完全に停滞し、生産力など、マッチ一本作ることさえ儘にならなかった。震源地から離れた都市や外国からの支援のみでは賄いきれず、夜に屋根を持たない者は次々と息絶えていった。万能な栄養剤と偽称さ

れた麻薬も大量に消費された」

「…だから、日本を滅ぼしたんですか…？」

「事実はそのだが、即座に決行した訳ではない。十年程待った。復興してくれると期待して、猶予を構えて、待った。だが何も変わらず、復興の目処が立たないまま、劣悪な環境と社会だけが蔓延した。十年間の間に、国際首脳会議で日本の対処について議論されたくらいだ。地震や二次的被害で日本の政治家の殆どは亡くなっていったから、勝手に進められた。日本に関する議論は激しく対立したが、過去に怨恨を持つアメリカやロシアや中国が放置派に付いたのが決定打だった。中には、俺達に顔が利く首相が、日本を消してくれと直接頼んできた者も居た。この問題は、ゲイブディパーソーズでも議論された。復興に俺達が協力するのは容易い。滅亡させるのもまた同様だ。だが、それでは自然現象に逆らう。地震が起こった結果でそうなったのなら、そのままいささるべきだ、と。そして最終的に、“放置”で議決した。数年後、日本の人口の三分の一が亡くなり、最早国として動いていない状態になった。俺は、その国に生まれた者として、仲間に自己申告をした。結果、申告通りの殲滅を決定し、二週間で滅ぼした」

「たった、二週間…？ どうして、そんなことが…」

「高分子蛋白質の病原菌を大量に造り、その年の台風に混入させた。その抗原はその台風の雨に濡れた者に感染すると条件を課している。接触到因る皮膚感染も可能にした。潜伏期間は一週間で、発病すれば確実に死亡する。お陰で勤勉な都心及び近郊の人間はほぼ全滅した。台風に敏感な警戒心を持つ沖縄県の間人は殺し損ねたが、生き残ったのなら仕方がない」

これが真実なら。

これが“彼”なら。

「じゃ、あ…コルドから聞いたのは…」

「全くの出鱈目だ。お前から俺への信頼を喪失させる為に誣告しただけだろう」

真実の代言人 7（後書き）

プラスチックボトル：

日本でいうペットボトルの、欧米諸国における通称。
ペットボトルは和製英語です。

“彼”は事の真実を明かしてくれた。

「コルド・キンベスターは軍事兵器開発会社を裏で経営している人間だ。何かで一儲けしようと謀り、前々から策略を実行していた。それが、イギリスとアイルランドの戦争だ。アイルランド市民がコルド・キンベスターの指導によって領土区域に関して起訴し始めたのと同時に、コルド・キンベスターは様々な悪行をし始めていた。窃盗、放火、強盗、拉致、殺人、その他。奴の表の肩書きは警察庁幹部だから、情報操作は容易い。そして、最後に起こしたのが『^{イシヤ}狂乱者』の悪用だった。断言できる理由は、仲間に因ると、ハツキングされた軍事基地から逆探知に成功したら、侵入者はアイルランドからだと判明したからだ。更に三十年以上も前に窃盗された『^{チェツ}阻格者』も利用していた。…もっと早く逮捕できれば良かったんだが、奴はここ以外にも開発所を経営している。また、開発所以外にもコネを持っていて、時には一般企業に隠遁していたこともあった。逃げ足が早くて見つけるのが困難だった」

「だから…私を、利用したんですか？」

「解釈の仕方に因るが、少なくとも俺はそのつもりはなかった。俺と関係すること自体が危険を招くから、公園から尾行されていたのに気付き、お前に万一のことがあっても迅速に救助に急行できるように、そういう手段に出ただけだ。コルド・キンベスターの居場所を突き止められたのは、全くの僥倖だ」

「じゃあ、もとから“彼”はそのつもりだった？ 本当なら、“彼”が約束してくれた言葉も繋がるけど…」

でも、まだ疑問は残ってる。

「でも、危険だからって、勝手に重要な人を襲ったりなんかしたら、大変な問題になります！」

「そうならないように、一国際刑事警察機構（ＩＣＰＯ）から生け

捕りにすることを条件に逮捕許可状を申請してきた」

そう答えて、“彼”はジャケットの懷から一枚の紙を取り出した。
「これが証拠の逮捕状だ。偽造ではない」

そんな…。じゃあ、私は、私は…。

自分が犯した愚かな過ちに気付いて、どうしようもない気持ちになつてきた。

“彼”は長い説明を終えて息を吸ったあと、こう繋いだ。

「お前と別れる前、必ず戻ると約束した。約束したからには、守るつもりだった」

“彼”が急に右手を伸ばしてきたのでびっくりして、受けるか避けるか迷っているうちに、自分の左の頬に触れた。その手は、思っていた以上に、温かった。

すると、淡い光が発せられて、腫れてしまっていた頬を治していく。

「無事で良かった」

その言葉が心に響いてしまって、もう我慢できなかった。嬉しさと、自己嫌悪感と、感謝と、後悔と。いろんな思いが次々と溢れてきて、涙が止まらなかった。自分で抑えることができず、声を上げて泣いた。泣かないと、耐えられなかった。

どうしてこんなことになってしまったのだろうか。“彼”は…オルパニルは初めから自分を助けようとしてくれていた。危険を顧みずに、私の所まで来てくれた。オルパニルには何かやらなければならないことがあるのに、それよりも私を優先的に行動してくれた。

なのに、私はなんと言った？

来ないでと、拒絶してしまった。

コルドの言葉に騙されて、オルパニルを敵視してしまった。

なんでコルドの嘘を信じてしまったんだろう。なんでオルパニルを信じなかったんだろう。信じていれば、コルドの言葉なんかまともを受けずに、彼を待っていれば良かったのだ。そんな話は嘘だときっぱり耳を貸さなければ良かったのだ。なのに、私はコルドの言

葉を信じてしまった。オルパニルとの時間をきっぱり投げ捨てたのだ。でも、オルパニルは私との約束通りに来てくれた。約束を守ってくれた。

裏切ったのは、私のほうだ！

もしあの時オルパニルが殺されてしまっていたら、私はどうなっていたのか。いや、私だけじゃない。私の家族や友達、クラスメイト、もっと大きく見れば、私の国の人達、そのみんなも巻き込まれていたかもしれない。コルドに本当に利用されて、自分の街や国にとっても迷惑をかけていたかもしれない。いや、迷惑なんかじゃ絶対に済まなかった！ 両親や友達を危険に晒すことになったかもしれない！ コルドの思い通りに、悪い方向だけに進んでいたら、取り返しのつかないことになっていったんだ！ そんな悪い可能性があった道を、私は自分で選択したんだ！ 自分から邪悪の道に荷担したんだ！ 後先など何も考えずに、ただコルドの言葉を鵜呑みにして、母国を危険に晒すところだったんだ！ 悪いのは自分だ！ 自分が！ 全部！ 全部自分のせいで

頭の後ろを押されて、オルパニルの胸に引き寄せられた（？）。

突然のことに反応できず、困惑していた。バランスを崩して倒れてしまったのだろうか。いや、頭の後ろから押されているのを感じた。目の前には彼の胸板もあった。私はオルパニルに抱きしめられているようだった。わけがわからない。彼の考えがわからない。でも、彼に酷いことをした自分がそんなことをされる資格なんてないから、腕を突き出して離れようとした。

でも、身じろいでも頭の後ろの手は添えられたままだった。それが彼なりの“許す”の代わりの行動だと思えた。

彼の寛大さに安楽して、何よりも彼の体は温かくて、その温かさで自分を包んでくれている。

それだけで充分だった。もうまともに考えることもできず、思いのままに、彼の胸に縋って泣き続けた。

泣き続けている間もずっと、オルパニルは私の頭を撫でてくれた。私はごめんなさいと言った。ごめんなさい。ごめんなさい。彼は私の頭を撫でてくれた。泣いて許してもらえないわけがない。私よりも、私に拒まれた彼のほうがつらいに決まっている。でも、彼はこんな私を抱き締めてくれていた。それが、どうしようもなく嬉しかった。

どれくらい経ったのか分からないが、自分ではかなり長い時間が過ぎてから、ようやく涙が収まった。

オルパニルの体から離れて、でも間近から、彼の顔を眺めた。

そして、“それ”を見た。

…どうして、なんで、でも、そんな。

「ソミア？」

名前を呼ばれたようだが、聞こえないくらいに惹きつけられていた。

「…きれい」

「？」

オルパニルが瞬きをした。そのせいで潤いが増したのか、より輝いて見えた。

「オルパニルの眼…すごくきれい…」

私の感想に疑問を抱いたのか、オルパニルは壁に鏡のような反射率を与えて、自分の眼を見た。

その右眼は、文字通り、輝いていた。茶褐色だった虹彩と黒だった瞳孔は今、半透明ないし不透明な、ガラス光沢を持つ黒に染まっていた。光を受けると、白・黄・紅・褐・緑・灰・青などの色が散る。

まるで宝石みたいだ。

今まで片目しか染まっていなかったのは、彼の精神状態が不安定だからと言っていた。今両目が染まっているということは、彼の心は微塵も揺らいでいないということなのだろう。そして、両目が染まると、能力を使う前に行く“呪い”^{まじな}が必要なくなるんだ。

オルパニルはその眼を確認すると、少しうんざりしたようにサングラスを外した。

彼と向き直ると、二つの目の輝きが見て取れた。彼の素顔も、初めて見た。やっぱり、どこから見ても何百年も生きているとは思えないほど若く、だがしっかりした顔立ちだった。

「あの、いいんですか？ 外しちゃって」

「露顕してしまったら、隠匿している意味が無い」

本当に、彼は素っ気ないけど、潔かった。

サングラスを仕舞うついでか、オルパニルはポケットから通信機を取り出した。

「無事に目標を確保したことを仲間に連絡しておく」

“連絡”という言葉に、私は何かに引っかった。混乱から醒めたばかりだが、必死で思い出そうとする。

確か、そう、そんなに前じゃない、むしろ、ちょっと前くらい……。そうだ。

「オルパニル！ 早くここから逃げないと！ コルドが呼んだ応援部隊が来ちゃう！」

思い出した。コルドはさっき、応援を呼んでいたことを言っていた。あれからどれくらい時間が経ったのか分からないが、応援が到着してもおかしくないくらいの時間は経っていると思う。

心配顔のソミアとは対照的に、聞いたオルパニルはこれ以上ないと思えるくらい完璧に動じなかった。

オルパニルは体をずらして、彼の後ろ、出入り口を指さした。出入り口という名のエレベーターの乗降口なのだが、さっきオルパニルが風で煙を追いやったせいか、奥がよく見えた。そこは……あれ？ なに、あそこ？ どうしてか、どこをどう見てもそこら中がボロボロだった。というか、エレベーターの箱自体がなかった。

頭上にクエスチョンマークを満載させながら、答えを求めてオルパニルのほうを向いた。すると彼は答えてくれた。

「ここの施設は、一旦最下層まで降りてから、別にある特別なエレ

ベーターで上に上がってこの部屋へ辿り着く。つまり、この部屋は最奥にして袋小路だ。先程エレベーターを完膚無きまで破壊し、周囲の装置も破壊した。後援が来るのは、恐らく一週間後だ」

：あ、だから、オルパニルが現れる直前に部屋が揺れるくらいの大きな音がしたんだ。

なんだか、そんな無茶さも慣れてきてしまったのか、深く考えずに納得してしまった。心の中で自分に拍手。

オルパニルは立ち上がり、私から離れながらポケットから通信機を取り出した。誰かに電話をするのだろうかと思したが、通信機を使う前に、彼が私のほうを向いた。

「ああ、ついだが、一つ忠告しておく」

「？」

「女の子が“殺す”や“消す”の様な、殺生の意味合いを持つ言葉を安易に使うな。物騒だ」

そう言い置いて、オルパニルは通信を始めた。

：うん。ごめんなさい。

言えない分の謝礼は胸中で自然に漏らしていた。

オルパニルは、見た目は愛想が悪いかもしれないけど、根はいい人なんだと思う。そうじゃなければ、仲間への重要な連絡を後回しにしてまで私に説明したりしない。でも、それは彼と充分に親しくならないと分からない部分だ。この世界から恨みを買ってしまうのは、彼が人との交流に消極的なだけじゃなくて、普段からの態度が素っ気なかったり無表情でいたりするから、誤解を招くんじやないかと思つた。私たちは普通、表情なくして人と交流することなんてない。顔だけじゃなくて、声だって変わる。嬉しかったら笑って声が高くなるし、悲しかったら曇って声も低くなる。そんなふうの変化を彼は持たないから、その様子に大抵の人は驚いて近づきづらくなるんじゃないか。彼だけでなく、私たちも互いに近づこうとしないから、当然の結果として彼は孤独になっているんじゃないか。

仲間へ連絡する背中を見ていると、不意にそう思えるのだ。

「……もしもし、俺だ。ッ！……………。お前は報告しなかったら文句を言うだろう。……………。多忙なのは想像できるが、俺の報告を優先してくれ。代わりに現場には俺が出撃する。……………。ああ。」

——報告、約一時間前に目標のコルド・キンベスターを確保。状態は、ん？……………。遅れた理由は必要無い。状態は急性脳神経ショック。生命に別状はない。個人的には放置的な自己覚醒を希望。他、男女数十名と、最奥の部屋の男性二名が重傷。こちらも生命に別状はないと思われるが、連行の際には医師の同伴を希望する。可能ならば、ロククライマー数名の同伴も希望。前例のない難儀な救助活動が予想される。以上だ。質問は？……………。だから回答拒否」

そのような報告を伝えて、オルパニルは通信機を切ろうとした。だが、寸前で何かに気付いたように慌てて付け加えた。

「一つ言い忘れた。最奥の部屋で、報告した三名の他に少女が一人居る。救助隊の方で保護するよう依頼してほしい。以上だ。通信終了」

今、何て…？

この部屋には今のところ“少女”に該当する人物は自分しかない。救助なら、オルパニルがしてくれたのではないのだろうか。なぜ自分の身柄を救助隊に委任する必要があるのだろうか。

彼の一言が、自分と彼との間に壁を作り始めているような気がして、予告もしないで彼がどこかへ行ってしまうような気がして…。

「オ、オルパニルっ！」

不安になって、自然に彼の名前を呼んでいた。

通信機を仕舞ったオルパニルは、半分だけ私のほうに身体を捻って、頭だけで私を見た。

…どうして、戻ってきてくれないんですか？

「お前はもう大丈夫だ。直に救助隊が到着して、保護される。自宅に護送されて、明日には元の生活に戻るだろう」

オルパニルは刀を抜いた。

「そして、俺の事情で危険な目に遭うことも二度と無くなる」

私は彼が次に言う言葉を予想した。

「色々と、危険な目に遭わせて申し訳なく思う」

同時に言わないでほしいと願った。

「ソミアに、人間並みの幸福が降り注ぐことを祈っている」

しかし、願いは届かないと悟った。

「さようなら」

オルパニルは刀を垂直に構えた。

嫌だ…。

私、まだお礼も満足に言えてない。

私、いろんなことをしてもらったのに、私からは何にもしてあげられてないのに。

彼にひどい思いをさせただけで、このままだなんて…。

こんなところで別れるなんて、絶対に嫌だっ！

オルパニルが能力を発揮し、刀から視界を奪われるほどの強烈な光が発した。そして、弾けるように光が霧散すると、そこに少年の姿はなかった。

真実の代言人 8 (後書き)

お気づきになりましたか？

今までのソミアの心理描写が、すべて伏線だったということ。

願う者 1（前書き）

勝手に申し訳ないのですが、この章だけ第三者目線での描写になります。

シミュエーションの関係で、こちらのほうがいいかと思い、一時的に変更した次第です。

わけがわからないでしょうけどご理解いただき、引き続き楽しんでいただけると幸いです。

なお、この章には残酷な描写を多々取り入れる予定です。苦手な方は、次章の更新まで待っていただくか、相当な覚悟を決めてお読みください。

願う者 1

第六章 願う者

夜が白み始めたばかりの空を背負い、曙光でその身を現した野草達が、静かに、確かに、その場に群生していた。所々に樹木や池と共存しながら、野は地平線の向こうまで大地を覆っている。

珍しく凪いだ草原に、空から光の粒子が流れてきた。その粒子は地面付近まで辿り着くと螺旋を描き、何かを形成そうと収束していく。

粒子の挙動が制止すると、そこには少年が降り立っていた。

報告を受けていた地点に予定通り到着したことを確認したオルパニルは、まだ混乱状態に陥っていない事に安堵し、同時に拍子抜けした。報告では、緊急発令が敷かれてもう大分経つらしく、始まっていることを前提に構えていたからだ。

だが彼には、今は視認できる範囲に居なくとも、いずれこの場所が渦中へと変貌する事が予想できていた。当然ながら、今から今後の対処を考えるのが自分の手段だ。しかし、彼はその予定を不可抗力により、今は置いておかざるを得なかった。

「やってくれる……」

オルパニルは正直落胆したい気分に襲われながらも何とか堪えて、振り返った。

そこには、オルパニルのジャケットを辛うじて掴んでいる少女の姿があった。先刻の移動手段は発現に至極の集中力を要求していたため、自分の体に触れていた彼女も範囲内として連れてきてしまったようだ。

恐る恐る面を上げたソミアは、非難すらも覚悟を済ませたような顔色をしていた。

「どういづつもりだ？」

オルパニルは飽くまで当然のことを尋ねた。

彼にとつては、ソミアが無理をしてまで同伴を望む理由が思い当たらなかった。自分の非行を詫びたし、決別の言葉も伝えた。さらに理由を並べれば、これから先は安全が保障されているとはとても言えない現場であるので、どんな手を行使しても連れて来たくはなかったのだ。なのに、何故この少女は追跡してくるのだろうか。

「だって…」

ソミアは蚊の鳴くようなわずかな音量で答えた。

「あんな、急に別れるなんて…まだ、何も…嫌だったから…」

オルパニルは心底呆れてしまった。何の為に自分が配慮したのだろうか。

通常なら、説得するか力尽くても元の場所に連れ戻すが、こうなってしまうては仕方がないので覚悟することにした。

オルパニルは通信端末を取り出して、連絡した。

「もしもし。前言撤回だ。最奥の部屋で確保するのは大人三人だけでいい。以上」

そう言い終えて、通信を切った。

「オルパニル…？」

「普段なら問答無用で帰らせるが、もうそんな暇は無い」

オルパニルは真つ平らな口調でソミアに告げた。

「俺から離れたり、勝手な行動をしたら、死ぬと思え」

彼のそんな忠告にソミアは疑問を持った。もう裏切ることは許さないということの言い換えだろうか。

だが、逃げたとしても逃げ切れるわけがない。自分の耳には彼の言う発信機能を備えたイヤリングが付いているから、どこへ行こうとも居場所は知られている。そもそも、こんな広い平野から逃げようとしたってすぐに見つか…

視界の片隅で、一条の光が光速で横切った。

何かと思い、目を凝らすと………また横切った。

オルパニルなら知っているかもしれないと思って訊こうとしたが、
「動くな」

短い命令を発すると同時に、彼は右腕を横に薙いだ。

直後、オルパニルとソミアの目と鼻の先で爆発が起こった。ソミアは途轍もなく驚愕したが、なぜか爆風は吹かず、爆音も聞こえなかった。

「い、今の…なんですか…!？」

「ただの攻撃だ。地平線を見る」

従順に地平線を見ると、小さいが、緑色と茶色の平原には有り得ないような色や大きさを持つ物が沢山あった。よく見ると少しずつこつちへ近付いている。反対側を見ると、殆ど同じような光景を見た。

まだ状況が読めないソミアに、オルパニルは包み隠すことなく極力簡潔な言葉で説明した。

「ここは戦場だ」

時間が経つにつれて、軍団は接近し、その規模が遠目ながらも見る事ができた。最前列には歩兵だと思われる小さな影が夥しい量を保ちながら行進している。まだ遠いので詳しくは掴めないが、その動きは統制されていて尚、動きも速い。歩兵軍団の後ろには、それらを援護するように巨大な戦車が続いていた。いずれも浮遊しているその姿形はいくつか分かれており、最も多い車両の中に一定間隔でより大きな車両が配置されている。小型のもの、大型のものそれぞれに機銃や主砲、特殊兵器の投下口などが共通して搭載されているが、大型のものは小型のものより数も大きさも勝っている。反対方向を見ると、ほとんど同じような黒い塊がこつちに向かっている様子が見て取れた。このあたりに知識のないソミアでも、遙か彼方から止まることなく進軍してくる黒い団体からさっきのようなものを感じ、恐怖が募った。

大きな戦車は進軍の途中からでも砲撃している。発射されたレーザーはその威力を減衰させることなく空間を滑り、敵対する軍団の

一部へと吸い込まれていき、着弾した場所で威力相応の爆発を起こす。だが相手はその夥しい数の勢力を怯ませることなく、なおも接近し、応戦する。

「今までは政治家同士が協力し、市民を押さえ込み、何とか小康状態を保持していた。だが『^{レイジャー}狂乱者』の影響で市民だけでなく政治家までもが激昂した。コルド・キンベスターの策略通り、無事に国同士の戦争が開戦した」

近くでまた爆発が起きたが、怪我も何もない。オルパニルは自分とソミアを包む程度の大きさの球体で覆い、光は除いて、空間の内側と外側を隔絶している。その結果、科学技術では到達困難な防壁を生み出すことができた。

「長引くと面倒だ。さっさと終戦させるつもりでいる」

よく見ると、軍団の上の空にも影が見える。陸上だけでなく空軍部隊も出動しているらしい。戦闘機のようなだがいくらか小型のものが既にオルパニル達の上空で交戦している。陸戦軍団のほぼ上空には小型のものよりも何倍もの巨体をもつ飛行戦艦が数機控えていた。相手の軍の小型戦闘機がその射程内に入って撃墜を試みているようだが、ことごとく返り討ちに遭っていた。

一体どのくらいの兵力を投入しているのだろうか、ソミアは数値的な相対的相性と単純な数量からくる兵器の驚異を考えていた。どちらもほとんど優劣のない質と量を備えており、どのようなきっかけで戦況が傾くかは予測が難しい。それらの兵力が全力で激突したら、このあたりの土地はどれほど荒廃してしまうかも予測できない。そして、身の安全を保証できない境地へ足を踏み入れ、自分はこんな所にくるべきじゃなかったのだと今更ながら自覚した。

「伏せている」

オルパニルが指示し、ソミアは疑問を解き明かすよりも言われたようにするのがこの場にふさわしいと思い、身をしゃがめた。

彼は、終戦させるつもりでいる、と言った。それはどういう意味なのか。終戦する条件は決まっていないが、相手国が降伏する、宣

言や条約を受諾する、停戦・休戦状態から鎮火する、という処理が一般的だ。両国の首相に取り入って、終戦を求めるのだろうか。まさか両国の戦力とも全滅させるなんてことは考えてないことをソミアは切望した。

オルパニルは左手に握る刀を右腕の横まで引いてから、体の捻りと回転を利用して真横に薙ぎ、刀身を一周させた。すると、刀身の通った道が純白に光ながら宙に留まっている。

「――駆ける」

オルパニルが唱えながら右腕を払うと、光の輪が一斉に広がり、その半径を広めていく。光は最初に留まっていた高度を維持し、地形の段差や凹凸に対応してその身を湾曲させながら、着実に地を滑っていく。やがて部隊に接近し、突っ込むと、光に触れた兵の部分が切断された。歩兵は歩行能力を失い、底部を破壊された戦車は浮遊できなくなり、陸上部隊の進行は停滞した。

オルパニルは光が部隊に衝突していない頃にも次の行動に移っていた。刀を天空に向かって掲げ、唱えた。

「――進れ」

刀身から無数の光弾が生まれ、四方八方に弾けた。光弾はそのまま直進せず、まるで意志があるかのように一つ一つが自律し、無秩序に空へ向かっていく。向かう先は、先程の攻撃の効果範囲外だった空軍部隊だった。光弾は高性能ミサイルを凌ぐ速度で飛翔し、光弾に比べれば空に漂流しているようにしか思えない空軍兵に向かっていき、衝突した。空軍兵は回避などできず、その身を碎かれた。小型の戦闘機は瞬時に塵となるか蒸発し、一撃で撃沈しなかった機体は着弾し貫通してから往復してきた光弾に再度碎かれたり、複数の光弾の餌食になった。

空軍兵を食らい尽くした光弾は標的を再確認し、まだ死に損なっている陸軍兵のいる地上へ向かっていった。両方、均等に分かれた光弾等は、二分していてもその数に弱体化の印象はなかった。雨のように降り注ぎ、ただの一つの影も残すことなく、完膚無きまでに

殲滅した。

「起きて良い」

オルパニルが言い、ソミアはやつとまともな態勢になれた。

改めて眺めた眼前の光景に、彼女は言葉を失った。

先程小さく見えていた鉄の軍団は今や一気も見当たらず、その代わりに大量の潰れた金属とそれらを原料に燃え盛る広い炎が見えた。
「ここの作業は終えた。仲間からの連絡を待つ為に、無期限で待機する」

「そんな！ どうしてこんな酷いことをするんですかっ！」

ソミアは本気で怒った。

だが、オルパニルにはその怒りの理由が見つからなかった。

「なんで……！ どうして！ そんなふうに、何の躊躇いもなく人を殺せるんですか！？ あなたには慈悲の心もないんですか……！」

ソミアにとつてはオルパニルの取った行動が許せなかった。さっきまで見えていた黒い軍団は、両国のどちらかに所属する兵隊だということとは分かっていた。兵隊ということは、彼らは人間だ。戦車のような機械と違い、きちんと血の通った人間がいたはずだった。歩兵にしる戦車の中にしろ、人がいたというのに、彼はそれを何の躊躇もなく薙ぎ払ったのだ！ あれだけ人を殺すことに責任や後悔、そして極力それを避ける志を見せてくれたのに、状況が異なるだけで簡単にその志を投げ捨てた。彼の行動には理解を拒む気持ちすら生まれていた。

ソミアが非難すると、オルパニルはソミアの背後に回り込み、後頭部を鷲掴みにした。

「な……なんですか？」

彼の行動について訳が分からないので、その手を振り払おうとした。だが、しっかりと握られているので離れなかったし、彼もその手を離そうとしなかった。

「よく見る」

ソミアは渋々言う通りにして、大軍がいた場所を向いた。すると、

視力が上がり、遠くまで鮮明に見えるようになった。オルパニルがソミアの視力を上げたのだ。

「何が見える？」

視力が上がって先負まで見えるようになった光景で、ソミアはそれを見た。

曖昧だったものが明瞭になったそれを、見た。

黒煙を上げ、激しく燃え上がる炎の中に見えたのは、ガラクタになった、金属、金属、金属、金属…

（あれ…？）

その光景には、何かが足りなかった。

足りなかったものは、さっき自分が彼に咎めたものと、発覚した。

「人が…いない…？」

ソミアは自分が嫌悪していた結果とは裏腹の現場を見せられ、訳が分からなくなった。

「頻繁に誤解が生まれているとの風聞を耳にするから、この際に覚えろ。ここは戦場の前線で、どちらの軍も最前線部隊だ。前線部隊はその役割故、犠牲が最も出る。犠牲の多発が予期できる場所に人間を投入するのは非人道的だという考えから、前線部隊には人間を含みせずに、遠距離から操作するのが主流だ。編成される兵隊は全て戦闘用の機動ロボットや戦術AIを搭載した現場指揮役の兵器となっている。戦争に人道も非人道も無いかも知れないが、もう一度言う。人間は居ない」

オルパニルが手を離すと、ソミアの視力が元に戻った。

「前線部隊は、一見犠牲のような役割だが、自分の国と敵対する国の境目で戦う為、責任は重大だ。兵をここに集中すれば圧倒的に侵攻できるが、人間が居る本部が手薄になる。かと言って、本部の周囲に兵を集中させると、前線部隊の兵力が減少し、相手に突破される。だから、前線部隊は極めて重要な配置の一つでもある。その重要な配置を双方とも同時に全滅させると、軍の司令塔は予想外の事

に動揺し、戦況は混乱する。勿論、前線部隊に役割の重要性を軽薄化させているなら作戦の続行は可能だが、一先ずこの部隊から監視を離れさせるという意味では両国相互に利得でもあり損害でもある。戦略に多大な影響を齎した^{もたら}のは間違い無い。休戦するも良し。終戦するも良し。どう転ぶかは、奴等次第だ」

オルパニルは全てを知っていた。知っていたからこそ、戦場で奇抜な行動をした。はつきりとは言っていないが、彼はこの戦争を止めようとしている。それは彼の言動からも察することができた。

人間の心理を読み、あえて有り得るはずがない現象を起こして混乱させた。戦場で最も重要な点を正確に突き、戦争の理論を利用して根本から崩壊させた。そうすることによって、戦争の渋滞を促進させた。

そして最も驚くべきことは、オルパニルの能力の本領発揮だった。今まで街の中で発揮するために加減されていた効力に一切の容赦が除外され、二個大隊を瞬滅させるほどの力を目の当たりにした。連絡が入って通信に出ているオルパニルを眺めて、ソミアは心中では卒倒していた。

通信を終え、オルパニルが振り返ると、即座に言った。

「用事が出来た。次の場所へ移る」

オルパニルは刀を構えて瞬間移動の準備を始めた。しかし構えたまま、しばらく硬直していた。どうしたのだろうとソミアは思っただけで、待っていると、彼がまた言った。

「早く俺に捕まれ。捨て置かれないのか？」

オルパニルに指摘されて、やっと理解した。ここへ来るのと同様の方法で移動しようとしていたのに、ソミアはオルパニルに手段を任せてしまい、直立不動を決め込んでいた。それを彼は指摘したのだ。

「あつ、す、すみませんっ」

「しっかり捕まれ」

ソミアは赤恥を感じながら、オルパニルに捕まろうとした。

だが、この期に及んで、悩みが生じた。

（どこに捕まればいいんだろう？）

ここへ来た時と同様に、オルパニルの服に捕まればそれでいいのだが、彼の今の台詞が頭の中で無視できなくなっていた。

しっかり捕まれ、と言ったのだ。

（服じゃ心配だし…。首に捕まったら怒られるに決まってるし…。体なら掴みやすいけど、それじゃ抱きつく形になっちゃうし…。刀はやらなくても結果は見えてるし…）

ならば、多分そこしかなかった。

ソミアは赤恥を覚悟して、この前のように、オルパニルの左腕に捕まった。かなり恥ずかしいが、この際そんなことは言ってられない。

オルパニルはソミアが固定していることを確認して、集中力を高めた。能力を発揮すると、刀身が光るのを合図に、二人の体を粒子レベルにまで分解していった。発生する熱エネルギーを利用して、発散させる反動によって飛翔する。粒子によってトンネル効果を持ったことも活かし、オルパニルはソミアを連れて目的地へと向かった。

願う者 2

(前ページより)

「將軍！」

「どうした？」

「報告します！ 国境地点の前線部隊が、何らかの原因によって全滅しました！」

「なん…だと！？ 一体どういうことだ！ あの兵力がなぜ全滅するのだ！？ 向こうが新兵器でも投入したとでもいうのか！」

「いえ、お言葉ですが、全滅したのは我が軍だけではないのです」

「何…？ どういう意味だ？ 説明しろ」

「はい。前線の開戦から五十一分後、何らかの攻撃を受け、我々だけでなく敵国の陸・空軍も全滅したのです。わずか、三十六秒で」

「さん…！？ 不審な点はないのか？」

「敵軍が特殊な兵器を使用した痕跡は感知しませんでした。ですが、問題時間の四分前に、現地のレーダーや探査衛星から、両軍のほぼ中間地点に二つの反応を捉えています。まだ分析の途中ですが、情報欠片を掛け合わせると、どうやら人間ほどの大きさのようです」

「人間ほど？ …分かった。引き続き分析を続けてくれ」

「作戦の変更は致しますか？」

「いや、必要あるまい。兵力が激減したのは我が軍だけではないのだから、作戦に変更なく、敵の本部を両側から挟み撃ちにする。工作部隊は派遣しているな？」

「はい。順調に侵入を成功し、既に行動を開始しています」

「なら、問題はないさ。あとはこちらで敵軍とのんびり交渉でもしていればいい」

「はっ。では、失礼します！」

「…。人間サイズの闖入者、か…。まさか奴らが来ているのか…？
だとすると、少々話が読めなくなりそうだな…」

ソミアとオルパニルは目指していた目的地へ到着した。

ソミアが、怖くて閉じていた目を開けると、そこは高層ビルの屋上だった。見慣れない町並みなので、どこの街なのかだけでなく、どちらの国なのかも判別がつかなかった。

「ここは？」

「アイルランドの南部だ。ここで一騒動が起きた」

「…？ それは何ですか？」

オルパニルがソミアのほうを向いて説明しようとした直前、オルパニルが何かに気がつき、ソミアの腰に腕を回し、

「ひ、えっ？」

左へ思い切り跳躍した。直後、そのビルが大きく揺れ、傾き、低い階から崩壊していった。

跳躍したらどこかに着地しなければならないのだが、オルパニルは別のビルの上ではなく、ビルの谷間に狙いを定めた。谷間の真上に到着すると、いきなり空中で停止し、そのまま降下した。

それは、アトラクションの絶叫マシーンが苦手なソミアにとっては災難だった。

「きゃあああああああ！」

ソミアは悲鳴を上げ、本能でオルパニルの首に腕を回してしがみついていた。羞恥よりも恐怖が勝っていた。

何秒か急降下して地表が近くなると、オルパニルは能力を発揮した。地震とソミアが受ける重力を反対に向け、空へ引かれるようにした。すると、今の二人にとって地面は上となり、下の空へ引かれて速度が遅くなった。オルパニルは微調整をしながら地面付近まで

その状態を維持し、地面が目前になると効果を解除し、無事に地表へ着地した。

通常なら食べた物が胃の中で上へ下へと動いて気分を害する方法だったが、幸いにも二人ともしばらくの時間何も食べていなかった。で、最悪の影響は免れた。

足が着いていることにソミアは安堵し、冷静になると、自分がオルパニルに抱きつく格好になっていることに気がついた。

「わっ、ごめんなさい！」

ソミアは凄い勢いでオルパニルから手を解いた。

今いる場所は、建物と建物の間にある隙間の通路、路地と呼べる場所だった。ここは何もないが、耳を澄ますと、大通りのほうから悲鳴や爆発音が聞こえた。僅かな隙間から覗く外の景色には、市民が逃げる光景が見て取れた。

やはりここは状況を知っていると思うオルパニルに訊こうとした。だが、オルパニルはソミアの背後を向いて、ソミアを庇うように刀を構えた。すると、オルパニルが展開した防壁に数発の銃弾が衝突した。

ソミアが見ていた景色があるほうの、反対側の景色があるほうには、一人の兵士がいた。どうやら今撃つたのはこの兵士らしい。

「お前達住民は我々から逃げられん！ 速やかに投降しろ！ さもな」

オルパニルが兵士の目の前にいて、

「いと、ッ？」

刀で兵士の銃を斬った。

「なっ！？」

兵士の顔が驚愕の色に染まって動きが止まると、オルパニルはすかさず兵士の鳩尾へ渾身の蹴りを入れた。兵士は胃液を撒き散らしながら、本来考えられない速度で外の路上へ飛んでいった。路上の地面に着いても勢いは止まらず、転がり続け、その向こう側の建物にぶつかって、ようやく止まった。

その光景を怯みながら眺めていると、背後で物音がした。振り返ると、さっきソミアが見ていた景色のほうから何かが姿を現した。

兵士ではない。四足歩行するロボット兵だ。犬のような態勢だが体はそれより重厚で、体の至る所に凶器を仕込んでいる他、口内の舌がある部位にレーザーの銃身が仕込まれている。作業用ロボットやヘルパー用ロボットは人間の体型のほうが適しているが、機動性を要求される戦闘ロボットの場合は猛獣型のほうが適しているのだ。ロボット兵は既に照準をソミアに合わせている。オルパニルに助けを呼ぼうにも、彼は今離れた場所にいる。

もう駄目だと、胸中で弱音を吐いた。

「心配するな」

ソミアの真後ろから声が聞こえ、肩に手が置かれた。いつの間にかオルパニルが背後にいて、よく見ると、ロボット兵との距離が遠のいている。風の音さえも起こらないほどの早業だとソミアは仰天した。

先程兵士と対面した時、オルパニルは自身の居場所を兵士の眼前に変更し、一瞬で移動したように見せた。今のソミアも同じで、オルパニルがソミアの所へ戻ったのではなく、ソミアがオルパニルの所へ居場所を変更されたのだ。

オルパニルはロボット兵が発射したレーザーを防壁で難なく防御すると、火の玉を発射してロボット兵の銃身を頭部もろとも破壊した。

爆炎が収まると、そこには頭部が丸々吹き飛ばされている四足歩行ロボット兵が残っていた。すると、オルパニルはすぐさまソミアを右腕で抱えて、刀を媒介に横の建物の壁を破砕して、室内に避難した。それは兵器に精通している者にしかできない判断だった。

歩兵型ロボットの概ねは、判断・処理などを司る核が胴体にある。身体の損傷によって戦闘能力が望まれないと判断された場合、自律回路を切断する。そして、周囲に味方歩兵が自律回路が切断されていない味方ロボットがない場合限り、残されたエネルギーで最

後の手段を作動させる。

オルパニルとソミアが建物のできるだけ奥へ転がり込んだ直後に、ロボットが自爆し、路地を吹き飛ばした。ただの爆発ならばシールドによって防御できるが、爆炎から発生する燃焼済みの煙には有毒のものが多く、その場から離脱するのなら、最初から距離を空けたほうが危険が少ないのだ。

炎が燃え尽きたのを見計らって、オルパニルは室内に侵入した危険な爆煙を突風で室外へ追放した。

「無事か？」

「はいい…なんとか…」

今更確認しているようなオルパニルに振り回されたソミアは、短時間の内に重複した絶叫体験に耐えられず目を回していた。

とはいえ、すぐにでも街全体の様子を確認したいオルパニルは、ソミアを休憩させる間に独自で行動することにした。幸いにも、ここは比較的安全地帯に値する場所だろう。

「街中の様子を見てくるから、ここで休憩している」

「は、い……………えっ？ ま、待つて！ そんな急なこと言われても」

「心配ない。二分後に戻る」

「…わかりました」

承諾を確認して、オルパニルはソミアの周囲にシールドを展開させた。建物の外へ出て、直後に浮力を自身に与えて空へ飛翔した。

雲が漂泊する最低高度の地上千五百メートルよりやや低めの高度で滞空してから、改めて空から全体図を眺望すると、大まかな状況が読める。どうやら情報は正しかったようだ。

挟撃作戦という仲間からの連絡を受け、急遽駆けつける展開になった。この作戦が功を奏した場合、力関係の均衡が崩壊する戦況になる。この戦争はコルド・キンベスターによって勃発した物であるから、是か非で求める義務が彼にはあった。

侵入している兵力は約一個中隊程度。街の規模から計算して、もう少々兵力があると仮定しておく。予想よりも少ない規模だが、機

械兵というグッドスタッフに因って作業効率の落ち度を帳消しに出
来ているようだ。連絡を受けてから急行したから、まだ侵攻は広
くはない。だが、武器を持たない住民に抵抗力があるとは思えない
ので、四時間余りもあればこの街は完全に制圧されるだろう。

オルパニルは偵察を終え、戻ることにした。

ソミアが休憩している建物へ戻ると、部屋の外に閃光が漏れてい
るのが見えた。破裂音も聞こえる。

オルパニルが部屋へ帰還すると、呼んだ覚えのない客が来ていた。
兵士が三人。ロボットではなく、人間の兵士だ。

彼らは自分たちを目撃し、任務遂行上で邪魔なソミアを始末しよ
うと、シールド目がけて銃を乱射している。おそらく、彼らのよう
なチームが先ほど建物を倒壊させたのだろう。

人工の兵器くらいでオルパニルのシールドが打ち破れるはずはな
いし、中にいるソミアは視覚しか情報を拾えない境遇だから、安全
は心配無用だ。だが、それでも兵士達は懲りずに無駄弾を乱射して
いるし、ソミアは自分の身体を抱いているほど怯えている。見物し
ている暇があるのならさっさと救助することが正当だと、オルパニ
ルは判断した。

「騒々しい。近所迷惑だ」

オルパニルが文句を言うと、兵士達は振り向いた。その時にはオ
ルパニルはもう刀を地面に突いていた。

「――束ねろ」

兵士達の足下の地面が液体になり、彼らを取り込んだ。肩まで完
全に漬かると、今度は三人が一箇所に引き寄せられ、液化した地面
がくっつき合って一つになると、地面が正常な固体に戻り、果たし
て人間ロールケーキが一本出来上がった。

「はっ、離せえ！ くそお、動けねえ！」

「うーん、こりゃどうしようもないね。しばらくこのままかな」

「ふざけるな！ 俺達には大事な使命があるんだぞ！ 何もできず
にいられるかっ！」

「あらあ、僕は構わないですよ。先輩達とずっとこうしているのも、
なんだか夢のようで…」

「やかましい！ ゲイは黙ってる！」

呼吸ができるように首から上は拘束から避けておいたのだが口が
残ると今度は耳障りな会話が聞こえてきたので、オルパニルはいつ
そのこと全面的に塞いでおけばよかったと後悔した。

ソミアの元へ行くと、彼女がオルパニルの視線と自分の視線を重
ねた。その表情は青ざめていて、いつからかは知れないが彼女なり
に不安だったようだ。

オルパニルはソミアを包囲しているシールドの直径を伸長させ、
自分をその中に入れた。

「オルパニル！」

同じ空間になって音が通じるようになると、ソミアが開口一番に
彼の名を呼んだ。

「宣言より遅れて済まない。愚問だと思うが、大丈夫か？」

「愚問なんかじゃないですよ。心配してくれてありがとう。私は大
丈夫です！」

「…。ならない」

そう言つて、オルパニルは外に見える壁（に開いた穴）のほうに
視線を逸らした。

そんな彼の仕草に、ソミアは違和感を持った。いつもなら次の行
動に移り始めたり、現在に相応な話題に触れたりする。だが、今は
特に何かをしようとはせず、意味無く外を見ているだけだ。嚴重に
警戒して外の様子を察しようとしているのかも知れないが、どこか雰
囲気が違ったように感じた。

（返事をする前に、なんだか絶句したような…。気のせいかな？）

ソミアは怪訝を隠せないが、当のオルパニルは相変わらずの無表
情だ。人間を見る目が養われている自信がないソミアには、オルパ
ニルの内心を窺い知ることは不可能だった。

やがて、オルパニルが視線を戻してソミアと向き直った。

「上階に移動する。此処よりは発見されにくい筈だ」
オルパニルが提案した。これがいつもの彼だとソミアは再認識し、彼の提案に賛成した。

願う者 3

まだ出勤時間に至っていないために建物内の電気が入っていないかった。エレベーターかエスカレーターを使えばより早く、より体力を浪費せずに上の階へ移動できただろうか、二人は仕方なく階段を利用することにした。

オルパニルは一刻も早急に目的の場所まで移動したかったが、ソミアと共に移動しているために勝手な速度で進行することを控えていた。身体強化もせず、極力常人レベルの運動能力に引き下げるように努めていた。一方ソミアは、運動に慣れたオルパニルの階段の登り方に付いていけず、すでに息を上げていた。階段での足の運び方、呼吸の整え方、体のバランスの取り方など、細かいがオルパニルにとっては訂正させたい箇所がいくつも観察できるほどソミアの走り方は効率が悪かった。

息を切らせながら必死で走るソミアは、普段から思っている自分の運動神経の鈍さを再度呪った。運動はお世辞にも得意といえる方ではなく、むしろ運動音痴だ。しかし、日常で交通機関も整備された今では、スポーツ選手や運送業などの体力が要求される職業に就くでもない限り大きな体力が必要にならない。体力が必要なものの、作業が単純なものは、作業用ロボットに依存しているのが現代だ。運動ができなくても大丈夫だと証言する周囲の人間にもいたことから、自分が運動音痴でも大して困ることはないだろうと高を括っていた。そう油断していた考え方が、ここで表立った。そう油断していた自分が腹正しかった。

時間の節約、と表現すればいいのだろうか。目的の場所まで迅速に移動すること、ソミアが万一転倒でもして外傷を負い、余計な時間を費やさなければならぬようなことがないように未然に防止すること、それらを両立するために、オルパニルは決行した。

視界も霞むほど必死で足を動かしていたソミアは、階段の踊り場で自分を待っているオルパニルの姿を確認した。猛スピードで走る彼を見たことがあるからきつと手加減してくれていたんだろうけど、それでも速いことには変わりない。せめて少しでも足を引っ張ることはないようにと頑張っていたが、ようやくゴールだと安心して、残り少ない体力を振り絞って彼のもとまで走っていた。

オルパニルの待つ踊り場まで到着する頃には、ソミアの体は体力的に限界に至っていた。膝に手について、肩で息をする。体中が酸素を求めて、横隔膜が活動を繰り返す。火照りすぎた体を冷やそうと、全身から汗が噴き出ている。呼吸のしすぎで喉が渇く。胸が痛い。眩暈がする。肩の上下が止まらない。そんな状態になっても、彼に追いつくことはできた。努力は実ったんだと思った。

まだ姿勢を正せないソミアの肩に、オルパニルの手が載った。「よく頑張ったな」という言葉を期待して彼の顔を見ようとしたら、むりやりな力で後ろに仰け反らされた。バランスを取ろうとしても音痴な運動神経では体がいうことを訊かず、このまま倒れるしかないのだと諦めた時、足下が掬われた。

両足が宙に浮き、もはや体のどこも地面に接していない。正面を向けば天井が見える。しかし体は地面に落ちていない。こんな状態って一体どういう状態なんだろうと自分で自分が分からなくなった。「済まない。急ぎたい」

オルパニルの声が正面やや右側から聞こえて、朦朧とした視線を向ければ彼の顔があった。

意外に近づいた彼の顔と、背中と膝裏に回された彼の腕の感触が伝わってきて、ソミアは自分がいわゆるお姫様だっこの体勢で抱えられているということに自覚した。

まだ息も整わず、呼吸も乱れっぱなし、心臓の鼓動の速さも収まらないままだったが、ソミアは伝えるだけ伝えた。

「す、すみません。邪魔……して……ばかりで……」

切れ切れの呼吸で謝罪するのは失礼だと思うから、きつと彼は怒

っているだろう。

「いや、良く頑張った」

言うや否や、オルパニルは猛烈な速さで階段を上り始めた。最初に強く揺れたので、ソミアは拙い反射で彼の胸のあたりを掴んだ。オルパニルもその点に配慮し、歩数および跳躍する前と後との高低差を可能な限り少なくした。それで降はさほど揺れることはなく、ソミアも安心して体力回復に専念することができた。

まだ荒く息をしているソミアは、自分がいつの間にか彼の服を掴んでいることに気づいた。いつからそうしているのかは自覚がないが、この手を離すのはなんだか不安があった。コルドの仕事部屋でのことじゃないけど、離せばどこかへ行ってしまう、触れていればずっと傍にいてくれる、そんな錯覚があった。

だから、ちょっといけないとは思いながらも、ソミアは掴む手の力を強めた。

長い階段を上り、オルパニルはある階で足を止めた。だいぶ回復したソミアを降ろし、そのオフィスの中にためらいなく足を踏み入れる。

オルパニルに続いて足を踏み入れたソミアは、オフィス内の様子を見ることができた。部屋中には机が整頓されて置かれてはいるが、紙類は散在し、誰かの飲みかけのコーヒーが入ったコップまである。細かく観察すれば、必要な情報と思しき媒体が整頓されてあったり、所によつては雑に保管されていた。普段は忙しそうな雰囲気が出ているが、ここは何かの企業の物件らしい。営業専門かコンサルタント専門かだろうか。

「誰もいませんね……」

「早朝では居る訳が無い」

「えっ……今つて、そんな時間なんですか？」

朝の時間帯だとは思っていたが、それよりも早いとは思わなかった。

「平野で日の出を見なかったのか？」

「その時は、それどころじゃなかったですもん…」

「気温は？」

「このあたりの地域じゃ、朝が寒いのは当たり前ですから…」

「髭の伸びは？」

「私、女です…」

「女でも顎髭が伸びる者は居る」

「非該当です…」

故意なのか過失なのか、オルパニルは冗談を真面目に言った。

「ところで、どうしてこの街に来たんですか？ “一騒動” って言うてましたけど」

ソミアが訊くと、オルパニルは要点だけを纏めて答えた。

「この街に、イギリス軍の工作部隊が侵入した。戦争を有利に進める為だ。イギリス軍は北アイルランド方面とアイルランド島南部の両極から攻撃するつもりでいる。その作戦を打破するべく、部隊と抗戦するのがこの街に来た目的だ」

そう言つて、オルパニルはその階の壁際まで歩いていった。

「…それは、さっきみたいに一組ずつ戦っていくんですか？」

「そんな細々とした事はしないし、やりたくもない。何より、面倒臭い。だからこうする」

言うやいなや、オルパニルは右の拳で壁を殴った。すると、殴った箇所から壁が外側へ砕け散った。やがて損壊が周りの壁全体に及び、この階の壁だけが骨組みのみ残った開放的な場所となった。

オルパニルは壁際（だった部屋の端）から離れると、部屋の手前で止まった。

「こっちへ来い」

オルパニルがいきなり命令してきた。ソミアはその理由がよく分からないまま、言われた通り彼の傍に近寄った。

「暫くの間は余計に徘徊するな」

オルパニルがそう言つと、刀を縦に構えた。さっきも見た、能力

で移動する直前の構えだ。ソミアはそんな彼を見て、どこかへ移動するのかと思ったが、そうではなかった。

オルパニルが能力を発揮すると、刀から霧が拡散し始めた。発生源から触れるほどの距離にいたオルパニルとソミアはたちまちその霧に身を隠された。とても濃厚な霧だった。手を動かして顔に近づけてみるが、目前にあるはずの自分の掌すらも見えない濃霧だった。とめどなく発生する濃霧はオルパニルによって突破された壁から溢れ、遂に街を包み始めた。容赦なく拡散してゆく濃霧は、住民も、兵士も、車も、兵器も、高層ビルでさえも飲み込んだ。窓を開けている部屋には霧が室内に侵入し、濃霧が満たされていた。

（目標範囲は半径三キロ）

オルパニルは胸中で呟いた。

（人間は視覚を奪われると、手に入る情報が極端に激減し、周囲の状況が把握できなくなり、恐怖と不安に駆られ、その場に立ち竦む）

街中は突然の事態に困惑し、より一層奇声が増えた。

（助けを求め、知人の名を叫ぶ者もいれば、半ば発狂状態に陥り、闇雲に動き回る。時間の経過に比例し、恐怖感はある）

「オ、オルパニルっ！ どこにいるの！？」

ソミアが彼を呼んだ。予想通り、不安になったのだろう。

「先の場所から移動していなければ、同じ場所に居る。ソミアの左前だ」

数分後、オルパニルの目標だった半径三キロ全域が彼の濃霧に満たされた。

この霧は、ただ視覚を奪う為に発生させたのではない。通信手段を例外なく断絶させる機能も持つ。

そして、これが最大の理由だが、この街に侵入した兵士を確実に全滅させるための下敷きでもあった。

オルパニルは自分の右後ろにいるはずの、ソミアのほうへ手を伸ばした。腕一杯に伸ばした手をやや左右に振り、ようやくソミア本人を掴んで、そのまま引き寄せた。

「わっ、わっ？」

ソミアは背中から強く引かれ、オルパニルの胸（だと思ふ場所）に密着した。自分の顔や身体で感じる彼の体温といい、背中から左腕にかけて感じる彼の感触といい、今の自分はオルパニルに抱き締められている態勢だということをソミアは実感した。

「オル、パニル…？ むぐっ」

彼の名を呼んだら、さらに引き寄せられた。ひえー…。

「俺の服を使つて押さえ込んでも構わないから、呼吸を可能な限り殺せ。そして絶対に身動きを取るな」

ソミアはオルパニルの注意の意味が全く分からなかった。彼の行動に付属する助言に対して疑問を持つが、一々「何故？」と尋ねている暇などなかった。

自分から抱きつきに行くなんて途轍もなく恥ずかしいのだが、四の五の言つて躊躇わずに、何とか羞恥心を隠して抱きついた。彼の言つた通りに、彼の胸に自分の顔を埋めて、呼吸をできるだけ小さくする。オルパニルはさらにジャケットを脱いでソミアの頭に掛け、息が外に漏れないようにした。彼自身もジャケットの襟の部分で口を覆う。

「構えろ」

「…！」

ソミアはオルパニルの胸に腕を回し、オルパニルは抱き締める腕の力を強めた。そして、オルパニルは刀を逆手に持ち直してから、床に突き刺して固定した。

街に侵入した作業員達は、突然の奇妙な濃霧に立ち往生していた。その中の、作業員チームの指揮官を担っている隊長は、後ろにいないはずの仲間に声をかけた。

「おい！ 何か変化はあったか！？」

すると、向いていた後方から返事があつた。

「駄目です！ 通信手段は全て繋がりませんし、レーダーも機能するどころか、それを確認することも困難です！」

本来なら、上官への報告は面と面向き合つて伝えなければならぬのだが、見えない時に動くとき々と混乱するので、今は遠方からの大声による報告を許可していた。

「どうしましょう？ これでは遂行予定時間を越えてしまいましたが」「そうだな…。確かに目が使えないっていうのは不便だが、俺たちにとってはそんなに障害にはならないさ」

「…と、言いますと？」

「考えてみる。俺達の最終目標は、“この街の占領事実を明確にすること”だ。あとから続いてくる味方軍の道を空けておくっていうのが最優先任務だが、それだけじゃ足りないのさ。万一ことあと失敗するようなことが起きても、この地域の占領事実さえ作っておけば、今後この地域は俺たちイギリス軍のものってわけだ。敵を屈服させるには根拠がいるからな。俺達はその材料集めをしてるんだよ」

「あ、それはつまり…」

「そうだな。どんな方法であれ、この街を陥落させればいいだけの話なんだ。だから、見えないのなら、俺達なりの手段を使うまでさ」「分かりました。では、すぐに準備に移ります」

「…って、戦車の中は見えるのか？」

「いいえ、かろうじて見えるだけです。ですが、もう何年も乗っていますから、どこに何があるのかぐらいなら、勘と手探りで分かります」

「それは凄いな」

「ありがとうございます！」

その言葉で、会話は終わった。さっきの部下が戦車の中に戻り、仲間に指示を出しているのが聞こえた。

「…無意味に思える訓練も、こんな時に役に立ってしまうんだな」
隊長は誰にも聞こえない音量でぼつりと独り言を漏らした。

やがて、戦車チームから報告が来た。

「隊長！ 砲撃の準備、全て完了いたしました！」

「分かった、ご苦労。センサーに頼らないで、手動でいけるか？」

「狙い撃ちは無理ですが、遠くを撃つだけなら可能です！」

「よし。——全員その場を動かずに、衝撃に備えろっ！」

砲撃手が砲身进行操作し、方向と傾きを決める。

「調整完了！」

砲撃手が発射のトリガーに指をかけた。

「——滞れ」

「よし、撃てえ！」

隊長の命令に従い、砲撃手はトリガーを押した。空気中のあらゆる粒子に荷電して一点に集束させ、電磁気の反発力で弾くことで発射する『集束粒子砲』を放った。『チェッカー阻格者』の主砲の小型版なのだが、兵士達はその兵器の存在を知らない。

空気を裂き、照準先に向かって一直線に進み、着弾した物を粉々に粉碎する、驚異の殺人兵器。その砲弾は、視界の利かない濃霧の中を突き進み、どこかへ行ってしまった。

隊長は、十秒ほど経過しても何の爆発音も起きないことに疑問を持った。

「なんだっ！ どうした！？」

部下に尋ねると、耳を疑いたくなるような返事が返ってきた。

「分かりません！ 急に消滅したみたいで…原因不明です！」

「そんな…！」

隊長は自分にとっての前方を眺めた。一点の曇りも見当たらない

純白の濃霧は微塵も揺れ動くことがない。だが、よく目を凝らすと、顔の前を何かが掠っている。見えはしないが、霧が動いていた。

「何があつたんだ…？ 何が、いるんだ…？」

予想外どころか、粒子砲弾が消滅するという前代未聞の事態に、不安が過ぎつた。

この作戦の途中は問題など無かった。島に上陸する時は兵器の密輸ルートを使つて問題なかったし、街に侵入する際は上層部から指示された通りに従事して無事に国境を越え、本番になって街を奇襲し始めても住民は突然の武力に為す術もなく逃げ惑うばかりで、抵抗の反撃など恐れることもなかった。

だが、今になってこれは何だ。

先刻、兵士数名と連絡が取れなくなっただけでなく、ロボット兵も一体が撃退されている。そして今はこの状況だ。奇妙な点が多すぎる。

（それに、何だ、この…顔を掠っている物は？）

先程からずっとこの不気味な現象が目と鼻の先で続いている。虫でもいるのだろうか。

試しに、何気なく、顔の前の空間を片手で軽く払った。

一呼吸置いて、霧が難いだと同時に腕の感触が無くなった。

「つつ！」

小さな抵抗のあとに伝わる違和感。

見なくとも、感じる。

腕が無くなっていた。

「うあああああああああああああああ！」

隊長は肺に入っている空気を全部絞り出して、大きな絶叫を上げた。

直後、出した空気と同量の空気が無理矢理肺に戻り、隊長の歯、声帯、気管を裂き、急激に入り込んだせいで肺が破裂した。身体の内臓が傷付けられ、出血し、それを異物と見なした身体が反射的にそれを体外へ押しだし、隊長は最終的に吐血する形を取らされた。

内側から襲う激痛と気分の悪さに、身体を屈ませる。隊長の上半身は、粒子のような微細な物に切り裂かれ、原形すらも判別できなくなった。

「隊長！ どうされましたか！？」

動作を指令する頭部を失った隊長の下半身は、仰け反り、そして切り裂かれてバラバラになった。

兵士が戦車のハッチを開いた時に、丁度隊長の下半身が切り裂かれる音を聞いた。

「なっ！？」

そして、外へ出るために上へ移動してハッチを開けたその兵士は、頭上から強大な圧力を受け、上半身が下半身に向かって陥没した。

その兵士は無論、即死した。

戦車の中にいた他の戦車チームメンバーは、霞む視界の中で見た仲間の無惨な死に様に戦慄し、そして同量の憤怒が湧き上がった。「どこだあ！ 誰がジェイクを殺したあ！？」

兵士の一人が操縦席に座り、別の一人がターレットに座った。制止させていた戦車を発進させ、同時に街を破壊しようと砲身を動かす。

数秒後、戦車は内装を赤黒く染めたガラクタになっていた。

願う者 4

能力発揮を詠唱してから十分程が経過した。

（…希望範囲を決定した後、その空間内に濃霧を充満させ、そして濃霧を構成する粒子をその空間に固定する。もし外部からの刺激によつて粒子が流動した場合、数秒後に強制的に元の位置に戻す。発動時間はその外部物の速度に比例して早くなる。粒子が戻った時、その復路中に異物があつた場合でも迂回はしない。その代わりに破壊・貫通を許可する）

街中から聞こえる悲鳴は少なくなり、何かのは快音もほとんど聞こえなくなつた。

（人間が有らゆる不動の状態を維持できるのは、無意識の状態では三十秒以下と言われる。常識的に考えて、必要最低限の効果を期待するには充分か…）

終了の潮時だとオルパニルは判断し、悪魔の霧を消滅させた。純白の空間に色彩が戻つていき、久方ぶりに視覚に役目ができた。

ソミアは気恥ずかしそうにオルパニルから離れた。今までずっとくっついていたなんて信じられなかったが、手や顔にまだ残っている彼の感触や彼の匂いが、事実を証明させた。彼からの指示だったとはいえ、男の人に抱きしめられるなんていう大胆なことをやつてしまったことが恥ずかしくて仕方なかった。

気分が火照りすぎてしまったので外の様子でも見て気を紛らわせようと思つたソミアは、もう少しよく見える場所に移動しようとした。

しかし、オルパニルに肩を掴まれた。

「恐らく、見ない方が身の為だ」

そう助言され、目視を制止された。

オルパニルはソミアの断念を確認すると、窓から飛び降りて外に出た。

地面に着地するまでの間、オルパニルは、高度が低くなるに連れて異臭が強くなっていくことに悪態をつきたくなった。今まで何度も経験してきた臭いだが、やはり直ぐに慣れることは出来ない。

地上に降り立ってオルパニルが最初に見た物は、粉々になった金属の破片だった。恐らく乗用車や戦車の類だろう。その証拠に地面の所々に、操縦者の物と思しき血痕と肉片が散在している。空気にも変化があり、至る箇所かが腐敗臭と生臭い悪臭が湧出している。

自分がもたらしたのは、何も動く物が無い町だった。建物の中どころか、路上を歩く人が見あたらない。ほんの少し前まで兵士や住民の声、兵器の音が街中に溢れていたのに、今ではそれすらも聞こえてこない。

予想通り、ソミアを連れて来なくて正解だったとオルパニルは、奇怪な感想だが、胸を撫で下ろした。

安堵したのも束の間、眼前には口を覆いたくなる光景が広がっている。このような悪夢をもたらしたのは彼だが、彼自身、形が残ってなくて救われていたのだ。でなければ、もうとつくに気が狂っていただろう。常人ならば臭いのみで気分を害しても不思議ではない。オルパニルも嗅覚や感性は人間並だが、持ち前の無感情さを駆使して何とか平静を保っていた。

ここの現状を見ただけでも、工作部隊はほぼ全滅したと予想できた。兵士であつても所詮は人間だ。情緒は一般人と大差ない。ロボット兵も、センサーが利かなくなったことで帰還指令が作動し、予め組み込まれた方位や電子空間地図を頼りに、人間達の元へ移動するはずだった。それならば帰還途中で霧の餌食に遭っている。

「おい…お前、無事だったのか…？」
声をかけられた。

オルパニルは抜刀した状態で身構えた。その人物は建物の影から

恐る恐る出てきた。成人の男性だが、服装からイギリス軍の兵士であることが判明した。どうやら殺し漏れがいたらしい。

兵士の顔からは畏怖の感情が曝け出ていた。右腕も肘から先が無くなっており、出血が止まっていなかった。しかし、兵士はそのことに頓着することなく、顔を引きつらせながらこちらを凝視している。

兵士はゆつくりと、歩みを勧めることすらも恐怖しながら、それでも自分のほうへ近寄ってくる。

「何があつたんだ……。仲間は訳のわかんねえうちに死んじまつたし、仲間だけじゃなくて他の奴らも消えちまつて……。お前、何ともないのか……？」

恐らく、この兵士はこの街で自分が引き起こした結果について充分に理解できていない。理解できていないのならば、通常ならば自分の説明できる範囲で話をするとところだろう。

だが、ここは戦場だ。

「おい、お前、何か言えよ……」

兵士がオルパニルの肩に手を載せようとした。

「Ignorance is bliss.」

オルパニルはその手首を掴み、能力を発した。

「なっ……が！　ぎゃああああ！」

兵士の体内に流れる血液や細胞質などを構成する水分が、一瞬で沸騰した。結果、兵士は瞬間的にショック死し、空気を入れられたように膨張した全身を激しく痙攣させた。

「博識より無知の時期に死ねる方が迷い無く死ねる為、幸福だ。せめて、幸福な時期に死んでくれ」

オルパニルは目前で倒れる元兵士の肉塊に向けて、祈りの言葉をかけた。

抵抗の余地無く殺害を終えると、結果について正否を議論する自分が最近いる。

質問に正直に答え、事象の概要を説明し、その事象の発生源が自分だと自白し、それで兵士はまともでいられただろうか。

納得がいくまで誠意を持って説明すれば、理解を得られただろうか。

理解を得られた兵士を、自分はなんの心配もなく見逃せたのだろうか。

少ない可能性、人と人が相容れることの難しさを知っているオルパニルは、どうしても面倒がない手段へ傾いてしまっていた。今のようになければ、兵士は生き残る。生き残った兵士は、任務に復帰するにせよ、逃亡兵になるにせよ、これからしばらくは生き残る。それでは、やはり面倒が起こるだけだ。殺しておくに限る。

オルパニルがそこまで黙考した時、背後で液体が跳ねる音がした。反射的に音のした方向を振り返って、オルパニルは目を見開いた。ソミアが地上に降りて来ていた。先程の建物の電源が時限制で入力されたのか、非常用電源が作動したのかは不明だ。何の意志が働いたのかは知らないが、ソミアは何かしらの手段を用いて降りてきてしまっていた。

そして、あまりにも残酷な惨状に嘔吐していたのだ。

オルパニルは急いでソミアの傍まで駆け寄った。

「大丈夫か？」

「オ、オル……うぶ」

ソミアが口を押さえながら涙目で喋ろうとした時に、再度嘔吐した。内蔵が収縮し、呼吸もままにならず、ただ一方的に気分を悪くさせた。長い時間何も食料を口にしていなかったから、吐瀉物は胃液がほとんどだ。だがそれでもつらい。

ソミアは強い香水を使えないほど臭いに敏感だった。臭いの正体が生々しい物であれば、気分を害してもおかしくはない。

「深く息を吸え。気持ち悪いなら、無理せずに吐き出せ」

ソミアは伏せている頭で頷き、オルパニルの服を掴んだ。自分の吐瀉物が付着しているその手は震えていた。いや、身体全体が震えていた。

オルパニルとしては何とか気分を和らげてやりたいが、感覚情報による気分の悪さは精神が原因な為、物理的な治療法は通用しない。確かに臭気は大体の人の気分を悪くさせるが、臭いは嗅いでいるうちに慣れる特徴もある。また、臭いは嗅覚器官が臭気の化学物質に接触することで感じる感覚なのでそこを遮断すればいいのだが、恒久的に臭気が発生している現状では短期的に施しても意味がない。効果が切れた時に余計につらいだけだ。かといって、長期的に施すのは更に悪い。そうしたならば、俺が解除しない限りソミアは嗅覚障害に陥ってしまう。だから、今こうしているように本人が安定するまで待つしかできなかった。

時間を掛けて、胃の中が空になるほどソミアは嘔吐した。風が街を吹き抜けて幾分空気が清浄化された気がし始めた頃になって、ソミアの状態がようやく落ち着いていた。ソミアの両手は吐瀉物が滴り、自分の服にも零れていた。

会話ができることを見計らって、オルパニルが話しかけた。

「見るなと忠告したはずだ」

ソミアはオルパニルからやや非難され、普段ならすぐに謝罪の言葉を口に出しているところだった。だが、今は周囲からの異臭と気分の悪さで、冷静さに欠いていた。

「…酷い」

ソミアは俯きながら、意見した。

「ここまでするなんて、酷すぎる。戦争を止めるためだからって、こんなことが許されるわけないです。こんなの、絶対に間違ってる

…！」

ソミアは怒りを抱えながら、オルパニルを批判した。

平野での一件は納得してもいい。相手が意志を持たない機械だからだ。

だが、今の件はそれとは違う。相手は紛れもなく、血の通った人間なのだ。しかも、対象が兵士だけではなく、住民も含まれていた。人の尊い命を残酷に奪うことが戦争を止めることに繋がるとは思え

なかった。オルパニルのやり方は明らかに矛盾していると、自信を持てた。

しかし、オルパニルも伊達に数百年を生き延びていなかった。自分のやり方が他者に受け入れてもらえず、非難され、軽蔑され、罵倒されて、それでも自分の意志を曲げなかった。何故なら、自分のやり方が終戦へ導いていると信じているからだ。結果として終戦まで導いた経験もある。自分の国が虐殺の後に敗北という形で戦争を終わらせた経験もある。戦争を止める方法はこれしかない、信じるしかないからだ。

「終戦へ繋がり得る最も効果的な手段に出ただけだ。喚くな」

こんな時でも感情のないオルパニルの態度は、ソミアの逆鱗に触れた。

「なんでこんなことができるんですか！？ 生きている人を惨殺して、なんでそれが人のためになるんですか！？ 戦争から人を救うのに、血を流させる必要がどこにあるんですか！？ あなたはそれでも人間ですか！？」

ソミアにとっては感情のままに口に出したただだった。考え方を改善してほしいという意味だけで、深い否定ではなかった。

「貴様に何が分かる！？」

だが、その言葉は、今度はオルパニルの逆鱗に触れた。それは、“彼ら”には決して言うてはならない批判だった。

「この決断をするのに、どれほど苦悩したと思う！？ ただ戦争が終わるその時を期待するだけの貴様等に、戦争を終わらせようとしている俺達の何が分かる！？ 綺麗事だけを妄想的に羅列するな！」

オルパニルが怒りのあまり声を張り上げた。感情を一切出さなかったはずの彼が、今はっきりとソミアを怒っていた。

ソミアは誤解していた。オルパニル達の活動は、救済活動でも、

慈善活動でもないことを。

“彼ら”は世界中から嫌悪されている。どれほどの年月、どれほどの労力を費やしても、どれほどの希望、どれほどの教訓を与えても、世界はそれを認めず、哀れにも浪費、詐欺としてしか残らなかった。いつの時代、どここの場所にしようとも人々の見解は変わらず、事あるごとに非人間、死に神、殺人鬼、破壊神、意志ある厄災、化け物と謗られた。

“彼ら”はいつでも、生きているのに人間だとは思われなかったのだ。

だからオルパニルは、ソミアも、今まで自分たちを孤独へ追いやった者達と同等だと、撤回した。

ソミアは激情したオルパニルに少々たじろいだが、退く気にはならなかった。

「分かってないのはあなたのほうです！ 人は誰だって生きたい。戦争が終わった時に、自分が生きていることを望んでいます。みんな、死にたくないんです！ でもあなたは、生きて還れるようにするどころか、非情なまでに命を奪ったんです！ これのどこに善意があるっていうんですか！？」

「善意ではない！ 戦争自体が非常識だと判断し、必死で阻止しようとしているだけだ！ 善も悪も関係なく、戦争はすべきでないと信念を持って阻止しているだけだ！ その方法に良いだの悪いだのと我が侬振るっていられる訳がない！ 目的の為なら手段は選ばず、私心を混ぜることも許されないのが当然だ！」

「そんなことない！ あなたは何でもできるんです！ あなたができることの中に、戦争を止められる方法はきっとあるはずなんです！ 私たちには無理でも、あなたには実現させる力があるんです！ それを無視して、破壊のみで戦争を止めようとしているなんて、ただ自分に甘えているだけです！ 一番楽な方法を取っているだけなんです！」

「違う…違う！ 破壊・殲滅以外に、終戦方法など有り得ない！」

死者を出さずに戦争を止めるなど有りはしない！ 太古から繰り返されてきた戦がそうだったように、今もなお続いている地域紛争や内乱が途絶えないように、どちらか一方が負けない限り戦火は消えない！ そして、一刻も早く終戦するように俺は剣を振るっているんだ！」

「勝ち負けなんかどうでもいい！ 今すぐに戦争が終わらなくたっていい！ 時間がかかっても、和平が訪れればそれでいいんです！ 私は…私は、あなたにぞ」

激痛。

飛び散る鮮血。

止まったかのように思えた光景。

オルパニルは背後から狙撃され、右腕を肩から吹き飛ばされた。迂闊だった。工作部隊と聞いていたので、狙撃手の存在を失念していた。狙撃手は目立った動作を起こさないため、霧の効果を受けなかったようだ。

口論している内に、オルパニルは自分の意志に迷いが生じてしまい、シールドの強度が落ちてしまっていた。宝石のような輝きを宿していた右眼も、今は通常の眼に戻ってしまっていた。

銃弾の衝撃で前のめりになったオルパニルは激痛を堪えてなんとか踏み止まり、そして面を上げ、戦慄した。

その銃弾は当たった物にしか威力を発揮しない光線ではなく、貫通力も兼ね揃えた徹甲弾だった。銃弾はオルパニルの右肩を貫通し、その先の、ソミアの胸部を貫いていた。

不運にも身体を中心近くを通り、左の肺だけでなく、心臓の左側も破壊していた。心臓の構造で、左側、特に下の左心室は新鮮な酸素を含む血液を全身に送り出す役割がある。それを失えば、脳を含む全身が酸素不足に陥り、一気に酸欠状態へ向かう。

目を開けたまま人形のように倒れ、そのまま動くことがなくなったソミアを目の当たりにして、オルパニルは憤怒が爆発した。

自分の右肩とソミアの心臓、その二点を貫いたことで、狙撃場所は逆算できる。狙撃手がいるのは、五百二十六メートル離れた建物の二十三階だ。

「――巫山戯るなあつ――！」

オルパニルは振り向き様に斜めに刀を振った。

次の瞬間に起きたその現象は、写真で例えると理解しやすい。

地表からの風景を写真に撮り、それを鋏などで横方向に切る。すると、写真は二枚に分離し、断面に沿ってずらせば、まるで風景そのものが切れたような風景に見える。

今それが、現実に起きた。

刀身の延長線上にある物体は一つの例外なく断絶され、その箇所から埃が噴出した。建物の断絶箇所から上は、自重で断面を滑り、地上に向かつて崩落した。狙撃手は瓦礫に埋もれることとなり、巻き添えを食らった無関係の建物も同じ運命を辿った。勢いで効果の範囲内に入った地面にも切断現象が起こり、地中の電線や水道管が切れて放電や水の破裂が勃発した。埃やら塵やらが地上を走り始めたが、一見して風景の見晴らしが良くなってしまった。

劇的に変わった景色を前に、オルパニルはそれを眺めず、代わりに激痛と急激な失血で膝をついた。傷口からは脈動に遭わせて血が

嘔き出し、目が眩んできた。能力で止血しようとしたが、激痛によって集中できず、返って痛みを甦らせた。

溢れ続ける自分の血をぼんやり見ていると、怪我をしているのは自分だけではないと思い出した。

「ソミア…」

オルパニルは思うように力が入らない身体を奮い立たせ、頼りない足取りでソミアの傍まで行った。

ソミアは、目を開けたまま、死んでいた。自分の吐瀉物で汚れた服を纏い、胸部を中心に血に溺れていた。

そんなあまりにも可哀想な様を見て、オルパニルの脳裏に“あの過去”がフラッシュバックした。

身体を焼き焦がされ、所々を吹き飛ばされている、家族。

未熟な自分を叱咤し鍛えてくれた、血に染まっている、恩師。

自分の採択でもたらした地獄の中で、後悔し贖罪するよう目で訴えていた、同族。

精神的^{トラウマ}外傷を抉られ、オルパニルは激しく嘔吐した。胃がもがれたかのように痙攣し、身体が震えた。左腕から滑り落ちた刀が、酷く虚しい音を立てた。

あの時もそうだった。何かを守りたいと望んでいても、結局最後には自分勝手になってしまう。何かをしたいのにどうしたらいいのかわからず、結局最後には何もしなかった。その度に、自分は無力で、矮小で、馬鹿な野郎だと悔やんでいた。悔やむことで、許してもらえなかった。

だが、現実には許してくれず、再度後悔の現場を与えようとしていた。

もう一度、また何年も悔やみ続けると、伝えようとしていた。

（いや…今は、今の俺は…あの時の俺とは違う）

些細なことで暴走していたあの時とは違っていると、オルパニルは自負していた。

ソミアは、本来ならこんな場所にいるべきではない存在だ。紛れ

もなく自分が連れてきてしまった。自分さえちゃんとしていれば、こんな目に遭わせることもなかった。戦争を経験する必要などない、経験するのは俺達だけで充分だった。

だから、オルパニルは責任を果たしたいと思った。

ソミアはまだ死んではない。脳への酸素供給が途絶えても、三分は存命できる。ソミアはまだ生きている。

自然界の法則など、関係ない。

自然重視の思想など、興味ない。

世界からの悪評など、どうでもいい。

罪を着せたいのなら、いくらでも着てやっても良かった。これから先、飽きるほどの贖罪の時間を課せられても良かった。

だから――

「俺の目の前で死ぬなあっ!!」

オルパニルはソミアの傷口に向かって左手を翳すと、ソミアの身体が太陽のように激しく輝いた。

願う者 4 (後書き)

I g n o r a n c e i s b l i s s .
「知らぬが仏」

願う者 5

そこは辺り一面真っ黒な空間だった。

気がつけば、そんな場所にいた。

ここがどこなのかはわからない。

わかるのは、今ここにいるのは、自分一人だけということ。

そんなことを自覚すると、忘れていた感覚が甦ってくる。

独りでいることの寂しさを、思い出してしまう。

自分を追い詰めるこの世界を嫌ったこともあった。

この世界から追い込まれる自分を憎んだこともあった。

周りにあるものが次々と嫌いになっていくのが情けなくて、消えてしまいたくなった。

そんな私にも大切な友達ができた。

大切だと思えるものができた。

友達がいたから、その悲しさを忘れることができた。

友達がいる温かさが、寂しさを溶かしてくれていた。

だけど、今その温かさはない。

結局、独りでいることは私の運命なのかもしれない。

そんな感覚が自分を包む。

どこかから声が聞こえた。

遠くのほうから淡く聞こえる声は、泣いていた。

姿が見えなくてもわかるくらい、悲しい声を零していた。

その声を聞いてみると、私も悲しい気持ちになった。

心から何かを悔やんでいるような響きがとても痛々しい。

悔やみ続けているその叫びを、可哀想だと思った。

また、その声の主も、独りでいることを悲しんでいるように見え

た。

誰かといたい、独りになりたくない、この気持ちを伝えたい、そう願っているのに。

自分のいる立場が、それを許さないことを理解している。自分でわかつているからこそ、余計につらくさせていた。

私は、もし泣いているその声の主に会ったら。

独りじゃないということを教えてあげたい。

私ならその孤独を理解することができる。

ひとりぼっちでいることがどれだけ心を荒ませるか知っているから。

独りでいる必要なんてないって知っているから。

この気持ちを伝えようと、そつと手を伸ばす。

闇雲にではなく、目の前だけに向かって。

伝わるかどうかなんてわからない。

相手に気づいてもらえないかもしれない。

相手にとっては不快かもしれない。

でも、伝えようとすることに誤りなんてない。

伝えようとする努力に間違いなんてないはずだ。

私の友達は、孤独を悲しむ私を助けようとして、あの時話しかけてくれたのかもしれない。

独りじゃないってことを伝えるために声をかけてくれたのかもしれない。

もし本意が違ってても、私はそう思える。

そして、伝えてくれた私は嬉しかった。

今までの悲しさが消え去ってしまうほど、嬉しかった。

私は孤独じゃない。

そう思える人たちに恵まれた。

だから、今度は私が伝える番だ。

ひとりじゃないよ、って。

ちゃんというよ、って。

もし、その声の主に会えたなら。

手を伸ばした方向の真っ黒な空間に、同じような真っ黒の背中が薄ぼんやりと見えた気がした。

私は迷うことなくその背中にさらに手を伸ばして、そして、

ソミアの外見は元通りに直っていた。

だが、意識を戻さない。ずっと動かないままだった。

「ソ、ミア……！」

やはり、死者を蘇生することなどできない。そう認識すると、オルパニルの涙が溢れていた。

悔やんでも悔やみ切れなかった。この子を死なせてしまったのは、自分は何の為に必死で戦争を止めようとしているのか。

オルパニルは残った左腕で、ソミアの身体を抱き締めた。以前に感じた温かさと同じ温もりが伝わってくる。

同じなのに、今自分の腕の中にいるのは、亡骸なのだ。

彼女は、紛れもなく自分のせいで、死んだのだ。

「うああああああああああああああああああ……！」

認めたくなかった。

嫌だった。失いたくなかった。

もう自分の非力さのせいで大切な存在を手放したくはなかった。なのに、現実残酷なほどに奪い去っていった。

あの日の誓いはどこへ行った？二度と失わないために自身へ課した、世界への誓いはどこへ行った？

こんな事態を避けるために胸に決めた、あの誓いはどこへ行った！？

全て、自らの未熟さが招いた失態。

誓約一つ守れない、脆弱な自分のせいだった。

「くそお……！　ちくしょう……！！」

オルパニルはソミアの身体を強く抱き締めた。

まるで、奪われまいと必死で匿うように。

まるで、駄々を捏ねる子供のように。

「ちよっ……オルパニル……」

くぐもった小さな声が聞こえて、オルパニルははつと我に返った。
「苦しい、です……」

オルパニルが腕の力を弱めると、ソミアが、死んだと思っていた目の前の少女が、彼と向き合った。その瞳は、確かに生きていた。

「ど、どうしたんですか？　なんで、そんなに泣いてるんですか……」

？　それに、建物の中にいたのに、ここはどこ……えっ！　オルパニル、あなた、腕が！　大丈夫ですか！？　し、止血しないと……」

ソミアはオルパニルの怪我に気付き、あたふたしている。

そう、彼女は知らない。

オルパニルの能力では、死者を蘇生することは不可能と断言していい。たとえソミアのように即死レベルの致命傷を受けた直後の状態でも、治療できる死因と方法は限られている。

実現可能な手段の中で、彼は時間を利用した。ソミア自身に流れている時間を巻き戻し、健常な状態、即ちまだ“霧”を使用する直前の頃にまで遡行したら、健常な状態のまま再び外の時間まで時間を進め、現存する時間と寸分の狂いなく合致させた。この方法を取ると、進めた時間の間は空白となり、一部の記憶喪失の状態になるが、蘇生法であることには変わらない。

さらに、オルパニルがソミアの数十分前という過去を知っていたという理由も大きい。

人が“時間”を把握できるのは、現在と過去との時差を感じられ

るところから概念が生じる。時計に表示される時刻は、一日の経過度合いを把握できるように媒体化した目安であり、無象の時間を把握していることにはならない。ある出来事を経験し、月日が流れる中で「そういえばあんなこともあった」などと現在と過去に変化を見出した時、人は現在と過去を結びつける「時間」というものを捉えることができる。

オルパニルは自らの経験とソミアの経験を比較し、過去に共有した過去を照合した。最近の彼女の中で、もっとも正常な状態の頃を無理矢理引き出した。

遺伝性や先天性のものではない外傷だったので、この処置が使えた。

結果として、“生きているソミア”を生かせ続けることができたのだった。

「いや、いいんだ。俺の事なんかよりも…本当に良かった…！」

オルパニルは再び強く、だが配慮した強さで、ソミアを抱き締めた。今の気持ちは言葉にできなかった。

初めて（・・・）見る（・・・）オルパニルのそんな感情的な姿にソミアは不思議な気持ちになったが、今は抱き締められてあげた。きっと何か悲しいことがあったのだろうと察したからだ。

オルパニルは、また失ったのだと諦めていた。贖罪するべき思いをまた一つ増やし、再び後悔を続けるのだと諦めていた。自分には人と関わる資格などなく、孤独以外に生き方はないのだと、今度こそ諦めようとしていた。

だが、今回はそうはならなかった。

自分の理論が勝ったのか、単なる奇跡なのか、オルパニルには分からない。何のお陰なのかは判別できないが、今ソミアが生きていることに感謝したかった。

しかし、まだ終わってはいない。

「…止めなくては」

まだ、彼には果たすべきことが残っているのだ。

「戦争を…止めなくては…」

オルパニルは抱いていたソミアをそつと下ろした。

「オ、オルパニルっ、そんな身体じゃ無茶ですよ！ 死んじやいます！」

「早く、止めなくては…。止めないと、また無意味な死が増えてしまっ…」

オルパニルは朦朧としかけている意識を集中させ、立ち上がった。が、すぐに膝から崩れてしまった。出血し過ぎているのだ。

今度はソミアが倒れたオルパニルを支えた。彼は血の気が薄くなっている顔つきで、荒い呼吸を繰り返していた。人の表情を読み取ることに慣れていない彼女にも分かるほど、意識があるのが不思議なくらい酷い状態だった。

すでにぼろぼろで、それでも立とうとする彼を見て、ソミアはやるせない気持ちになった。

彼ばかりが傷ついているんじゃないってことくらい分かっている。今でも知らない場所で知らない人が血を流していることくらい分かっている。

でも、目の前でこんなに痛々しい姿を見せつけられて、せめて目の前の人にだけでも特別な同情をかけたいと思うのはいけないんだろうか。

ソミアは着ていたカーディガンを脱いで、彼の右腕の傷口に押し当てた。無駄のような気がしても、やらずにはいられなかった。

カーディガンがどんどん赤黒く染まっていく。ソミアはより強く押し当てる。自分の手や服が汚れることなんか気にならない。鉄の臭いがしたけど、さっきから気分の悪い臭いがしていたのだから今更だ。

どうしてこんな状況になっているのか、ソミアはまだ知らない。気がつけば建物の中ではなく外にいたし、街は恐ろしいほどの静寂に包まれ、腕がなくなっているオルパニルが泣きながら自分を抱きしめていた。

どんなことがあったのか、ソミアは知らない。

オルパニルも話さない。

それでも良かった。

一つだけ理解できるのは、彼がこの戦争のために尽力してくれたということだ。

大怪我を負っても尚、戦争で失われそうな人命のことを心配するのだから、間違いないだろう。

そんなオルパニルに、ソミアは協力したかった。彼が成し得ようとする結果のために、力を貸したかった。

なのに、血は止まってくれない。

すでにカーディガンはほとんどに血が染み込んでおり、血の固まりのように錯覚してしまう。手のひらも赤黒く染まり、生温かさが伝わるたびに彼から体温が抜け落ちていると思えて焦った。

オルパニルの顔色は青ざめているのではなく、土色に変化していた。血の気なんて感じられず、かつて見たこともない人肌の色を見えますます焦りが募った。

どうして、彼ばかり。

どうして、彼は心も体も傷だらけにならないといけないんだろう。どうして、彼はつらい目に遭い続けなければならないのだろう。

「こんなの、酷すぎますよ…。酷いの、どうして戦争なんかするんですか…こんな、いいことなんて、何も無いじゃないですか…」

ソミアは、誰に伝えるでもなく、訴えていた。

「戦争なんて、ただ悲しみを生むだけじゃないですか…人が死ぬことを、どうして望んで始めるんですか…！　こんなの、どんな結果になったって、嬉しくなんかいいですよ…！」

目の前で傷付いているオルパニルと、ついさっき気づいた異臭の正体を理解して、ソミアは涙を流していた。今この瞬間に人が殺し合っているなど、夢であってほしかった。

また、オルパニルも、必死で戦争を止めようとしていることも察した。どんな時でも表情を変えなくても、戦争を望んではいなかった。

た。コルドの建物の中で、彼は誰一人も命を奪いはしなかった。それだけ、人が亡くなることの悲しさを知っていた。だが、そんな彼でさえ戦争という大きな渦に飲まれてしまう。戦争は死と悲しみしか生み出さないのだ。

戦争など、今すぐにやめてほしいと、願った。

「……………やってみるか…？」

まともに姿勢を保つこともできないオルパニルが、不意に口を開いた。

「お前の方法で、やってみるか…？」

彼は掠れた声で、しかし明確な意志を持って、提案していた。

彼は重傷で、もう自由に行動することができない。それはソミアにも理解できる。しかし、ソミアがやる、というのはどういう意味なのか本人には分からなかった。

だが、オルパニルはいつでも嘘はつかない。なら、戦争を止める方法は残されていて、それをソミアに託そうとしているはずだった。なら、迷うことはなかった。

「…どうすればいいんですか？」

ソミアが尋ねると、オルパニルは力を振り絞って左手を動かし、拾い直した日本刀『漣哭』^{つるななき}の柄をソミアの見える場所まで引っ張ってきた。

「願うだけで良い…国に何を伝えたいのか、希^{こいねが}うだけで良い…。後は、俺がやる」

そのやり方は、今のソミアにとってはこれ以上ないほど簡単だった。伝えたいことは決まっている。なので、ソミアは日本刀の柄を握りしめた。

それを確認したオルパニルは、言葉を紡ぎ始めた。

「あえかなる おこなる吾^{あれ}に いと侘びなるに」

言葉と共に、オルパニルの身体が眼の色と同色の霧となった。

「明け暮れの 夜を飽きずに 異^けしう痛みけり」

辺りに飛散していたオルパニルの血痕やもがれた右腕も、同色の霧へと変化した。

「口惜しく 心憂^{しんゆう}しくて 臥しにけれども」

不思議な輝きを持つ霧は、ゆっくりとソミアを包んでいく。

「驚けば 傍に覚えず 夢現^{ゆめうつ}あり」

オルパニルの姿は見えないが、ソミアの知らない言語で紡ぐ旋律が聞こえてくる。

「羸^{みづ}るまで 物憂す朝を 耐^たう声^ねのみをも」

（この言葉って…もしかして…）

「持つことは 必ずなかれと 教えられけり」

（日本語…？）

「零^こり続く 袖の雫の 数ばかり 切なる心地 露も伝はむ」

オルパニルが奏で終わると、ソミアの視界を始め、身体感覚がなくなった。

ソミアを包んだオルパニルの霧は、今は大きな球体となっていた。やがて弱々しく煌めくと、急に空に向かって加速し、すぐに見えなくなった。

願う者 5（後書き）

オルパニルの旋律…

旋頭歌 + 短歌 の組み合わせです。

正確な文法や歌い方ではありませんが、アレンジということで大目に見てやってください。

願う者 6

（前ページより）

*

イギリス軍は困惑していた。

原因は、工作部隊の定期連絡が途絶えていることだった。作戦進行度や現場状況の把握に努めなければならない重要な情報提供が途絶えてしまうのは、作戦を指揮する身としては非常に遺憾だ。

アイルランド軍を南北両方から挟み撃ちにするこの作戦では、工作部隊は重要な役割があった。陸戦で大がかりな前線部隊を駆り出して敵国を挑発し、指揮の注目を逸らしているうちに工作部隊を潜入させて南部を制圧し、南北両側から挟撃する、というのが今回の作戦だった。

その重要な部隊からの定期連絡が途絶えた。これはつまり、出られなくなった、即ち反撃されたことに他ならない。何らかの罠にあったのか、こちらの動きが読まれていたのかは分からない。

しかし、作戦通りに進めるには失敗は許されない。工作部隊が失敗すれば、補完する作戦を練らなくてはならない。

別の命令が出されれば、それは厄介である。武装は充分ではあるが、挟み撃ちに必要な物資まで持参しているので、これはとんだ荷物になる。

別の命令が下らないことを願いながら、本部の大部隊を指揮している將軍は命令を待っていた。彼の任務は上からの命令を忠実に厳守すると共に、自国の勝利を導くための的確な指令を出すことだ。その手や声には、何万という同胞の命が懸かっていた。

「將軍！」

後ろから、部下が報告に来た。

「戦況が変わりました。敵国は我々の作戦に気付いたらしく、徐々に北上しています。恐らく工作部隊が攻撃されたのもこれによると思われます。これに対して、上からの新たな命令が下りました。“陸空の遠距離兵器を駆使し、これを迎撃せよ。場合によっては接近戦による粉砕を許可する”です」

作戦の変更を通知された將軍は、さして同様もせずに受領した。こんな戦況になれば、やや自暴自棄に走りたくなる上層部の心理も理解できなくはない。

「卑怯な手段から一変して、低能な手段に変わったか。まあ、それが一番敵を殺し尽くせるやり方だがな」

「あ、の…將軍、ご命令をお願いしますか？」

部下に怪訝な顔をされ、將軍は苦笑した。

「安心しろ。命令に逆らったりはしないさ。それが私の仕事だから。…命令通り、これからこの大部隊は一機残らず参戦させる。各班に号令、三十分以内に全ての兵器を戦闘可能にまで準備し、表で陣列を組ませる。準備が整い次第、敵軍に向かって出撃する」

「了解！」

部下は敬礼をし終わると、伝令するために駆けていった。

時間が経過するにつれ、空気が慌ただしくなる。誰も彼もが忙しく動き回っている。

皆が自分の鶴の一声によって迷いなくそれぞれの役割を全うしようとしている。目的を定めて一致団結するのは、大舞台を率いる身としてはありがたくも思う。

しかし、一切の疑問も持たないのは、あまりいい傾向だとも思わない。

この戦況は、最初の展開から見ている立場としてはおかしいところが多すぎるように考えられる。

事の発端は、アイルランド側が北アイルランドのイギリス領に対して抗議したのが始まりだった。歴史を遡れば、当時の戦歴がもたらした勝手な措置によって、現在のような領土区分になった。

だが、それが起こったのは何百年も前のことで、今更になって怨恨を晴らすように抗議してきた。こちらの政治家達も、そこまで広い領土ではないのだから和解して返還なり交換条件を出すなりすればいいものを、猛反発してしまった。イギリスとアイルランドは長きに渡って親交度が低いといわれているが、それだけの理由で頭ごなしに相手側の言い分を蔑ろにするのも妙だ。

一時、上層部の人間に賄賂を贈っている者がいると噂が立ったことがあるが、まさかそれではないだろう。たとえ献金があったとしても、上層部を操作して利益がある者など、どんな人間が当てはまるのか。

抗議が表明化されて冷戦状態が続いていたが、つい先日アメリカ軍が抱えていた『^{レイジャー}狂乱者』がイギリス領に打ち込まれた。幸いにも予想より遙かに小さい被害で済んだらしく、どんな方法で被害を小さくしたのか詳細は報告されていない。

アメリカが横槍を入れる理由を問い詰めたが、どうやら制御プログラムへハッキングされて誤射したらしい。ハッキングした張本人を辛うじて逆探知に成功すると、どうやら犯人はアイルランドだという。

その事実が判明した瞬間、こちら側は頭に血が上ってしまった。相手側は否定しているが、自らの攻撃厚意を白々しく否認している態度は一度生まれた怒りの勢いに拍車をかけるだけだった。そしてなんと売り言葉に買い言葉と言わんばかりの展開の早さで宣戦布告してしまった。今回の騒動の原因や騒動を解決した手段など、注目すべき肝心な事項がいくつもあるだろうに。

結局開戦してしまい、上層部より言い渡された作戦に従って指揮を執ることになった。疑問は晴れないままだったので気が進まなかったが、命令となれば仕方がない。

挟撃作戦ということだったので、機械兵の前線部隊と必要最低限の工作小隊数組の同時指揮から始まった。とはいっても、前線部隊は基本戦術さえ送信しておけば、あとの細かい指示は現場の戦術

AIが執るから、自分に面倒さはない。

工作部隊においても同様で、任務の概要の説明をする程度だ。帝国までに南部を制圧し、軍の投入を円滑にする布石を行うこと。定時の報告を忘れないこと。あとは現場での臨機応変となる。工作部隊を統括するために配置しておいた隊長も、少し気が短いが任務に忠実で信頼のある男を厳選しておいたから安心していい。

ところが、結果だけをいうなら、どちらも全滅した。

機械兵のみで構成された前線部隊は、一機残らず一掃された。原因はまだ説明されていない。

工作部隊のほうは全滅と断言できないが、定時報告ができなくなるほどの状況に追い込まれた、という点は間違いないだろう。

一連の奇怪な結果は、どう考えても“奴ら”によるものとは思えなかった。前線部隊同士の間で衝突戦で、中間地点に現れたという不審な人間サイズの影というのも、その考えを裏付けている。

將軍は軍の一角を担う人間として、“奴ら”の存在を聞かされていた。異様な眼を持ち、異能を振るう、不老不死の存在。神出鬼没で、戦場に現れては敵にもなったり味方に付いたりする意味不明な拳動。

初めて耳にした時は説明した上層部の人間の正気を疑ったものだが、しかし、その情報を受け入れざるを得ない体験もした。

將軍の地位に着任してから間もない頃、他国の紛争に介入する任務を任されたことがあった。片方に助力して戦力バランスを崩すという建前で、今後の交渉のために恩を売っておこうという魂胆だった。

戦法の指揮官との交渉の末、戦地へ赴き助力する手筈を整え、いざ参戦した。

もう片方の国の戦力は高いとは言えず、むしろ集落の一揆に毛が生えた程度だった。戦車の類は見当たらず、歩兵に銃器を携帯させているだけの、脆い編隊だった。

その戦力に、自分は戦車や空爆機、最新の明細兵器を装備させた

歩兵を投入した。図らずとも容易く勝利できる、呆気ない戦いになると予想していた。

しかし、こちらの軍が投入された直後、こちらの重装備の軍だけが集中的に攻撃された。相手の戦力にこちらの兵器を破壊できるほどの火力はないはずと置いて、不意を突かれたと後悔した。

だが、その認識はすぐに改めた。破壊されていく自分の軍が、ありえない現象で破壊されていったからだ。一陣の風が吹いたかと思えば、厚さ何ミリもある重戦車が真つ二つに分断され、歩兵の体も切り裂かれた。空を飛ぶ空爆機など、気付けば空から破片を撒き散らしていた。

何が起きているのか分からず、レーダーを見ても何も映らず、把握することを許されないまま繰り返し返される殺戮を受け入れるしかなかった。

目の前で起こる惨状と、目に見えぬ破壊の意志を見せつけられ、私は恐怖と共に“奴ら”の存在を知らしめられた。

結果、自分の率いた軍のみが全滅した。戦力バランスの崩壊は招かれなかったので、紛争は引き続き行われた。どうやら参戦している戦力を全滅するのではなく、イギリスから投入された軍隊のみが攻撃されていた。

幸いにも生き延びてしまった自分は非難の目を向けられたまま帰還する羽目になったのだが、不思議な恐怖を味わったあとでは大きなショックにならなかった。

事後に振り返ったところ、参戦する戦力だけを狙って碎いたようだった。紛争を止めたいのであれば、敵味方を問わず戦力そのものを破壊してしまえば止めることができる。自分の援軍を一瞬で藻屑に変えてしまったあの力があれば、両方を全滅させることに難易などないだろう。しかし、そうしなかった。ということは、紛争を止める意志で攻撃したのではないということになる。

過去の戦争について自分なりに調査したところ、“奴ら”が戦争に終止符を打った事例はないようだった。むしろ、戦況を混乱させ

ていた。注目を恐れているのかどうかは不明だが、戦果だけを見れば勝敗を決めるほど大きな動きは起こさないように思える。

現状の戦争では、段階でいえば最終ラインだ。戦力や戦術、時の運に自らの命を託し、ぶつかっていく段階だ。ならば、これからの展開に“奴ら”の闖入はないと考えるのが妥当だろう。

「さて、これでまた何人死ぬかな？　それとも、全員死ぬかな？　はたまた、私だけが死ぬかな？　どれにしろ、死んだら地獄行きは決定だな」

將軍は、騒がしい空気に消されてしまうほどの音量で、そつと呟いた。

作戦開始を今か今かと待機していた甲斐があつたのか、準備は予想よりも迅速だった。戦車やロボット兵のメンテナンスはすでに済んでおり、いつでも使えるように暖機していた。作業は順調に進み、各作業班を見回っている間に全ての出撃準備が整っていた。

「將軍、出撃準備、完了しました！」

さっきの部下が報告してきた。

「よし、分かった。私の軍艦はどこだ？」

「あちらにご用意しております。……しかし、將軍も出撃なさるのですか？」

「現場の指揮官がいるだろう？　命令でも、その場の戦況に対応した指令を出せと言われてるしな。私も久々の実戦だ。ぬくぬくと紅茶を啜りながら戦争を遠目に眺めたくはないのでな」

「將軍がそう仰るのなら。將軍機は最後尾の艦です。私が案内いたします」

外に出ると、大量の兵器が規則正しく編隊していた。全体的に扇のような集合を幾つも並列させており、後ろになるにつれて兵器の数が少なく、だが強力な物へとなっている。

將軍は部下に案内された軍艦に搭乗した。内部は、天井は低いが

狭くはない高さであるし、やや余裕を持った広さもある。指令席や制御席に座っている者や、いくつものモニターを示した壁際を横目に、最上にして最奥の部屋に到着した。そこは周囲の壁のうち、視線と同じ高さは全面ガラス張りになっており、外の風景を眺望できる構造になっていた。

將軍は座席に腰掛け、しばらくしてから操縦者を含めた出撃準備が終了したことを伝達された。それを聞いて將軍は満足し、通信回線を開き、マイクを手についた。全ての艦内に搭載されている通信が開き、モニターに將軍の肩から上が映し出される。

「諸君、朝早くから準備ご苦労だった。あまり寝ていない者もいると思う。朝楽しみにしている番組を見ていない者もいると思う。私は今朝のニュース番組が見られなくて残念に思っている」

將軍の目の届かない場所に多くの兵士は、その冗談を訊いて思わず笑った。

將軍はそれを狙っていた。兵士の精神をリラックスさせるのも、上に立つ者の役目だからだ。

「誰にも、この時までにはできなかったこと、したかったことは沢山残っているだろう。これからしようと思っていることも、持っているたかも知れないな。しかし、しばらくはできなくなる。君らも、私も、しばらくは自由がなくなる。これからは戦争に行くのであり、我々が愛する国を守るために、または自分が愛する者を守るために、戦場に赴くことになる。正直なところを突けば、戦争には行きたい者も、この中にいるかもしれん。そういう者にとっては、これから行く先は地獄と同義だろう。」

だが、この戦争に勝てば、この戦争に生き残れば、君らにはまた自由が与えられる。家に帰って家族と一緒にパンケーキを焼くこともできる。友人と一緒に酒場で飲み潰れることもできる。恋人と一緒に紅茶を楽しむこともできる。自分にとっての楽しみを楽しむことができるはずだ。

ならば、この戦争に勝とう。この戦争から生きて帰ろう。帰る方

法は簡単だ。これから先に見える敵を倒せばいいだけだ。やり方は、主に遠距離兵器を駆使して攻撃する。場合によっては接近戦も考えられるが、必要になったら私がその都度命令する。要は、敵を倒せばいいのだ。敵を負かせればいいのだ。たったこれだけで、君たちには輝かしい未来が贈られるのだ。

さあ、迷うことはない。敵を殺し尽くし、皆で勝利の祝杯を飲もうではないか！」

將軍は兵士達にそう激励すると、兵士達から賛同の雄叫びが聞こえた。

「全機、出撃！」

將軍が命令し、編隊全体が前進し始めた。

小一時間が経過すると、艦支部から報告が来た。

「十時、十二時、二時方向に敵確認！ 分散しています！ 距離、全て一万！」

「焦るな。兵力ではこちらが上だ。：攪乱煙幕散布！ そのすぐ後に超電磁爆弾を発射だ！ 一から十三は二時方向、十四から二十六は十二時方向！ 二十七から四十は十時方向を砲撃しろ！ こっちは先手を取るんだ！」

イギリス軍の艦から黒い煙が噴霧された。これは爆発の後を偽装すると共に、車体をステルス状態にする効果がある。この距離では遠距離法を当てるには機械的な制御に頼るのがセオリーだ。しかし、ステルスが働いては機械的な照準が合わなくなり、手動での砲撃を余儀なくされる。陸兵器もステルスが実現し、昔に敵に一泡吹かせたという実績もあつた。

煙幕が味方全体を覆ったことを確認し、特殊な砲弾を放とうとした時だった。突如激しい衝撃が全体に与えられたかと思うと、先程覆い終えたばかりの煙幕が全て掻き消されていた。アイルランド軍は、イギリス軍とほぼ同時期に相手を視認していて、さらにイギリ

ス軍が特殊な煙幕を使うことを過去の戦歴から予想していた。そこで、あらかじめ衛星と連携してイギリス軍の位置を把握し、暴風弾によって煙幕の対抗策を取っていた。

攪乱煙幕は、全体を覆い終えるまでに時間がかかる。再度覆い直すつとすればそれだけで軍隊の停止時間が発生してしまい、敵に砲撃されてしまう。

このまま、シールドのみで戦うしかなかった。

「怯むな！ 反撃しろ！ 超電磁爆弾発射！」

イギリス軍の戦車から三方向に砲弾が発射された。アイルランド軍の上空で爆発し、目に見えるほどの強力な電磁パルスが発生した。受けた兵器は電磁波の影響で管制システムが停止し、活動不能に陥る。この砲弾は、コンピュータ管理されている兵器ほど効果は高い。様子を窺うと、アイルランド軍は予想通り兵器の機能が停止して動きを止めていた。後は前もって用意していた作戦に従って遠距離砲を連打すればいい。固定した標的を撃つほど簡単な者はない。

「動きが止まったぞ！ 今だ！ 全機、さっき指示した場所へロツクし、砲撃を開始しろ！」

コンピュータによって火器管制系が操作され、大砲に距離や地形を計算された方角と傾斜を設定した。そして、砲撃手が引き金に手を掛けた。

「やめてください！」

突然、イギリス軍、アイルランド軍の兵士全員の耳に、女性の声が届いた。

すると、天空から、太陽光線を覆い隠すほどの眩い光が降り注いだ。肉眼では目を開けていられず、頼りの兵器のセンサーはなぜか停止してしまっていた。

戦車が動かなくなってしまったので、兵士達は戦車の外へ出た。將軍も、軍艦の機能は停止してしまっていたが、風景を眺望できる司令室から光り輝くその光景を見ていた。それはまるで、大自然級の光のシャワーを浴びているようだった。

「戦争なんてしないでください！ 同じ人間同士で争ってほしくありません！ こんな酷いこと、誰にもやってほしくありません！ です！」

その声は、光の中心から聞こえていた。誰の者が分からない。どうやってこんなことができるのか分からない。だが、その声の主は、全ての軍人達に訴えていた。

「こんな方法しかないわけなんです！ きつと、お互いに平和を分かち合える方法はあるはずなんです！ なのに、あなた達を見送った人達を悲しませるような方法しかないなんて、ずるいんです！ 誰も、こんなことをしてほしいなんて思っていないんです！ もう、誰かが死んじゃうなんて、嫌なんです！」

その声は、一点も曇ることなく、軍人達に届いていた。また、声の裏では、軍人達の姿を見て泣いているようにも聞こえた。

「もう…傷つけ合うのはやめてください！！」

声の主が最後の言葉を叫び終わり、泣き声をこぼしながら、今まで降り注いでいた光が弱まっていった。その刹那に、光の中心に、誰かの姿が見えたような気がした。もう少しはつきり見たいという衝動を抱くが、光はそのまま弱り続け、遂にいつもと同じ空に戻った。

軍人達には、今の一瞬の光景が脳裏に焼き付いていた。同時に、

最後に見えた姿の正体を無意識に知っていた。

あれは多分、女神様だ、と。

神はいつも自分たちを見てくれていた。

人間達が行うことを、ずっと遠くから見続けていた。

今姿をお見えになったのは、自分たちの浅ましい愚行を見かねて、自ら諍いを止めに来られたのだ、と。

そう思うと、我々人間は何をやっているのだろうと、自虐せざるを得なかった。自分の国のためと託けて、自分の側の利益ばかり重視し、本当に望まなければならぬ物を忘れていた。

侵略や支配に偉功を感じる時代は終わったのだ、と。

（今回は、“奴ら”に感謝しておくべきだな…）

起こりえるはずがないものを目の当たりにして、神の存在を否定できる人間がどれだけいることだろうか。

本能的に知る“人ならざる存在”に、自分たちは殺されもすれば救われることもあるのだと将軍は思った。

将軍は指令役の者に命令した。

「全機に命令だ。シールドを全力で保持したまま待機させろ。あと、アイルランド軍の司令官と通信を繋げてくれ」

後日談 1

後日談

六日も眠っていたなんてびっくりした。

私の目が覚めて一番最初に見たのは、いつも見ている自室の天井だった。記憶に新しい物事が、夢だったような感覚になった。

ベッドから起き上がると、すぐ隣にいた母が驚愕し、そして涙を流しながら私を抱き締めた。母は私を離すと、凄い勢いで退室した。どうしたのだろうと疑問に思いながら少し待っていると、母は父を連れて戻ってきた。食器の片付けをしていたそうだ。父は満面に嬉し泣きを浮かべながら、私をぎゅっと抱擁した。

母は、私が眠っている間ずっと看病してくれた上に、私が覚醒するのを今か今かと待ってくれていたそうだ。

父は、仕事に集中できなくなるくらい私を心配してくれていたみたい。私が眠っていた最初の三日間は、仕事を休んで傍にいてくれたと聞かされた。

それらを聞いて、私は両親に抱きついた。両親に隠し事をしていくけれど、それでも私は愛されているんだとわかった。それに対しての、稚拙だけれど純粋な感謝の意思表示だった。

両親の気が落ち着いてから、私は自分が憶えている最後の日から経緯を尋ねた。

ソミアから帰りが遅くなると連絡があつたが、翌日になっても帰って来ず、とうとうその日のうちに娘が帰ってくることはなかった。そのまた翌日、痺れを切らした両親は警察に捜索願を提出するため家を出ようとした時、一人の少年が訪問してきた。その見ず知ら

ずの少年はなぜか愛娘を抱えていた。少年によると、しばらくは起きないが健康面では問題はないと言った。娘が送り届けられた日から数えて六日後の夜、つまり今日にやっとソミアが目覚ましたんだそうだ。

両親の口から少年という単語が出てきて、思わず慌ててその少年の人相を訪ねてみると、

「そうねえ……。黒髪で、焦げ茶色の眼をしてる東洋系の、変わった格好の男の子よ。全身真っ黒の服を着てて、変なサングラスをかけてたわ」

「ちよつと表情を出さない子だったね。ずっとムスツとしていて、声も普通すぎるくらい落ち着いてたよ。ああ、でも英語は上手だったな」

私の予想していた人の印象が返ってきた。自分が知らないところで世話になっていたのを聞いて、少し恥ずかしくなったり、感謝したりした。

目が覚めた日は軽い物を食べた。経管栄養を手配してもらったので昏睡している間の体の健康面はなんとかなっていたけど、何も口にしていなかったのは違うないので、ご飯はおいしく食べられた。

食事が終わると、なんだかどつと疲れが湧いてきた。一週間近くもベッドで横になっていたから、体の筋力が多少落ちていたみたいだった。まだ目を覚ましたばかりだったこともあり、体も疲れてしまったのかもしれない。この日は食事を済まして早々に体を休めた。次の日、午前中のうちに病院に行って検査してもらったが、幸いにも何の問題もなかった。どうやら身体的および精神的な過労が原因だったらしい。

家を出たのが早い時間ではなかったせいか、帰宅した頃には正午へ差し掛かる時刻になっていた。

検査結果に安心した母が朝食を作ってくれている間、暇潰しのつもりでダイニングに据えられてあるテレビの電源を入れた。いつも

はクイズ番組やトーク番組を観ているけど、普段見るはずもないこの時間では自分の知らない番組ばかりが映されていた。仕方がないので、今まで眠っていた分のニュースを身につけておこうと思って、ニュースを報道しているチャンネルに回した。

テレビに映った物に、私は愕然とした。

町の様子を生中継で映しているようだが、そこに映っているのは廃墟のように崩壊した建物だった。もともと中心都市としても機能していそうなくらい大きな建造物を抱えていた街が、今では瓦礫に埋もれそうになっている。私はこんなひどい光景が今現在存在すると思うと、やりきれない思いに駆られてしまう。

一体どこの街なのかと思って、画面の端に載っていそうな街の名前を探して、それを見つけた。

街の名前を呼んだ直後、目を疑った。

幸いにも街の名前が書いてあったが、それは自分が通っている学校がある街の名前と一緒だった。

画面にリポーターが現れ、見た目の雰囲気を見事に説明したり、現地の人にインタビューをして生の声を聞いたりしている。耳を傾けていると、水道こそ無事なものまだ電気が断裂している地区も多く、復旧の目処が立っていないこと、現地の人は懸命に復興作業を続けており、他の地域からも医療や配給のボランティアなどの援助が来ているが、いずれも芳しくない状態だということを必死で伝えていた。

“あの人”が止めようとしてくれていたけど、こうなってしまうたのだろうか。

でも、と考えを改める。街をこんなにしてしまうほどの驚異へ“あの人”は一人立ち向かっていったのだ。結果はどうあれ、その姿勢は讃えるべきだろう。

テレビ画面に映し出された光景に釘付けだった視線から一人の人物のことを考えていると、母に「そういえば」と声をかけられた。「友達には電話した？やっ」と目を覚ましたんだから、連絡してあげ

なさいな。きつと待ってるわよ」

言われてから、私ははっとした。みんなには悪いけど、すっかり忘れていた。自分の感覚では一日しか経っていないのだが、本当は一週間も時間が流れていたのだ。また、普段は昼間に電話することも時々だし、するとしても自分から電話することはほとんどなかったから、自分から電話するという感覚が今一つなかった。

すぐに電話しようと即決して自室に行こうとして、すぐに足を止めた。

これも忘れていたが、私はあの日、放火魔に襲われそうになった時、鞆も携帯端末も剥ぎ取られていた。友達に連絡したくても、連絡手段が今の手元にはない。

その旨を、大事の所は省いて、紛失したことだけを母に伝えようと首を傾げられた。

何かおかしいことを言ったのかと疑問に思い、その視線を返すと、母はさらに首を傾げた。

「ソミアが嘘なんかつかないとは思っただけど、じゃあなんでなくした鞆が部屋にあるのかしら、って思っで……」

母の返事を聞いた私は、一度止めた足を勢いよく再始動させた。どうして、と心の中で何度も疑問を反芻した。

あの日の夜、私は確かに紛失したはずだった。

喪失感を味わった。信頼していたものをなくした悲しさを味わった。

喪失感を抱えた時、“あの人”が紛失したのと同じ物を買ひ揃えようとしてくれた。

全部、嘘なんかじゃないのに、どうして。

私は自らへかけた問いに答えをあてがうため、自室を空けた。

本の多い、見慣れた雰囲気。毎日見ているであろう自分の分身とも呼べる空間を、私は注意深く視線を配った。

そして、私の机の上にあるそれを発見した。

取っ手の付いた、手提げの鞆。

あの日、あの人に助けられた引き替えに紛失してしまった自分の鞆が、そこにあった。

中身は何一つ変わらず、剥ぎ取られた携帯端末も一緒に入っていた。改めて買い直した新品ではなく、自分が使い古した状態のままでもあった。

どうやって見つけたのかは分からないが、届けてくれた人に感謝した。…いや、おそらく“あの人”なんだろうけど。

まだ現実を受け入れられないのか、何となくおっかなびっくり端末を開いてみると、十数件の受信メールが保存されていた。日付は端末を紛失した日の翌日が中心で、両親は勿論、ジャスミン、ローレンス、アナリアの三人からも届いていた。

メールの文面を読んで、三人ともそれぞれなりに心配してくれていた。私は感謝の気持ちも込めて、自分が起きたことと体調も大丈夫なことをメールで知らせた。まだ昼間だし、忙しかったら悪いしすると、すぐに電話がかかってきた。今は授業中なはずなんだけど…と思いながら通話させると、電話口からジャスミンの声が聞こえてきた。親友の声を聞いただけで、とても安心してしまった。

多少の時間差がありつつもローレンスとアナリアからも電話がかかってきたので、ミーティングモードで複数通話状態にして全員の声が聞こえるようにした。三人から心配してくれている言葉をもらい、私は大丈夫なことと、しかし今日は学校は休むことを伝えた。両親から今日くらいは学校を休むように言われたからだ。

私の病欠を伝えると、受話部分から三人分のくすくすという笑い声が聞こえてきた。おかしいんだけど本当は笑っちゃいけない、みたいな笑い方かな？

聞いてみると、どうやら学校が大破して授業どころじゃないらしく、崩壊の心配がないくらい修復するまで臨時休校の形を取っているらしかった。どれくらい壊されているのかは、昼のニュースを見ていた自分にはすぐに推測できた。確かに、学校がやってないのに欠席することを伝えてもおかしいだけだ。

三人からおちよくられたあと、ジャスミンは外出できるかどうかを尋ねてきた。私はダイニングに降りて、昼食の盛りつけをしていた母に友達と遊びに行ってもいいか訊いた。母はちよつと驚いた表情をしたが、私がそんなに真剣に頼んでいたせいかな、困りながらも了承してくれた。ただし、夜遅くまでいないことと、そんなに遠くまで行かないことを条件に出された。

母親が驚いた顔をしたのは、たぶん、知っていたからだと思う。少し前までの私に友達がいなかったことを。

自分に身近で、寄り添ってくれる同年代の人間がいなかったということを。

だから、友達を大切にしたいという私の気持ちを悟って、外出を許してくれたんだと思う。

条件付きで外出してもいいことをジャスミン達に教えると、今日の放課後の時間に、また商店街へ行こうと提案してくれた。私の復活祝いだそう。商店街の様子を思い出しながら、飲食店が経営されているのかどうか心配になって聞くと、最近になってようやく修復を終えた店がちらほらあるらしい。復興の邪魔になってしまふんじゃないかと心配を隠しきれない返事をしてみたら、経済発展への貢献とか若さという名の活気の散布とかいうよくわからない難しいことを言われて、なんだか心配する気がなくなってしまった。

友達に会えると決まり、私はちよつと声が弾んでしまふのを隠しながら、夕方に商店街への入り口で待ち合わせをした。

母が作ってくれた昼食を食べ終えてから、私は外出の支度を始めた。

待ち合わせの時間はまだまだ先だ。今から行っても待つ時間が長くなるだけだろう。

だけど、私は早くあの街に行きたかった。

何かをするわけじゃない。復興の手伝いをしようにも、瓦礫がまだ散乱しているという現場に非力な自分は力不足だろう。

復興の手伝いをするつもりじゃないから変な理由だけど、どうし

ても今から行きたかった。

赴きたいのは、あの街の凶状を知ったからかもしれない。たくさん
の建物が崩壊し、街の機能が激減した光景に胸を打たれたせいの
衝動かもしれない。

そんな状況を知って、関係ないことだとは思えなかった。私だっ
てあの街にはたくさんお世話になっていて、思い出もある。なのに、
こんな時だけ家で遠目に見ているのが申し訳なく思えた。

また、街をそんなふうにしてしまった人、そんなふうになるのを
防ごうとした人、両方の立場の人を知っている自分にとって、街の
光景が無関係なもののように思えなかった。

行っても何もできないと思う。でも、なぜか行ったほうがいいよ
うな気がしたのだ。そう決めて、今準備をしている。

動きやすい服装を選び、でも帰りは日没かそれを過ぎた頃になる
だろうから防寒対策もして、自宅を後にした。

いつも学校に通うように電車を使って目的地まで向かった。さす
がに地下を通るだけあって、電車はちゃんと機能しているようだっ
た。線路はすべて地下を通っているから影響を受けなかったようだ。
いつもの駅のホームに降り立つと、そこは予想よりも駅舎への破
損の痕跡は少なかった。被害の中心地より離れているからだろうか。
……いや、細部までよく見れば、所々に亀裂が走っていた。ガラスも
取り替えたらしい、不自然に真新しい物が詰められている。一箇所
に気付くと、全体的にも亀裂が走っていることにも気付いた。

駅を出て、商店街までバスを利用しようと考えていた。町の様子
をじっくり見ていきたいところだけど、それだと徒歩では幾ばるか
遠い。ターミナルで待っていると、大型の車両が到着した。しかし、
いつも見ているバスとは色も形も異なっている。なんだか、こう、
ちよつと言いが悪いけど安そうなものに変わっていた。同じバス
に乗ろうとしていた人に訊いてみると、前まで使っていたバスはこ
の間街と一緒に壊れてしまったんだそうだ。同情をかけるように話
すその人の様子を見て、私は今回の被害の大きさを改めて意識した。

商店街の入り口に降り立つと、被害の度合いが酷くなっていた。建物の窓ガラスは砕けていて、張り直されている所は多くなかった。まだ物が散乱しているし、足下の舗装も罅が入っていたり剥がれていたりしていた。中には半壊、あるいは全壊している建物もあり、瓦礫の撤去作業が大変そうだった。

街の人たちの殆どは、どこかしらを怪我していた。火傷している人もいれば骨折している人もいた。刺し傷や切り傷で済んだ人もいれば、下半身が麻痺してしまった人もいた。

でも、みんなの顔に絶望感はなかった。

どうしてこんな状況で晴れ晴れとした顔でいられるのだろう。

誰も彼も、今までないような歓喜を抱いているように感じた。

それが疑問となり、しばらく当てもなく歩いた。

政府が改革でもしたのだろうか。それとも、この街からノーベル賞受賞者が生まれたのだろうか。

歩きながらずっと考えているが、理由が思いつかなかった。

首を捻りたくなる気分でいると、目の前に瓦礫の山が道を塞いでいた。すぐ横に見える建物の、瓦礫の山らしい。これでは前に進めない。周囲を見回すと、他の人たちも目の前の小山に迷惑しているようだった。一週間もすれば除去隊が派遣されて道を空けていそうなのだが、ここにはまだ行き届いていないらしかった。

仕方ないので、来た道を戻ろうと踵を返そうとした。

瓦礫の向こう側からタンクトップの男の人が現れて、すぐに離れるように大声で言ってきた。どうやらリーダーのような人だったらしく、撤去作業をしていた人達はその指示に素直に従い、全員が距離を取った。

急に人垣ができて見えなくなってしまった私は、近くに積み重ねられていた瓦礫の山によじ登って人垣の向こうの光景を眺めた。

次の瞬間、瓦礫の山が融解し始めた。鼠色の表面は赤く染まり湯気を上げて液状になった瓦礫は表面張力で地面と接する面積を広げることなく、その場でそれ同士を結合させていく。一分も経たない

うちに赤く熱せられていた外見は元の鼠色に戻り、湯気も引いていた。気付けば、山積みになっていた無数の瓦礫は一つの巨大な塊になった。

それだけでも仰天なのに、今度はその塊が轟音を立てながら地面から離れ始めた。密着していた真下のコンクリートを一緒に引きちぎりながら、その巨体が上がっていく。誰もが口をぽかんと空けている間に、巨大な塊はまるで投擲でもするかのような低い軌道を描いて宙を飛び、私からさらに向こう側にある交差点のほぼ中心へ落下した。

これで道が通れるようになった。

通れるようになったが、誰も動こうとしなかった。

いや、動けなかった。その光景を目の当たりにしていた人達全員が目丸くしていた。

私は、口が半開きになってしまったのは抑えられなかったけど、他の人とは違うところがあった。

こんなことをした人物に、心当たりがあった。

こんなことができるのは、きっと彼しかないはずだった。

そう思った直後に、辺り一面から歓声が上がった。

「やったあ！ これで通れるようになったぞ！」

「すげえ……！ あの瓦礫の山が、一瞬で……！」

「やるねえ、あんた！ 助かったよ！」

人垣の反対側に、いつの間にか人の輪ができていた。誰かを囲んでいるようだ。

遠くからではよく見えなかったので、人の輪を裂いて中心に入っていた。……つもりだったのだが、人の壁の厚みが厚すぎて中心に行くことができず、いつの間にか輪の外へ弾き出されていた。

きっと、この人垣の向こうに彼がいるんだと思う。でも、どうしてか繋がりそうもないように思えた。

できればもう一度会いたいのは本当だ。でも、輪の中と外が別々で、決して交わらないように思えた。

方や、人の中心に位置して多くの感謝を受け取っている人。

方や、人の中心にいる人を遠目に眺めている自分。

たぶん、あの日を最後に彼とは会えないのだと思った。私と彼は生きている世界が違うのだから。

私は人垣から離れて、そこから両手を組んで向こうにいるであろう“あの人”に祈った。

どうか、お元気で、と。

そう思って、諦めようとした時だった。

人垣を割って、中心にいた人が這い出てきた。

そして、偶然にも私のほうに歩を進めていた。

その人は、黒髪で、黄色の肌で、黒い服装で、片方だけのサングラスを掛けていて、腰に一振の刀を提げていた。

願いが届いたような気がして、嬉しかった。

もう一度、この人に会えたから。

「オルパニルっ！」

後日談 2

(前ページより)

*

六日も掛かるとは想定外だった。

通常なら、防衛省や治安管理局に事件の詳細書を提出すれば、後はさっさと出発できていた。

だが、今回はそれを承認されなかった。コルド・キンベスターを生け捕りにしたのは問題ないが、言語や記憶を担当している頭頂葉の角回を機能不全にさせてしまった所^{せい}為で、奴が関連する事件の詰問が出来なくなったのだ。その為、七面倒臭いだけの様々な後処理に関係することになった。

先ず、例によってコルド・キンベスターへの過度的な損傷について非難された。これは“条件では、生け捕りにすると言っただけであって、逮捕に当たる際の心身への損害は制限されていなかった。相手が逮捕の宣言に対して抵抗した為、その状況に相応な必要最低限の損傷はやむを得ないものと判断した”と弁解した。また、“断絶したのは細胞のシナプスの部分だけであって、脳細胞自体は破壊していない。充分な栄養を摂取させれば、脳の機能が復活する可能性はある”と救済弁明を証言すると、何とか放免された。

呆気なく済んだので釈然としなかったが、人間側からすれば俺を捕縛する利点はあっても拘束し切る自信が無いのだろう。

次に、『狂乱者』と『阻格者』からのこの街への被害明細書の提出だ。建物を破壊したのは自分ではないのだが、図書館や企業会社を破壊したのを白状すると、当局は態度を一変させて弁償を要求してきた。彼等のいい加減さに呆れなくなりながら、しかし被害は減少したが死傷者を出したのは事実なので、事件に関する報告書を余

計に詳細に明記する事で補償した。

そして、南部で起こした濃霧による大量殺戮についても非難された。通常ならば有罪で、終身刑でも生温い重罪だと有罪判決が下るほどの所業だった。だが、ゲイブディパーソーズに終身刑を科せるのは無意味であり、拘置所で大人しくしているとは思えず、更にオゾン層再構築を担当している自分を長期的に行動不能にすると環境面に多大な悪影響が出ると推測した意見が出た。なので、最終的には“南部の大量殺戮はコルド・キンベスターによるもの”と濡れ衣を被せることで全会一致した。

ただ、この事件を解決する最中に、大分身勝手な行動をしたと自覚していたので、今日一日に限り復旧作業に協力しようと決断し、今街に居る。…その筈なのだが、冷静に熟慮すると、長居して人間の流れに自分の力を混合させてしまうと、本来の運命に逆らってしまうと気付いた。なので、そろそろ此処から離脱した方が賢明だと判断した。

俺はこの時代に生きている筈がない存在。下手に人間と関係を持つのは不都合なのである。

あの娘と行動を共にする事も、本当は厳禁なのである。

だが、結果として、あの娘のやり方に因って戦争を止める事が出来た。戦争を止めるのは、武力では無いのだと改めて教えられた。

能力を使用した後、俺とあの子は元の場所に戻ってきた。彼女は憔悴しており、気絶もしていた。だが息は有り、規則正しい呼吸も繰り返していたので、問題ないと診断した。

あの場所から離れる為に彼女を運搬しようとして、自分の腕が元通りになっている事に気付いた。序でに失血症状も消えていた。呆れる事に、無意識に自分を守る布石を行っていたようだ。『狂乱者と『阻格者』の時といい、俺は無意識に余程生きたがっているようだ。

彼女の記憶から自宅の住所を引き出し、彼女を自宅へ送り届けた。その時に、丁度彼女の両親に遭遇したので、無事である旨を告げて

おいた。

それと、ICPOへ報告する為に国内最大の警察署へ赴いた際、帰る直前に彼女の鞆等の事を思い出し、駄目で元々のつもりで尋ねてみた。すると、意外にも発見した。どうやら放火を通報した市民が、現場近くで発見した彼女の鞆と携帯端末を警察に届けておいたらしい。その放火が大きな事件と関連していると判明し、警察署でその重要品を預かっていたようだ。その御陰で俺は彼女の鞆を見つける事が出来た。届けた者も、そのまま盗まなかった事に感心した。あの子と邂逅したのは、誰にも予想できないくらい偶然だった。

コルド・キンベスターが最後に目撃されたこの街に到着して、最初に、図書館でこの街の地形や構造を調査した。しかし、数日に渡って調査したが奴の尻尾も掴めず、向こうから出てくるのを待機するのも手かと思案し、残余時間を趣味に充てていた。すると、突然話し掛けられたので、彼女の趣向を解明したいほど訝しんだ。相手からは話し掛けられる事など、ここ数年皆無だった。その時は強^{あなが}ち嘘ではない任務を楯に断ったが、今思い返せばあれは軟派^{ナンパ}だったと推定した。彼女の背後に仲間らしき女子集団も潜んでいたから、恐らく正解だろう。

翌日に、街を捜査しつつニュースで情報収集していると、また彼女に遇った。ただ、彼女は前日の件もあつた所為か、大分戸惑っていた。なので、彼女が不注意に落としていた鞆を拾って渡したら、即座に退去するつもりでいた。

だが、再び彼女から話し掛けられてしまい、去るに去れなかった。これ以上関わりを持たせる訳にも行かず、寧ろ危険に晒す恐れがあると判断し、彼女に多少恐怖を与える言葉を投げて、半ば無理矢理離れた。

なのに、あの子は何を思ってたか、尚も俺を追跡してきた。成る可く発見されないように建物の上からの搜索に切り換えたが、見逃す訳にはいかない放火の現場で、結局再会する事になってしまった。

気絶している間に彼女を自宅に還送する事も出来たが、奴らの一

味（監視役等）に顔を記憶されていたら今後どうされるか予測がつかなかったので、心配が無くなるまで同伴させる事にしたのだ。

幾つもの奇遇があつて、あの子と最後まで同行する事になったのだと思う。

今は彼女には感謝している。自分だけでは今の結果は出せなかっただろうから。

そう、感謝しているだけだ。だから、自分にあの子への好意など有る筈は無い。

しかし、コルド・キンベスターの部屋で俺の疑惑を晴らした後に号泣する彼女を抱擁したのは、些か単純過ぎると我ながら反省する。何とか嫌悪感を持たれない結果に終えたから良かった物の、最初に拒否されていて尚抱き寄せるとは一体あの時の自分はどうしていたのか。彼女に拒絶された時は若干衝撃を受けたが、その報復等ではない事は断言できる。強いて言えば、彼女が慟哭したからだ。泣いている姿を見ていたら、抱擁の衝動が生まれた。何故かは自分でも理解できないが、無理矢理理由を付けるならば、かつて自分がまだ（・・・）人間の（・・・）子供だった頃、泣いている自分を母親が抱き締めてくれた事が記憶の奥底に残っていたからだと思う。：しかし、煩惱を抑制できないとは、俺もまだ未熟である。

だが、もう会う事も無いだろう。彼女はこの国に在る町に住んでいるのだから、今日出国する俺と会う事は無いだろう。何人も会者定離だ。

遇えるとすれば、数年か、或いは数十年か先になるだろう。それだけ時が経てば、お互いに記憶の一部から消滅する。そうなれば、もう関係は切れる。それぞれの人生を歩める。

それで良いのだと、自分に納得させた。

前方を見ると、何やら大勢で瓦礫の山の撤去作業をしているようだった。需要の高い道路を閉鎖しているらしい。皆汗だくになりながら作業を進めるが、山は一向に減らない。休戦時から作業を進めているのだと思うのだが、そうとは思えないくらい難航していた。

瓦礫の量もあるが、その重さも原因の一つだった。また、怪我人も大量に出たので、作業に取り掛かれる人数が少ないのも一理だった。

このままでは開通するのが何時になるか知れた物ではない。

俺はこれを最後にするつもりで、撤去作業を行っている青年に声を掛けた。

「全員を離れさせろ」

忠告すると、相手は怪訝な表情をした。用件が直截過ぎたらしい。理由まで添付しなくてはならないとはいってもなごらに面倒臭い。

「助力するから、反対側に居る者も含めて瓦礫から離れさせろ」

青年は発言の内容と、自分の態度が尋常ではない事を理解したらしく、他の者達を離れさせた。

俺は瓦礫の間近に立って、両手を叩いた。

あの娘と口論して心理が再度不安定な状態になってから、俺の眼もまた片目だけ元来の色に戻っていた。

コルド・キンベスターとの対峙からは、明確な目標が成り立っていたから心理が安定していたのだと思われる。決して自分の為だけでは無いのだと思えたから、能力を潜在的な使用方法で発揮できたのだろう。

一度楽な方法を知ってしまうと、自分で定めた“呪い”が億劫に感じた。

あれから試験的に“呪い”を使わずに能力を発揮してみたが（勿論、被害が出ないような大したことのない内容で）、予想通り意の儘に発現する事はなかった。なので、以前のように“呪い”を再開していた。

だが、それを嘆こうとは思わなかった。

染まった眼が片方だけの時と両方共の時では能力の实质に相違はあるのかどうか、感覚に頼って実験してみた事もある。結果は、特に差異は無かった。結論として、どうやら能力を発揮する際に、“呪い”に依存するか否かの違いだと解釈した。

また、一度心理安定させる事が出来たので、安定させる方法があるのだと、希望も持てた。利己的で必須でもない事だが、心理を安定させる方法を見つけ出すという今後の目標も作れた。それだけで十分な収穫だ。

ならば、嘆く必要はない。今までのように能力を使ってゆくだけだ。

俺は能力を発現しようとして、しかしその内容に悩んだ。

この多量の瓦礫を別の場所に移動させるのは、他に置く場所が見当たらないから却下。

この瓦礫の持ち主である建物に戻すのは、接着効果も望めない瓦礫の素材では強度の信頼性に欠けるから却下。

溶解して高さか太さが巨大な柱に変えるのは、邪魔だから却下。

建造物の屋上へ移送するのは、今後瓦礫の撤去に苦労する上、そこまで移送するまで操作しきる自信がないし時間もかかりそうだから却下。

瓦礫すべてを塵レベルまで粉碎するのは、この場に居合わせている人間全員が塵肺の危険性に晒す事になるので却下。

融解し、表面張力を利用して道路の一部へ帰化させるのは、充分に広がるまで高熱に熱した瓦礫から周囲の人間を避難させなければならぬので却下。

.....考えるのが面倒臭くなってきた。

もう、最も単純な思考に従う事にする。

儘よ。

俺は瓦礫に触れて、能力を発揮した。

先ず、瓦礫を融解して一つの塊に変える。作業を手短にするには作業対象の個体数を減らすのが先決だ。

ある程度空間の元素を利用して液化化した瓦礫を操作して表面張力で広がらないようにし、理想の状態に成ったら直ぐに凝固させた。「おい、背後の交差点に居る連中を遠ざける。交差点内には誰も立ち入らせるな」

俺は青年に再び指示した。

青年は我に返ったように自我を取り戻すと、俺の狙う先の交差点へ慌てて疾走していった。

数分後に戻ってきた青年は、俺の指示通りにした旨を伝えてきた。何故呆けていたのか尋問する気も起きず、俺は確認して締め段階へ移行した。

手を叩き、念のため全身の筋力の強化を施しておく。

再び手を叩き、眼前にそびえる巨大な塊の、底部に一番近い表面を両手で驚掴みにした。一度液化させているとは言え、その表面は凹凸が残っているので掴むのには造作ない。

塊自体にかかる重力に絆重力を減退させ、これで準備は整った。

「…………ふ」

俺は一気に力を込めて、その塊を持ち上げた。重力の作用を減らしているとは言え、これに密着している地表面までは作用させていないので、そこから引き剥がすのは自力に頼らなくてはならない。

力任せに塊を無理矢理持ち上げ、左手は掴んだまま底部に右腕を回す。少し探ると、丁度手を差し込みやすい隙間を発見した。液状化しても元々が強固な素材だったので埋まり切らなかつたらしい。

偶然も利用の範囲内と考え、俺はその隙間に右手を差し込んだ。

現在、俺自身は塊の下に位置し、右手は塊の底部に、左手は塊の側面に、それぞれ位置している状態にある。

これからどうするのかと言うと、単純な思考に従う。

俺は目標である交差点を見据え、体勢を半身に変える。

交差点までの距離、約七十メートル、か。

両腕に力を込め、両足の踏み込みを意識し、全身の筋肉を一度に運動させるつもりで意識を高め、

「むんっ」

ぶん投げた。

力任せではなく、見据える先にある交差点の中心へ落下するように調節してある。

塊は俺の予定していた通りの軌道を描き、
いつの間にか築かれていた人垣を飛び越え、
狙撃するような理想の軌跡を残して、

着地する寸前、重力に影響されていないままだと着地した際の音
や振動や管制によるズレに違和感が生じるだろうから、それを解除
し、

ドゴンッッ！！

という壮絶な轟音と共に地震と間違っ程の震動が地面を伝播した。
あまりの振動で全員が小ジャンプをしたように見紛った。

俺はようやく通過できるようになった道路を通るべく、軽く両手
を叩いて埃を落とし、一仕事終えたあとの充実感を秘めながら向か
う予定だった方向へ向きを直した。

目の前には、驚愕の面持ちで俺を凝視する数多の人間が居た。
異色無くこの場にいる全員が同じ表情をしているのを観察して、
俺は後悔した。

先程俺が行った撤去方法は非常識極まりない。
それを実現した俺は不気味でしか無い。
単純な手段を決行したのが裏目に出た。

逃走すべきだ。間違いない。即刻逃げる事にする。
そう断定して、ここから離れようとした。

だが、

「やったあ！ これで通れるようになったぞ！」

「すげえ……！ あの瓦礫の山が、一瞬で……！」

「やるねえ、あんた！ 助かったよ！」

周囲の人間から口々に絶賛された。

喚起の声が噴出している中、俺はこの場の人間達の常識を疑った。
今のを目の当たりにして、この者達はどうも思わないのだろうか。
彼等の台詞を振り返ってみると、成る程瓦礫が除去された事に歓

喜しているのであつて、方法は二の次らしい。瓦礫の変化後の形状と撤去の手段に懸隔がある事はどうでもいいようだ。

やる事はやったからここから離れようとした。だが、いつの間にか周囲を囲まれ、逃げ道が無くなっていた。思わず拳動不審になつてしまつた自分を、周囲にいた人は今度は俺をばしばしと叩き始めた。歡喜や感謝の意思表示なのだろうが、本気で痛い。やたら痛い。今背中を蹴られて素直に痛い。

感謝されるのは悪い気がしないが、自分としては非常に居た堪らず、何より体中が痛いので、先程の進行方向に沿つて出発する事にした。人垣を割り、その途中でまたもやびしびし叩かれたが、苦勞の甲斐あつてやつと広々とした空間に脱出した。

安堵してから歩き始めた所で、誰かに自分の名前を呼ばれた。

久々に他者から名前と呼ばれた気がした。警務所へ報告しに出向いた時も、この街で復興の援助をしている間も、名前で呼ばれる事は無かつた。彼等には俺の本名も、暗号名でさえも教えていないから、当然と言えば当然だつた。だが、名前を知っている者は、少なからず自分を知っている者であるから、多少は安心感があつた。しかも、この街で自分の名前を知っている者は、数少ない筈だ。

声のした方へ顔を向けると、予想通り、知つた顔があつた。

もう遇う事は無い思っていた人の顔があつた。

その人は自分の方へ小走りで駆け寄つて来るが、悪い気分はしない。

常人ではない自分を恐れずに、近寄つてきてくれる。

過去を知つて尚、自分を理解し、存在を認めてくれる。

名前で呼び、絶大な信頼を寄せてくれる。

心のどこかで求めていたような姿で、また彼女に遇えたのだから。

「ソミア」

後日談 3

オルパニルが自分の名前を呼んで、なんだか安心した。六日前に遭遇したことは、何一つ事実なんだと確かめられたような気がしたからだ。

傍まで寄って、彼と対面する位置で、もう一度彼の名を呼んだ。

「オルパニル…」

目の前に、会いたかった彼がいる。そう思うと、どうしてか涙が出てきた。

「良かった…また会えた…」

もう会えないと諦めかけていた。でも、神様は私たちの運命を重ねてくれた。

どんなお祝いよりも、彼に再び会えたことのほうが嬉しかった。

「あの、怪我してましたよね？ 大丈夫ですか？」

私は彼の体を心配した。あの時、気付いた時には彼は右腕がなくなるという大怪我を負っていた。そこから大量出血という二次的な状態にもなっていたはずだが…。

「問題無い。心配する必要は無い」

オルパニルは素っ気なく答えた。

見たところ、右腕は元通りになっているし、彼の顔色も悪くない。彼自身も大丈夫と言っているし、大丈夫なんだろう。どうやったのかはわからないけど、あの時の大怪我はすっかり治っているようだった。普通は不思議に思う所なんだろうけど、彼なら何でもやってのけそうだと考えられる私もいた。いいのかな、これ？

それと、何度も耳にした平べったい言葉遣いに、彼である実感を増えて、嬉しくなった。

「ソミアはどうだ？ その様子なら問題ないとは思うが、身体に異常は無いか？」

「はいっ。昨日目が覚めたばかりですけど、痛みもないし、検査

も異常なしでしたっ」

細かく突き詰めていくと心配してもおかしくない事実があるんだけど、本当に大丈夫なので、元気な声でオルパニルを心配させないようにした。

私の返事を聞いたオルパニルは、やっぱり疑問に思うところがあったのか一瞬だけ停止して、再び訊いてきた。

「肉体的には問題が無くても、精神的には堪えた筈だ。体重が減ってしまっていないかったか？」

言われて思い出したが、目が覚めてからいつものように体重を量ってみると、以前と比べて物凄く減っていた。二日分の体験と六日間の点滴生活が原因らしい。体重が急激に変化すると体に良くはないんだけど、でもこれは仕方のないことだ。二日分も尋常じゃない体験をさせられれば精神的に参って気疲れするし、一週間もベッドの上で寝たきり生活を送っているのは体の筋力が衰えるし、同期間だけでも基礎代謝分しか栄養を送られない点滴を受けていれば太ることなんてないし、お通じがあっても口から入る物がなければその分体重が減るし。

でも、これは私にとっては何の問題もないことだ。今まで通りの生活を送っていれば元の体重に戻るだろう。…体重が増える、って考えるとすごく微妙な気持ちだけど。

だから、笑ってこう答えた。

「ダイエットする手間が省けました」

「…なら、別に良い」

そう言い終えて、オルパニルは話を閉じた。変わらない無愛想だけど、自分の健康を心配してくれていたことを知って、とても嬉しかった。

オルパニルはこれ以上尋ねようとはしてこなかったもので、私が尋ねることにした。今日のニュースを見ても、分からないことだらけなのだ。

「あの、オルパニル…。訊きたいことがあるんですけど、いいです

か？」

「俺が情報を持ち合わせていれば、答える」

と言つて、

「…歩きながら話そう。背後からの視線が気になる」

そう付け加えた。彼の背後を覗いてみると、さっきの人垣を作っていた人達がこつちをじろじろ見ていた。確かにこれは気になる…。

私は彼の提案に賛成して、歩き始めた。彼の隣を、彼の歩調に合わせて歩く。今は夜ではなく、昼過ぎの時間なので、腕を掴むことはなかった。でも、彼の後に付いていくしかなかった夜の時は違い、今はお互いに望んで歩いていると思った。それがなんとなく、気恥ずかしいような、仲が親密になったような感覚を感じた。

「それで、何が訊きたい？」

「えっ…と、ですね…」

急に訊かれると少し混乱するが、自分を落ち着かせて、疑問を引っ張り出した。

「その…あの、オルパニルが怪我をしながら力を使ったあとに、何があつたんですか？」

今の自分にとって最大の疑問を尋ねると、オルパニルは珍しい物を見るような風で（変化はすごく小さいけど、わかるようになってきた）私を見た。

「知らないのか？」

「知らないから訊いているんですけど」

「ニユースは見ていないのか？」

「この街の状態とかは見ましたけど、肝心な所は何も」

「…運が悪いと評価された経験は？」

「友達からは、しょっちゅうです…」

なんだか私が無意識なところから悪いように思えてきた。

オルパニルは少しだけ黙った。多分、考え事をしているんだと思う。やがて、私のある場所まで連れてきた。そこは、前にオルパニルと路上で出会った、シヨーウィンドウのある電化製品取扱店だっ

た。

その店は、ショーウィンドウの硝子が割れているのを除けば、大きな損壊は見当たらなかった。もう修復が終わっているのかな。ショーウィンドウの前には、前に見た時よりも大勢の人が群がっていて、テレビに流される情報に耳を傾けていた。私達もその一部に紛れた。

「恐らく、その内に返答が報道されるだろう」

「え？」

私はテレビの映像を注視し、報道の音声に集中した。

『——と決議し、次なる進歩を目指す模様です。』

…次のニュースです。現在軍隊のボイコット運動が激化し、今後の進展に期待が掛かる国際的な軍事問題について、政府は今日、四度目になるアイルランド側との首脳会議が行われました。結果は、対立状態は継続させるが兵は撤退させることが決まりました。今、両国同時に兵士を撤退中で、今日の深夜には全ての撤退作業を終える予定でいると、政府は発表しました』

そこまで聴くと、周囲の人達が一齐に歓声を上げた。

「えっ？ …な、何がどうなってるんですか？ 軍隊が撤退したとかで…」

「報道の通り、戦争からまた一步遠ざかった、と言うだけだ。まだ休戦状態と言うだけで終戦締結は結ばれていないのだが、戦争の正犯がコルド・キンベスターだと判明していれば、終戦するのも時間の問題だろう」

「いえ、それでもさっぱりなんですけど…」

話を聞きたいとテレパシーを送るつもりでじいっとオルパニルの目を見ていたが、彼は話そうとはしなかった。その代わりに、テレビの映像が変わった。

『本当だ！ 本当に俺達は神のお声を聞いたんだ！』

『何度も目を疑ったけど、あれは本物ですよ！ 仲間も見だし声も聞いたと言っていましたから、見間違いないんじゃないです！』

『戦争を続ける意味なんてないんだ！ これからは話し合いによって解決する努力をしなくちゃいけないんだ！ また戦争なんてやったら、女神様を悲しませてしまうぞ！』

テレビでは、兵士が何やら必死で反戦争運動を唱えていた。

『このように、兵士達は全員で口を揃えて、“神様を見た”、“戦争をしたら神様を悲しませる”と言っています。命令違反の弁解だと解釈して詰問が続いていますが、アイルランドの兵士達も同様の発言をしており、政府は、当時何らかの怪現象が起き、その影響で闘争意欲が損なわれたと考えています。現場に同伴していたカメラマンもその怪現象を見たと言っています。しかしながら持参していたカメラの写真やビデオディスクには何の映像も映っていませんでした。また、当時を監視していた衛星からの映像にも何も映っておらず、専門家も首を傾げている次第です』

報道員は事実を不思議そうに、しかしちよつとだけ嬉しそうに説明した。

「オルパニル……。あの、説明をしてもらっていいですか？」

テレビではそれ以上の情報は流れなかったので、とうとう分からず終いになった私は隣の彼に問いつめた。

「簡単に説明すると、お前の思念を兵士達に聞かせた。それだけだ」「それじゃあ全然分からないですよ！ く、詳しくお願いします！」「い、いくら面倒だからって、はしよりすぎ……」

「お前の思念や感情を、お前の音声に乗せて、現場にいた兵士達全員に聞かせた。姿形は隠蔽したから顔を知られている心配は無い。ただし、現象を記録として残されるのは今後に支障が出る為、光景は生身の網膜を介入しなければ見られず、音声は蝸牛殻を通さなければ聞こえないようにしておいた。写真やビデオの映像に残っていないのはその所為だ」

「その“光景”を、兵隊さん達は“神様”って誤解してるんですか？」

「地方に異端は幾つか存在するが、イギリスとアイルランドはプロ

テストントとカトリック、つまりキリスト教だ。神秘的な現象は非科学的な物へ連想してしまっても無理はない」

「へえー、と感心して、一つ気になった。」

「あ、あの、オルパニル…私、どんなことを兵隊さん達に言ったんですか？」

不思議なことだが、自分ではよく憶えていないのだ。なんだか記憶が薄ぼんやりとしていて、ずつとろ覚えのような感じなのだ。もし変なことを言っていたら、恥ずかしくて外に出られなくなってしまうそうだった。

「知らない。俺もそれどころではなかった。どうしても知りたかったら兵士達に訊け」

「そこまでは…ていうか、声を聞かせたら私の声だってばれちゃうんじゃないですか？」

「日数の経過がまだ浅いから可能性は有る」

「か、顔は見られてないんですよねっ!？」

「その筈だが、知られたくなかったら接触は避けるべきだ」

「ばれたら、…どうなりますか？」

「恐らく、一生キリスト教徒から崇拜されるだろう。神の使者として尊ばれるに違いない」

「そ、そんなの、恥ずかしいです…!」

私は自分が大勢の人達から敬われる光景を想像して、思わず赤面した。神様のような心の清らかさは持ちたいと思っても、大勢の人から神様のように崇拜されるのはちよつと遠慮したい。

「恥じるのは勝手だが、誇りに思つて良い。あの戦争を止めたのは俺ではなく、ソミアだ。お前の言葉が兵士達の心を動かした事実は変わらない。それは真実として俺達の記憶に残り、伝承させれば永遠に伝わってゆく」

一区切り言い終えたオルパニルは歩みを止めて、私と向き合つた。「俺だけではこの結果を生むことは出来なかった。せめて、直接礼を言いたかった。…ありがとう、ソミア」

そういつて、オルパニルは深々と頭を下げた。

相手に頭を下げるというのは、どこの国でも敬意を払うという意味で共通している。擦れ違う人達に横目でみられて私はちよつと焦った。

オルパニルは随分と壮大な話に繋げていた。確かに、私がああ声の主だと兵隊さん達に申告すれば、世界的な大ニュースになると思う。でも、これは私だけが持つ偉大さじゃないと断言できた。そんな大それたつもりじゃなくて、本当の気持ちを含めたただだったのだと迷わずに言える。

「私だけのものじゃないです。オルパニルがいてくれたから、この結果に繋がられただけです。だから、この誇りは、私とあなたで半分こです」

自然と、笑つて言えた。恥ずかしいような、でも温かい気持ちになれたような気がした。

オルパニルは少しの間懊悩して、

「…なら、半分だけ頂く」

それだけを言った。

ニュースを見終えると、また歩き出した。今度はさつきよりも遅めだった。

歩きながら、この街の様子を見学していた。いつもとは違う。それは、街のあちこちが壊れていて、街の人達も怪我をしているという意味だけではない。みんな、戦争が終わろうとしていることに喜んでいて、表情が明るかった。

しばらく歩いてみると、前から歩いてきたお婆さんが、オルパニルに向かってVサインを見せて、そのまま通り過ぎた。そのお婆さんは、オルパニルと同じような、片方のレンズしかないサングラスを掛けていた。

彼に知り合いなのか訊いてみると、

「良い運動をさせられた」

と答えた。何があつたんだろう…。

その後も、私とオルパニルは並んで商店街を歩いた。修復が済んでいない店舗が多かったので店を回る、とまではいかなかったが、私はまた彼の隣にいられることが嬉しかったから気にしなかった。

私の気になったことを訊くと、彼は的確に説明してくれる。やっぱり時々省略することもあるけど、そこを聞き直せば嫌な顔もせずかどうかはわからないけど、嫌じゃなければ会話もしないだろうか……って思うけど嫌じゃないっていうのはその、なんていうか、あの……そう、なんだろうか。いや、彼に限っては違うだろうけど。

しばらく歩いていくと、道の先に商店街の出入り口であるアーチが見えてきた。実感はないけど、本当に長い間一緒に歩いていたらいい。

歩きながら、オルパニルは太陽を見た。私もつられてそれを見た。まだ高いが、そのうちに茜色に染まってくるだろう。

視線を戻すと、彼はまだ夕陽を見ていた。茜色に照らされた彼の姿は、普通の人には出せないような雄々しさが感じられて、見とれてしまった。彼が普通の人じゃないと知っているからこそ余計にそう思わせ、なんだか胸の鼓動が高鳴る。

オルパニルは視線を夕陽に向けたまま、ぽつりと言った。

「そろそろ出国と思っている」

突然の出発予告に、私は驚いた。

「長居すると、やはり不都合が多い」

理由も付け加えてきた。

言葉が理解できると、嫌だと思う気持ち溢れた。

偶然が気まぐれして、せっかく再会できたのに、もうお別れなんて、嫌だった。

このまま別れたくなくなかった。

まだ、訊きたいことも、教えてほしいことも、たくさんある。言っていないこと、言いたいが、いっぱいあるのに。

「……………オルパニル」

「何だ？」

私を知ってくれた人で。私の生き方を許してくれた人で。私を守ってくれた人で。私を支えてくれた人で。私を考えてくれた人で。私を、あんなにも思ってくれた人を、失いたくなかった。

「………ずっと、」

そこまで言いかけて、人差し指で私の額を小突かれた。

「それは、駄目だ」

オルパニルは、私の言いたいことを悟って、それ故に制止した。願っても叶わない願いだってことは分かっていた。でも、お願いしないと気が収まらない。そこまで、私は彼のことを思っていた。それは制止されたが、私は別の方法を探した。

“これ”を言ったら、彼はきつと困ってしまうだろう。悩んだ上で、ちゃんと断るだろう。

だから、言わずに、伝えたい。もう一つの、感謝の気持ちに乘せて、伝えたい。

今しか、伝えるチャンスはないんだから。

「オルパニル、ちょっと……耳を貸してください」

「……？ 理由は？」

「あの、その……お、大きな声じゃ言えないんです……」

彼は腑に落ちない様子だったが、言われた通りに片耳を私のほうに近づけてくれた。

私は彼の横顔に、自分の顔を近づけた。

「……」

以前の私は、自分が好きではなかった。

学校へ行っても虐められるだけで、自分の場所なんてなかった。

両親を心配させるのが嫌でこのことを言うことができず、ただ事が収まるのを待つしかなかった。

高校へ行っても、自分は嫌われていると思い込んで自分から人を避けてしまったんだと思う。だから、ジャスミンとローレンスとアナリアの三人に話しかけられるまで孤立していた。

友達ができてから、私は飛び級を何度も蹴っていた。早く大学へ行ったほうが将来性にも有利になるのに、両親を安心させられるのに、それを選ばなかった。ずっと我が侘を言っていた。

そんな自分を、オルパニルは認めてくれた。許してくれた。彼は自覚していないと思うけど、本当はとも支えになっていた。

だから、どうしてもこの気持ちを伝えなかった。

今を生きていて幸せだと、初めてはつきりと思えたから。運が悪くても、私は幸福に恵まれていると気づけたから。

あなたに会えて、本当によかったから。

「ありがとう」

私は彼の頬にキスをした。

唇がそつと触れるくらい、控えめに。

でも、家族や親しい人に贈るのとは違う、特別な口づけ。

特別な人あげる、私のファーストキス。

それを、あなたを想う特別な気持ちに乗せて、贈った。

直後、オルパニルは大袈裟と思えるくらいの様子で後退った。

「なっ、ん、……そっ……えっ……？」

しかも、分かりやすいくらい困惑している。目を見開いて、口は開閉を繰り返して、顔まで赤くなっている。

彼の感情がこんなに表に出ているのを見るのは二回目だ。いや、一回目よりもはつきりしている。なんだか、普段の無表情な彼とは新鮮さがあってちょっと面白いけど、今までと感情の差がありすぎて呆気に取られた。

どうしてこんなに動揺しているのだろうか。私達にとっては、親しい人へ感謝や親愛の気持ちに使うのは日常的なのに。

それに、何百年も生きている人が、今更ほっぺのキスくらいで驚くのか……

そこまで考えて、ふと気付いた。

オルパニルは日本人だ。確か東洋の地域は宗教が違うから、キスは習慣じゃないんだ。

しかも、彼の反応からして、慣れてないっていうよりも、むしろ、は、初め…

うつひゃあ！ は、恥ずかしい！！

私は彼と同じくらい顔が真っ赤になった！

こ、こんなつもりじゃなかったんだけど、ただ感謝の気持ちと自分の気持ちを伝えたくてしたつもりなのに、相手が異文化だったいうことをすっかり忘れていた。いや、文化が違ってても彼は長い年月を生きているんだからそういうことの一度や二度や三度や四度くらいあるんじゃないかって思ってたそれなら別に大丈夫じゃないかって思えて、本当はこういう気持ちでのキスにすごく自信がなかったんだけど長命な彼なら経験あるだろうし大丈夫だろうって思って安心していたのによりによって彼も初めてっばいってうわーん！ 恥ずかしさが有頂天に上って、こんな顔を見せたくなくて、私は俯いた。

オルパニルは頬を撫でながら、口を開いた。

「…先程の、これ」

「ごごごめんなさいっ！」

「有り難く受け取っておくよ」

あれ…？

今、言い方が…。

妙な違和感を感じて顔を上げてみると、信じられないものを見た。オルパニルが、笑っていた。

変化は小さいけど、でも、今までの無表情が嘘のように、温かく微笑んでいた。

「は、はいっ！」

私も嬉しくて、笑った。

でも、どうして急に感情を表したんだろうか。

戦場でもそうだった。オルパニルは酷く悲しんで、泣いた。あんなに感情に乏しいと思っていた彼が、どうして？

まさか…！

オルパニルは感情に乏しいんじゃない、感情を抑えているんじゃないだろうか！？

感情というのは、物事に感じて起こる気持ちや、精神の働きの中のうち情的過程全般を指す。彼にも心があるんだから、何も感じないはずがない。きつと、人並みに沢山思っているはずなんだ。

それを押さえ込んでいるのは、多分彼の能力が関係しているんだと思う。彼の能力は、思ったことを現実化することだ。だから、そこに感情が混合してしまうと、自分が望む現象が起こりにくくなってしまう。だから、彼は能力のために、私達人間を助けるために、風波が立たないように必死で感情を抑え込んでいるんだ。

嬉しさを見つけても、悲しさを手にしても、楽しさを覚えても、怒りを湧かせても、何も感じていないように閉じ込めるんだ。恐れでも、嫉んでも、苛立つても、嘆いても、快くても、憎くても、懂れても…。愁いもしないで最初から何もないように耐え忍ぶんだ。

そんなの…

「そんなの…つらすぎる…！」

私は言った。言わずにはいらなかった。

どうして、そんな生き方を続けているんですか。

どうして、そんな生き方を続けることができるんですか。

全てがわかった途端、オルパニルがとても脆い存在に思えた。全てを完璧にできる存在、全てを可能にする存在、それが今まで尊敬と共に彼に抱いていた認識だった。感情の起伏が少ない性格を利用した能力で、全てに立ち向かえる雄々しい存在だと。

しかし、感情があるとなると、それらは全部あやふやな骨組みの上に載る称号ということになる。自身が抱える能力を駆使するために、あるはずの感情を無いものとし、完全に心の奥へしまい込む。次々を生まれ出ているはずの感情を塞ぎきるなんて、コップに水を注いでいるようなもので、いつか抑えきれずに溢れてしまうんじゃないか。溢れてしまった時、彼は今まで築いたものを全て失ってしまうんじゃないか。そんなふうに思えてしまう。

オルパニルは少し黙った。もともと意識していることだからか、私が何を言いたいのかわかっているんだと思う。

やや時間をあけて、彼はこう返してきた。

「自分で希望して選択した生き方だ。後悔などしていない」

いつもの真っ平らな口調で、はっきりと答えた。

普段は何を考えているのか分かりづらいけれど、彼はしっかりと信念を抱いて行動している。私の相談に対してああいった返事をしたのは、ただの思いつきではなく、彼の信念を参考にした返事だった。私のように迷うことがあるからこそ、私の気持ちが分かったのかもしれない。

私の迷いから来るつらい気持ちが分かっているからこそ、きちんと相談に乗ってくれたのかもしれない。

彼は、決して口には出さないけど、どこまでも誠実だった。

オルパニルは右手を私に差し出してきた。

「別れの前に、握手を」

私は握ることを躊躇った。

この手を握ったら、もう終わってしまう。

彼と一緒にいられないことは頭で分かっているけど、心のどこかで嫌がっていた。

気持ちよく見送りたいのに、葛藤がそれを邪魔していた。

「生きていれば、また遇えるかも知れない」

オルパニルが言った。

「同じ星で、同じ時の中を生きている。いつかどこかで、また繋がっているかも知れない。生きていれば、きっとまた遇えるだろう」

私は、知らないうちに泣いていた。

悲しい。寂しい。でも、それだけじゃない。もっと、明るいものもあるような気がした。

私は迷いを吹っ切って、オルパニルの手を握った。

彼の手は自分よりも大きくて、子供らしい柔らかさと男性らしい固さがあり、そして人と変わらず温かった。

「では、元気で」

「うん。あなたも」

別れの言葉を交わして、私達は握っていた手を解いた。そして、彼は踵を返して、歩き出した。

「あつ、オルパニル、待つて！」

私は思いつきをしてあげたくて、彼を呼び止めた。

オルパニルが振り返ってから、私は片手で自分の額を指してから下に下ろし、次にその手で左肩を指してから右肩を指した。

キリスト教の、祈願に用いる十字架だった。

そして手を胸の前で組んだ。

「どうか、オルパニルに限りない祝福がありますように」

すると、今度はオルパニルが静かに両手の掌を合わせた。

仏教の、祈願に用いる合掌だった。

「どうか、ソミアに常識外れの永い幸福が訪れることを」

祈願を終えると、オルパニルは元の方方向に向き直って、出発した。

彼の背中を見送りながら、これから彼はどうするのだろうと考えた。

彼の言う通りなら、また別の街で役目を果たしていくんだろう。

でも、どこの街に行ってもいろんな人から嫌われることになる。どれだけつらくても、どれだけ寂しくても、誰にも頼ることなく孤独に過ごしていく。後ろ指を指されても、自分のしていることに間違いはないんだと信じて、自分の信念を守っていく。そんな生き方を続けていく。

でも、果たして全ての街で蔑まれるのだろうか。どこの国、どこの町に行っても、理解されないのだろうか。

私はそうは思わない。

だって、私にとって彼は頼れる存在だから。誰にも負けないくらい、彼を慕っているから。

それに、今日のこの街では、彼の行為に対して感謝していた。復

旧の手伝いをしてくれて、みんなで感謝した。紛れもなく、彼を受け入れていたんだ。

だから、大丈夫。あなたがこれから行く先も、きつと受け入れてくれる。

だから、生きていることを迷わないで、これからもずっと生きてほしい。

それが、私の願いです。

T h e E N D

後日談 3（後書き）

こんにちは。作者の甘森礎苗です。

この度は私の作品「バース・ストーン」を読んでもうくださってありがとうございます。

最後まで読んでくださったあなたのご厚意に、私は感激です。

内容は、弱気で引つ込み思案でちよつぱり天然ちつくな記憶力抜群の少女が、無表情で無愛想であらゆる行動を面倒くさがる日本刀持ちの少年の諸事情に巻き込まれて、信じたり裏切られたり思い込みだりする話、というコンセプトで仕上げたつもりなのですが、楽しんでいただけたでしょうか。

最初から最後まで描かれていたソミアの心理描写だけでなく、オルパニルの心理描写も含めて、すべて伏線だったということ、お気づきになりましたか。

正直なところ、この作品は非常に読みづらかったかと思います。文章は説明足らず、展開も早く、事あるごとに意味不明な単語が飛び交う…。

それもそのはず、実はこの作品、私は高校三年の時に仕上げた話なんです。

当時は思いつきのままに文字を連ねていたんですけども、掲載の際に今一度読み返すと、あれやこれや妙な点多すぎる。

…だって、まず事件が起きてから二日後に戦争開始、なんてありませんw

実際はもつといろいろと兵力や書類などの下準備を何日もかけて整えてから、やっと宣戦布告するんですよ。

あと、そもそも題名も微妙ですし。なぜ「バース・ストーン」という題名にしたのか一応明かしますと、主人公の変な眼が理由です。もともと、誕生石のような色をしている人達の話、という発案で書いたのです。ちなみに、主人公はどの誕生石が気づきました？ヒントは本編の描写と、彼の名前です。…バレバレですねw

脱線しましたが、掲載する際に修正するにも本筋をずらすのはちょっとムリがありそうだったんで、ある程度を校正するだけに留めて更新を続けさせていただきました。

さて、本編中にいろいろと伏線を張って、それを計画通り回収したんですが、まだいくつも残っていますよね？鋭い方や全ての話を熱心に読んでくださった方はお気づきのはず。

実はこれ…というか、この作品、連作を前提として考えた話なんです。はい、すみませんごめんなさいm(――)m
ちゃんと解説してもいいですが、今後出す予定の話のネタバレにもなりますのでそれじゃつまらないんじゃないかな…と思ひまして、そのままです。

しかも、次の話をいつ掲載するのも不明です…。
気長に待っていただけると嬉しいです。

さて、最後に。

ひとまず、ソミアとオルパニルの話はこれでおしまいです。
稚拙な文章であるにもかかわらず本作品を最後まで読んでくださった方、本当にありがとうございました。

NG集

NG集

この度は「バース・ストーン」を読破していただき、誠にありがとうございます。

ここからの話は、『この物語が映画のように撮影されていたら?』と設定し、作者の妄想より生まれたNGを書いてみました。

本編とはまったく関係のない蛇足ですので、興味のない方は飛ばしていただいて構いません。

都合上、ネタバレが避けられません。また、多少の作品崩壊、人格崩壊、差別発言も含まれます。さらに一部パロディというかパクりもあります。それについて拒否感をお持ちの方、または原作に対するイメージを粉碎されたくない并希望する方は遠慮されることをお勧めします。

どうしてこんなものを掲載したのかと申しますと、
書きたかったからですw

あと、これを含めれば全編がちょうど50部になるから、というのも。

ここで登場する人物の根っこの部分は変わりません。あの少女は成績優秀で内気な高校生ですし、あの少年は変な能力を使う無愛想です。

生まれも育ちも立場も境遇も違う人達が集い、穏やかな雰囲気ですりあすな映画撮影するようになるんだろう…と単純な考えで書いてみたものです。

本当に、作者が載せたかったから掲載したようなものです。どうぞ、お読みになる時は肩の力を抜いて、気楽にご覧ください。

オルパニルが道を尋ねる場面

「済みません、ちょっとお尋ねしたい事が有るのですが」
表情と声色は無機質のまま、少年は日常では絶対使わないであろう慇懃な態度と口調で言った。

老婆は少年の方を向き、特に驚いた様子もなく、「はい？」と訊き返した。

「この辺りで一番大きな図書館は何処に在るかご存じですか？」
訊かれた老婆は、

「この辺で一番大きいな救急連絡先かい？」

耳が遠いのを利用した呆け^{ぼけ}を披露して見せた。

「それなら私もよく使うから、確かどこかに電話番号が――」

「いえ、違います。lifeline^{ライフライン}ではなく、library^{ライブラリー}です」

「うん？ あんた、さつきと言ってることが違うじゃないか。なんだい、人に尋ねておいて」

老婆は一人で勘違いを始めた。とりあえず風波を立てないように話を進めようとする。

「言い間違えたようです。申し訳なく存じます。済みませんが、俺も急いでいる身でして、宜しければ改めて教えて下さいませんか」「いやーだーねっ。感謝なんて上っ面で、ぜんぜん気持ちが込められてなかったじゃないか。私の目はごまかせないよ!」

「貴方の気持ちはお察しますが、どうか私に協力するつもりで、ここは一つ」

「ふん! あんたねえ、自分のことばかりで、ほんと私みたいな老人は頼めば何でも言うことを聞くみたいに思っているんだろう? 嫌だねえ、これだから最近の若いもんは。年寄りを大事にしやしない。いくら急いでるからってね、こんな――」

「済まない、貴婦人」

俺は口調を戻した。

「監督からは、ある程度のアドリブの口論なら許容範囲だ、とは助言されているが、流石にこれでは話が進まない」

「ありやま。ちとやりすぎちゃったかしらね、あっはっはっは!」

「…先行き不安だ」

ソミアがオルパニルにナンパする場面

「あ、あの…」

「…?」

少年が私の視線と自分のを合わせる。私はその眼光に少し身を引かせてしまうが、負けじと言葉を出す。無理矢理作った愛想笑いも付けて言った。

「その…な、何の本を、読ん、でるんで、す、か…?」

幸い、少年は聞き取ってくれたらしく、読んでいた本を持ち上げ、表紙と背表紙を私のほうへ向けた。

せっかく見せてくれている表紙を見て、思わず声に出して読んだ。

「『二十世紀の歴史 戦争編』…？」

「…」

「…」

「…」

「……………（えっと、何だっけ…？）」

「……………？」

「この小難しい表紙を盾にして、エッチな本を読んでるんですか？」
「よく使われる手段かも知れないが、ここはその台詞では無かった
と思う」

「で、ですよね！ わー！ なに言ってるんだろ私！」

「時に、真面目な人格と聞いたが、そう言う発想は年相応なのか？」

「そ、そんな質問、答えたくないですよ！ 深く追求しないでおい
てください！」

ソミアが委員長との話を終えた後の場面

「ちょっと、調子が上がらなくて…。教えてくれてありがとう」

「どういたしまして。躓いて転ばないように」

そう上辺は親切に言っつて、彼は教室を出ていった。

私は彼が見えなくなると思わず溜め息を一つ吐いた。

「度胸試しはどうだった？ ソミー」

と後ろから肩に手を置かれたので、ソミアは振り返った。

「わあっ！ な、何これっ！？ っていうか、誰！？」

「私よ。ジャスミンに決まってるじゃん。分からなかった？」

「じゃあ、なんでモアイの仮面をフルフェイスで被ってるのよ！？」

「まあまあ、ソミー、落ち着きなって」

「たまには間違うときもあるって」

「だったら、ロールとアニーも被ってるそのフルフェイスモアイ仮面脱いでよ！」

「いいじゃんいいじゃん、こういうのも」

「楽しくやらないとね、つまんないって」

「場違いな物も意外に合ったりするしさ」

「三人並んであさっての方向を見るポーズを決めないで！」

「ほらほら、ソミーも一緒に」

「被り心地がサイコーだよ」

「っていうか、これ罰ゲームだから」

「いやー!!」

街で、オルパニルが一人通信機に向かって話す場面

「もしもし、俺だ。何か動きは？……………。分かった。無いなら良い。……………。こつちも特に不審な事はない。……………。あ、分かっている。その為に俺は……………ん？この音は何だ？…電池切れ？しまった、充電しておくのを失念した。おいスタッフ、済まない、充電されてある代用品を貸してくれ。…え、無い？そうか…。あ、ならばパトラスを呼んでくれ。あいつなら同型の通信機を所持しているはずだ。…え、繋がらない？あいつ、ひよっとして逃げたのか？…あー、監督。悪い、事故だ。…どうすると言われても…。ん？何だ、その自転車は？え？まさか、これで人力発電しろと？正気か…？」

ソミアが拉致される場面で、その頃オルパニルは

『狂乱者』は爆音と衝撃波を伴って、擦れ違った。

爆風と爆音という置き土産を残したが、直撃はしなかった。

通過した『狂乱者』はプログラムされたことを律儀に従い、大きく軌道を変えていた。また着弾するためにこっちに向かってくるだろう。

だが磁力は消えていない。それはオルパニルが望む限り存続する。つまり、しばらくは殉職する心配はしなくて済みそうだった。

『カット！ はいオッケーです！ オルパニルさんはしばらく待機してください！』

「了解」

オルパニルはぶっ飛び続けている『阻格者』に乗ったまま、腰を下ろして休憩に入った。

今頃は、ソミアが不審人物に拉致される場面を撮影しているのだろう。そのシーンが取り終われば、また自分のシーンを撮影することになる。

つまり、その時まで自分はやたらと暇だった。

何をして時間を潰そうかとしばし思案した後、

（さてと…）

おもむろにラジコンを取り出した。…どこから出したの？

「聞くな。俺にも不明だ」

オルパニルはコントローラーを握って、ラジコンをぶいーんと走らせた。『阻格者』の真っ平らな表面を軽快に奔走し、編み目のように彫られている小さな溝の上を通ってがたがた揺れながらも健気に走行するラジコンを見て、オルパニルは呟いた。

「…虚しい」

放火現場よりソミア救出後、公園で会話する場面

二人はベンチに座って肩を並べ、少年は空を眺めながら、ソミアはジャケットの暖かさを感じながら、暫くじっとしていた。

何を話したらいいか思い付かず、ただ冷静さを欠くばかりだった。私は気晴らしに、周囲の景色を眺めた。空は曇りがちの天気になって、星空は断片的にしか見えなかった。降水量は少ないけど雨が多い地域だから、これも仕方がない。地上には微風が流れて、混雑した思考を…

「へつくしーい！」

「わっ！　び、びっくりした…」

「あー、流石に、半袖では冷えるか」

「え、だ、大丈夫ですか？　ジャケット着てたほうがいいんじゃない？」

「いや、台本ではお前に貸すようになってるから、このままでいい」

「そんな、風邪引いちゃいますってば。…監督、ちょっと休憩しませんか？」

ソミアが拉致される場面で、その頃オルパニルは　パート2

「わっ、ぶっ。 雲、雲の中に入ったっ。 そうだ、シールド張るのを忘れていたっ。 痛っ。 いだだだだっ。 雨粒が痛いっ。 と言うか寒いっ。 ああ、抵抗が強くなったから、苦勞して並べた七並べの完成形が散ってしまった。 何だここの環境最悪ではないかっ。 役者に怪我をさせてはならないのに、スタッフは何を考えて… あーもう、『狂乱者』五月蠅いっ。 今くらい大人しくしているっ。 撮影前に墜してやるうかっ」

オルパニルがコルドと対決する場面

「これからの未来を創世する若人は、とても大切な存在だ」
磁力によって礫にされ、弾雨に包囲されている“彼”は、諭すように声を響かせた。

「それを…」

“彼”の能力を受けたのか、停止していた銃弾が機関銃のほうに向かって飛んだ。 本来持っていた、秒速九百八十四メートルの速度のままで、それぞれが来た道を戻るように飛ぶ。 空気を裂き、銃身へ戻り、薬室へ戻り、その場所を叩く。 銃身が砕けようと銃弾は止まらず、金属が砕ける音が鳴り響く。

“虫螻”と切り捨ててくれるな！」

“彼”は能力を発揮し、腕に巻かれていた金属が、外れなかった。 …あれ？」

オルパニルは腕を振ってみるが、外れなかった。

「どうしたんですか？ 外れないんですか？」

「あんたが失敗するなんて珍しいな。 なんか別のことも考えてたのか？」

ソミアとコルドが心配する。

「いや、そんな事は無い。ちゃんと集中していた。…もう一回やらせてくれ」

【TAKE2】

「それを…、“虫虻”と切り捨ててくれるな！」

“彼”は能力を発揮し、腕に巻かれていた金属が外れた。

「…って、私のが外れちゃってますよ、ちよつと！」

「オルパニル、ソミアに意識向けすぎじゃないの？ まあ、可愛いの分かるけどさ」

「なっ、ち、違うつ…と思う。って、何を言ってるんだコルドっ」

「まあまあ、隠さなくてもいいじゃないか。自分に嘘をつくのは良くないぞ。自分の思うがままに、今日だけはいつもの強がりという名の殻を捨てて、素直に正直に伝えるんだ。さあ！」

「さあ、と言われても…」

「オルパニル、私は、いいですよ…？」

「ソミア、期待と不安を混ぜた上目遣いの視線を寄越すな。今はそれどころではないんだから」

「んじゃ、今じゃなければいいのか？」

「細かい部分を一々突っ込むなっ。今は撮影に集中しないといけないんだ。…も、もう一回やらせてくれ」

【TAKE3】

「それを…、“虫虻”と切り捨ててくれるな！」

“彼”が能力を発揮し、“彼”の腕に巻かれていた金属が外れた。拘束する機能を失った腕輪は両側の壁に引き付けられ、勢いでぶつかって壁にめり込んだ。金属の勢いはまだ止まらず、あまりの衝撃に壁が轟音を立てて倒れ、さらに四方の壁も倒れ、サイコロの展開図のようにセツトが倒れた。

「…」

「おー…」

「オルパニル、すごい…」

「ちよつと待てっ。これは俺が原因か？」

「やっぱ、あんたはただモンじゃねえよ…」

「私、あなたの味方役で良かったと思います…」

「待て待て待て、どん引くなっ。これは俺じゃなくて、セツトの強度の問題だ。おい、美術担当。なんだこの張りぼて級の仕上がりは？ 貴様、手を抜いただろう？」

「オルパニル、なんでもかんでも人に罪をなすりつけるのは良くないぞ？」

「あの、正直に自首するのがいいって、ワシントン大統領も言っていましたよ？」

「だから俺ではないと…。もう嫌だ…」

ソミアが拉致される場面で、その頃オルパニルは パート3

オルパニルは星空を眺めていた。

幾つもの星が夜を染めている。

空はどこまでも澄んでいて、オリオン座が綺麗に輝いていた。

その星空を、とても古典的で分かりやすいUFOが一機横切って

いった。

そのUFOを、ジェットエンジンですっ飛ぶ真っ黒の車が追いかけていった。

視界の下に広がる雲の草原から、きわどい服の大きな妖精が甲高い笑い声を上げながら湧き出てシンクロを踊った。

その隣を、スー。ーマンが百万ドルスマイルを浮かべながら飛び去っていった。

「……」

視界の端で、ピンクの丸い生命体がばかでかい五角形の流れ星に乗って駆け抜けていった。

ここから遙か遠くに見える積乱雲がライオンの顔になって、「思い出せ」と言うが消えた。

何らかの攻撃（おそらくは黄色い鼠の電撃）を受けたロケット団員二名と喋る猫一匹が雲を貫いて遙か彼方へ飛んでいった。

背後で、二機のガン。ムが空中戦を繰り広げた。

「……映らないからって、何でも有りは良くないと思う」

南部の街で、オルパニルが三人の兵士を束縛する場面

《打ち合わせ》

「……という感じになりました、その間は身動き一切できませんので、適当に喚き散らしてください」

「……わかりました」「……」

《本番》

オルパニルが部屋へ帰還すると、呼んだ覚えのない客が来ていた。兵士が三人。ロボットではなく、人間の兵士だ。

彼らは自分たちを目撃し、任務遂行上で邪魔なソミアを始末しようと、シールド目がけて銃を乱射している。

「騒々しい。近所迷惑だ」

オルパニルが文句を言うと、兵士達は振り向いた。その時にはオルパニルはもう刀を地面に突いていた。

「――束ねろ」

兵士達の足下の地面が液体になり、彼らを取り込んだ。肩まで完全に漬かると、今度は三人が一箇所に引き寄せられ、液化した地面がくっつき合って一つになると、地面が正常な固体に戻り、果たして人間ロールケーキが一本出来上がった。

「はっ、離せえ！ くそお、動けねえ！」

「うーん…こりやどうしようもないね。しばらくこのままかな」

「ふざけるな！ 俺達には大事な使命があるんだぞ！ 何も出来ずにいられるかつ！」

「あらあ、僕は構わないですよ。先輩達とずっとこうしているのも、なんだか夢のようで…」

「やかましい！ ゲイは黙ってる！」

「おっと、それは頂けないなあ。差別的な発言ですよ？ 人類皆平等ですよ？」

「だったらてめえ、この非常事態であるのに、耳元で気色悪い発言を聞いてみるっ！」

「やだあ、班長ったら。そんな大声で言ったら響いて恥ずかしいじゃないですかあ…（照）」

「勝手な勘違いで赤面すんなっ！ つーか、貴様の鼓膜は一体どうなってたんだ！」

「おつ、班長、彼の身体に興味を持ちましたね？ まったく、隅に置けないんですから」

「おちよくるんじゃないっ！ 俺はあくまでこいつの頭がおかしいと思ってるだけだっ！」

「隊長、伝えるなら今が絶好のチャンスですよ」

「何をだ！？」

「もう、しらばっくれちゃ駄目ですよ。僕なら構わないんで…ねー？」

「ああ、何だかどきどきします…ついにこの瞬間が…ああでも、なんだろっ、これ。嬉しいはずなのに怖くなってきました…。早く聞きたいのに、気持ちのどこかで聞きたがらない自分がいるんです。隊長、早く言ってください！ いや、やっぱりもうちょっと待ってからに…で、でも今すぐにでも聞きたい！ ああもうどうしよう！

僕困っちゃいます！」

「人の意見を差し置いて青春するなっ！」

「あのー…カット出ましたよー…？」

違う声が聞こえたほうを向くと、ソミアが控えめに立っていた。その隣にはオルパニルもいる。どうやら無事に今のシーンを撮り終えたらしい。

「ああ、そうか。教えてくれてありがとう。オルパニル、早速このコンクリートを剥がしてくれないか？」

「了解だ。だが、その前に一つ訊きたい」

オルパニルが言うのに次いで、ソミアが言った。

「あの、班長さん。あなたって、そういう方が好みなんです…？」

「え？」

「人を見た目で判断するな、とよく聞くが、誠の格言だと実感した」「ええっ！？ ちょっと待て！ なんか勘違いが広がってるぞ！」

「い、いえ！ 変だなんて言っていないです！ ただ、そういう人も

いるんだなって…そう思っただけで…」

「そこでなんで目を逸らす？」

「まあ、人生は色々だ。頑張って精々楽しめ」

「あんたもなんで目を合わせない？」

「班長っ、おめでとうございます！ 公認されましたよ！」

「だから何がだあ！？」

「僕、一生あなたに付いていきます！」

「もう放つといってくれえ！」

おしまい

NG集（後書き）

最後まで私の趣味に付き合っていたいただいて、本当にありがとうございました。

またどこかでお会いできることを祈りつつ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9656h/>

バース・ストーン

2010年10月8日14時17分発行